

---

# 流れて流されてネギまへ

まどろみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流れて流されてネギまへ

### 【Nコード】

N4492K

### 【作者名】

まどろみ

### 【あらすじ】

死んだと思ったら、周りはお花畑。あれ??ココが死後の世界? ?良く分からないまま、何となく流されて主人公は「ネギま!」の世界へ行く事に

ぶろろーぐ1 (前書き)

初投稿です

右も左も分からない初心者ですが、手探りで頑張っていきますので  
よろしくお願いします

## ぶるるーぐ1

目が覚めたら、お花畑の中だった……………  
アレ???

いや、普通、布団の中  
チヨツピリ不真面目な子だったら学校の机の上  
見たいな感じでしょ!??

それが、なんで花畑!??

いや、確かにお花畑で昼寝とか、メルヘンチックで非常に良いのか  
もしれないけど

オレは、花粉症だし、ミツバチとかやってくるし!……………!!  
そんな事は絶対やんない!……………!!

とりあえず、アレだ  
うん

整理をしようか、整理  
ちよつと困惑しちゃっているみたいだし

えーと、たしか寝る前は

あれ、普通に寝たっばくないな  
だって、歯を磨いた覚えも、風呂に入った覚えもないし……………

.....

え〜と、たしか銀行強盗と偶然会って

死人に口なしっていう精神で人質を全部殺そうとしたんだよ

そんで、周りはパニック

小心者のオレなんて、もっとパニックを起こしてさ〜

しかも、あれだけ

いの一番に狙われたんだぜ、オレ

もう、大パニック

え〜と、話は変わるけど

オレってさ、ちょいちょい色々な格闘技をやっていたおかげで、凡人よりは強いとは思うけど

本当の格闘技の天才や人生を費やした人間には、楽に負けちゃうっつという微妙な強さなんだけど、まあ〜その辺は置いておこう

それでさ、格闘技って身体が反射的に動くまでやるんだよ

つまり、考える前に身体が動く

別に、考える事が不必要という訳ではじゃなくて、それもそれで必要っていえば必要なんだけど

動いている最中や、決まったパターンの乱打の時なんかは考える間もないっていうか.....

あ〜、もうワケが分からなくなってきたから良いや

っつか、いま重要なのってそれじゃないし

とりあえず勝手に身体が動いてしまつと

そんで、まあ、話は戻るけど

オレを撃とうと、強盗がすぐ目の前で拳銃を構えるんだけど  
その、位置やら、肘の曲げ具合がさ………

練習の時そっくりだったワケですよ、ハイ

もう、パニックで下手な事がなんにも考ええなかったのが幸いした  
のか

腕の関節をとって、極めちゃったんだよね

しかも、手加減なんて出来なかったもんで、折っちゃいました……

………  
その後が、もう大変

男が持っていた拳銃が自分の足元に落ちていたから、もう拾って、  
バンバン乱射して

蹴って、殴って、別の拳銃奪って、乱射して………

………  
ぶっちゃけ、どっちが強盗が分からないぐらい大暴れしたんですよ  
そしたらね………

なんか勝っちゃった

でもね、腹がめっちゃくちゃ熱いと思ったら、血がダラダラ流れてて  
それで、ブラックアウト………

………うわっ

オレ、人殺しちゃってる可能性大じゃん！！！！  
何か、血が一気に冷えたような感覚というか  
吐きそうというか………

つか、一緒に行った従妹いとことか、偶然会った友達と幼馴染の安否も  
分からんし

もし、オレが撃った奴に当たって死んだりしたら………

………

もう、何て言うの！？

心臓バクバク、頭フラ、吐き気が限界を超えて、ゲェーゲェーや  
つちゃっています

まあ、位置的条件を考えれば、人質側にはオレが撃った方向とは  
正反対なので、大丈夫なはず！！！！

とか、自分で言い訳するけど、確証がないからね………

………

ようやく、ゲェーゲェーが止まると

「はあ、やれやれ

いきなり、百面相をしたかと思えば吐いたり………  
お主の様な奴は初めて見たわ………」

呆れたような溜息と声が聞こえた

「ん??」

だ……………れ……………??」

まだ、喉に変な感覚があるし、まともに話すと再びゲエーゲエーや  
りそうというのもあり

思った以上に、もどかしい喋り方になったしまった

「無理して喋らなくてもいいぞい

とりあえずは、落ち着きなさい……………」

見上げると、涙でゆがんでいたが、なんかとても髭の長いおじいさ  
んがいた

とりあえず、遠慮はしなくても良いみたいなので

もうちょっと、ゲエーゲエーやった

……………気付いたら、水たまりになっていた



## ぶるるーぐ2

「ほっほほほほ

もう大丈夫みたいじゃの??」

そう言いながら、笑みを浮かべていた

”アレ”に浸からないように、長い髭をマフラーの様に首に巻いているのは仕方ない事だと思う

「さて、お主が村重むらしげ 徹てつで間違いないかの??」

「ええ、まあ」

「ふむ、そうか

とりあえず、あれじゃの〜

お主が死んだっていうのは分かっておるかの??」

ああ、だからお花畑で寝てたのか〜

なるほど、なっと.....く.....

「って、死んだ!？」

「そうじゃよ」

さ、最悪だ.....

親よりも早く死ぬとか、まだ恩返しもしていないし

しかも、社会に出る前で死んじゃうとか.....

今までの、必要なのが良く分らない勉強とか、全然意味をなさなかった.....

「って、ちょっと待って  
他の奴は!？」

オレが死んだとなると、次に気になるのは他の人間がどうなっているかだった

「ふむ

お主が死んだ時に同じ場所におった者達がどうなったか??  
という事で良いんじゃないだろうか??」

無言で首を上下に振る

というか、あんな分かりずらい言葉で分かるとは……………  
文章力が凄過ぎて羨ましい

「銀行強盗は1人を除いて、全員死亡

残りの1人は、両足と耳を撃たれて、まともな生活は不可能じゃない  
人質となった者達は、傷一つないの

少々、銃の音が大きすぎて、耳がほんの少し遠くなったかもしれない  
程度じゃ」

ふう……………

良かった……………

いや、もしオレが撃った弾で、人質の人を傷つけてたら、ちょっと  
半端ないほど落ち込んでいた自信がある

でも、強盗とはいえ、殺しちゃったんだよね……………

はあ~~~~

「落ち込んでいる所悪いが、ワシの話を聞いてもらっぞ

まあ、アレじゃ

運命というモノがあつての、それはワシの様な神ですら覆す事が出来ぬのだが

人間というのは素晴らしいの

運命に踊らされるだけではなく、大なり小なり、自分達で、切り開き変えていき  
そして、強い心を持っておればおるほど、その変える幅が広がるんじゃ

お主がああ銀行強盗を殺したおかげでのめくりめぐって、核戦争の危機すら救った

これほど、大きく運命を変えた、お主の強き心はきつと別の世界でも必要とされるはず

いや、必要なのじゃ!!!!!!

じゃから、別世か……………」

はあゝ、やっぱりオレには人の命は重すぎるよ  
確かに、殺されそうになったけどさ、それでも……………」

いや、だからと言って、人質の命を救わなくても良かったか！？  
と聞かれたら、そんな事無い！！  
と、答えられるんだけどさ……………」

「ええ〜と、あの〜聞いておるかの？？」

「えっ!？」

ああゝ……………」  
味噌汁には白味噌が一番でしたっけ?？」

「ばかもん、赤味噌が一番に決まっているじゃろ!!」

はあゝ、まったく聞いていなかったようじゃの

まあゝ、よい

とりあえず、主はいろんな特典を付けて異世界に行くだけ分かっ  
てくれればいいぞ」

「は、はあゝ……………」

特典???

会員30%割引きみたいなの??

というより、異世界???

「そうじゃの〜」

とりあえず、容姿を超イケメンに変え」

「お断りします！……！」

「って、なんでじゃ！？」

「いや、親からもらった物をそんな風に変えたいとは思いませんし……」

普通の顔だけど、愛着があるのも事実だし……  
と言うより、特典と言うのは、何かオレをカスタムしていくって事なのか??

「そうか、まあ〜確かにそうかもしれないの〜  
いや〜、すまない

それでは、魔力を一般の500倍、運動能力も一般の500倍、気  
とかも無限で、さらに格闘技術を初めから全て分かっているでどう  
じゃ！??」

「あ〜、非常に申し訳ないんですが……」

「なんじゃ??やはり500倍では物足りぬか〜  
それではの〜」

「いえ、そうではなくて、そちらも断っておきます」

「って、こっちも!??」

「ええ、さ、流石にそのような無敵というか、そんな能力、身の丈に合いませんし  
何もしていないのに、それは、ちょっと……………」

「というか、魔力?？」

「父さん、母さん、なんか死後の世界は不思議です」

「じゃ、何が欲しいんじゃない?？」

「いえ、特に何も欲しくは  
今のままで十分ですよ」

「そうは言っても……………」

「では、あれじゃ」

「不老不死と、鍛えれば鍛えるほど強くなる、つまり限界を無くす、  
これだけは絶対付けるぞ!!!!!!」

「いえ、不老不死とかありませんから」

「なんか、昔話であつたよね?？」

「人魚の肉を食べて不老不死になつたけど、結局幸せではなかつた、  
つていう奴……………」

「はあ、じゃあれじゃ」

「800年は最低でも生きてもらうが、それ以降は自分の意思で死ぬ  
不老不死でどうじゃ」

もう、コレがあれじゃぞ  
最低条件じゃからな！！！！  
絶対、もう削らぬぞ！！！！」

「じゃ、それで……………」

というより、オレ異世界に行くの承諾したつもりがないんだけど…

……………

「はあ、初めてじゃよ

ココまで、様々な特典がいらないと断られ続けたのは……………」

まあ、よい

では主には『ネギま』の世界に行ってもらったからの、  
いろいろと頑張るんじゃ！！！！」

「……………あの、ネギまの世界ってなんですか??」

まさか、あれか

第一次焼き鳥戦争

ねぎま大王は激怒した

昔から、焼き鳥と言えば自分だと自負していたのに、最近では皮やら手羽先だのが随分と人気だと

皮なんかは、喰い応えがないし、手羽先なんてもつてのほか、骨が邪魔だし手が汚れるではないか！！！！

だからこそ、ビールのお供、野菜と肉の見事なコラボレーションが

とれた、ねぎまがもつとも素晴らしいと！！！！

だが、それが分かっていない人間が多すぎる！！！！

もういい戦争だ！！！！

みたいな、壮大な焼き鳥ファンタジーが展開されるのか！？

もの凄く、イヤなんだが……………

「ふむ、お主の世界にはなかった作品なのかもしれぬの

まあ、魔法がある世界と思ってくれれば良いぞ」

よ、よかった……………

いや、だって、どっちかというオレ、皮が一番好きだし……………

……………

「では、今から異世界に送るので  
頑張ってくれ！！！！」

そう言うと、地面に穴があき

ズブズブズブ

ゆっくりと沈んでいった……………



「え〜と、出来ればもう少し早い方が良いんですが……」

「いや、ワシもそうしようとしてるんじやが、なぜか……」

ズブズブズブ

と言っかさ

今いる場所って、アレなんだよ

さっきゲエーゲエーやっていた場所なんだわ

つまり、このまま沈んでいくと

”アレ”に顔が……

「な、なんとかしてくれ……!」

さすがに、自分の物とは言えイヤすぎる

というか、今までこんな臭いところで話し続けた罰が当たったのか!?

「う、うむ

分かったぞ……!」

そりゃ……!」

おじいさんの掛け声とともに、一気に浮き上がった

”アレ”が……………

「う、浮かす対象間違えたの!？」

「す、すまぬ!!!」

そんな声を聞きながら、オレはゆっくりと沈んでいくのであった

第一章 魔女狩り編 その1

表

え〜と……………

これはちょっと困った……………

足からズブズブと沈んでいたから

出ていくのも足から、ゆっくりと出ていくんだよ

しかも、地面からゆっくりと……………

顔は、地面の中にあるくせに神秘の力で呼吸が可能だから、苦しいとかはないんだけど

ゆっくりと、オレの足が地面から生えてくる様子は、見る事は出来ないが、想像するだけで非常におぞましい

じっくり、ゆっくりと

20分をかけてオレは出てきた……………

人生の中で、一番長かった20分だったかもしれない

とりあえず、周りを見渡してみると、自分が森の中にいると言った事が判明

もし、街の真ん中とかだったらゾツとするよ……………

街の真ん中に突如地面から現れた足

時々バタバタしだして、ゆっくりとあがってくる足……………

……………

うん、森の中で本当良かった

んで、なにをすれば良いんだ？

えーと、普通に考えたら食料の確保とかか？

というか、なんかチヨツピリ酸っぱい臭いと、見方を変えれば非常に芳ばしいフルーティーな臭いにも感じなくもないような簡単にいうと、嘔吐物の臭いが非常に気になる

「うん、まずは水場を探そ」

まあ、あるのかどうかは分からんけど  
適当にうるつくかな

というより、不老不死もどきとか、いまいちよく分からん  
そもそも、あのおじいさんがオレの妄想ではないと決定したわけ  
ではない

まず、もしコレ全部がオレの妄想だとしたら、確実に精神科医に行  
かなくちゃいかん

しかも、精神に異常があった場合

『オレ、不老不死だから大丈夫』とか言って、自殺しないともし  
切れないから、なるべく早いうちに見張ってもらわないと、命の危  
険がある

逆に、この全てが現実だとしたら………

これもこれで、いろいろと問題がある

まず、人がいるのかどうか分からん  
つまり、ずっと独りでただただ孤独に800年過ごさないとイケない事になっちゃう

とりあえず、木々はあるので、オレが知っている木と同じかは分からんけど、とりあえず生物はいると言う事は分かった  
もしかしたら、人とは全く違う存在が人の代わりという可能性もあるが、それでも孤独よりはよっぽど幸せだ

他にもドッキリや夢といった可能性があるけど  
ドッキリは、ココまで大げさにやっても意味を成さないし  
夢は、もっと混沌としているから  
多分、ないと思う

「って、まあ〜そんな風に考えても仕方ないから  
適当に散策するしかないんだけどね〜」

そう言いながらも、まあ〜ぶっちゃけ色々と不安なんですよ

だって、800年の孤独とか、めっちゃくちゃ怖いし

って、ダメダメ

マイナス思考なんてしてたら、ずんずん落ち込んだらうからな

太陽の存在や、木の存在

他にも、ここら辺にいる虫もそうだけど、オレが知っている物と大差がないのだ

つまり、オレの知っている常識とそこまで大きな差がない可能性が高い……………と思い込んでおう

そんなこんなで、テンションを上げたり、下げたりしながら歩き回ると道らしき物が目に入った

「よっしゃあああああああああ……！」

自然では作られるとは思えないこの道は、人間、又はそれっぽいのがいるのをオレに教えてくれた……！！

もう、大好き、道大好き……！！

次は、それが人間でかつ自分に友好的だったら良いんだけどでも、800年の孤独は絶対ないから、それだけでテンションがすごい上がった

まず、道に沿っていけば町や村があるはずだから、そこへ向かおう

……………

ちょっと、ゲ○臭いけど、大丈夫だよな？

## 第一章 魔女狩り編 その2

## 表

街に着いたんだけどさ

全然ゲ○臭くても大丈夫だったよ

いや、だつてさ

街自体が臭いんだもん

道には、ああ、何て言えば良いんだ？

つまり、アレですよアレ

口から入って行った食べ物や飲み物が下の方から出てきた物体

ゲ○の親戚っぽいけど、生まれてくる場所が、反対というか

そんな、汚物達で溢れかえっているんだよ

しかも、さつき

「気を付けて」

と聞こえたと思ったら、上からそれらが一気に降ってきてさ

まあ、ギリギリ被らなかつただけど

.....  
いろいろと、シヨックが大きい

しかも、コレが普通らしく、女性も何も言わず汚物の中を普通に歩  
きまわっているし.....

なんていうか、異世界に来たんだな、って実感しちゃったよ

でもさ、汚物のせいで、異世界に来たと実感するとか、なんか、色々複雑な心境に……………

いや、普通はあれでしょ??

ドラゴンとかさ、そういうモンスターとか見て実感するんじゃないの???

それが、汚物だよ、汚物!!!

いや、まあオレの世界でもこういう歴史はあったしな

中世ヨーロッパだっけ??

確か、そのあたりの時代のトイレってというのはオマルでトイレを済ませて、そんで一杯になると窓から……………

いま、経験したじゃん!!!!

あれ??つまり、ココって中世ヨーロッパってこと??

いやいや、まて

ただ文化が似ているだけかもしれないからな、まずは周りをじっくりと観察をしてしっかりと判断をしないといけないよな

いや、だってさ、別世界かと思いきや過去に飛んできたって事だろ???

それじゃ、色々心構えが変わってくると言うか、混乱するっていうか

いや、もうすでに混乱してるけどさ

とりあえず、落ち着いて、深呼吸を……………



こんな臭いがキツイ所で深呼吸なんてするんじゃないかな……

とりあえず、周りを観察して状況の確認をしないと、うん

つか、そもそも中世ヨーロッパとオレが考えている異世界っていうモノにあまり差がないっていうのは痛かったな

いやだつてさ、ファンタジーの映画や本なんて大抵中世ヨーロッパっぽいでしょ??

だもんで、てつきりオレはこの雰囲気は異世界っぽく見えていたんだけど

中世ヨーロッパとしてみれば、それ以外に見えなくなってしまう

そもそも、異世界が中世ヨーロッパ風であるっていう先入観がいけなかったな

ここが中世ヨーロッパの可能性、つまりオレは異世界にいるのではなく、過去にいる可能性もあると考えながら観察をしないといけない

いや、まだオレの妄想だという可能性もないわけじゃないけど……

今できる、選択としては間違っていないよな??

周りの観察を続けていると、やはり文化が似すぎている事に気付くというより、どうして気付けなかったか不思議だ

いや、だって異世界って可能性としては無限の可能性があるはずだ  
つまり、文字とかが全然違ってもおかしくは無いし、もっと大げさに  
言ってしまうえば物理法則すらも変わっていてもおかしくは無いのだ

なのに、ココはオレには” 合いすぎる”

先ほど、心配した通り、オレが知っている人間がいる可能性がな  
り低いはずなのに、ココに居る人間はオレと変わらないように見える

まあ、この辺はあのおじいさんがオレを思っつて『人間がいる世界』  
いや、『オレが居た世界に似た世界』を選んだという可能性がある  
から、置いておく

つまり、今必要なのは知識だ

そこまで、詳しいモノでなくてもいい  
ただ、固有名詞がオレが知っているものと同じだったら、ココは少  
なくとも中世ヨーロッパである事が分かる

という訳で、いろいろな話を聞きまくと  
出てくる出てくる、イエス・キリスト、黒死病、ジャンヌ・ダルク、  
などなど

他には、魔女が出ただの、ユニコーンの角を売ってるだの、まあ、  
色々な話があった

って事は、ココは中世ヨーロッパで決ま……………りじゃ  
ないな……………

普通に聞いていたから、忘れていたけど、この人達普通に日本語話  
しているじゃん！！！！！

だあ、ココに来てオレの予測を一気に覆すまさかの事態に直面しちゃったよ!!

フランス語だか、何か知らんけど、ヨーロッパの人だったらその辺を使いよ!!!

なんで、そこで日本語を.....

いや、ちょっと待てよ、もしかしたらコレもおじいさんのサービスっていう可能性があるな

だから、相手の口元を見て、映画の吹き替えっぽくなっていけば、おじいさんのサービスで、違う言語も理解できているって事になるよな???

よっし、集中だ

「おーい」

来た!!!

上から声かけられたので、上を見て、相手の口を見る

「きをつけるよ」

.....ふ、吹き替えだ!!!

よっしや、コレで、オレの予測は全て当たった事に.....  
ん???きをつける???

そういえば、さっきも聞いたな

その言葉

え〜と、確かコレを聞いた後って……………

「ぬおらー！ー！ー！」

ギリギリ、避ける事が出来た……………  
も、もう少し遅かったら口の中に……………

異世界だか、過去だかは分かりませんが  
ココに来て、一番初めに訪れた危険も汚物でした……………  
……………

もうやだ、この世界

本気で泣きそうになったのはココだけの話

第一章 魔女狩り編 その2

表（後書き）

歴史があまり得意ではなかったので、いろいろと変な所があるかも  
しれません。

変な所、穴などを見つけたら、お知らせいただくと幸いです。

なんか、この敬語も間違っていそいで怖い……………

## 第一章 魔女狩り編 その3

### 表

うーん、とりあえずココは中世ヨーロッパかもしれないってことだよな???

まあ、それが異世界の中世ヨーロッパつまり、並行世界のの中世ヨーロッパなのか

それとも、過去の中世ヨーロッパなのかは分からないけど、ほとんどオレの知っている歴史と重なる世界だと言う事は分かった

ジャンヌ・ダルクは、たしか百年戦争の時の偉人だったよな???

んで、黒死病はその前??だったけ???

えーと、確かこの辺の時代は、魔女狩り、大航海時代、十字軍なんてやつもあった様な.....

いや、十字軍の後に航海時代が来たような気が

大航海時代といえば、アメリカを発見したんだっけか???

くそ、こんな事だったら、もっとしっかりと勉強しておけばよかったな

いや、でも絶対役に立たないって思っていた知識が役に立ったんだから、プラスに考えるべきか???

まあ、知識付けるのは好きなんだけども、過去の政治が役に立つには政治家にでもならんかぎり役には立ちそうにないし

微分だの積分なんて、日常じゃまず役に立たんと思うしな

どっちかっていうと、そゆつのはアレだろ???

大学とかに入るためだけに必要な知識の様に感じるんだよな

おっと、脱線したわ

え〜と、他に役に立ちそうな知識は

あつ、香辛料が高かったのも確か、この時代だったよな

そこで、ソレを手に入れるために大航海が始まったんだっけか？？

産業革命や、民衆による、貴族廃止の革命は兆しすら見えていないからな、まだまだ先の話だろう

周りを見る限り、今の時代は、貴族と宗教が大きな力を持っていた時代か？？

だあ〜、分からん!!!

何となくで覚えていたから、細かい年表が全然分からん!!

とりあえず、ジャンヌ・ダルクの話があったから百年戦争の最中または、その後の時代という事は分かった

そこで、魔女云々って所から、魔女狩りの時代の可能性も有る

とりあえず、そんな所だろ

そこで

.....どっしりよっ？

いまさらだけど、時代の考察ばかりで、どうやって生きていこうかを全然考えてなかったじゃん

まあ、楽しんで儲けるんだったら、なんか未来の知識を使えば出来そうだけど

魔女って言われそうだな、ソレをやるよ

ガリレオだって、地動説を唱えて魔女裁判にかけられたし

つか、オレって知識として知っているだけで、理解していないから、力学や、原子について証明できないじゃん……

うん、って事は学者じゃく食べていけないな

というか、もしオレがそうやって歴史を変えちゃったら、色々困らんか??

もし、ココが過去だった場合

オレっていうイレギュラーによって、いろいろと狂うよな

もし、異世界だったら、未来は未定だから、そんな心配はする必要がないんだろうけど

ココが過去だった場合

その時は、歴史を変えないようにしないと、オレという存在が消える可能性もある

というより、生まれるべき人が生まれず、歴史にはなかった大きな戦争が始まる可能性もあるし

逆に、歴史にあった戦争が起きない可能性もある……



……  
あまり目立たないようにすれば……

いや、それもダメだ

オレが存在するだけで、ずれる

オレがこの世界について、もう数時間たっているけど、それだけで未来は既に変わった

オレという存在が、オレの知っている未来を確実に壊し続ける

言ってしまうえば、呼吸一つするだけで、世界は変わるのだ

いや、でも逆の可能性もないか??

つまり、オレっていう存在が過去へ飛ぶというのも、歴史の一部  
オレが普通に暮らすことによって、歴史が、歴史の通りに動く

オレが歴史のパーツの一部という可能性がないとも言いきれない……

……  
結局のところ

「何も、分からないって事か……」

というか、俺みたいにバカが何を考えてもあまり変わらないだろう

し、答え何て出ないんだからさ、好きなようにすりゃ良いか

いや、もしイレギュラーだとしても、オレという存在が居るせいで完璧に未来はパラレルワールドになっちゃっているだろうし  
逆に、オレというイレギュラーすらも、歴史の一部というのなら、好きなようにすりゃ良いんだろ??

なんか、難しい事を散々考えたて出た結論

『好きなように生きれば良いんじゃないの??』

.....  
なんか

落ち込むわ

第一章 魔女狩り編 その3

表（後書き）

.....主人公とろいですね

何も行動を起こさず、考察だけでコロコまで文字数取るとは思いませんでした

## 第一章 魔女狩り編 その4

### 表

もう、考えるのめんどい!!!

というか、いろいろと難しい事をグダグダ考えていただけだけど、もう疲れた!!!

まあ、とりあえず適当にやっければ生きていけるでしょ

って思っていた時期が私にもありました

まず、人々の生気のなさ

めちやくちや腹が減っているようで、ちょっと不味い状態

もう、自分が生きるので精一杯っていう感じの人が多々いる

これは、上の人間（つまり貴族やら聖職者）が財産を吸い上げすぎているせいなのか、不作だったせいなのかは分からないが

とりあえず人々がけして豊かな生活を送っているのではないと言う事は分かった

うーん、ココはどんなに頑張っても楽な生活は出来そうにないな  
そもそも、ヨーロッパって乾燥しすぎなんだよね

これじゃ、農作は難しいだろうし、飢えがあるのも仕方ないな

しかも、これは勝手なイメージだけど、貴族やら聖職者が全部持つて行っちゃいそうだしな

日本にでも行くか??

多分、向こうじゃ戦国時代だからな  
成り上がるのも一つの手だろ

ああ、でも人をまた殺すのもイヤだし

つか、曰くオレは不老不死??らしいので何もしなくても生きて  
いく事だけは出来そうだけど

そういえば、その不老不死云々っていうのもマジかどうかわからん  
よな.....

実験するワケにいかないしな

まあ、あと30年もすれば分かるんだろっけど

そんなこんなで、結局クダクダと考えていたら

「おい、その魔女め!!!」

いつの間にか大勢に囲まれていました

しかも、人々は手に包丁、クワなどなど

各々に武器になると考えられる物を手にして、ぎらぎらとした目で  
オレの事を睨みつけていた

いや、考え事をするとなりが見えなくなるのって悪い癖だよな

〜

「いやいやいや、オレのどこが魔女っぽいよ??」

いや、別にオレ男だよ!!

っていう意味じゃないよ  
男も魔女って呼ばれていたの知っているし

でもさ、普通にどこでも居そうな男の子だよ、オレ  
まあ、確かに服装や、態度、目の色なんかはココの人間とは似て  
も似つかないし、素振りなんかもずっとそわそわしたり、なんかボ  
ーっと思考に浸かったり……………

あれ?? 思ったより怪しい人だな、オレ

「全身黒ずくめ、しかも目元に悪魔の印がはっきりとあるではない  
か!?!?!」

悪魔の印

ぶっちゃけ、ほくろの事だろうけど

こんなむちゃくちゃな判断を誰一人としておかしいと思わないで、  
真剣に魔女だと思って、オレを捕まえようとする

まあ、ほくろ以外にも怪しい所はいっぱいあるんだろうけど  
それでも、オレの世界では職質ぐらいですんだであるう程度

だが、ココはオレの世界ではない

捕まれば、魔女と自白させるための拷問、そんで火刑という理不尽  
極まらない世界だ

とりあえず言っておこう

痛いイヤだ

いま重要なのは、ココの人達にオレが魔女ではないと納得させる事ではない

というか、集団心理で自分達こそが正義と思い込んでいる大勢を説得できる自信がない

いま一番重要なのは、とにかくココから逃げ切る事これに限る

という訳で

「くくくく

ははっははっははっははっは

ばれてしまったか、そうだとオレがお前達の言う魔女という奴だ」

逆に開き直ってみました

とりあえず、脅しまくって

なんとか、逃げられるようにしないと

「この様なモノで、オレを捕えようなど笑わせてくれる!!!」

けて、ノリノリではありません

なんか、良心がズキンズキンと痛くて耐えられないかもしれません

とりあえず、言いながら、民衆Aの持っていた何か長い棒をつかみ、彼の重心を崩しながら捻りを加える

随分前に言ったように

凡人よりは多少強い程度とは言え、いろんな格闘技に手を付けてきたそう、所詮オレの実力なんてそんな物だ

格闘家の中で比べたら、中の下程度の実力だろう

まあ、『オレが居た時代の格闘家と比べたら』だが

科学と同じ様に、物理と同じ様に

格闘技もまた、進化してきた

より、効率よく身体を使えるように、より速く動けるように



一部の”天才”といわれる人間しか辿り着けなかった境地に、膨大な時間をかけ、大勢の人々を巡り  
感覚でしか分からなかった物を、科学的推論や多くの経験を次の世代へと伝え続けた

時には間違った解釈もあっただろうが、少しずつ、少しずつ前と進み続けた結果

凡才でも、当時の天才を超える技術を身につける事が出来るようになったのだ

さて、そんな時間と経験の結晶と、一般の市民が対決したらどうなるだろうか？

はっきりと言おう  
負けるはずがない

..... 1対1だったら

たぶん

しかも、打撃系が中心のヨーロッパで、先ほどのように重心を崩す運動は馴れているはずなく  
簡単に、転んでしまう市民A

格闘家同士だったら、こうはいかないだろうか  
重心すら知らない素人だったら、案外簡単に転ばす事は出来る

さて、はたから見ればどのようにオレが見えただろうか

ちょっと、相手の持っている武器を持ってただけで、簡単に転んでしまつ様子を見たらどのように思うだろうか???

答えは

「ば、化け物だ!!!!!!」

でした

「くっくくくく」

ようやく、貴様らとオレの力の差が分かったか」

言いながら、内心ビクビクですよ

だって、20人近くの人に武器を持って囲まれているんですよ!!!!!!

だけど、ビビらせまくる事によって、何とか逃げ切れそうなんだからさ、演技ぐらいやるさ

でも、なかなか上手に演技が出来たみたいで、皆顔を真っ青にしていた

さて、問題はオレみたいに、恐怖のあまり暴れまわる奴がいるかもしれないって所だよな

これまた、集団心理のせい、1人が向かってくれば全員が来るよな、絶対……………

「おっと、貴様等動くなよ!!!  
また、黒死病を流行らせたくはないだろ??

ふっふふふ、この街ぐらいたったらずに流行るぞ  
流行らせたくなければ道をあける  
武器を下せ、オレに危害を与えようとするな……………

……………  
そうすれば、流行らせないでやるよ

だが、1人でも刃向えば、この街は死で溢れるな

くっくくくくくく

お前だけではない、お前の子も、親も、妻も  
大切な奴等が、苦しみ、そして怯える

さて、どうするかね??」

よし、皆悩みまくっているぞ  
つつか、怯えて、悩んで、怒れて……………

非常に良い感じに混乱しているみたいだから、後もうひと押しだよな

「オレは、口に出したら縛られる  
約束は守るぞ」

何となく、悪魔っぽい（あれ、魔女だっけ??まあどうでもいいや）  
設定を勝手に考えて、適当な事を言ってみる  
というか、そんな病を流行らせるなんて出来ません

「いや、だが

神に逆らうワケには……………」

だんだんと声が小さくなっていき、最終的にはゴニョゴニョと何を  
言っているか分からん

つまり、なんだ

逃がしたい所なんだけど、神様を逆らうワケにはいかないと

オレが日本人だからだろか??

ぶっちゃけ、その理由が思いつきもしなかった

確かに、神のように人間を超越した”なにか”は居るかもしれない

だけどさ、逆らう云々っていうのも違うように感じる

そもそも、巨大な悪に脅され、人質を取られて仕方なく……………

……………

といえば、慈愛に満ちた神様だったら許してくれるんじゃないかねえの  
???

この場合、罰するのはオレ一人であって、他の人間ではないだろ??

まあ、この辺の考えも、きっとオレが日本という宗教の重要性が  
低い国に住んでいるからかもしれないが……………  
ぶっちゃけ、彼等の考えが全く理解が出来ないから、対策の立て方  
が分からん

もう、ずっと思考しっぱなし、かつ命のかかった演技のせいでめちやくちや疲れてきて

頭の回転も随分とトロくなってきた

つか、オレってさ死んだ時からほぼノンストップでココまで不安やら、なんやらで思考しながらココに来ただぜ???

もう、正直言っただけじゃなかったワケよ

とりあえず、うまいメシを食って、そこで適当な野原とかで寝てさゆっくりとしたい

そんなストレスやら疲れのせいか、つい

「だあ、んじゃオレが頼んどいてやるよ

それでいいだろ??」

適当な事を言っちゃったワケですよ

頼んどいてやるって.....

流石に悪魔っぽいセリフじゃねえな

もう、言った後に、やべっ!.....!

って感じ

はあ、こうなったら、ダッシュで逃げてやるのか!??

困まっているから、何とかかき分けて……………

なんか、そっちの方が頭動かすよりも楽な様な気がしてきた

とまあ、そんな風に自暴自棄になっていると、非常に不可思議な事が起きたんだ

反応は主に二つ

何いつているんだ!?

神がお前の言う事を聞くか!?

という困惑と怒りを交えたような反応

ちなみに、この反応の人間が9割

そして、残りの一割は、倒れそうなほど顔を青く染めた人間だった

その一割は、大慌てで周りの人間、つまり9割の人間に耳打ちをすると、耳打ちされた人間も青ざめ

急速に、青ざめる人間が増えて行く

全員が青ざめる頃には、皆武器を置き、そして道をあけていた

.....  
へ???

何が起こったの???

ワケが分からなかったが、とりあえずは助かった.....  
.....  
...のかな???

第一章 魔女狩り編 その6

表

何が起こったのかいまいち分からんけど、とりあえずオレが拷問にあうって事はないみたいだ

それは、ラッキーだったけど、あれだな……………  
この様子だと、たぶんこの街にも魔女狩りの被害にあった人間が結構いるみたいだな

おそらく、どこにでも居るんだろうっけどさ

「おい、お前達

他の捕まっている魔女たちの所へ案内してくれないか??」

用はないみたいなんだけど、遠巻きについて来る人達が大勢いるので、振り向きながら聞いてみる

初めはオレを囲んでいた人間だけだったのだが、着いて来る人達がだんだんと増えているみたいで、後ろにはもう70人ほどいた

「……は、はい」「」

まあ、アレだろうな

一応悪魔設定だから、怖がられているんだろうな

どもったような返事と共に、後ろの数人がオレの所へと追いついて来た

「おい、所で後ろの奴らは何だ?」



オレと同じぐらいの歳か??

時代も違うし、外国人なので顔つきも違うから、予測は難しいが、とりあえずソイツに聞いてみる

「きつと彼方様を見ていたいのかと……………」

恐る恐ると言うその様子が答えだろう

きつとあれだ、何をやるか分からないから、見ていないと怖いんだろっ

「はあゝ、とって喰いやしないから、そんなにオドオドするな」

「は、はい」

返事の声は震えきつて、顔も青く染まっている

だめだこりゃ

まあゝ、怖がってくれれば怖がってくれるほど、オレが拷問にあう可能性が減るから良いんだけどな……………

というか、いまさらだけどオレが喋っても言葉は通じるんだなもし、通じなかったら

なんにも出来なかったな.....

うーん、やっぱり色々と運が良かったな

そんなこんなで、魔女たちが閉じ込められている所へと案内された

どう見ても、教会なんですけど.....

つまり、なんだ

神様を崇める聖なる所で、魔女達の拷問もやっているのか??

笑えね.....

とりあえず、教会の中へと入っていくと

「おやおや、この様な大人数でどうしました??」

腹回りがブヨブヨしている神父が迎えてくれた

やべえ、教会に入るのなんて初めてなんだけど  
ちよっぴり、興奮したのはココだけのお話

.....あっ、どうするか考えていなかったけや

とりあえず、魔女狩りの被害にあっている人達を助けたいと思って  
乗り込んで来たけど、そう簡単にはいかないよな……………

「魔女達全員を引き取りに来た」

とりあえず、素直に言ってみただけ

これで、全員助けられたら、楽なんだけど

「……………どういふ事ですか??」

ほら、やっぱり……………

でもな、歴史を知っている人間としては、魔女狩りの被害にあっ  
ている人間を助けてあげたいしな……………

おっと、ココで市民Aが出てきて、神父の耳元でゴニョゴニョ言  
い始めた

思わぬ援軍が来た

頑張れ、市民A

あつ、やべ

悪魔設定だったのに、口調とか変わってきちゃった……………

……………

早く、もとに戻さんと!!!

というか、市民Aさん……………

なんか神父さんの顔が真っ赤なんですけど

あれ??怒ってませんか??  
いや、ココは、穩便に説得を.....

ああ、でも悪魔設定だと穩便なんて無理だよ  
絶対、怒らせるような事を言っちゃまうよ.....

「あなたは、神の使いをなんだと思っているんですか!？」

はあ??なんだ??

何を言っているのか分からん

えいと、ちよつと待てよ

つまり言つと

私は神の使いだから、彼方の様な悪魔に屈服しません

と言いたいワケか??

「少なくとも、豚のように太り、魔女狩りと称して、財産を奪って  
いく主の様な小悪党は神の使いとは言えんな

くっくくくくくく

どちらかと言つと、貴様の方が悪魔寄りではないのか??」

つて、ダメだ!!!

不味い、悪魔設定で適当な事をぺちやくちや喋っちゃまったよ.....

.....



.....  
また反射的に身体が動いてしまい、一本背負いをしちゃいました

というか、コノ神父運動不足過ぎ

流石に、アレほど遅い動きだったら、ナイフが怖いだけで、投げる分にはむしろ投げやすかったよ.....

「それで、魔女達はどこだ？」

って、気絶か.....」

落ちていたナイフを何気なくベルトに挟む

いや、だってオレの財産何もないんだよ！？

コレくらい貰っても良いじゃん！！！！

そして、とりあえず、気付けをして目を覚まさせてみる

まあ、気付けのやり方が良く分らなかったから、結構適当だったけど、とりあえず起きてくれた

「おい、魔女の所へ案内しろ」

もう、コレだけ脅しておけば大丈夫でしょ

「は、はい」

ありゃりゃ、脅し過ぎたみたいで、顔が真っ青だよ.....

.....  
つか、ありゃ???

脅し過ぎって言っても投げただけなんだけどな.....

……

慣れていないから怖かったのか？？

まあ、良い

とりあえず、神父に着いて行くか………

第一章 魔女狩り編 その7

表

まずは左のドアだった。

そこは、なんにもないタダ狭いだけの部屋だったのだが、神父がしやがみ、地面にあつた扉を開ける。

全然気付きませんでした。

いや、良かったよ。

神父に案内してもらって。

無言で扉を開けると、神父はその扉の中へ入って行った。

それに着いて行くオレ。

さらに着いて来る市民AとC。

なんで、まだ着いて来るんだろ??

とりあえず、市民トリオは気にしない方向でそのまま階段を下りていくと、まず気になったのは臭いだった。

その汚物とは違う、もっと鋭く、死を感じさせる鉄が錆びたような臭い。

ほんのりと下の方から薄明かりがあるため、なんとか転ばずに階段を下りて居られるけど、その臭いや薄暗い中を歩いている。

めちゃくちゃ、こええ。

というか、お化け屋敷とかも怖くて入れないようなビビリなんだよ、オレって。

それが、こんな本物が出そうな所はちょっと…。



というか、今にも叫び声とかが

「ぎゃあああああああ」

うおっ、びっくりした。

何！？何が起こったの！？

「おい、なんだあの声は？？」

「拷問の最中に上がった声でしょう。」

なに？？

つまり言つと拷問の真つ最中ってわけ？？

だあ、チンタラ歩いている場合じゃないよ。

速くいかないと。

「おい、どけ

急いで行くぞ！！」

神父を横へどかし、そのまま急いで降りていく。

少しでも急げば、拷問が早く終わる。

もう、そんな痛みをおう必要はないんだ。

ようやく、明かりへと辿り着くと、そこには男と、少女が居た。

裸で椅子に座り、俯く少女。

薄暗い地下でも光る金の髪、そして、淡いランプの光によってシミ一つない白い肢体が浮かびあがる。  
そして、その白い肢体に塗りたくられた膨大な血…。

あけっ放しの檻の扉から飛び込み、声をかける。

「おい、君

大丈夫か!？」

オレの声が聞こえたのだろう。

俯いた顔をゆっくりと上げ、オレを見る。

その左目には、3本の釘が刺さっていた。

「なんだ??? 貴様は???」

そう聞いて来る彼女は、カツコよかった。

痛々しい姿をしているにも関わらず、不敵な笑みを浮かべながら聞いてその姿に、不覚にも見惚れてしまうほどカツコよかった。

「化け物風情が、誰が喋っていいと許可した!？」

唐突に、忘れさられていた男は怒鳴り声をあげると、持っていた釘を彼女の目へと向かって、付き立てようとした。

そんな、男の腕を

オレは、掴んだ。

「てめえが黙れ。」

あつ、やべ

本気でぶん殴つちまった…。

まあ、いいか。

「ちょっと待っているよ。」

今から、解放してやるからさ。」

言いながら、少女を椅子に固定しているベルトを、ナイフで切つていく。

そして、その過程で気付く。

彼女の手には指一本一本に釘が打たれ、手すりに固定されていた。

この時代、この傷は治るのか??

そもそも、目も適切な処置が出来ないと死んじゃうかもしれないよな???

「貴様は、一体なんだ?」

また同じ事を聞かれたけど、今はそんなのに答えている暇はない。主に、オレの精神的に、このままお喋りとか無理だ。

「少し痛いだろうけど、我慢してね。」

痛くない様に、丁寧かつ素早く釘を抜いた。  
まだ残り4本あるし…。

ただ抜くだけといえど、精神的ダメージがキツイ。

「ん??」

先ほど抜いた傷口から黒い煙が出て来た。  
そして、しばらく経ったら、あら不思議、傷口がきれいさっぱり。

「って、どういう事!？」

「吸血鬼なのだから、当たり前だろ？」

「おお、なるほど。」

やっぱりココは異世界みたいだな。  
初めてファンタジーな人に会ったよ。

「痛いだろうけど、我慢してね。」

「一気に全部抜いちゃうから。」

言うと、返事を聞く前に抜いて行く。

押し殺したような、声が何度か聞こえたが、全て聞こえないふりで抜いて行った。

「よし、コレで終わりだ…。」

「うん、お嬢ちゃん頑張ったね。」

軽口をたたいているが、精神的ダメージは膨大。

しかも、彼女の左目に刺さっている釘が痛々しくて、泣きたくなっ  
た。

「ふむ。」

頑張ったご褒美に撫でてあげようかな？

なんて思っていると、彼女は左目に刺さっている3本を掴むと…

「くううう」

引き抜いた…。

精神的ダメージが半端ないです。

「ふむ、やはり目は開かんか」

言いながら、垂れてた左目の血を拭った。

もう、出血がない所を見ると、とりあえず吸血鬼パワーで傷は閉じ  
たんだろう。

というか、吸血鬼さん。

裸なのに、なんでもない様にするのはやめてくれませんか？

いやいや、さすがに10才ぐらいの子に欲情はしないけどさ、倫理  
的というか、常識的に考えてというか…。

着る物がないから、仕方ないっていったら、仕方ないんだけどさ。

とりあえず、目のやり場に困るので上着を脱ぎ彼女へとかけてあげ  
る。

「な、なにをする!？」

「うん？だって寒いだろ??」

さて、他の人達も助けないと…。」

つゝか、ココ本当に教会？

見た事のないような拷問器具が所狭しと並べられている。

しかも、薄暗いから気味の悪さが倍増。

正直言つて、一刻も早くココから出たいのだ。

振り返ると、そこには茫然と立つ市民AとCと殴られて気絶した男と、それに踏みつぶされ再び気絶している神父がいた。

あっ、やべ。

悪魔設定忘れてた。

つか、やっぱりアレだな。

オレって演技の才能がないみたいだ。

長時間の悪魔設定がどうしても出来ん…。

あと少しだから、気合いを入れる。

ついでに、気絶している二人に気付けも入れた。

なんか、真っ青になった二人がゴニョゴニョと相談をしていた。

まあ、いきなり気絶したばかりの男に神父が状況を説明しているんだろう。

だが、あれだ。

先ほども言ったように、ちびりそうなほど怖いココから早く出たいという気持ちと、悪魔設定がいつ切れるか分からない焦りがあったので

「さっさと魔女達のもとへ案内してもらおうか。」

二人の相談が終わるのを待つことなく、言葉を発した。

悪いとは思っているから、そんな顔でオレを見ないでくれ。

とりあえず、案内はしてくれるらしい。

オレよりも先に、全員が行ってしまう。ついて来いって事だよな？

「本当に、貴様は何者なんだ？」

3度目の少女の質問。

「まあ、詳しくは後でね。」

置いて行かれちゃ困るから、一緒に行こうか。」

ココから、後は意外とスムーズに行った。

とりあえず、悪魔設定で脅して魔女達を解放させ、そして神父からちよっとヤバいぐらいの金品を奪った。

ちよつとは抵抗するのかと思いきや、隣の吸血鬼が睨みをきかせてくれたんだろっ、真っ青な顔になると、慌てて色々と持ってきてくれた。

きつと、この人も罪悪感があったんだろっ、絶対にばれないような所に隠されていた奴までくれたんだから。

んで、その金品を持って、そのまま街を出たというわけさ。

つつか、本当に色々と運が良かった。

すこしでも、運が悪かったら、絶対死んだ。

改めて考えてみると怖いな…。



でもまあ、それなりの成果はあったわけだ。  
こんなに小さい吸血鬼も助ける事も出来たし。

うーん、そういういえばさつきは吸血鬼っていうファンタジーな人に初めて会ったから、ココが異世界だと早合点したけど  
もしかしたら、オレの世界でも本当にいたかもしれない存在なんだよな。

意外と、異世界と過去を見分けるのは難しいな。

というより、普通はアレだよな。

小説とかだと、すぐに『おお、ココが異世界か。ココでオレは勇者になる！』みたいな感じになるけど  
現実はそのないうまくいかないね。

というより、ココが異世界か過去かが分からないっていう、謎の現象に見舞われているし。

まっ、とりあえずココには吸血鬼がいた。

もしかしたら、ドラゴンとか魔法とか、そういうファンタジーな物もあるかもしれないから、覚悟しなくちゃいけないってところかな？

「おい、貴様。

いつまで手を繋いでいるつもりだ？」

吸血鬼っ娘の声で、オレの意識が現実へと戻ってきた。

うーん、たしかに知らない男性と手を繋ぐのはちょっとイヤだよな  
…。

「じめんね。」

「まあ、いい。」

さて、そろそろ良いだろ？

いい加減、答える。

貴様は、何だ？」

4度目の質問だった。

同じ様な質問を何回もしてくる少女。

うーん、そんなにオレの事が気になるのか？

はっ、まさかアレか？

誘拐犯とかに間違えられて、超警戒されているのか？

まずいぞ。

たしかに、今の状況はとてつもなく変な状況だろう。

適当に歩き回るオレに対して吸血鬼の娘が隣におり、さらにその後ろには魔女と言われた人々が40人ほどゾロゾロと付いて来る。

たしかに、誘拐犯または奴隷商人とかに間違われてもおかしくない！！

「えーと、名前は村重 徹。」

それで、オレは…。」

どうやって答えれば良いの？

『貴様は何だ？』

この質問ってさ、なんか哲学とか入ってすごい重みがあるんですけど！？

つか、オレって何よ？

というより、どういう答えを求めているんだ！？

「ちよっぴり恥ずかしがり屋の、どこにでも居る普通の子供だよ。」

なんか、求められていた答えと違う様な気がする。

でも、コレがオレの限界なんだ…。

「くくくくくく」

くっはははははは

おっ、オレの悪魔設定よりも上手な笑い方だ。

というより、さっきの答えにココまで大笑いする要素があつたか？

「エヴァンジェリンだ。」

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

それが私の名だ。」

…絶対覚えてられないと思う。

いや、人の名前を覚えられないというのは、かなりの失礼にあたる  
とは思っただけど、横文字の名前に不慣れなもんで…。

「じゃ〜、エヴァちゃんて決定ね。」

うん、コレだったら確実に覚えていられる。

「そんな風に呼ぶな。あほう」

そうは言いながらも笑みを浮かべているので、けしてイヤじゃないんだろう。

「まあ〜、いい。」

それよりも、徹よ。

私のモノになれ。」

め、命令ですか？

第一章 魔女狩り編 その9

表

え〜と、どうしょ。

私のモノになれなんて言われた事ないから、ちょっと困る。

というより、そんなプロポーズを10才ぐらいの子にされてもなあ

…。

ん？つゝか、これプロポーズなのか？？

「ああ〜、友達からでどう？？」

「友達だと？」

ふははははは。

悪の吸血鬼に友達など必要ない！！！！」

どうしろというんですか！？

あなたは！？

というか、なんか友達がない言い訳に聞こえてきたよ。  
なんか言いそうじゃない？

「俺みたいは大物に付いてこれる奴がないだけさ。」

とか、友達がない人は特に言いそうなんだけど…。

そうか、友達がないのか…。

めっちゃくちゃ可哀想だな。

「OK、分かった。」

「それは、私のモノっていう事だな？」

「違う違う。」

エヴァちゃんの友達一号にオレがなってやるから、安心しな〜。」

「友達はいらぬと言

って、頭を撫でるな!!！」

おっと、思わず頭を撫でていたらしい。

というか、そんなに撫でやすい位置に頭があるからダメなんだよ。  
うん。

「はいはい、照れない照れない。」

それに、貴様じゃ〜だめだな。

出来れば、テツ兄いとかって呼んでくれればベストなんだけど。」

「貴様は貴様だ十分だ!!！」

だ〜から、撫でるなど言っているだろうが!!！」

なんか、こっちに来てから初めてだよ。

こんなのにのんびりと話が出るのは。

ぶっちゃけ、さっきまで頭を回転させまくって、ピリピリとした雰囲気  
のなかで演技してって、心休まる時がなかったしな〜。

おっと、そういえば魔女狩りの被害の人達どうしょ？

街に置き去りにするワケにもいかなかったから、とりあえず連れて来ちゃったけど…。

いまさらだけど、エヴァちゃんの相手をしていて、この人達を全然見ていなかったけ。

とりあえず、後ろを振り返って彼等達をみると、やはり魔女狩りと命名されるだけの事はあるんだろう。

女性と男性の比率が8対2と女性の方が圧倒的に多い。

これは偶然なのか、それとも女性が中心として被害に合っているのかは分からないけど

多分、偶然ではないんだと思う。

そもそも、エヴァちゃんもそうだったけど拷問するさいは裸にする。

後は煮るなり焼くなり好きにしているのだから、こつ言つてはアレだけど性的興奮を覚える奴もいるだろう。

つつか、確実にいる。

たぶん、その為だけに捕まった人もいるんだと思う。

幸い、この人達が監禁されていた場所では服の着用が認められていたから、鼻血を出す事はなかった。

だもんで、その時の服装のまま出発していたんだけど、せめてエヴァちゃんに新しい服を買ってあげるべきだったな…。

だって、いまだにオレのダボダボの上着を着ているんだよ！！

たしかに、これはコレで可愛いけど…。

というより、この子に羞恥心というのではないのか？

さっきだって、ボタンを締めずに前を全開で普通に歩きまわっていたし。

あれ、オレが締めなければきつとあのままだったぞ。

まあ、確かにボタンを締めると動きにくくなるけどな。

というより、確かに転びやすくはあるわな…。

「うん、とりあえずエヴァちゃんはおんぶな。」

「い、いやだぞー!!」

私は悪の吸血鬼なんだから、おんぶなどはダメだ!!」

なんか、凄い必死だった。

というより、この悪の吸血鬼っていうフレーズが気に入ってるのかな??

「はあ、仕方ないな。」

とりあえず、お姫様だっこをしてあげた。



第一章 魔女狩り編 その10

表

どうやら、お姫様だっこもお気に召さないようで、お姫様はご立腹です。

でもまあ、降ろす気はないから諦めて貰うしかないよね。

それよりも、いま重要なのは魔女狩りの被害者達に状況を教える事。今までタイミングがなくて、うまく切り出せなかったが、とりあえず状況ぐらい教えないと彼等の不安は募るばかりだろう

「ねえ、キミ達。」

声をかけると、俯いていた顔があがった。

きつと、不安な顔つきをしているだろうと思いついていたのだが、別にそうでもなかった。

多少の疲れは見えるけど、皆の顔はむしろ明るかった。

不思議と言えば不思議だけど、まあ不安がっていたりするよりはいい事だ。

「え」とね

街じゃ怖がらせちゃったかも知れないけど

アレは演技で、オレは普通の人間だからあまり怖がらずに聞いてね。

「

彼等の前でも悪魔設定で話していたので、なるだけ優しく声をかける。

もとから怖がっていた様子もなかったので、対した混乱も起こらず、彼等はオレの話をすっかりと聞いてくれた。

まあ、話した事といえば、ただたんにオレが悪魔の演技で皆を助けたって事だけだが。

流石に、死んで沈んで足からゆっくりと参上したなんて言ったら変人に思われてしまう。

「まあ、現状はそんなところかな。

次はこれからの事なんだけど、別の街に行こうかと思う。

幸いお金は一杯あるから、何とかなると思っただけでそれで良いかな？」

特に不満もない様子で頷いてくれる彼等。

こうやって、文句もなしに普通に頷いてくれると楽で、嬉しいっていえば嬉しいんだけどさ。

もしオレが悪い人で奴隷商人とかだったらどうする気なんだろ？

結構簡単に売られちゃいそうな気がするんだけど…。

うーん、これは後で注意しておく必要があるかもしれないな。

まあ、とりあえずそれは落ち着ける状況になってからしようじゃないか。

さて、ココで質問だ。

「うー、どー？」

いや、普通に道を歩いていたらつもりなんですけど、気付けば普通の道。  
周りを見渡せば木ばかり…。

うん。

迷った。

つか、アレだよ。

ココの地理に詳しくないオレが一番先頭を歩くとか、無謀だよ！！

というか、どうして誰も突っ込まなかったんだ？？

だってアレだぞ、幼女と話しながら適当に歩いて、森の中に入って行っちゃうんだよ。

誰か、おかしいとは思わないの？？

オレだったら、アレだぞ。

確実に不安になるぞ。

誰も突っ込まなかった事から考えると、自主性がないのか  
それとも、オレに絶対の信頼を置いているかのどちらかだよな。

それに関しても、後々注意をしなくちゃいけないな。

確かに、団体行動。

つまり戦争の時の兵隊なんかはこっちの方が確実に生き残れる可能性、または戦いに勝つ可能性がある。

現在の状況も、団体行動面で見れば混乱も少なく、短時間で目標の達成を目指すので正しいと言えば正しいだろう。

もし、上が頼りになればだが。

ホント、オレが上とか無理ですよ。はい。

だけど、もしココでオレが『あゝ、ゴメン。迷っちゃった。テヘツ』とか言ったら、確実に混乱する。

というよりも、この団体行動での弱点は、上がいなくなると何も出来なくなるって言う所だろう。

もし、その頼りになると思いこんでいた上が、そんな事をいったら…。

よし、とにかく今は適当に歩き回って、人の住む場所を探すしかない。

Uターンをしようかとも思ったけど、ぶっちゃけ何処から来たか分からないほど森の奥に来ちゃったから無理だしな。

うん、適当に歩き回ろう。

なんか、こっちの方から美味しそうな臭いがしてくるしなあ。

臭いに釣られて、歩くと

3分ほどで村が見つかった。

よ、よかった。

第一章 魔女狩り編 その11

裏

Side 民衆A)

いくなれば、それらは常識だった。  
いつからかは分からないが、決まった常識。

猫を飼ってはいけない。

少しでも奇妙な事をしてはいけない。

冗談も殆ど言ってはいけない。

コレをやぶれば、魔女と見られてしまい、そのまま火炙りだ。

だからオレ等は猫なんかは近付けば蹴り飛ばし、他人との接触を恐れた。

他人の目を気にして、普通の事だけを普通にこなしていくように努めた。

そして捕まった魔女の最後は火炙り。

オレは無実だ。

私は何もやっていない。

悪魔はお前らだ。  
呪い殺してやる。

そんな魔女達の戯言を聞きながら行われるお祭り。

それが、オレ達の日常だった。

だから、彼を見た時は愕然としたよ。

普通とは思えない異形の黒の服に。

何かを考え込んでいるかの様に立ち止まり、独り言をつぶやく、その様子に。

目も髪も黒く、とても幼く見える彼の容姿に。

大馬鹿者なのか、それとも器がデカイのかは分からないが

あまりに堂々と、好きなように生きている彼が少し羨ましく見えた。

何かは分からない。

何かは分からないが、彼にある” なにか ”がオレ達を止めさせた。

魔女が現れたと知らせを受け、集まったオレ達を止め、そして戸惑わせる” なにか ”。

コレが、魔女の力なのだろうか？

そのあたりは分からなかったが

いい加減捕獲し、教会へと渡さなければ魔女をかばったとして、オレ達が魔女とされる。

だから、オレ達は彼を囲み、そして言うのだった。

「おい、その魔女め!!!」

「いやいやいや、オレのどこが魔女っぽいよ??」

またもや、啞然とさせられた。

何人もの魔女を捕まえてきたが、必死に自分が魔女ではないと訴えてくるのみで、この子の様に逆に尋ねられるのは初めてだ。だが、しつかりとした証拠がある事には変わりなく。

「全身黒ずくめ、しかも目元に悪魔の印がはっきりとあるではないか!!!!」

これ以上の証拠はないだろう。

後は何も反論させずに、捕まえてしまえば全てが終

「くくくく」

ははっははっははっははっは

ばれてしまったか、そうだオレがお前達の言う魔女という奴だ」

唐突に口調が変わった。

それと同じ様に雰囲気が変わり、その圧倒的な存在感にオレは怯えた。

勇ましさからではなく怯えから武器を構えるのだが、身体が痺れてしまいこれ以上動きそうにもない。

「この様なモノで、オレを捕えようなど笑わせてくれる!!!」

言いながら、彼の目の前に構えていたオレの武器を掴むと、オレは



尻もちをついた。

強い力で突き飛ばされた様な感覚ではなかった。  
彼もそれほど強い力を使っていた様にも見えなかった。

抗える事の出来ない”力”によって自分から転んだような感覚だ。

抵抗の出来ない”力”を使う者。

怖ろしくて身体が震えが止まらなくなり、歯もガチガチと情けない音を出す。

コイツは魔女なんかじゃない。

今まで魔女達は殆ど抵抗など出来なかった。

コイツは魔女なんかではなく、もっと恐ろしい存在。

コイツは、コイツは、コイツは

「ば、化け物だ！！！！」

ギリギリしぼれ出せた、かすれたオレの声が響いた。

第一章 魔女狩り編 その12

裏

Side 民衆A)

「くっくくくく」

ようやく、貴様らとオレの力の差が分かったか」

冷たく、黒い声が投げかけられた。

彼の目の前にいる。

それだけで、オレという存在がぶれてなくなってしまいそんな錯覚に陥った。

「おっと、貴様等動くなよ!!!」

また、黒死病を流行らせたくはないだろ??

ふっふふふ、この街ぐらいだったらすぐに流行るぞ

流行らせたくなければ道をあける

武器を下せ、オレに危害を与えようとするな.....

.....

そうすれば、流行らせないでやるよ

だが、1人でも刃向えば、この街は死で溢れるな

くっくくくくく

お前だけではない、お前の子も、親も、妻も  
大切な奴等が、苦しみ、そして怯える

さて、どうするかね?？」

この人の言葉の一つ一つに力があつた。

武器を下せと言われたら、下ろしたくなる。

道をあげると言われたら、道をあげてしまいたくなる。

そして、死という一言で、それを連想してしまいそうになった。

普通の者が言う『死』という言葉とは比較にならないほどのプレッ  
シャーがかかってくる。

身体の震えが抑えられないのは確実にオレだけではない。

「オレは、口に出したら縛られる  
約束は守るさ」

信じれた。

確かに、悪魔との契約の際に似たような縛りはある。

だが、そんな知識などではなく

それは彼が彼故に信じれた。

ただの暴力ではココまで怖れる事はない。

いや、確かに怖いがそれだけだ。

だが、彼はそれとは違う。

暴力だけではない、大きな力。  
力だけではない、圧倒的な存在。

それが怖ろしくて、怖くて、でもそれは敬う対象となるような畏怖の念。

だからこそ、彼の言った事は信じれた。

「いや、だが

神に逆らうワケには……………」

オレではない誰かが声をあげる。

だが、少しずつ機嫌が悪くなっていく彼の様子に、声が小さくなっていき、途中からは近くににいるオレですら分からない様な状態だった。

もし、コレで刃向かったと判断されたら、オレ達殺されるよな？  
余計な事を言つなよ…。

だが、そんな懸念とは裏腹に

「だあ、んじゃオレが頼んどいてやるよ

それでいいだろ??」

思いもよらない答えが返ってきた。

何を言っているんだ？

その言葉には先ほどとは変わり、怖さはなかった。

ただし、余韻なのだろう  
存在感だけは圧倒的だったが。

つまり、あれだよな。

オレ達が神に逆らっていないから見逃して、と頼んでくれるんだよな。

誰に？

まあ、普通に考えれば神に頼んどいてくれるって事だろう？

魔女がそんな事頼めるか？

答えはNOだろう。

だが、頼むと彼は言った…。

圧倒的な存在感。

身体が勝手に覚える畏怖の念。

そして、神に頼み事が出来る。

それってさ、まるで神の使いみたいだよな。

いや、そんな事ないだろ。

だって、さっき自分は魔女だって言ったばかりだし。

まあ、オレ達を戒めるためと思ったたら違和感がないような気がするけど…。

いや、それでも…。

というより、自分から魔女だっという悪魔いらないよな？？

「おい、逆らうな。」

あの方に道をお譲りしろ。」

大慌てで周りを説得した。

あの方の圧倒的な存在感もあり  
案外周りもすぐに、この説明に納得が言ったよつで全員が一斉に青ざめて武器を置くことになった。

第一章 魔女狩り編 その13

裏

side 神父

この聖職者という職は非常においしい。

昔と比べたら甘い汁が吸えなくなったというが、魔女狩りという新しい利益を生み出す方法が出来たので十分うまい汁が吸っていった。

最近では魔女を見つけるという仕事もつくり、景気はウナギ登り。ただ拷問して魔女だと言わせるだけで、そいつの財産全てが手に入るんだから、コレほどおいしい仕事はない。

しかも、今は大物

吸血鬼の真祖も手札にいる。

コイツを殺せば、ワシは”吸血鬼の真祖を殺した”という事で格があがり、教会での地位も盤石なものへとなっていくのだから未来は非常に明るく、笑いが止まらない。

おっと、金づるが来たようだ。

「おやおや、この様な大人数でどうしました??」

一番先頭を歩く、不可思議な男にとりあえず挨拶をしておいた。全身黒づくめ、そして黒髪、黒眼とまずこちら辺では見る事のない怪しい人だった。

だが、よくよく見てみると、一見地味に見える彼の服だが非常に細かく編まれており、かなりの金がかけられている事が分かった。

異国の貴族だろうか？

そのあたりは分からないが、ココまでの上物を着るぐらいなのだから、さぞかし羽振りも良いのだろう。

街に寄ったついでに、教会へのお布施をする。

まあ、貴族として当たり前前の行動であろう。

もし、教会に来なければ異教徒として魔女狩りの標的になる。

もし、お布施の金額がふさわしくなければ、ココの教えを軽んじているとして

まあ、色々と厄介な事が多々起きる。

ココに訪れる貴族もあまり多くなかったので、この臨時収入は非常に嬉しい。

さてさて、どのくらいくれるのだろうか？

期待を込め、彼を見ていると、ようやくその口を動かした。

「魔女達全員を引き取りに来た」

想像していたのとは全然違う申し出に一瞬思考が停止してしまって



いた。

彼の言葉はそのままとるのならば、魔女達全員を引き取りたいという事。

ただの魔女であるのなら既に財産は奪っており、火炙りにするた  
めだけの存在だ。

まあ、火刑は教会の権力を示すとして必要ではあるのだが重要度  
がかなり高いというワケではない。

それをワザワザ欲しいというのだから、何か裏があると思って間違  
いがないだろう。

普段ではこのような事はけしてない。

では、何かしら普通ではない事態があったのだろう。

すぐに思い浮かんだのは、吸血鬼の真祖だった。

確かに、コレほど地位をあげ、名誉を得る事のできる道具は中々存  
在しないだろう。

コレを殺せば、一気に英雄なのだからな。

だからこそ、ワシも渡すワケにはいかん。

「……………どういう事ですか??」

分からぬふりをして、なんとか出し抜こう。

奴が話す言葉の一つ一つを全て聞き、そして矛盾をつきつける。  
全ての神経を奴の口元へと集中させる。

だがここで、くだらぬ横やりが入ってきた。

奴の後ろに付きまどっていた、人間が私の耳元で喋ってきたのだ。

しかも、内容がふざけていた。

「あの方は神の使いで間違いありません。」

との事。

つまり市民からの支持を得て、そして教会に吸血鬼を出さざるおえない状況にさせようというのだろう。

あまりに、ふざけている。

ただでさえ、吸血鬼の真祖を寄せという非常に迷惑な我儘を言っているに関わらず

私という神の使いが居るにも関わらず、その目の前で神の使いを演じる。

あまりに愚か、あまりに無謀、そしてあまりにも馬鹿にしすぎている。

というより、騙される奴も騙される奴だ。

このように全身が黒い男を神の使いだと!?

どうやったら、騙されるといふのだ!!!

「あなたは、神の使いをなんだと思っているんですか!？」

つまり、やる事は一つ。

市民に自分の方が神の使いとして格が上だと証明するだけだ。

聖書の暗証、神にもとづく神話の数々。

それらを言いあっていけば、それで終わりだろう。

とてもじゃないが、この様な小僧にその知識で負けるとは思えない。  
そう確信して、問う。

だが、聞いた瞬間、彼の存在が爆発的に大きくなった。  
先ほどまで、私よりも小さかった小僧が、一気にでかくなったような錯覚に陥る。

「少なくとも、豚のように太り、魔女狩りと称して、財産を奪っていく主の様な小悪党は神の使いとは言えんな

くっくくくくくく

どちらかと言うと、貴様の方が悪魔寄りではないのか??」

「な、何を言っているんだ!？」

貴様は!!」

慌てて言い返した時に、全て気付く。

この者は、吸血鬼の真祖を得るためだけに、教会を潰しにきているのだ。

外にいる民衆の心をつかみ、神の使いとしての格をワシよりも上だと思わせる。

それによって、この者の言う事は正しいと思わせる。

確かに聖書を読んだ事のある人間など、この街には1割もない。  
というよりも、文字を読める人間が1割もないのだ。

そんな中、聖書やら伝承やらを言い合い

どちらが優れているかなど、民衆には分からない。

だから民衆にも分かりやすいように、ワシを悪だと言った。

コイツは神の使いですらない、ただの悪だと。

確かに、こっちの方がよっぽど民衆には分かりやすい。

たった一言によって、ワシは悪だと判断されてしまったのだ。

もし、ここで言い訳をしたとしても、彼の策略にはまっていく一方に違いない。

そもそも、慌てて返事をしてしまった所で間違いだったのだ。

他の言葉で有ればまだ取り繕えたのに、これでは自分で認めたのと同じではないか…。

「くっくくくく」

おやおや、先ほどの穏やかな口調はどこへ消えたのかね

し・ん・ぶ・さん

くっけけけけけ」

さらに、畳みかけてくる小僧。

なんたる屈辱。

「ええ〜い、黙れ!!!」

コイツが悪魔だ!!!」

懐から、ナイフを取り出し、小僧へと振り落とす。

いきなり殺すという手段をとると、確かにワシの権力が下がるだろう。

だが、この者は全てを奪う。

今、ココで殺しておけば、全ては悪魔の仕業に出来る。

ワシの支持は下がるだろうし、権力も墮ちるかもしれないが、全てよりもまだ。

いや、もしかしたら吸血鬼の真祖を殺したっという逆転の一手から上からは、神の使いを語る悪魔をも殺したと思われるかも知れぬ。

つまり、ココで殺せば後はどうにかなるに違いない!!

そう、ワシの地位は上がり、うまい汁をさら

第一章 魔女狩り編 その13

裏(後書き)

すごく、変な所で終わっていますが、途中ではないのでご安心(?)  
ください。

第一章 魔女狩り編 その14

裏

Side 民衆A)

唐突だった。

神父がナイフをだし、あの方を刺そうとした。

そこまでは分かっていたのだが、あの方が後ろを向いた途端、神父がその視線を追うかのように宙に浮き、地面へと這いつくばったのだ。

「それで、魔女達はどこだ??

って、気絶か……………」

いうと、あの方は神父を抱え込み、胸の前で手をつなぎ合わせると

ビクン

神秘的だった。

まるで、神父に魂を注ぎ込んでいるような、そんな様子が目の前で起きている。

いつかい痙攣すると神父は目を覚ますのだった。

side エヴァンジェリン

男の腕が再び迫ってきた。

そして、右の目に奴の指が突き刺さる。

「ぐうつ。」

下唇を噛み、悲鳴を無理やり抑えた。

こんな奴のために悲鳴などあげてやるものか。

「ゲスが。」

その汚い指をさっさと抜け。」

奴の指が私の中を好き勝手に動いている、そう思うと虫唾が走った。

「けっ、お前みたいな化け物にそんな事言う権利なんてないんだよ。」

私に言い聞かせるためだろう。

奴の息がかかるほど顔を近づけていた。

ふふふ、丁度良い。

ガッン



「ぎゃあああああああ」

「ふん、くだらないな。」

「たかが頭突きくらいで、みっともない悲鳴をあげるな。」

「とりあえずは、一矢報いたというところだろうか？」

「だが、これくらいでどうにかなるわけではあるまい。」

しばらく、各地を転々としてきたのだ。

その時の経験から、これからの予測など簡単についた。

他の魔女と同じ火炙りにされるのだ。

この、穢らわらしい奴め。

ああ、あのような凶暴なのがいなくなれば、平和になるわ。

などの声を聞きながら燃やされるのだ。

私は吸血鬼だから死ぬ事はないだろうが、痛みはあるのだ。

死ぬに死ねず、体中を焼かれ続ける…。

今まで色々な経験をしてきたが、今度こそ狂ってしまうかもしれないな。

「ようやく見つけた」誇りある悪”という道だったが、狂ってしまったえばその道など簡単に踏み外すだろうな。

まあ、それも良い。

もう、疲れてしまったんだよ。私は。

どのくらいの月日は分からんが、それでも長すぎる孤独。

” 誇りある悪 ” という道いらいわいを見つけたおかげで狂わずにこれまで頑張ってきた。

もう、いい加減休んでも良いだろ？

疲れたんだ。

「この、クズが!!」

叫びながら男が左目に釘を差し込んできたが、不思議と痛みすら感じなかった。

何も無い、ただ深い水の中で、ゆっくりと身体が溶け出すような感覚。

暗い闇に包まれ、全てがどうでもよく感じる。

ソコは非常に居心地がよかった。

ドタドタドタ

何かが下りてくる足音が響く。

音はだんだんと近付いて来て、私に触れるというのだった。

「おい、君

大丈夫か!？」

それは深い闇の中に、細い光が差し込んだ瞬間だった。

第一章 魔女狩り編 その14

裏（後書き）

ちなみに、気絶をしたら気付けをすると良いというワケではありません。

した方が良い場合もありますが、してはいけない場合もあるかと思  
います。

その辺はご了承ください。

第一章 魔女狩り編 その15

裏

Side エヴァンジェリン

ゆっくりと顔をあげると、そこには心配そうな表情の男がいた。  
何故か彼は泣きそうな顔になっていた。

「なんだ?? 貴様は??」

無感情。

だが、機械的に笑みを浮かべながら問うと

「化け物風情が、誰が喋っていいと許可した!？」

頭突きをされた男は

今度はくだらない事を叫びながら、持っていた釘を再び私の目へと  
付き立てようとした。

また刺される。

思ったはそれだけだった。

やはり、私は堕ちたらしい。

前の私であつたら。

痛い、耐えなければ  
など様々な感情を持ち、そして身を強張らせただろう。  
襲いかかってくる痛みに覚悟を決めていたのである。

だが、今の私は違った。

全てがどうでもよく、刺さるといふ事実が分かっているだけ。  
耐えなければならぬという感情などなく、覚悟もない。  
生物の本能すらも、既に無視しており  
身体は強張るところか、一切の力が入っていなかった。

だが、いくら待てど、その釘が私の目に届く事はなかった。

「てめえが黙れ。」

それは衝撃的だった。

目を抉られるよりも、よっぽど衝撃のある光景。

私を守るために、男を殴ったのだ。

地位のある、権力のある男を、吸血鬼を守るために殴り飛ばしたのだ。

何を考えているんだ？

この男は？

私を利用する気か？

吸血鬼は殺されるべき存在なのだろうか？

なぜだ？

なぜなんだ？？

「ちょっと待っているよ。

今から、解放してやるからさ。」

「貴様は、一体なんだ？」

殺されるために存在するような私を、自分の身を危険にさらしてまで  
どうして助けるんだ？

あつたのは困惑。

この者が何だか分からなかった。

だが、こやつは私の言葉を無視して

「少し痛いだろうけど、我慢してね。」

丁寧に釘を抜いてくれた。

今まで、釘のせいで行われなかった再生が、黒い煙と共に行われる。

「ん？？」

って、どういふ事！？」

男からあがる疑問の声。

ああ、そうか。  
なるほどな。

こやつは、私が吸血鬼だと、知らなかったのか。

別に、この者が悪いわけではない。

見知らぬ子供を助けるために、聖職者を殴れる、優しい男だ。

ただ、少し寂しいだけだ。

分かりきった事だろ？

私が受け入れられる事など、けしてないんだ。

自分の中にいる自分が言ってくる。

ああ、分かっていたさ。

分かっていたとも。

私は吸血鬼だ。

人とは相容れない怖ろしい吸血鬼だ。

受け入れてもらえる事などないと、分かっていたさ。

だがな、だが

少しぐらい、夢を見ても良いだろ？

1人は寂しいんだ。

少しぐらい、期待したって良いじゃないか。



「吸血鬼なのだから、当たり前だろ？」

不敵にだ。

不敵に言うんだ。

自分に言い聞かせながら、震えそうになる声を無理やり抑えて言う。

この後はいつもの様に、怖がられ、罵られる。

何度も何度も経験した事だ。

優しいお婆さんも、幼いあの子も、皆そうだった。

だが、何度も経験しても馴れる事はないんだな。

こうして彼の返事を待つ僅かな時間ですら、ここまで苦しいのだからな。

「おお、なるほど。」

これから襲いかかってくるだろうと思われた罵倒に身を強張らせていたというのに。

思いにもよらない言葉に、思考が停止した。

だが、その言葉が、私を受け入れてくれる言葉だと

吸血鬼である私を受け入れてくれる言葉だと気付いた時。

私は泣きそうになった。

まったく、情けない事だ。

もう、既に何十年も生きている化け物だというに、幼子のように声をあげて泣いてしまいたいと思うのだからな。

本当に、情けない事だ。

「痛いだろうけど、我慢してね。

一気に全部抜いちゃうから。」

私の顔を見ず、そのまま彼は残りの釘を抜いてくれる。

素直に助かった。

今の顔を見られては、とてもじゃないが悪の吸血鬼らしくない様子を見られてしまっただからな。

「んっ、ズズツ。」

痛みを堪えているのか、泣くのを堪えているのか分からん声が響く。自分自身でも良く分からんのだ。

だが、痛みを堪えている声だという言い訳は出来た。

けして、こやつに泣くのを堪えているとは思われないようにしなくてはならぬ。

「よし、コレで終わりだ…。」

うっん、お嬢ちゃん頑張ったね。」

全てが抜き終わると、笑みを浮かべながら私は見つめられた。

それが恥ずかしく、そして片目にこの様な煩わしい釘があるような状態では不恰好であったため

「ふむ。」

全ての釘を掴むと

「くううう」

全てを引き抜いた。

まったく、恥ずかしいのを誤魔化すためやら  
容姿を整えるために、目に刺さった釘を抜くとは  
一体私は何を考えているんだか。

だが、悪い気分ではなかった。

第一章 魔女狩り編 その16

裏

Side 民衆A)

「てめえが黙れ。」

あの方の聲がしたと思うと

「なっ、吸け、ぶはっ」

唐突に飛んできた男に神父が潰された。

慌てて神父を起こそうとするが、あの方が起こした奇跡を見て固まっってしまった。

あの方が少女から指に刺さっている釘を抜くと、黒い煙が出たのだ。恐らく、悪しき者を少女の中から取りはらっているのだろう。

ココからでは良く分かなかったが、二人は少し喋ると次は、残りの釘を全て抜いて行った。

抜いて行くたびに、黒い煙が出ていき、そして全て抜き終わると何を思ったのか少女は左目に刺さっていた釘も全て抜いたのだ。

普通であつたら、痛みの叫び声を出したりするのであるが少女は、軽いうめき声をあげただけであつた。

それだけで、目は開かぬがなんともない様子。

先ほどの指も、血は付いていたが普通に動かしている様子からして、治ってしまったようだ。

まさに神の奇跡。

この御方が何をしにココへ舞い降りたのかは分からないが、この御方は天から使われた者だという事は間違いない。

〈side エヴァンジェリン〉

「ふむ、やはり目は開かんか」

おそらく、あの釘に一応とはいえ魔除けがかけられていたのだろう。もしくは、材質が銀だったりしたのかもしれないが。

指の方は簡単に治つたので、こちらもすぐに治るとは思つのだが目は、指と比べて繊細で細かいため時間がかかるようだ。

どうでもいい事を考えていたおかげか、多少は落ち着く事が出来た。

血を拭いながら、前を見ると笑っていた男の顔は、痛みを堪えるかのように歪んでいた。

痛みを堪えているのは私だというのに。

呆れながらも、やはり嬉しかったのだ。

普通の人の、普通の反応。

それが、吸血鬼である私にでも同様に反応してくれるその様子が。

まったく、いい歳だというのに、本当に呆れてしまう。

はっ、これはダメだ。

よく考えてみようではないか。

もし、あやつに私が喜んでいるとばれたとしよう。

そうすると、あやつからは『目の釘を抜いて喜ぶ特殊な人』という不名誉極まりない評価になってしまうのではないか。

それはいかん。それはいかんぞ。

いきなり男は動く。

「な、なにをする!?!」

私に、自分の上着を着せて来たのだ。

「うん? だって寒いだろ??」

さて、他の人達も助けないと…。」

不思議とその上着は温かかった。

side 神父

「おい、何なんだアイツは!？」

「ワシに聞くな。」

「ワシにだって良く分からん。」

唐突に男が飛んできて再び気絶したかと思うと、次もまた例の男によって目覚めさせられた。

先ほども、なぜ気絶したのか分からないという恐怖もあり、あの男には逆らってはいけないと本能が訴えていた。

しかも、これは並みではない。

まるで、自分よりも何十倍もある巨大な自然を目の前にしたかの如く、身体が恐怖ですくむのだ。

我々が起きると、ついてきた平民どもは何かを見たらしく、興奮していたのだ。

何が起きたのか聞くと

「あの、少女を治した。」

と返って来たではないか。

つまり、あの男は吸血鬼だった少女は人間へと治してしまったというのだ。

確かに、吸血鬼をみると片目が治っていない。

今までは、全ての傷を治していた少女である。

つまり、人間に戻ってしまったという事だ。

力が違いすぎる。

だが、コイツにはそれが全く分かっていない様子で

「おい、とりあえずアイツが背中をオレに向けるように誘導しろ。オレが、コイツで首をとってやる。」

と、怯えながらも男は、まだやれると思いつ込んでいた。

「ダメだ。あの男に手を出しちゃダメだ。

アレに逆らったら、全部が終わる。」

そう、全部だ。

何もかもが終わってしまう。

「何だ!？」

奴の目的は何なんだ!？」



この男も恐怖によって、焦っているのだ。  
頭が混乱をおこし、ワシへと迫ってくる。  
そんなワシたちに、冷水の様な声が響いた。

「さっさと魔女達のもとへ案内してもらおうか。」

都合の良すぎるタイミングで彼が言葉を発した。  
本当に、都合の良すぎるタイミングだ。

まるで見計らったように、男の聞いて来る『目的』を語ったのだ。

「諦める。」

あの男に逆らうのは、無理だ。」

ワシは言うつと、男に背を向け魔女達の元へと向かった。  
例の男に声をかけなかったのが、せめての抵抗であった。

第一章 魔女狩り編 その17

裏

Side エヴァンジェリン

「さっさと魔女達のもとへ案内してもらおうか。」

口調や雰囲気が一気に変わると、聖職者達は顔を青く染めながら先  
行していった。

あの、プライドだけは高い聖職者が、文句も言っていないことなく、怯え  
て従っていたのだ。

「本当に、貴様は何者なんだ？」

「まあ、詳しくは後でね。」

置いて行かれちゃ困るから、一緒に行こうか。」

そう言うと、奴は私の手を握りそのまま付いて行くのであった。

というより、手など繋ぐな！

子供じゃあるまいし。

しかも、これでは悪の吸血鬼としてかっこつかんではないか！

そんな事を考えながらも、文句も言わず付いて行ってしまった。

コイツの方が、よっぽど人心を惑わす魔女らしいではないか。

とりあえず、コイツの目的は魔女達の開放らしくと言う事が分かった。

何があつたのかは分からぬが、聖職者達の異常までの怯えのため、そのあたりはすぐに達成できた。

だが

「お前達が奪って来た財産を全て寄こせ」

この要求はうまくはいかなかった。

いや、とりあえず聖職者は怯えていたため、それなりの金品は持つてきた。

だが、本当に”それなり”なのだ。

相手に、”とりあえず納得しておこう”と思わせるぐらいの、非常にイヤらしいぐらいしか持ってこないのだ。

聖職者などよりも商人の方が向いているのではないか？

だが未だに手を離さない、この男の方がよっぽど上であった。

「ところで、右の扉には何があるんだ？」

と聞けば、膨大な紙幣が見つかり。

「こちら側には、地下はないのか？」

と尋ねれば、高級なワインの保存庫を探し当て、さらには

「随分と広い庭だな。」

何のために、こんな広さが必要なんだ？」

言つと、その真下からとんでもな量の金品が出てきたりと

この男には誰も敵かなわないと、見せつけられた。

優しく、狡猾で圧倒的な存在…。

知れば知るほど分からなくなる。  
そんな不思議な魅力の持ち主。

とりあえず、分かった事は  
こやつには人たらしの才があるという事だ。  
未だに繋がっている手が、それを証明していた。

「全部は持っていけないからな  
コレぐらいは渡しておこう。」

あの方は、言つと大金をオレに渡した。

「コレを使つて

まあ、飢えている人でも助けてやれ。」

ああ、なんと云う事だろう。

アガペー、無償の愛を受けるのは親以来の事かもしれない。

しかも、この方はこの街にいる全員にその愛を与えたのだ。

「後はそうだな。

街に汚物をそのまま捨てるのはやめさせる。

畑にでも埋めておけば、作物も育てやすくなるからそのようにしろ。  
そうすれば、病気も減るしな。

あとは、ジャガイモだ。

ありゃ、見た目は不格好だけど飢餓には苦しむ事がなくなるからな。  
育てていて損はないぞ。

ただ、芽には毒があるから気を付けるようにな。」

初めは、ただただ怖ろしく感じた彼だが  
今は、そうではなかった。

確かに巨大な力はあるに違いなかったが、怖ろしい対象とはなり得なかった。

1人でも刃向かえば、黒死病を流行らせるなどと言ったわりに散々神父が刃向かったにも関わらず、オレ達の心配をするだけで、天罰を下そうとはしなかった。

だが、初めの恐怖を忘れたワケではなかった。オレ達を戒めるための、あの恐怖。

あの方は伝えたかったのではないだろうか？  
周りに流されるだけではなく、自分をしっかりと持てと。

「魔女狩りはもうするなよ。」

それだけ言うと、あの方は去ってしまった。

オレは、その大きすぎる愛に包まれ、涙をこらえるのに必死で頷き、礼をするしかなかったのだ。

他の者たちもそうだった様で、中には泣いている者すらいた。

ジャガイモ。

どのような物かは分からなかったが、あの方が言ったのだから、それさえあれば飢餓で苦しむ事もなくなるのだろう。  
だが、その前にやらなければならぬ事が多くあった。

もう、オレは学んだのだ。

領主や聖職者など関係がなかった。

無駄な争いが起きない様に、ある程度は機嫌をとるが、それ以上の必要はあるまい。

それよりも、オレ達がオレ達でこの街を良くしなくてはいけないんだと。

ココに住む者、全員がココにはいた。

つまり、あの方の巨大な愛は全員へと伝わったのだ。

それは、我々の結束を強くしたに違いなかった。

ココにいる全員

さらに後ろにはあの方もいるのだ。

怖いものは何もなかった。

皆が期待する中、オレは口を開いた。

「とりあえず、汚物について考えようか。」

第一章 魔女狩り編 その17

裏(後書き)

とりあえず、一言だけ言わせて下さい。

締まらねっ…。



side 元魔女

原因は噂であった。  
誰もがした事のあるような本当にくだらないう噂。

そんな噂から、変なこじつけをされてしまい、私達は魔女へとしたてあげられた。

誰しみが、魔女となる可能性があったから、人々は努めて妬ましい人、疎ましい人に焦点をあて  
噂を広げ、そして魔女へとしたてあげられたのだ。

自分の変わりとなる犠牲。  
それが私達なのだろう。

ただただ、美しいから、お金を持っているから、親が死に1人だから  
などと言った理由から、噂を広げていくのだ。

彼女が美しいのは、悪魔と契約したから。  
彼がお金をもっているのは、悪魔から教えてもらったから。  
彼女に親がいないのは、悪魔の生け贄にしたから。

証拠など一切ないような噂から、私達は捕まったのだ。

いや、証拠がないとは語ったが、教会で認める証拠はあった。

裸にされ、体中くまなく舐めまわされるかのように見られる。

その時、ほくろ、痣などが見つければ、それが証拠となるのだ。

こんな酷い事があっていいのだろうか？

そんなモノ、誰だってあるではないか。

だというのに、彼等は取り合ってくれず、自分は魔女だと言わない限り攻め続けられるのだ。

爪を剥がされた者もいた、水を飲まされ続けた者もいた、体中の骨を脱臼させた者もいた。

その拷問から逃げたいために私達は言うのだ。

そうだ、私が魔女だ。

胎児を貪り食べたのも私だ。

家畜に病をかけたのも私だ。

すべては私がやったのだ。

と…。

あったのは、絶望だけだった。

拷問で死ぬか、火刑で死ぬかの違いはあったが、結局は死ぬのだ。

しかも、皆の敵として死んでいく。

しかも、最近は『別の魔女は誰だ？』と別の魔女を知るためにも拷

問をされるのだ。

まるで、魔女を少しでも増やしたいと思っているかのように。

そのせいで、この部屋には容量を越す人数が収容されていた。

もう、生きている意味を見いだせなかった。

結局、私は苦しく、惨たらしい死に方しか出来ないのだ。

そんな、未来にどうやって希望を見つけろという？

そうやって、広がった絶望。

それを一瞬で消し去り、希望の光を与えてくれた人がいた。

「全員表に出ろ」

神父に言われた時は、ついに火炙りの日が来たのかと思っていたのだがそうではなかった。

神父の後ろにいた幼い少年。

彼の悲しそうな顔と、優しい言葉から、彼の優しさを知った。

その少年の顎に使われる神父たちを見て、私達は彼の不思議さを知った。

そして、私達があのだ獄の日々から解放されたと分かった時、私達は彼の中に光を見出した。

あなたは、何も知らないかもしれない。

私達に自分の事を説明する時に”普通の人”と言っていたが、そんな事はない。

彼は私達の命の恩人であり、絶望の中で見つけた、眩しく輝く太陽なのだ。

拷問、裏切り、妬み、欲などで冷え切ってしまった私達を抱きしめ、温めてくれる光なのだ。

その光にどれだけ救われたか、その光にどれだけ勇気付けられたか、あなたは知らないだろう。

彼に恩返しをしたい。

これは救われた私達全員の総意であった。

だが、別にもう一つの思いがあった。

これは私だけかもしれない。

とても愚かで、とても自分勝手な思い。

とても醜く、浅ましい欲求だった。

だが、思わずにはいられなかった。

闇の中で見つけた光と

あの、全てを包み込む穏やかな太陽と

共に、ずっと過ごしていきたいと……。  
私は、思わずにはいられなかったのだ。

だがそれも、あなたは知らない。

いや、コレだけは知られてはならないモノであった。

少しでも長い間、彼と共に居られるために  
知られてはいけない、私だけの秘密。

第一章 魔女狩り編 その19

裏(前書き)

魔法について独自の解釈が入っています。

Side 魔法使い

まず初めに感じたのは勘違いかと思うほどの微弱な変化だった。

自分がかけた魔法だから、この特性は良く分かっていた。  
その特性とは認識阻害魔法と、人払い。

今までの魔法とは方向性が全く違う新しい理論に基いて完成させた、  
オレの自慢のオリジナル魔法だ。

認識阻害魔法、読んで字のごとく認識を阻害する魔法。  
今は、この村にその魔法をかけている。

これによって、普通の人には村が見えていないという症状に陥る。  
多少勘が良い人間には、村は見えているのだが理解は出来ないとい  
った状態になるだろう。

そして、もう片方の人払いの魔法だが  
これは、人々に何となく居たくない、行きたくないと思わせる魔法  
である。

二つとも、村にかかっており  
対象は外の人間、つまり村人以外の人間を対象とした。

二つとも、対象の人間に”思わせる”だけの魔法であるため  
対象の人間が少しでも違和感などを感じれば、すぐに解けてしまう  
脆弱な魔法と言えなくもなかったが  
それでも、今のところは完璧であった。

何故ならば、この魔法はオレのオリジナル魔法であったからだ。

つまり言うと、この魔法を知っている者はオレ一人しか居ないのだ。  
認識阻害魔法や人払いの魔法が存在すると認識していない限り、こ  
の魔法を解くのは理論上は不可能なのだ。

オレ一人しか知らないが故に、ほぼ完璧な魔法。  
そう信じていた。

確かに天文学的な数値でココに迷い込んで来る者はいるだろうが、  
あの男はそうではなかった。

ほんの少しのバグ。

ソレを付き、彼は40人近い人々を引き連れてココまでやってきた  
のだ。

理論上は不可能と思っていた事を彼は楽に覆したのだ。

偶然40人を引き連れてやってきた可能性がないとは言い切れなか  
ったが

それでも、恐らく無理だと言っておこう。



40人全員がこの村を認知しているのだ。  
恐らく、この男が村があると認知させたのだろう。

無い物があると信用させるこの男の力量は正直言って怖ろしいモノ  
があった。

「いや、やっと村に着いたよ。」

適当に歩いていたら、偶然着いてさ。」

村の入り口で初めて会った時、白々しくも男はそう言ったのだ。

まずは彼を警戒した。

だが、彼が持っていた片目の開かぬ少女と、彼の後ろにいた40人  
近い人達の様子を見て、その警戒はなくなった。

何故ならば、この者達も魔女狩りの被害にあっていたという事が分  
かったからである。

どこで知ったのかは分からない。  
だが、彼は知っていたのだろう。

どうして、ただの村に魔法をかけたか。  
どうして、この村には人里から離れた森の中にあっただのか。

その全ての答えは

ココが、魔女達の村だからであった。

正確に言つのならば、魔女狩りの被害者の村とでも言つべきだろうか？

とにかく、この村であつたら彼の後ろにいる者達全員を差別されたりする事なく暮らしていけるのだ。

この村を知っていた情報網。

まだ発見されても居ない魔法を潜り抜けた技術。

40人近い人数を混乱もなく連れて来た統率力。

そして、この疑り深いオレをあつという間に説得してみせた人心掌握術。

あつという間にオレは説得されてしまった。

とてもじゃないが、敵いそうにもない。

とてつもなく大きい人間だった。

とりあえず、村の人口が40人近く増える事となった。

## 第一章 魔女狩り編 エピローグ(前書き)

この話はフィクションです。

色々と歪められまくっているので注意してください。

## 第一章 魔女狩り編 エピローグ

中世は非常に不安定な時代であった。

戦争、疫病、飢饉など、様々な災厄によって、人々は常に死と隣り合わせの生活をしていた。

そんな環境下、人々は何故このように自分達が苦しまなくてはいけないのか考えるようになる。

不満を何かモノにぶつけないと、やっていけないほどに人々は疲れてしまっていたのだ。

恐らくは、何かくだらぬ噂だったのだろう。

本当に、くだらない事をきっかけに、魔女狩りが始まったのだ。

民衆達が率先して、魔女と思われる人を捕まえた。

村八分、リンチなど様々な事が行われるようになり、それはヨーロッパ全土へと広がる。

根拠のない、理不尽な暴力がヨーロッパ全土に広がってしまったのだ。

そして、魔女狩りと言う巨大な波は民衆だけには留まらず、教会までも巻き込んだ。

だが、民衆と教会とでは魔女の扱いは違った。

とりあえず、噂がたった人間は教会へと無理やり連行された。

そしてまず裁判を行い、魔女か否かを決する。

大抵の場合は魔女となり、多大なお金を払った物のみ魔女ではないとされるようであった。

この、教会が魔女と判断する証拠は悪魔の印であった。

裁判を受けている人間を裸にし、ほくろや痣がないかを調べるのだ。この、ほくろや痣は悪魔と性的接触を行った際につけられるキスマークである、などと判断されたらしい。

次に行われるのは自白を促す拷問。

そして、自白をすれば火炙りとなる。

この火炙りは街総出で行われ、お祭り騒ぎになっていた。

だんだんと、教会は魔女探しに躍起になっていく。魔女を火炙りにすれば、教会の権威はあがり、魔女を殺せば、その財産はすべて教会のモノへとなくなっていったのだ。

教会からしてみれば、非常にいいビジネスだったのだろう。

時には、拷問の際に仲間の魔女を教えろと迫った。

何も言わなければ、再び拷問が始まるので、苦痛から逃れたい人々は街に住む人の名を次々とあげていったのだ。

この魔女狩りは中世末期から近世まで続くこととなる。

さて、この魔女狩り。

今の我々であったなら、とても残酷だといえよう。

だが、当時の人々にとってはそれは正義であったのだ。  
考えられない事かもしれぬが、人は時としていくらでも残酷になれるという一つのいい例だろう。

だが、時として例外というモノはある様で、ヨーロッパの魔女狩りが行われていた地域にも関わらず  
近世になる前、つまり周りは魔女狩りを行っていたにもかかわらずに、唐突に魔女狩りをやめた街があった。

その街には特有の昔話があり、題名を『うそつき天使』という。

非常に大雑把な説明をしたら、天使が嘘をつき教会から魔女をさらってしまうという、ただそれだけの話なのだが  
所々に、『ジャガイモがあれば飢えない』や『汚物が病気の元』などといった、当時の常識を覆す所が部分的にある。

当時、ジャガイモは悪魔の植物といわれ、食べてはならないとされてきた。

また、汚物も当時としては道に溢れるのは普通の事であり、病気の元とは考えられなかったと思う。

そもそも、昔話というものは

正直者が得をする話が主だというのに、この話は天使が嘘をついた事によって、人々の心を変えするという

酷く不可思議な話である。

ある学者は、ハーメルンの笛吹き男がこの話の題材になっているのではないかというが  
詳細は不明である。

だが、確かにその街では汚物は畑へと埋め、ジャガイモを育てていた事により飢えも少なくてすんでいたという事実はあった。  
様々な資料を見ていくが、結局その天使が何者だったのか、魔女達はどくなったのか、なぜ魔女狩りを行わなかったのか  
といった、部分は結局分からずじまいであった。

『ヨーロッパの歴史』より一部抜粋

この村は、ヨーロッパ版の隠田百姓村とでも言うべきだろうか？  
とりあえず、魔女狩りの被害にあった人達の隠れ里の様だ。

都合がよ過ぎるだろ。

いや、だってさエヴァちゃんと遊んで迷い込んだと思ったら、非常に都合のいい隠れ里が見つかったんだよ。

まあ、オレの曰ごろの行いが良いから、神様がほほ笑んでくれた  
んだろう。

とりあえず、最近は何を切りまくったり、畑を耕したりと毎日がか  
なり忙しい。

しかも、バリバリの現代っ子だったオレとしては、慣れてない事ば  
かりで常に振り回されてばかりだったのだ。

バリバリの環境破壊も、オレが40人も連れてきてしまったため村  
の面積を大きくするのに必要であり  
そして、畑を耕し、新たに畑を作るのも必要な食物が増えるので、  
やらなければいけないと分かるのだ。

50〜60人しか居なかった小さな村に、40人も人が増えるの  
だから

村の生産量、面積を増やさなくては、すぐに村がダメになっちゃう  
事なんて、ガキのオレでも分かる。

まず苦労したのは家だった。



流石に40近くも家を作るのは面倒だったので、大きな家を木で適当に作り、そこに皆で暮らした。

凄く適当だったが、柱の数を無駄に多く下から多分大丈夫だと思う。

というより、ヨーロッパといえば石で出来た建物ばかりというイメージがあつたのだが、案外木製の物もあるみたいで

驚かれなかつたのがチョッピリ残念ではあつた。

設計図は頭の中のみ。

流石に2階もあるようにすると、つぶれた時が怖いため平らな家となった。

というより、『建築の技術の無いオレがこんなモノ作っていいのか？』など、いろいろと疑問があつたが

まあ、日本とは違って地震が少ないから、大丈夫だよな？

まあ、”とりあえず”の感覚で建てたので、10〜20年ほど建ったら建て直そうと思っている。

村総出で、気合いを入れて作ったため家は2週間ほどで完成はした。この期間の短さが逆に不安となつたのだが、今は何とか保っているので良しとしておこう。

この建築、一番の功労者は村長さんだろう。

なんと、彼は魔法使いらしい。

なんか、色々とこの世界に毒されている様で、あまり驚きもしなかつたのだが。

とりあえず、家を建てる時はとても助かった。

だって、楽に木を運んできたり、切り刻んだりと大活躍だったもん。

そりゃ、助かる。

ちなみに、この魔法っていうのは中途半端に万能だった。

木を運んだり、切り刻んだりは出来るんだが、畑を耕したり、洗濯をするのは不可能らしい。

まあ、それでも魔女狩りの被害にあった人達の潰れた指や折れたまま固まってしまった骨などを治してくれたのは本当に助かった。

しかも、その魔法には使える量というのが決まっている様で、あまり乱用も出来ないらしく

オレ達にも力仕事は当然の様にあった。

そんで、次は食糧。

幸い金は沢山あったので、家畜と植物の種などを大量に買い込んで後は自給率を上げるのみとなった。

とりあえず、この自給率に関しては時間をかけてじっくりと、やっていくしかないの

すぐに、何とか出来る筈もなく、ゆっくりと地道に畑を耕して種をまいた。

というより、外国って日本と比べて作物よりも肉の方を食べているのって、あまり意味がないのかと思っていたんだよ。

だってさ、牛とかを育てるのって大豆とか滅茶苦茶使うじゃん。

だったら、牛を育てずに大豆を食った方が腹は膨れると思っていたんだよ。

だもんで、バンバンに作物を育ててやれば、楽に自給率が上がると思っていたんだけど

村の様子をみると、そんな簡単にはいかないようだ。

畑をみれば作物なんて微妙な量。

話を聞くと、不作がかなり多いらしい。

まあ、確かに気候も温暖とは言えないし、雨の量も日本と比べたら圧倒的に少ない。

そんな不安定な作物にくらべ、牛や豚といった家畜は楽だという。

どうやら、食べさせているのは作物ではなく、その辺に生えている雑草。

適当に放し飼いにして、育ったら食う。

牛はミルクも手に入るから、なお良いとの事。

確かに、ここは森の中だから雑草には事欠かないだろう。

やはり、生きていく上で必要だからこそ肉食文化というモノが広まったんだろう。

うん、なんか感動だ。

とりあえず、ココまでは何とか出来た。

家はいつ崩れるか心配だし、食物も金に物を言わせて買い込んでい  
るだけで、まだ自給率の上昇は出来てはいないが  
間に合わせとしては、十分だろう。

後は、しっかりと働けば村で飢え死にするような人は出ないだろう。

それどころか、税もないので前よりも豊かな生活が出来る可能性もあった。

コレだけ聞くと、順風満帆の村生活のように思えるかもしれないが一つだけ、どうしても困った事があるのだ。

日本人の顔つきのせいで、幼く見られお姉さん達と一緒に寝かされたり、エヴァちゃんがソレを真似てきたり  
どうしても、米と味噌汁が食べたかったりと、そんな事ではない。

いや、それはそれで困っているのだが生きる上ですぐに改善しなくてはいけないというワケではない。  
どうしても、困っている事。

それは、環境の酷さであった。

ちよつとコレは、ヤバいつて言うぐらい環境が酷いのだ。

前の街でもそうだったかが、ココの村でも汚物は普通に道に捨てられている。

さらに、暮らしていて気付いたのだが動物の死体なんかもそのままなのだ。

街とは違って、下が石畳ではなく、土だったため汚物や死体が分解されてくれるのが唯一の救いではあった。

それでも、やはり道に汚物を捨てるのは色々とダメだ。

そしてコレは暮らしていて気付いたのだが、お風呂がないのだ。これは、流石に驚いた。

風呂なんてモノは、既にあるものだと思っていたのだがないのだ。

オレのイメージでは紀元前には既にあつたものだと思っていたのだが、ないと知った時は本当に驚いた。

というより、『風呂はないのか?』と聞いたところ驚いた表情で

「徹様、何があつたんですか!?

死のうなんて思わないでください!」

と必死に説得されてしまった。

エヴァちゃんにも話したら

「ならん、ならんぞ！」

徹は私のモノなんだからな、勝手に死のうとするな！」

との事…。

いや、別に死のうとしてはいないんだけど、かなり心配させてしまった。

というより、エヴァちゃんに初めて名前を呼んでもらって、ちょっと嬉しかったのは内緒だ。

色々話を聞いてみると、どうやらお風呂というモノは、病にかかりやすい行為であると認識しているらしい。

お風呂に長く入っていると、指がフニャフニャになって不思議だな？  
って小さい頃思った記憶がある。

だが、この時代の人にとってはそれだけですまされなかったらしく

『お風呂は、肌が柔らかくなってしまう怖ろしい行為だ』と認識されてしまったらしい。

つまり、そうやって柔らかくなった肌から病原菌が入ってきて、病気になるてしまったていると考えていたのだ。

オレはてつきり、香水って肉食文化だったため開発されたモノだと思っていたんだよ。

肉ばかり食べていると、体臭がキツクなるってよく聞くしな。

でもさ、確かにそれも含まれていたんだろうけど

風呂に入らなかったから、っていうのも理由に含まれているんだろ  
うな。

というか、汚物にしろ風呂に入らなかったりと

ココに来てから、考える問題が清潔関係って一体どついう事だよ…。

しかも、この人達って環境の方は全く気にしないんだよ。

普通は、病気にならないには手洗い、うがい、よく食べて、よく寝  
るとかが考えられると思うんだよ。

つまり、身体を清潔にして、健康管理をしっかりとするって事だろ？

でもさ、ココの人達って身体を清潔にっていう概念がいまいちない  
みたいなんだよ。

それどころか、家にネズミがいがいが、動物の死骸が普通に道に置  
いてあるのが気にしないで無視だよ無視。

もう、生活の一部みたいなもんで、居る事に嫌悪感とかが一切ない  
らしい。

初めて、ドブネズミを見てビビっていたら、女性一同から鼻で笑わ  
れてしまったのは良い思い出だ。

これじゃ、病気が流行るのも仕方ないよ。

とりあえず、皆の身体についているノミやダニを何とかして一掃し  
たい。

そういえば、布団を干す理由って日光には殺菌効果があるからだっ  
たよな？

たしか、ノミやダニにも効果はあつたはず。

間に合わせだが、日光浴で殺菌をさせて、この人達の意識の変化を促していくとしよう。

ついでに、ネコとか飼つてネズミの数を減らして、汚物や動物の死体の処理をどうするか決めさせれば  
だいぶ、環境は変わるだろう。

というよりも、コレだけで確実に病気にかかる人の人数が減るだろうな。

そういえば、黒死病っていうのは伝染病らしいから、隔離もさせないとさらに流行る可能性もあるしな。

ん？

というより、オレってこの時代の抗体がないか？

そういえば昔の探検家が、土地を発見してソコを探検したら彼の身体に付着していた菌が大流行してしまつて、その土地の人々を死に追いやつたつて話があつたな。

でも、その菌つて探検家の出身地域ではただの風邪らしく、そんなに大勢を死なせる様な威力はなかつたとか…。

つゝことは、オレって少しでも風邪をひいたら一発で死ぬ可能性もあるつて事か？

おじいさんのサービスを期待しておくでしょう。

うん、きつとおじいさんはサービスでオレに抗体を作ってくれてくれるはずだ。



そつでも思っていないとやっけていらねないし。

まあ、とりあえず皆で日光浴をしようとな提案したら。  
日光浴も、どうやら病気の元らしい……。

アレ？

これ、詰んだ？

整理をするぞ、整理。

今の環境は最悪で、現代っ子のオレとしてはとてもじゃないけど耐えられない。

せめて、身体を洗う、汚物の処理、ネズミの処理、動物の死体の処理、感染者への対応方法ぐらいは皆にしつかりとやってほしい。

後半の4つは、普段はやらなくて良い事をやらなくてはいけないため面倒だと思うだろうし、反発も出るとは思うけどやらせる事は不可能ではないはずだ。

イメージ的にはごみ収集の分別が増えた時のイライラぐらいだろうと思う。

ただ、問題は最初の奴。

つまり身体を洗う事だ。

小さい頃に親にうるさく言われた手洗いうがいをやらないどころかこの人達は病気の原因だと思い込んでいる。

唯一幸いなのは、虫が身体にいる事は”一応”は不健康の証だと認知している事であった。

不健康というか、なんといいば良いんだ？

とにかく、正常な状態ではないと思ってはいるようだ。

ただ、それは仕方がない事であるらしい。  
歳をとれば身体は動かなくなる。  
ちよつと寝不足だから、調子が悪い。

と同じ様なモノで

虫が身体中にいるのは、健康的ではないが仕方がないモノだと思っ  
てしまっているのだ。

どうしろっていうんだ…。

確かに、身体を洗わなくても他の事をしっかりとやれば病気になる  
人は減るだろうけど

やっぱり、身体を洗うのが一番重要だよな？

というか、オレが嫌。

もう、三週間もお風呂に入っていないから頭が痒くて仕方ないんだ  
よ。

オレだけが入っても良いんだけどさ、やっぱり皆にも入って欲しい  
し…。

とりあえずは、オレはお風呂に入るとしよう。

水が多いワケではないから無駄遣いは出来ないから、その辺は考え  
なくちゃいけないな。

そして、めちゃくちゃ気持ちよさそうに入っていれば、きっと皆も  
気になって入ってくれるかも。

うん、多分無理だな。

いくらオレが気持ちよさそうに入っていたとしても、流石に死の恐怖と比べたらね…。

意識を変えていくのは、ゆっくりとやっていくしかないかもしれないな。

とりあえずは、オレが風呂に入り続ける事によって風呂に対する恐怖心を少しでも減らすぐらいしか思い浮かばない。

せめて、濡れタオルで身体を拭かせる事ぐらいはやらせておきたい。

「という訳で、風呂を作るぞ！」

家畜やらを買いに行った際に、バカでかい鍋みたいなモノが安く売られていたから買ったんだよ。

ソイツを使つて五右衛門風呂を作れば、完璧でしょ。

ウキウキ気分で風呂作りの準備をしていると

「アホか貴様は！」

いきなり後頭部を叩かれた。

振り向くとエヴァちゃんが泣きそつな顔をしながらオレの事を見て  
いるのだ。

「ど、どうしたの!?! エヴァちゃん。

お腹が痛いとか?」

もう、オレはオドオドですよ。

だって、魔女狩りの拷問にあつても泣かなかつたエヴァちゃんが泣  
きそつなんだよ。

そりゃ、慌てるぞ。

「誰かにいじめられたの?

それとも、お昼が足りなかった?」

考え付く限りの例をあげてみるが、どうも違つらしい。

「 が死 う だ。」

小さい声で俯きながら喋るため、うまく聞き取れなかった。

「うん?

なに?」

身体をかがめ、エヴァちゃんの声が聞こえるように顔を近付ける。

「お前が死のうとするからだ!」

顔をあげ、叫ぶようにエヴァちゃんが言った。



ほんと、どうすれば良いんだ？

身体を清潔に保てば、皆も健康的に過ごせるのに  
入ろうとしたら、自殺と思われて泣かれちゃうし。

お互いがお互いの事を想っているはずなのに、なかなか上手くいかないんだよな。

かといって、オレが妥協しちゃったら病気も広がるし、死ぬまで風呂にも入れないかもしれない。

説得するしかないんだろうけど、あまり自身がない…。

「大丈夫だって。オレは死ぬ気はないよ。」

なるたっけ刺激をしないように、優しいと思われる笑みを浮かべながら言うが

「だったら、風呂などに入るな！」

泣きそうな顔のエヴァちゃんに言われるとかなり胸が痛むが、ぐつと堪える。

「そういうワケにもいかないんだよ。」

「どうしてだ!？」

やめる、絶対に入るな。入ってはならんからな!」

かなりのパニック状態になってしまっているようで、叫ぶようにオレへと詰め寄ってきた。

ここまで、エヴァちゃんがオレの心配をしてくれて不謹慎だけど嬉しい。

「エヴァちゃん、あのね」

「私のモノにならなくても良いから、私が徹のモノになっても良いから。」

呼ばれたいのなら、テツ兄いと呼んでやるから。

だから、だから…。

頼むから死なないでくれ。

お願いだ…。」

既に防波堤は決壊しており、エヴァちゃんの瞳からは涙がとめどなく流れていた。

「エヴァちゃん、よく聞いてほしい。」

エヴァちゃんの両肩をつかみ、彼女の瞳を見つめる。

涙によって、揺らんでいる彼女の瞳に動揺しながらも説明をした。

今の環境のままじゃ、病気が流行る事。

風呂に入れば、かなり改善される事。

細菌や、虫を媒介するなどといった難しい部分は余計に混乱させて



しまいそうなので端折はしりっているが  
それでも、オレの考えを聞かせていった。

「だが、その考えが間違っているかもしれないではないか。」

「たしかに間違っているかもしれないけど

オレが昔住んでいた所は、毎日の様に風呂に入っていたから、エヴァちゃんと言うように急に死んだりはしないから大丈夫だよ。」

分かってはくれたようなのだが、やはり納得はしていない様子だった。

『オレ、実は未来から来たんだ』とか言っちゃったら、絶対頭が可笑いな子と思われちゃうしな…。

とりあえず、コレが今のところ出来る精一杯の説得だった。

「どうしても入らないといけないのか？」

「うん。」

とりあえずオレだけでも入っておけば、皆の抵抗だって少しは薄くなるかもしれないし…。」

あまり自信はないんだけど、コレぐらいしか思いつかなかったんだよ。

せめて濡れタオルで身体を拭くぐらいをやってくれれば、多少はマシになると思うんだ。

『アイツが一番怖ろしいお風呂に入っているんだから、身体を拭くぐらいだったら大丈夫だろう。』

って皆に思わせれば、ゆっくりと浸透してくると思うんだけど、

こんなに上手くいくかな？

「分かった。もう何も言わんよ。」

ただし、条件が一つ。」

どうやら、いつもの調子を取り戻したようで、いつもの様な不敵で可愛らしい笑みを浮かべながっていた。

まだ、ちょっと無理をしているような感じは出ていたが、それでも少し安心した。

「で、何？

その条件って？」

笑みを浮かべながら答えると、エヴァちゃんは何故か不満そうだった。

「あの子、私は悪い吸血鬼なんだぞ。」

もうちょっと、不安がったりしないのか？」

「うん、全然。」

というより、オレの中だとエヴァちゃんは吸血鬼云々よりも可愛い女の子っていう方の印象が強いしな。

「ふん、つまらない男だ。」

条件とはな

私も一緒に入れる。」

「別に良いけど、怖くはないの?」

だつてさ、自殺と勘違いされるような行為だよ。

それを自ら進んでやるつて、絶対怖いと思っただよ。

「あんな、私は不老不死の吸血鬼なんだぞ。

怖いワケがないだろうが。」

不老不死だから、怖くないか。

不老不死といえば、オレも不老不死疑惑があるんだよね。

まあ、どうでもいいけど。

というよりも、いつの間にかオレはこの世界を自分の妄想だとは思えなくなってきた。

その可能性も捨てきれないとは分かっているんだけど、もうオレの中ではこの世界は現実だった。

もし、コレが妄想だとしたら

ポストやら電柱やらと話していたりするのだろうか、その辺はもう知らん。

周りに酷い迷惑をかけているかもしれないが、そっちはそっちで頑張ってくれって感じだ。

「それじゃ、お風呂を作ろうか。」

そっつい、エヴァちゃんとお風呂作りを開始した。

とりあえず、大鍋の底を木の板を使い、熱くない様に加工。  
さらに、側面の一部を木で覆い腰をかけれるように段差を作り、完成した。

見た目不格好で、たったコレだけを完成させるのにかなりの時間を使ったが、かいた汗の分だけ気持ちよく風呂に入れると思う。

ちなみに、この大鍋の下には煉瓦を積み上げておいて空間が出来るようにした。

一応、ココに火を入れる予定だ。

さらに、適当に作った階段まである。

まだまだ下手だが、なんか段々と上手くなってきているような気がする。

地下水は勿体ないので、この前降った時に溜めておいた雨水を鍋の中へと入れていく。

そして、枯れ葉や細い枝を下の空間へと入れて…。

火の起こし方が分らん。

うわ、ココでまさかの落とし穴。

「エヴァちゃん、ココに火をつけてくれる？」

「仕方ないな。少しまっている。」

そういうと、エヴァちゃんは家の中に入っていき、火のついた木の棒を持ってきた。

曰く、炉から持ってきたとの事。

頭良いな…。

「よし、それじゃ点火だ。」

細い枝や枯れ葉ばかりだったので、火はあっという間に燃え広がった。

そして、用意した太めの棒なども入れながら、さつき作った薄い板で風邪を送っていく。

ある程度火の勢いも強くなってきたので、後は時々枝を入れながらエヴァちゃんと話して湯が沸くのを待った。

そして、ようやく沸いた。

細かい時間は分らんが、凄く長く感じたよ。

自分で汗まみれになりながら作った風呂。

そして火を使って湯を沸かすという初めての経験。

その全てが、ただのポロイ鍋を華やかに見せていた。  
というわけで

「お風呂だあ！」

もう、準備も万端だ。  
着替えの服からタオルまで、全てが完璧。

とりあえず、素っ裸になって腰にタオルを巻きつける。

一応、エヴァちゃんの教育に悪いと思ったので、もちろん見えない  
様に頑張ったさ。

結構寒いが、下の火のおかげで、案外なんとかなった。

そして、もう一枚のタオルを湯に浸けて身体を拭く。

うわっ、こんなに汚れてたの？  
オレって…。

ちよっと、ヤバいぐらいの汚れがあったので、雨水をためていた器  
に湯を入れてタオルを洗い、再び自分の身体を拭く。

うん、まだちよっとヤバいけど、良しとしておくか。

「ふむ…。

とりあえず、私も拭け。」

「分かった分かった。」

いつの間にか裸になっていたエヴァちゃんを背中を拭いた。

オレの時よりもヤバいです。

計3回拭きました。

とりあえず、疑似桶の中が悲惨な事になっていたため、湯を入れ替えた。

「ほら、残りは自分でやってね。」

タオルをエヴァちゃんへと渡し、そして待ちに待ったお風呂へと入った。

初めてだらけで、いろいろと苦労したけどコイツは最高だった。うん、苦労したかいがあるというものだ。

いきなり死んだり、魔女狩りにあったり、家を作ったりと、本当に色々と苦労した。

馴れない事ばかり、初めてな事ばかりで、毎日が大変だった。

なんか、情けない事に涙が出てきそうだよ。

頑張ってるけどさ。

たかが、お風呂ごときに負けてたまるか！って思って頑張ってるだけ



ているけどさ。

なんか、涙が出そうなんだよ。

「おい徹。

私も入るのだが…。」

急に声をかけられたので、湯を顔にかけて色々誤魔化した。

「ちょっと待っていてね。」

多分、初めてだからどうして良いのか分からないだろう。

さらに、これは一人用だから

エヴァちゃんも一緒に入るとなると、”アレ”をしないと入れないと思う。

とりあえず、立ち上がる。

「はい、後ろを向いて。」

よく、分からない様な顔をしながらも素直に従うエヴァちゃん。

そして、彼女のお腹のあたりに手をまわし抱っこをしてあげた。

「なっ、何をする!?!?」

「暴れないでね。」

言いながらそのままゆっくりと風呂へと浸かった。

座れる場所が少ないので、エヴァちゃんはオレの膝の上に座ってもらう。

「悪の吸血鬼が…。」

なんか、落ち込んでいるようだが、無視。

「エヴァちゃん、オレ等は木の椅子に座っているから熱くないけどさ

金属の部分には触っちゃダメだよ。

火傷しちゃうかもしれないからね。」

でも、コレって一応水も入っているし、水の温度も38〜43の間ぐらいだから、上の方だったら大丈夫のような気がするな。

下の方は火で熱せられているから、流石に熱いだろうけどさ。もしかしたら、熱くないかも？

でも、君子危うきに近寄らずだ。

せつかく気分がいいのに火傷なんてしたらつまらないしね。

ゆっくりと、膝の上に座るエヴァちゃんの頭を撫でた。

なんだか、エヴァちゃんの父親みたいだな、オレ。

石鹸がなかったのは、すごく残念だったけど風呂の中でゆつくりとしたおかげで、身体は清潔になった。

水はかなり貴重なモノなので、前の様に毎日に入るわけにはいれないが、3日に1度ぐらいのペースで入りたい。

もし水がなかったら、蒸留をして同じ水を使う事にしよう。

身体に良いのかは分からないけど、ただ焚きなおすよりはマシになると思う。

とりあえず、オレとエヴァちゃんに関しては衛生面ではだいぶマシになるだろう。

残りは他の人達。

まだ、汚物の処理、動物の死骸の処理、ネズミの処理についても提案はしたのだが、実行までにもうしばらく時間がかかりそうだ。

救いは、オレが連れて来た人達はスグに実行してくれたので一気に村の環境が改善へと向かった事ぐらいかな？

少しづつ、元からいた人達にも広がってくれるだろう。

そんな事を、エヴァちゃんの髪の毛を拭きながら考えていた。

というより、女の人の髪なんて拭いた事がないからいまいち分からん。

男の奴みたいにかシガシと拭いたらダメだよな？

ドライヤーもないし、気温もそんなに高くないから、しっかりと拭かないと風邪をひいちゃうから、なるだけ丁寧に拭いてあげた。

「ほら、これでよし。」

「ああ、助かった。

借りーっだ。」

髪を拭いたぐらいで借りって…。

「はいはい、子供はお兄ちゃんに甘えるものでちゅよ。」

「ええ〜い、何度言ったら分かるんだ!？」

私はもう何十年も生きている悪の吸血鬼なんだぞ。

って、だから頭を撫でるな!！」

そんな事をやりながら村へと戻った。

「徹様、どこへ行っていたんですか？」

家に着いた途端、メアさんに尋ねられた。

ちなみに、メアさんは魔女狩りの時に助けた時にいたお姉さんだ。いろいろと生活に慣れていないため、よく助けてもらっている。

「お風呂に入ってきたんだよ。」

「徹様、一体何を考えているんですか!？」

エヴァちゃんも止めて下さいよ!！」

凄いい勢いで怒られました。

いや、でもコレは完璧にオレが悪い。

「メアさん、ちょっと落ち着いて。」

「落ち着くなんて無理ですよ!！」

あなたが死んでしまったらどうするんですか!？」

メアさんは、うつすらと涙を浮かべながらオレへと迫ってきた。

とても、エヴァちゃんを説得した時にそっくりな状況です。

えくと、えくと…。

どうやって、エヴァちゃんを説得したんだっけ？  
たしか…。

「メアさん、よく聞いて。」

メアさんの両肩をつかみ、彼女の瞳を見つめた。

うん、たしかこういう感じだった。

とりあえず、エヴァちゃんと同じ様な説明を繰り返した。  
なんか、2度目だから馴れて来たみたいだ。

「大丈夫だよ。メアさん。」

メアさんにも同じ事をやれっていうワケじゃないから。」

本当はやってほしいのだが、死の恐怖は味あわせたくはなかった。

「いえ、そういう事が言いたいワケじゃないんです。

なんで、徹様はそんな怖ろしい事が出来るんですか？

確かに、徹様が言う事が正しければ問題はありません。

ですけど、間違っていたら死んでしまうかもしれないですよ!？」

死ぬ可能性があるのだったら、冒険はせず従来のままの方がいい。

この考えは理解できた。

もし、オレがこの時代の人間だったら、この行動は理解が出来ないだろう。

だけど、オレはこの時代の人間じゃないんだ。

未来からきて、未来の知識をもっている。

もし、他の人が言う事に流されて何も行動を起こさずに普通に暮らしたら

きつと、何も文句も言われないだろうし、エヴァちゃんやメアさんみたいに泣かしてしまう事もないだろう。

だけどそのままにして、もし誰かが身体を壊したら

誰かが死んじゃったら、オレは絶対後悔する。

いや、どんなに頑張ったとしても結局は後悔するとは思う。

でもだ、でも何もやらなかった時の後悔と比べれば全然違うのだ。

「文化の違いかな？」

オレにとっては、そんなに怖い事じゃないんだ。

むしろ、オレの暮らしていた所だったら健康のためだったんだよ。しかも気持ちいいんだよ、お風呂ってさ。」

「メア、諦める。」

私も何度も考えを改めさせようとしたが、徹には無意味だったよ。

たしかに、徹のいうように風呂とは気持ちいいもだったしな。」

エヴァちゃんの援護が来たが

「徹様、エヴァちゃんも入れたんですか！？」

こんな子供に、そんな危ない事をやらせてはいけません！！！」

結果は、火に油をそそいだけであつた。

「とりあえず、エヴァちゃんは吸血鬼だから見た目の年齢とは違つからね。」

エヴァちゃんの意見を尊重しただけだよ。」

「それはそうですね。」

「それ以前に、吸血鬼は不老不死だからな。風呂ごときで死ぬような事はないさ。」

というワケで徹、また一緒に入るぞ。」

「うん、別にいいよ。」

出来れば、次は石鹼が欲しいな。

たしか、古代エジプトにはあったような気がするから  
作ろうと思えば作れるかもしれないんだけど、自信がないな。

そもそも、普通の高校生なオレには石鹼の作り方なんか分からない  
しな。

どうしても欲しければ、別の国に行って手に入れるのが一番楽かな？

「徹様、エヴァちゃんと一緒にお風呂に入ったんですか!？」

「えっ、うん。」

気持ちよかったよな、エヴァちゃん。」

「ああ、そうだな。」

そんな風に話していると

「徹様、私もお風呂に入る事にします!!」

何故かメアさんもお風呂に入る事になった。



とりあえず、この家にいる人達全員に風呂についての話しをした。

やつぱり、『死のうと思わないでくれ！』みたいな発言をされたが、なんとか説得をした。

3回目のため、説得はかなりスムーズだった。

「ああ、それでさ

ちよつとオレの思った事を言ってもいいかな？

皆はお風呂は皮膚を柔らかくしてしまい、その柔らかくなった所から病気の原因が入ってくると考えているんだよね？」

どうやら、オレの解釈に問題はなかったようでオレの言葉に皆は頷く。

「という事は、皮膚を柔らかくしない、逆に凝縮させる水風呂だったらむしろ身体を外敵から守ってくれるんじゃないの？」

かなり屁理屈っぽく、胡散臭いけど、唯一オレが思いついた恐怖感なく身体を清潔にする方法だった。

さすがに、気休め程度だと思ったのだが、何故か全員が納得してしまつた。

こんな、トンチみたいな奴で解決出来ちゃつたよ…。

ヨーロッパの気候は低いので、そんな所で水風呂に入っては風邪をひいてしまうため

是非、身体を清潔にしたいと言って来た、半数の人間には身体を濡れたタオルで拭かせる事にする。

残りの人達は、やはり怖いのだろう。

しばらくは様子見のスタンスをとるようだ。

歳をとっている人達には、心臓の負担がかからない様にぬるま湯にさせた。

「やめたくなったら、勝手にやめて良いし

逆に、もしやりたくなったら、それも勝手にやってね。」

後は、時間の経過とともに昔いた場所と比べて身体をこわす人が減ってきたと実感すれば

だんだんと、風呂に入る人も増えてくるだろう。

「あと、外から家に入ってきたら手洗いうがいをしよう。

コレも、オレの文化だと健康にいいとされてきたからね。」

これで、オレがやりたかった環境の改善はひと段落かな？

まだ、村全体というワケではないけど半数近くの間人が動いてくれるから、時間さえ経てば完璧になると思う。

コレで、オレが出来そうな革命もどきは終わりかな？

農作に関しては、三圃式農業、地中海式農業といった言葉は知っているのだが、どうすれば効率がいいのかなんてオレに分かるはずがない。

というか、現在の農業が三圃式農業の様だ。

となると、今オレがやるべき事は普通の労働力として村に貢献する事。

つまり、木を切ったり畑を耕したりを今までと同じ様にやっていく事が一番重要かな？

この村は女性の比率が高いから、男のオレがしっかりと働かないといかな。

こう言っちゃなんだけど、男と女で比べたら男の方が木を切るやら畑を耕すといった重労働は適しているし。

あつ、何となく男尊女卑の理屈が分かったような気がする。

これじゃ、重労働に適している男性の方が女性と比べて地位が高くなっちゃう理由も分からなくはないな…。

まあ、この村だったら男と女の比率がおかしいから、だんだんとその考えも消えてくるんじゃないかな？

というか、このままだと村って自然消滅じゃない？

だって、子供が十分に生まれなさそうだし、もし生まれても閉鎖された空間だから、血が濃くなりすぎちゃうでしょ。

かといって、外部の人を入れたらそれはそれで、閉鎖している意味がなくなっちゃうし。

魔女狩りの被害者を助けまくるっていうのも良い案かもしれないけど、第一に危険。

第二にあまりに多すぎると村の容量を越しちゃうしな。

そもそも、小さい村だからこそ革命もどきが成功したワケであって、この状態で外から人を入れると今までの努力がお釈迦になる可能性も否定できない。

とはいっても、魔女狩りの被害にあっている人達を助けられるのなら助けてほしいな…。

この辺りは要相談って所かな？

そもそも、村の事を決めるんだからオレだけが勝手に決めるワケにはいかないよね。

やらなくちゃいけない事が1つ増えたな。

村の皆と今後の相談。

コレはかなり重要だな。

個人的には、とりあえずは村の安定が最優先だと思っているんだけど…。

うわぁ、結構相談しないといけない事が多そうだな。

というより、何でオレが舵とっているんだろ？

今さらだけどさ、なんかオレが舵をとっているみたいじゃない？

うん、村の代表を決めよう。

コレは早急に決めないと問題がいっぱいあるぞ。

多分、皆を助けたからだと思うけど

ココにいる皆はオレを代表だと決めている感じがするから、さっさとやめさせないと。

オレみたいな人間は上って向いていないような気がするんだよね。

いや、だってエヴァちゃんと遊んでいて道に迷ったりしている時点で、その辺は分かるよ。  
なんとなく、魔法使いの…

なんていう名前だっけ？

マー君でいいや。

マー君が村の代表みたいだけど、なんかソレもなんとなくみたいなの雰囲気だからな。

この際はつきりと決めさせた方がいいだろ。

だあ、この考えもなんか偉そうだよ！！

くそお、早く代表決めてオレがこんな事を考えなくても良いようにしないと。

いつ穴に落ちるか分かったもんじゃないよ。

こんな風にごちゃごちゃ考えてもオレの提案が通るかどうかわからないんだけどね。

とりあえず、今日の所は寝よう。

「眠くなったから、寝るね。」

おやすみ。」

そう言つて、一応区切られている男部屋の方に入ろうとするのだが

「徹。

お前はそつちではないだろ？」

「そうですよ、徹様。

男性の皆さま、徹様をけして部屋に入れないでくださいね。」

その他、女性の皆が男衆にお願いをしたところ

やっぱり、今日も部屋へと入れなくなつてしまった。

どうやら、男尊女卑の問題について考えるまでもなかつたようだ。

むしろ、女尊男卑になりかけている様に感じるが…。

まあ、男は女の人の尻に敷かれるぐらいの方が色々と上手くいくんだらう。

ウチはカカア天下だつたし。

「頼むから、開けてくれよ。」

男部屋を封鎖する扉を叩きながら言つが

「あの人達に逆らえるワケないだらうが!!」

だそつです…。

「さてさて、徹様

眠いのだったら、あちらで寝ましょう。」

「そうどうぞ。

眠いのだろ？早く行って寝ようではないか。

ちなみに、他の男共よ。

夜が明けるまでに一歩でもその部屋から出てみる。

死ぬよりも恐ろしい目にあわせるぞ。」

「エヴァちゃん。その時は私も一緒にさせてください。」

どうやら、オレには逃げ道がないようだ…。

女性と一緒に…。

きつと、前だったら緊張で眠れなかったりするのだろうが、こちらではかなり疲れているのでスグに熟睡できた。よく働き、ほどよく食べ、よく寝る。

しかも、毎日が早寝早起きだから、健康面ではかなりいい感じだろう。

初めの頃は酷かった筋肉痛も最近ではそんなにきつくはなかった。

きつと、だんだんとこの生活にも慣れてきてるのだろう。

そういえば、今日はマー君と村について話すつもりだったんだよな。

まあ、それはもうちょっと後だな。

随分と早く起きちゃったみたいだし、散歩がてら畑の様子でも見に行こうかな？

でもな、寝起きで動くのもたるいし、こうやってダラダラとするのも気持ちいいしな。

どうしよ？

気付いたら、いつもの時間になっていた。

とりあえず、朝ごはんを食べながら皆は今日の予定を話しているみ



たいだった。

ヨーロッパの食卓というと、非常に儼かな雰囲気です。食べて居そうな感じですが、中世ではそうでもなかった。

そもそも、フォークやナイフなどといった食器がなく、食べるのは手掴みなのだ。

まあ、パンは良いでしょう。

アレは普通に手で食うモノだからね。

でもだ、肉とかも手掴みで食っていくというのは驚いた。

いつ頃からテーブルマナーというものが決まったのかは分からないが、今は確実にそんなものなかった。

手はドロドロ、シチューなんかも音を立てて飲み、あまった具は指でかき回して口の中へといれるのだ。

いやね、確かに飯を儼かに食うのはオレには合わないけどさ、流石にココまでラフじゃなくても良いと思う…。

とか言いつつも、オレも馴れたようで普通に肉を掴んで口へと運んでいるのだが。

そういえば、フィンガーボールっていう指を洗う水を飲んじゃった、男の話があったな。

何で聞いたのかは忘れたけど、マナーが分かっている男が勘違いしちゃったっていう話。

なるほどね。

確かに、こんな食い方していたら指を洗う水が欲しくもなるわ。

ココに来てから、色々雑字の疑問点が解決したり、納得したりしていた。

前はなんとなく聞き流していたような疑問ばかりでそこまで重要っていうワケではないんだけど、なんとなく感心してしまう。

でも、やっぱり手は汚れるんだよな。

しかも、手で直接食べるのも衛生的に良いとは言えないし…。

箸でも作るか？

でもな、アレはストレスがたまる一方だろ。

オレはもう17年も箸を使い続けていたから楽だけど、今から村の人達に箸を使わせても、もどかしく思うだけだよな。

しかも、衛生面については手をしっかりと洗って、病気の人と同じものを食わない様にすれば十分だろうし箸の案はなしだな。

というか、このまま暴走しまくったら日本色に染めちゃうかもしれないし、やめとこ。

「それで、徹様はどうするんですか？」

「ん？」

考え事をしている中、唐突に話をふられたので、変な返事をしてしまった。

「ですから、徹様は今日どうするんですか？」

今日の予定を聞いているんだよね？

「とりあえず、マー君の所に行つてこれからの事を話そうかと思つているよ。」

「マー君？」

あつ、そういえばマー君つてオレが断りもなしに勝手につけた奴じゃない。

「ああ、魔法使いの人の事だよ。」

魔法使いだから、マー君だ。

あれほど騒がしかった、この食卓がいきなり沈黙したのはオレのネーミングセンスのなさのせいかな？

「そうだ、エヴァちゃんは何をするの？」

とりあえず話を逸らして、空気の回復に努める。

「ふむ、そうだな。」

ココは、悪の吸血鬼らしく

って、お前な！

どうして、私がかっこよくきめようとする時に、拭うな！  
というより、私を子供扱いするな！..!..!

「いや、どうしても口元についていたシチューが気になって…。

さっさ、エヴァちゃん

コレで完璧だよ、ここでカッコよく『ビシッ!』って、きめちゃって。」

「分かったぞ。

ココはだな、悪の吸血鬼らしくだな

って、貴様

しっかりと聞け!!

その料理を置け!!--もぐもぐしているな!!--」

いやだって、肉がうまそうだったし…。

「はいほづぶ、はいほづぶ。

ひっかりほ

「飲んでから言え、飲んでから!!--」

もう、ゆっくりとご飯ぐらい食べさせてくれも良いのに。

とりあえず、しっかりと味わい、飲み込んだ。

前の世界と比べたら、調味料が少ないためか味のインパクトは少な

かったが

素朴、かつ肉そのもののおいしさを閉じ込め、肉汁がジュワツと口の中に広がるこの触感は  
日常になりつつあるとはいえども、非常においしかった。

「うん、おいしかった。」

「それじゃないだろうが。」

別の事を言おうとしていただろうが！？貴様は！！」

テーブルから身を乗り出し、言ってくるエヴァちゃん。

そこまでして、オレに構ってもらいたいのだろう。

オレの精神年齢が低いせいか、よく子供に懐かれるしな。

「よし、分かった。」

今日はエヴァちゃんも一緒にマー君の所に行こうか。」

傍にある、水の入っている器で手を洗いながら提案。

ん？あつ、これがフィンガーボールか？

良く分からんが、まあ良い。

「貴様、何勝手に私の予定を決めているんだ！？」

今日は、悪の吸血鬼らしく昼から寝ると決めているんだ！！」

椅子から立ち、オレへと迫ってきた。

とりあえず、ベトベトだった手を器の中に入れさせた。

「よし、おててを洗いましょうね。」

「だから、子供扱いするな！！  
自分で出来る！！」

ばしゃばしゃと、手を自分から洗い始めたので。

「いい子、いい子。」

頭を撫でておきました。

とりあえず、はたかれた。

「よし、ということ、エヴァちゃん  
マー君の所へ行くぞ。」

それじゃ、メアさんいつてきます。」

「あっ、はい。」

いってらしゃいませ。」

「ちょっと待て。」

私は吸血鬼なんだぞ！！  
何故朝から起きていなければいけないんだ！？」

とかいいながら、エヴァちゃんは夜しっかり寝ているワケだし…。

「大丈夫だね。」

そんなこんなで、エヴァちゃんを引き連れマー君の所へと向かった。

「なるほどな。村の代表を決めたいという事か。」

挨拶もそこそこに、さっそくマー君と相談を始めた。

「うん、今一番重要なのはそこだよな。」

それを決めない限り、他の問題についても詳しい話し合いは出来ないし。」

代表といっても、王様みたいに何でも1人でやるっていう事にするつもりはないから

何も出来ないという事はないだろうけど、やっぱり皆をまとめる人間は必要であろう。」

「なあ、徹。」

他の問題とはなんだ？」

エールを飲みながら、エヴァちゃんが聞いてきた。

「とりあえず一番身近な問題は食物の問題だろ？」

三圃式農業するんだったら、その順番も決めなくちゃならないし、畑を増やすのも重要だな。」

木を切つて地道に増やすのもいいけど、焼き畑で一気に増やすのも楽で良いかもしれぬ。

でもな、焼き畑ってヨーロッパでも出来るかどうかちょっと分から



ないな…。

「次に環境改善の徹底。」

これは、今はかなり良い感じに進んでいるから、これをじっくりと広げていくっていうのも必要だろ？」

このまま、何もしなければ勝手に広がっていくというワケでもないので、少しずつ広げていかなくちやいけない。

「他には、男女の比率がおかしいから出生率の低下、魔女狩りの被害にあっている他の人の対処、他の村との繋がりとか考えようと思えばいくらでも出てくるよ。」

いい感じに会話が区切れたので、オレもエールを飲む。  
ビールなんて飲んだ事がなかったので、正直感想などあまりないのだが、アルコールが普段の飲み物というのは、まだ違和感がある。

とはいっても、水を飲んだら腹を下す可能性が高いので、基本はコレなのだ。

「オレも食物に関してはかなり早急に手を打つべきだと思っている。」

「でしょ

そんなワケで早急に村の代表を決めた方がいいと思っっているんだ。」

そうなってくると、どうやって代表を決めるかが問題だけど誰が代表に相応しいか、皆に聞いて終わりだな。

「とりあえず、村の皆に聞いて  
皆が代表に相応しいって思っている人を代表にすれば良いんじゃない？」

オレのイメージの中では、代表を中心に村の人達と相談をしながら問題を解決していくのが理想だと思っているが  
そういえば、中世ヨーロッパって絶対王政だからこの考えが受け入れられないのかないよな？

だって、村っていう名前だけで皆で協力っていう感じの雰囲気が出てない？

きつと、この時代の人も国単位で見ると絶対王政だけど、村単位だったら民主主義だったと思うわけよ、オレは。

「ところでさ、村って民主主義だよな？」

「民主主義？」

なんだそれは？

知っておるか？マギよ」

「いや、オレも知らんな。」

終わった…。

おじいさんのサービスはかなり良く、普通の言葉から、”おっけー”や”サンキュー”などと言った外来語までしっかりと通じるのだが”じゃがいも”みたいに、相手側が全く分からないモノは通じないみたいなのだ。

つまり、”民主主義”という言葉は、まだ概念すら出来あがっていない状態なのだろう。

ということは、村の代表というのは権力の象徴って事になるだろうから、皆なりたがるよな…。

そういえば、マー君の名前って”マギ”だったんだ。

魔法使いから取ったニツクネームだったのに、凄い偶然な事に本名とも繋がっていたわ。

「うん、代表決めるのは無しだ。」

「はあ？」

いきなり言っている事を真逆にしたため、マー君は啞然とした顔でオレを見つめてくる。

まあ、気持ちは分らないでもない。

自分自身、かなり無茶苦茶な事を言っていると分かっている。

だが、それでもだ

「オレは、この村を独裁政治にしたくない。」

愚王が頂点となれば国は潰れるが、賢王が頂点となれば国は潤う。

この潤いは民主主義よりも上だと思っ。

1人の者に権力を集中させる事によって生じるのは、マイナスだけではない。

もちろん、プラスの側面だってあるのだ。

そのプラスとは、その政策が正しかろうが、間違っていようが、強硬出来るといふ点だ。

この言い方では、むしろマイナスの様に感じるが、プラスも含まれている。

つまり、余計な足の引っ張り合いがないのだ。

自分の所に少しでも利益が来るように、相手の足を引っ張る。それを繰り返すうちに、どうでも良い論争がはじまり結局よく分からないまま終わる。

もし、自分の利益を考えず、民の事を考える者しかいない状態だとしても

各々に自分の考えがあるのだから、自然と停滞してしまうのだ。

だが、1人に権力が集まった場合はそんな事がない。

自分がやりたいように、国を変える事が出来る。

良くも悪くもだが…。

だが、それは人々の自由をなくす。

自分で考える事を放棄して、上の者のいう通りに動くだけとなってしまう。

確かに、賢く優しい王が頂点であれば、ある程度の生活は保障されるだろう。

でも、それだけだ。

オレは、たかが高校生だから難しい事は分からないしこの考えも間違っているのかもしれない。

でも、エヴァちゃんが、メアさんが、マー君が、村の皆が、そんな鎖で縛られるのは嫌だった。

皆の知らない、もっと広い世界を見せたかった。

自分で考えて行動する。

まだ、社会人になってもいないオレが言っても説得力なんてないだろうけど、皆にそれをさせてあげたかった。

そういえば、皆が行く仕事に関しても始めは色々とおレが指示をしていた。

多分だろうけど、今も彼等はその指示を守っているんじゃないだろうか？

臨機応変にって言っても、半分ぐらいしか通じなかったような気がする。

自然と起こったモノじゃないし、未来っていうちょっと卑怯で汚い裏技を使うけど

市民革命もどきをやってやろうじゃないか。

たぶん、この市民革命に一番才能があるのはエヴァちゃんじゃないか？

あの我を通す強い心…。

簡単にいうと、我儘だが

それを、いかに発揮する彼女がもっとも市民革命に重要なのだ

るう。

「という事で、二人とも

この村を変えていこうではないか!!」

ワケの分からない様子の二人だが、そんなものはもう気にしない。  
多少の指示はするだろうけど、自分で考える事が出来るようにココ  
を変えてやるうではないか。

頑張れば、頑張った分だけ返ってきて、そして失敗した時は皆が手  
伝ってくれる。

そんな、オレの理想な村を作ってやるうではないか!!

オレなんかには大きすぎる目標だが、頑張ってみようと思う。

ところで、何をすればいいんだ？

## 第二章 革命編

### その9

#### 表（後書き）

この小説はフリーダムです。

何をしでかすか分かりませんし、ご都合主義も含まれております。

もし、辻褄が合わない所などがございましたら教えて下さい。

修正出来るかどうかは分かりませんが、後学のためによりしくお願  
いします。

革命をやるうと決意をしたは良いけど、いかんせん革命のやり方などオレは知らない。

くそお、学校の授業は使えないな。

こういう時のために、革命のやり方とか、ちょっとぐらい教えてくれてもいいだろうに。

唯一覚えているのは『テニスコートの誓い』のみだ。

コレが、卓球場だったら『テーブルテニスコートの誓い』になったのかな？

とか、変な事を考えていたから名前だけはしっかりと覚えていた。

そもそも、革命っていう奴は抑圧された人々の間でフツフツと沸きあがってくる様子から分かるように、自主的である。

そう考えてみると、ある意味心の革命の様に感じる。

一番初めに行われる革命が心の革命か…。

正直、今の状況に村の人達は何も不満はないであろう。

なんせ死ぬと思っていた状況から助け出され、そして税がなくて食料はある程度あるという、楽園に近い村なのだ。

唯一オレという変人が何をしでかすか分からない部分が、かなり不安だろうが

それ以外には何の不安もない楽園。

今までが辛かった分、この平穏を大切に守りたいと思うだろう。



つまりは、何も変わらない生活がただ続いていく事になる。

これはコレで良いのかもしれないな。

特にこれといった変化がない、平穏な日常を過ごし続けるというもの。

時間的ゆとりが出来れば、それぞれ娯楽も出来てくるだろうし。

でもこんな閉鎖的な村での娯楽ってあまりなさそうだけだな。

そもそも、この村だと基本は物々交換で経済が成り立っているからな、しかも交換するのは主に食べ物ばかり。

お金はあるんだが、その金は基本的には村の物だしな。

そうなってくると、この村で作ったモノを外で売って、皆にお金を小遣いとしてあげるか？

そんで、たまに外に出る奴に新しく色々と買ってきてもらうとか？

とりあえずエールは村じゃ作れないから、近くの大きな街に行つてそこで大量にまとめ買いする分は必要だろ。

そうなると、金を街に零しているだけだから、回収のために村で作った何かを売る必要もあるな。

そして、蓄えとして結構村に残して、残りを小遣いであげればいいのか？

でも、これじゃ社会主義で皆の働く意欲をなくす可能性があるな。

だからと言って、競争性にしたらそれはそれで、相手を蹴り落とすつていう行為をやらなとも限らないし

そもそも、三圃式農業は順番とかがあるから、村全体で協力しないとダメだから

正直、そこに競争を入れると協調性がなくなっちゃうんだよな。

おっと、考えがかなり脱線したな。

とりあえず、平穏な日々っていうのをきつと村の皆は求めているって事だろ？

ただ、だからといって、その平穏の上に胡坐をかいてただ平穏を貪っただけは

確実に、この村は潰れる事になるだろう。

周りの変化に襲われるか、皆の意欲がなくなったせいで内側から崩れるかは分からないけど、確実に潰れる。

そもそも、マー君だっていくら魔法使いとはいえども寿命があるんだから、いつまでもこの様に守られている閉鎖された空間にいる事は出来ないのだ。

やはり、その辺を考えれば意識を変えるのは重要な事だろう。自分で考えて、自分達で村を守ろうという意識を持たないといけない。

その意識を持たないと、もしマー君やオレがいなくなった時、何も出来ずにただ周りに流されて終わっちゃうだろうしな。

とりあえず、その辺をエヴァちゃんとマー君に説明して、皆の心の改革を3人で考えた。

マー君はかなり優秀な人間だった。

オレが話す内容は、この時代では一般人が知っているとは思えない

ような考えばかりだというのに、彼は一発で理解した。

エヴァちゃんもまた、見た目とは裏腹の長い年月の経験からだろうか？

この子もかなり優秀であった。

二人とも優秀だったのだが、理解の仕方が違った。

ロジックの組み立てによつて、流れを考えてそして結論へとつなげていくマー君に対して

エヴァちゃんは、直観的な理解とでもいえようか？  
流れなどを考えずに、なんとなくで結論を出すのだ。

例えば、社会主義は最終的に経済が崩れ可能性があるってという説明をすると

マー君は

国が全てを管理する、必要以上働く必要がない、だったら働かなくても良いと考える人間が増えていく、だんだんと経済の循環が上手くいかなくなっていき崩れていく可能性が出てくると、オレの説明からこの流れをゆっくりと理解していくのだ。

一方エヴァちゃんは、国が全てを管理する、人をそんな都合よく管理出来るものか  
で終わりだ。

”国が全てを管理する”という言葉だけで、エヴァちゃんはこれは上手くいかないとなんとなく分かってしまうのだ。

一瞬で結果を出すけど曖昧なエヴァちゃんと、ゆっくりだけど流れ

をしつかりと感じるマー君。

凸凹コンビだったが、それが逆に丁度型にはまっているようだ。

なんか、オレいらなくなね？

凄く、落ち込みたくなつた。

少なくともこの二人に関しては改革などは必要がないよう自分で考えるという事を既にしつかりとやっていた。

代表者なしで、村についてを決める方法。

とりあえず決まったのは、食物に関して今すぐに必要な物なので上からの命令という形をとる。

ただし、リーダーなどを決め、効率良くやるように相談をさせ、その意見を考慮してオレ等が決めていくというスタンスをとる。

他に關しては、5人で1グループを作り、その中でまず相談。

そして、決まった日にグループの代表者（およそ20人）が集まり、その意見を出し合うという形をとる事にした。

ぶつちやけ、1つを決めるのにかかなりの時間がかかると思うが、ぶつちやけ初めのウチはあまり意味がない。

というよりも、多分意見が殆ど出て来ないと思っているので、自分で考えるという事の練習をさせる時期だと思っている。

そして、処理しきれなくなってくるほど意見が出てくるようになってきたら

村の中で数人の代表者を村全体の多数決で決め、彼等を中心に村を

作っていくという感じだ。

とりあえず、その先駆けとしてオレ達3人で村の問題について話し合った。

そしたら、色々な問題点、先送りになっていた問題がかなり多く出て来てしまい、それらを全部解決しなくちゃいけないと思うと憂鬱になった。

ちよつと先走り過ぎて、その解決方法まで話し合っていたらいつの間にか昼も過ぎていた。

飲んだエールの量は分からないほど、ちよつぱり酔ったかもしれない。

一応、民主主義もどきの基礎が出来たのでコレを皆に伝えに行った。

Side エヴァンジェリン

村というモノは、私にとっては最も行きたくない場所であった。

今まで、何度か村を訪れたただの幼子のふりをしながら生きていた事があつたが

最後は必ずといっていいほど、裏切りで終わるのだ。

仕方ないと言ってしまえば、仕方ない事。

幾年か年月が経っても全く変わらない私に、弱い人間が怖れるのは必然だった。

何度も経験した仕方のない事。

何度経験してもけして馴れない仕方ない事だった。

たしかに、奴は優しい男だ。

私の様な世界からすらも拒絶されるような存在にすら手を差し出してくれる優しい者だ。

だが、そんな愚かなほど優しい者など奴ぐらいしかいないだろう。

そう、奴ぐらいしかいないのだ。

もし、村で共に暮らしたら確実に他の者は私を拒絶するだろう。きつと、私と仲の良い奴すらも含めて拒絶をする。

『私のモノになれ。』という返事は『友達だったら』という返事だった。

奴が私のモノへとなれば、奴と共に世界中を放浪すれば良い。

奴をどのように扱おうが、私の勝手だ。  
なぜなら、私の”モノ”なのだからな。

恐らく私が村から拒絶されるまでに2年程の期間があるはずだ。

それまでの間は、ただの幼子のふりをしていれば拒絶はされない。

その期間内に、奴を私のモノへとしてやろうではないか。

友達などという甘い事をほざく奴に、私が悪の吸血鬼だという事を分からせてやるのだ。

嫌がる奴の家に無理やり押し入り、勝手に飯を作ってやろうではないか。  
いやか。

家はおろか、身体の中すら私に蹂躪ふみふみされるのだ。

くっくくくく、恐怖に怯える奴の顔が目に見えわ。

まさに悪というのに相応しいではないか!?

2年もあれば、確実に奴は私のモノになるであらう。

「とりあえず、オレは話をつけてくるね。」

エヴァちゃん、おとなしく待っているんだよ。」

「ああ、分かった。」

そんな、私の怖ろしい考えなど知るよしもない奴は、そういつと村の中へと歩を進める。  
だが、途中で振り向き

「あつ、そうそう。」

皆、エヴァちゃんって吸血鬼だけどいじめちゃダメだよ。  
皆、仲良くしてね。」

言うだけいうと、奴はそのまま村の中へと入っていくのであった。

頭の中が真っ白になった。

side メア



あの子が、吸血鬼？

何が何なのか、まったく分からなかった。

もしかしたら、何かの間違い、又は冗談の可能性もあることはあるが、限りなく0に近いだろう。

私達を救ってくれた徹様の頼みであつたら、大概の事は聞き入れるつもりだった。

だが、これは一体どうということだろう？

吸血鬼と仲良くしろ？

私達のような、世間からはみだした様な人間を、自らの危険をも顧みずに救ってくれた、あの方は  
その大きすぎる優しさで確かに吸血鬼をも救おうと考えているのか  
もしれない。

幼少の頃から、祖母から教えてもらった昔話では、吸血鬼は悪の存在であつた。

そう、吸血鬼は悪の存在なのだ。

アレは、胎児を食い、血を吸い、楽しみのためだけに人を殺す、怖ろしい魔物なのだ。

だがだ、私もそうだった。

私もまた、胎児を食い、家畜を殺し、悪魔に肌を許した女なのだ。

そう考えれば、この吸血鬼も私達と同じように、あらぬ疑いで絶望していたのかもしれないとも思う。

そもそも、彼女をこのまま殺したり、追い出したりしたら徹様がお悲しみになる。

だから、一応

そう、一応だが、しばらくの間彼女の様子を見る事にしよう。

平穩に彼女が暮らせばよし。

だが、彼女が徹様の害となるのだったら…。

例え徹様に嫌われようとも、それなりの罰を与えよう。

「エヴァちゃんでしたよね？」

とりあえず、今必要なのは情報。

彼女が徹様に害を与えるかどうかを正確に判断する情報が欲しかった。

「そうだが、貴様は？」

「メアです。」

それで、吸血鬼というのはほんとですか？

「本当だ。」

それで、そうするんだ？

私を追い出すか？殺すか？」

普通に認め、そして口の端を釣りあげながら聞いてきた。

「いえ、その様な事をすれば徹様の考えに刃向かってしまうので辞めておきます。」

ですが、もし貴方が徹様を傷つける様な行為に及ぶのなら、それ相応の覚悟をしてください。」

何も力のない私であったが、この思いは本物であった。  
例え、卑怯だと言われようが、自分が傷つこうが、ありとあらゆる手段を用いて徹様を守るつもりだった。

「くっくくくくく。」

「ふふふふ。」

お互い、肩を震わせ笑いあう。

これは、はたして愉快だから笑っているのだろうか？  
それとも、威嚇のために笑っているのだろうか？

私自身、よく分からなかったが私は彼女を見据え笑い  
彼女もまた、私を見据えて笑っていた。

お互い、目は笑っていないが…。

「お、い、皆

ココに住んでOKだつて。」

手を振りながら徹様がこちらへ駆け足で近付いてきました。  
流石徹様です、この様に簡単に定住地を見つけてくださるとは。

「おつ、エヴァちゃん友達2号が出来たのか？」

彼女を再び持ち上げながら徹様は聞いてきました。

「違う、違うからな！」

それよりも、持ち上げようとするな!!」

唐突に変わった彼女の雰囲気。

口では拒絶しながらも、抵抗はしていなかった。

どうやら、私の心配は杞憂だったみたいだ。

「ねえ、君

なんていうの？」

「メアです。メアといいます。」

慌てて答える。

「メアさん。エヴァちゃんの事よろしくね。」

そういうと、徹様は柔らかく微笑んでくれた。

side 男

「くっくくくくく。」

「ふふふふ。」

目の前では2人の女性が笑っていた。

2人共美人だったので、非常に絵になる光景だったはずなのだが

とても怖かった。

オレは初めって知ったよ。

笑顔って時には恐怖を生むんだな。

なんとなくだが、オレはこの2人にはどうやっても逆らえない気がした。

Side エヴァンジェリン

奴の人たらしの才がそうさせるのだろうか？

不思議な事に奴が私を紹介するだけで、大抵の者は畏怖すべき吸血鬼を受け入れてしまうのだ。

今まで、私が追われていた事がバカバカしくなるほど簡単に。

しかも、少数ながらもいた反吸血鬼派も数日も経てば普通に受け入れてしまうという異常さであった。

もう、何が何だか分からない。

奴に会ってからというものの、”異常”や”分からない”を何度思った事だろうか？

本当に、私の存在が村の人々全員に認められたのだろうか？

何かを企んでいる可能性があった。

大きな裏切りの可能性もあった。

だが、その様な目で見てくる者達が纏う空気は常に私は見て来た。

それ故に、人を見る目は確かのもりであった。

しかも、もし私を陥れるのであったら、村の全員が演技をしなくてはならないのだ。

1人、2人ぐらいであったら私の人の見る目を騙す輩がおるだろう。だが、流石に村人全員は無理だ。

そうやって考えると

私は受け入れられたのだ。

そう、私は受け入れられたんだ。

異常で分からない、摩訶不思議の超常現象。

どんな奇跡がおき、どんな偶然が絡んだのか分からないが不思議と受け入れてしまった。

なんせ、奴がいるのだから。

人たらしで不思議な奴がいるのだから。

私は不思議と現状を受け入れられたのだ。

まったく、奴はどれ程まで私を惹きつければ気が済むんだ？

コレほどまで私を惹きつけたんだ。その代償は重いぞ。

side メア

とりあえずは、一通り終わった。

反吸血鬼派、とは言っても5、6人程だったが  
その人達の説得は終わった。

嬉しい事に、徹様に救われた我々の中には反吸血鬼派など存在せず  
殆どの者達が妄信的に徹様の事を信じているため、反発すらなかつ  
た。

何故か男性の方々に怯えた視線を向けられた様な気がしたが、恐ら  
く気のせいだと思う。

しかし、かなり不思議な事といえよう。

徹様に着いてきた私達が、吸血鬼を受け入れるのは別に分からない  
事ではない。

徹様の恩があるのだし、皆があの方が信頼に足るお方だと思ってい  
るのだから彼女を拒絶したりはしない。

だが、前からこの村に住んでいた人達にとってはどうだろうか？

吸血鬼とは畏怖すべき存在。

いくら魔女狩りにあったからとはいえ、それは世間からはみ出した  
だけであり

世界から拒絶されたワケではない。

普通は納得しないだろう。

吸血鬼を拒絶するだろう。

だが、そうではなかった。

60人近くいる中で、吸血鬼を拒絶したのは5、6人程度だったの



だ。

流石、徹様です。

一体何をなさったのかは全く分かりませんが、本当に不思議なお方だ。

恐らく、一昨日言った言葉。

『メアさん。エヴァちゃんの事よろしくね。』

これには、今回の説得を頼むという意味が込められていたんでしよう。

しかも、重要なのは私1人に頼まれた事だ。

私が信頼されたという事なのかもしれない。

それはそれで、嬉しいのだがコレはただの推測であるのでそれほど重要ではない。

重要なのは

私1人で、解決できるレベルの問題であったという事だ。

つまり、あのお方は村に住む全員の説得は無理だけど

ほとんど、反対意見はださないと暗に示していたのだ。

何でもないかのように今も笑いながらエヴァちゃんと遊んでいる徹様。

一体、その笑みの裏に貴方は何を考えているんですか？

そう思った瞬間だった。

徹様が得体の知れない何かに思えて、背筋が凍った。  
巨大な優しさを持っていると分かっているながらも一瞬、そう一瞬だがあの方の力に怯えてしまったのだ。

きつと、そんな私の怯えが分かったのだろう。

徹様は私の方を見て、笑みを浮かべたのだった。

そして、エヴァちゃんと何かを話すと彼女は私の方へと近づいてくるのだが、徹様だけは背中を向け何処かへ行ってしまった。

「エヴァちゃん、どうしたんですか？」

何でもない様子を装い、エヴァちゃんに聞くと

「畑を見に行ってくるから、メアさんの所で大人しくしてなさい。  
だつてよ。」

そんな返事が返ってきた。

やはり、徹様は私の怯えに気付いてしまったのだ。

今のままでは、私がより怯えてしまおうと思って自分から進んで背中を向けたのだ。

私が怯えないようにと、少しでも離れようとしたのだ。

じゃなければ、こんな都合の良いタイミングであの方が背中を向けるワケがないのだ。

そもそも、家作りの休憩中に畑を見に行く理由すらないではないか。  
私はとんでもないほどの愚か者です。

Side 村人A

変な少年だった。

いきなり家に来たかと思うと。

40人ぐらいの規模でこの村に住み着くと知らせにきてさらに、連れの長い金髪で10歳ぐらいの少女は吸血鬼だけど苛めないであげて

とだけ言うと帰って行ってしまったのだ。

近所の人達も、同じ様な少年が同じ様に言って帰ったらしい。

なんだ？

アイツは??

スグに噂は村中に広がった。

そもそも、60人しかいない小さな村なので噂などはスグに広がる。

どうやら、村長もこの大勢の人が来る事は認めているようなので、文句は全くない。

もう既に家作りが始まっているようだが、オレ達にはオレ達の仕事があるのでそっちを優先させてもらった。

そういえば、吸血鬼云々って言っていたな…。

ほんと、なんなんだろう。  
アイツって…。

side 男

女の人怖い、女の人怖い。

アレは説得じゃないよ。  
脅迫だよ…。

女の人怖い、女の人怖い…。

**第二章 革命編**

**その13**

**裏(前書き)**

だんだんと、更新速度がゆっくりになっていきます。

詳しくは活動報告にて。

Side マギ

まず驚いたのは、徹が魔法を知らなかったという事だ。

オレの認識障害魔法と、人払いの魔法を破ってこの村へと到達したのだから

もちろん魔法を知っており、その知識に基づいた理論によってココへ辿り着いたのだと思っていた。

いや、思い込んでいた。

だが、彼は知らなかった。

魔法というモノがある事自体、彼は知らなかったのだ。

魔法を知らない者に魔法を破られた。

正直言つて、異常だった。

まったく未知の技術を彼はたった一人で解いてしまったのだ。

もう、天才などという次元を超えてしまっていた。

彼は一体、何者なのだ？

彼の異常性は、隣にいた吸血鬼の存在よりもよっぽど上だ。

そのためか、吸血鬼がそれほど危険でなく思えてしまっていた。

というよりも、その吸血鬼に全く怖れを持つ事なく接している彼の余裕を見ていると

本当に強く、危険なのは彼だと、いやでも分かってしまう。

こちらの味方なので良かったが、もし敵となったら…。

頭を振り、その考えを追い出した。

彼独特の雰囲気や、彼に付き添っていた人間達の様子を見る限り

大切な者に手を出さない限りは、彼は進んで敵になろうとはしないだろう。

もし彼が魔法を使えたら、どうなるだろうか？

巨大な力は時に人を惹く。

ただでさえ、彼のカリスマにより、人を惹いているというのに、コレ以上となると想像がつかない。

それ故、見てみたい気がするが

オレには、彼に教える自信がなかった。

あの、圧倒的カリスマと力を持つ彼に教えられる自信がなく  
そして、怖いのだ。

ありとあらゆる物を吸い取り、オレが想像もつかない物を作りだし  
そんな彼が怖い。  
全てを破壊し、全てを操りそんな彼が怖ろしい。

だが、そんな彼を見てみたいと惹かれるオレがいた。

それ故に、危険過ぎた。

だから、戒めだ。

契約の魔法を自分へとかけた。  
絶対破る事の出来ない、契約の魔法を。



それでもしないと、魅力にあてられて教えそうだった。

（side エヴァンジェリン）

家を作る際に男が見せた技術。

それは、私を吸血鬼へとし、そして私を殺そうと躍起になっていた者たちが見せた忌む力であった。

強力で、怖ろしく、不可思議な力。

その名を魔法といった。

その力に嫌悪感があった。

深い、深い恨みもあった。

だが、力がなくては私は生きていけない。

もしかしたら、逃げる事は出来るかもしれないが、けして守る事は出来ないだろう。

守るという言葉で1人の人間が脳裏をよぎる。

いつも笑みを浮かべ、私を子供扱いする馬鹿者の顔がよぎった。

ほんの少し。

たった数日という期間にも関わらず、奴はココまで私を侵していた。まったく、甘くなったものだ。

呆れながらも、じわりじわりと幸せやら嬉しさやら、ちょっとした気恥かしさやら

混ざりすぎて言葉には出来ない感情がゆっくりと胸を満たしていた。

とにかく、私には力が必要だった。

選り好みなどしている余裕などない。

何でもいいから、とにかく力が必要なのだ。

だからこそ、私は男に言うのだった。

「おい、その力を私に教える。」

嫌悪し、恨んでいる力を私は求めたのだ。

たった1人の者のために。

〈side メア〉

私は、まだ徹様に謝れないでいた。

いや、謝ってはいけないと思っていた。

謝罪など自分が許されたと思われたい自己満足にしかすぎないのだ。

あの時の笑顔を思い出す。

私が畏れてしまった時の、あの笑顔。

悲しそうに微笑む、あの笑顔…。

そして、あの方は背中を向けて歩いてしまったのだ。

その瞬間、徹様は遠くに行ってしまった。

今さら後悔しても仕方ないだろう。

全ては自分が悪いのだ。

分かってはいるのに、胸が苦しくなる。

太陽に背を向けられ、光が遠くに行こうとも  
そこに手を伸ばしてしまう。

自分が遠くに追いやったというのに。

今朝、徹様は普通に挨拶はしてくださった。

どの様に思われても仕方ない私に、挨拶をしたのだ。

まるで、畏れられる自分が悪いとでも言つように…。

やはり、あの方は太陽なのだ。

巨大で温かく、そして優しい。

時には、その優しさで自分を傷つけながらも、皆を照らし続けようとする太陽なのだ。

それは、あまりにも気高く、あまりにも優しく

そして、あまりにも

悲しすぎた。

そんな、悲しい太陽。

遠くへ行ってしまった太陽に、私は何が出来るのだろうか？

そう考えた時、幼い吸血鬼と、魔法使いが話している様子が見えた。

巨大で畏れられる太陽。

遠くに行ってしまったても、温かく包み込んでくれる優しい太陽。

ならば、私はその太陽に向かっていこう。

私から近付いて行くのだ。

気高く、孤独な太陽に

例え、近付き過ぎて、<sup>ろう</sup>蠟の翼が溶けようとも  
その身を熱で焦がそうとも、手を伸ばし続け少しでも近付けるよう  
に。

だから、私は魔法使いに言うのだ。

「私に、魔法を教えてください。」

大きな力を求めたのだ。

孤独な太陽の元へと行くために。

第二章 革命編

その14

裏(前書き)

遅くなってしまうすみません。

お詫びといつては何ですが、ちょっと長めに作りました。  
楽しんでもらえば幸いです。

Side 男

「起きている時はあんなにも大人びているっていうのに  
寝顔は可愛いんだな。」

布団から出てしまった手をしまった。

12、3才くらいかな？

こんなにも、身体が小さいこの子がオレ達のために毎日のように奔走した。

オレ達を助けるために奔走し、この村で暮らせる様に必死になり、そして家を作るために駆け回った。

こんな小さな身体で、オレ達の無責任な期待を背負って頑張ってくれたんだ。

本当に、凄い子だと思う。

でも、それ以上に子供に全てを押しつけてしまった自分が情けなか

った。

「オレも、頑張らなくちゃいけないな…。」

さて、そろそろオレも寝ようとするかな。

毛布に手を伸ばすと

「うっ、うっ…。」

小さなうめき声が聞こえてきたのだった。

暗くなっている中、ゆっくりと響くうめき声。

ビクビクしながらその音源を捜すと、それは徹から漏れているように…。

慌てて顔を覗き込むと、先ほどの穏やかな寝顔とは違う、苦しげな表情で彼はうめいていたのだ。

悪夢でも見ているのだろうか？

彼の額からは汗が流れ出ている。

そんな彼の様子を見て頭をよぎる2人の女性。

『おい、もし徹に何かあってみる。』

私が直々に貴様をくびり殺してやるぞ。』

『徹様に関して、何かあればすぐに教えてください。』



もし、怠れば…クスッ。」

2人の言葉を思い出し、オレの額からもイヤな汗が大量に流れ出す。

「たたたたた、大変だ!!!」

少しでも早く2人に教えないと、とんでもない事になる!!!

慌てて、部屋の扉を開け放ち  
女性用の部屋へと乗り込んだ。

まず視界に入ったのは白い肌…。

男として、喜ぶべき状況なのかもしれないが  
いかんせん、背筋から大量の冷や汗が出てくるだけで、とてもじゃないがそんな余裕はなかった。

「くっくくくく。」

とりあえず、死んでおくか？」

「ダメですよ。エヴァちゃん。」

殺しては苦痛が半減してしまいます。」

笑顔を浮かべながらジワリジワリと迫ってくる、恐怖…。

しかも、彼女ら2人だけではなく

女部屋にいる全員がオレへと迫ってくるのだから、本当に怖い。

「イヤだあ！！！」

慌てて逃げようとするが、メア様に捕まってしまう。

「ふふふ。」

逃げようとするなんて、本当に悪い子ですね。」

微笑んでくるメア様に何とか言い訳をしようとするが、金魚のように口をパクパクするだけで、上手く発音が出来ない。

気付けば、囲まれていた。

男であるならば、夢見た光景。

大勢の女の人に囲まれるハーレム…。

それが、ココには広がっていた。

だが、現実にはハーレムなどとは遠く離れている。  
むしろ、近いのは戦場で敵勢力に単身で特攻した状況の方が近い。

「くっくくくく。」

何か、言い残す事はあるか？」

ありがたい事に、エヴァンジェリン様はオレの話の聞いてくれるようであった。

あの邪悪な笑みも今では天使の様な微笑みに、見えない事もないよ  
うな気がした。

とりあえず、深呼吸をして、再び金魚のマネ事をしないように精神  
を落ち着かせる。

そして、ゆっくりと口を開いた。

「服は着ないの？」

だあゝ、違う、違うぞー！！

そんな事を言っちゃ、火に油じゃん。

言い訳をしないと、絶対に殺される。

「いや、別に皆の裸が見たくないってワケじゃないんだ。」

ああ、コレは死んだな…。

せめて、この様子を目に焼け付けておくとしよう。

大勢の女性が肌を見せている、この光景を…。

あれ？

女の人の身体をみても、恐怖しか感じない…。

やべ、男として色々と失っちゃったかも。

私の眼下には、苦悶の表情をしながらうめく徹がいた。

変態をボコボコにしている中、途切れ途切れに変態が今の徹の状態を喋り、慌ててココへと来たのだ。

こう言ってしまうては何だが、ただの悪夢なのだから放っておいても別に構わない。

もし、何とかしたいのならば起こしてしまえば良いのだ。

だが、そういうワケにもいかなかった。

少々、それでは都合が悪いのだ。

何故ならば

「あこ ちゃ。」

こうやって、女の名前と思わしきものが出てくるからだ。

分かってはいた。

こやつにだって、過去はあるだろうし、親しかった者がいても何もおかしくはない。

分かってはいるのだ。

だが、コイツが私の知らない女の名を呼ぶ。

それだけで、胸に針が刺さったかのような痛みが走るのだ。

愚かな小娘のような感情。

分かってはいるのだ。

自分のこの感情が愚かだという事は。

分かってはいるのだが、この痛みは収まらなかった。

とりあえず、今はマギの到着を待つしかなかった。

メアが呼びに行ったので、すぐに着くだろう。

未知なる力、魔法であれば徹の夢がどのような物なのか分かるかもしれない。

勝手に夢を覗かれるのは良い気分ではないだろうが、いつかは私のモノへとなるのだから全然構わないだろう。

というよりも、私のモノなのだから、その管理はしっかりとやらな  
いと。

少しすると、2人がやってきた。

どうやら、夢を見る魔法という物はあるらしく、それを使うように  
命令するとマギは案外簡単に魔法を唱えた。

まあ考えてみれば、村長としては莫大な力を持つ徹の過去を見てお  
きたいとでも思っているのだろう。

奴の思惑はともかく、私達3人は徹の夢の中に入る事に成功した。

「で、何なのだ!？」  
「この格好は!？」

徹の夢の中に入ってきたのは周りの風景からすぐに分かったのだが、問題は私達の格好だ。

皆、裸なのだ。

「精神体だから仕方ないだろ？」

まだ、魔法についてはあまり詳しくはないので、そう言われてしまつては何も言えない。

「エヴァちゃん、マギさん…」。

ココは、なんですか？」

「何を言っているんだ？」

徹の夢の中に決まっているではないか。」

「いえ、そういう事を言っているのではなくて…」。

とにかく周りを見てください。」

言われた通り、周りを見渡す。

なんなんだ?ココは?

おそらく、室内だろう。

異常なほどに磨かれた、壁、柱、机などは金属で出来ている。

その上には、大量な紙があった。

汚物も、なく、炉も存在しない。

窓からは、外の景色が見れ、ガラスが大量に使われていた。

全てが異常。

あまりにも、高価な物が所狭しと並べられており、中には見たこともないような物も多くあった。

「亜子ちゃん、大丈夫だからね。」

かすかに徹の声が聞こえた。

とりあえず、この周りのモノが何かは置いておくでしょう。今、重要なのは徹の事だ。

私達は顔を見合わせ、頷くと声の聞こえた方へと向かって行った。

すこし進むと、15程の人間が、部屋の角に集まっていた。

その一番先頭。

隣にいる、幼い女の頭を撫でながら彼はソコに座っていた。

恐らく、今は何かが起きているのだろう。  
徹以外の者達が顔を恐怖で歪ませている様子からそれは簡単に推測  
できた。

そして、もう1人変な奴がいた。

銃に良く似た物を徹達に見せながら、立っている全身黒ずくめの男。

「エヴァちゃん、これをどうみますか？」

隣にいるメアが私にささやいて来る。

「あの黒男が他の人間を脅しているって所だろうか？」

とりあえず、あの男に他の者達が恐怖しているって事には間違いは  
ないだろう。」

メアも私と同じ様に考えていたのか、小さく頷いた。

「ぐすつ、テツ兄い

ウチ、死んじゃうん？」

「大丈夫、大丈夫。」

徹と、少女の間で行われているやりとり。

ココで、聞き逃せない言葉があった。

”死”の可能性があるということだ。



徹は、一体ココで何があったんだ？

「おい、コツチは終わったぞ。」

声が聞こえたかと思うと、似たような黒男が5人が奥からやって来ていた。

「OK、じゃこちらも終わらせるな。」

そういうと、徹の傍にいた男は、その手に持っている銃(?)を徹の隣にいた女へと向けた。

そして

パン

「きゃあああああ。」

絶叫と乾いた音が響いた。

黒男の腕は変な方向を向いており、筒は壁を抉った。そして、その腕は徹が脇に挟みこんでいた。

つまり、奴があの一瞬で黒男に近付き  
そして、腕を折ったのだ。

「マギ、お前にコレが出来るか？」

恐らく、戦闘が得意と思われるマギに聞いてみると

「魔法を使えば、ぎりぎり出来るかもしれない程度だ。」

予想通りの答えが返ってきた。

「そうだな。」

あの、最小限の動き。あの一瞬で腕を折る力、その技術。

そして、もっとも怖ろしいのが

「あいつ等の意識がなくなった瞬間に、死角から入っていく技術

だろ？」

続けたマギの言葉に私は頷く。

あの、黒男が少女しか見ていない状態。

周りの警戒を解き、少女のみに意識の焦点を当てた瞬間に徹は黒男の死角から入ったのだ。

全てが完璧であった。

もし、あの瞬間よりも早ければ、黒男は徹の動きに気付き、引き金を引くのが早くなっただろう。

もし、あの瞬間よりも遅ければ、間に合わず少女は助からなかっただろう。

傍から見ていたからこそ分かる、徹の異常なほどの勝負所の嗅覚。まさに、あれは芸術だった。

そして、芸術のような可憐さの次は、猛獣のような野蛮な暴力。

折れた腕をさらに捻り、銃を落とさせると徹はそれを拾い黒男の頭へと無情に打ち込む。

ある意味必然な事に、少女とメアは同じ様に顔をそむけた。

異常なほど、銃の威力が高かったので、黒男の頭は破裂したのだ。そこから飛び散った、肉片は彼女達のような普通の人間には見れたものではないだろう。

だが、徹は違った。

黒男の惨状など、まるで意に介さず

そのまま、奥にいる男へと向かって行ったのだ。

その後は、圧倒的な暴力で終わった。

近付きながら、銃を撃つ。

そして、殴り、蹴り、投げ、とどめをさして…。

何発かどうしても避けられなかった物を腹にくらいながらも、彼は暴

れ続けた。

獣のような咆哮をあげ、体中が血でまみれながら暴れ続けた。

そして、最後の1人になった。

彼も流れ弾にあたったのだろう、耳が片方千切れてなくなっていた。

恐怖から歯を震わせ、身体を震わせながら徹へと銃を構えていた。

そんな男に、徹はただただ正面から近付く。

普通だったなら、ただ撃たれる様な自殺行為。

だが、徹は撃たれなかった。

ゆっくりと近づいて来る徹を、男は撃つ事が出来なかったのだ。

そして、男の目の前まで徹が行くと、簡単に男から銃を奪い

そして

パン、パン、パン

無言で男の足に3発撃った。

痛みと恐怖からだろう。

男は倒れてしまった。

そして、それを見送った徹もまた

倒れるのだった…。

そして、真っ暗になった。

ピッピッピッピ

甲高い音が定期的に聞こえ、押し殺した泣き声。  
嗚咽、謝罪、お礼、などなどが聞こえた。

そして

ピッピッピッピ

ピ

何の音かは分からなかった。

ただ、その音が儂く

そして、悲しかった。

ただ、漠然と分かった。

この音で、”何か”が終わったのだと…。

この後、徹はどうなったのかは分からない。  
何があったのかも分からない。

ココで、徹の夢は終わりだった。

魔法が解け、私達は目を覚ました。  
結局分かった事は殆どなかった。

アレが何だったのかも、分からない。

そもそも、ココとは全く違う様子から  
徹は何処か遠くから来たのだろう。

その来た理由も全く分からなかった。

「アレは本当に徹様の過去だったの事なのでしょうか？」

重い空気の中、メアが静かに言葉を放つ。

「証明は出来ない。

所詮、夢だからな。

過去とは全く関係ないただの夢なのかもしれない……。」「

マギもまた、ゆっくりと言葉を放った。

「…傷だ。」

「はあ？」

私の要領を得ない言葉にマギは疑問の声をあげた。

「明かりを持ってこい。」

徹が付けられた傷、その有無で現実かどうか分かる。」

あの夢が現実であって欲しいのか

それとも、ただの夢であって欲しいのか

それすらも、私には分からなかった。

ただただ、知りたかったのだ。

現実なのか、夢なのか…。

炉の火を大きくし、僅かながらも明るくなった。

そして、私はゆっくりと彼の服をはだけさせると

彼の腹には、幾つもの丸い跡がくつきりと残っていた…。

side エヴァンジェリン

「んっ…。」

目を覚ますと、何かに締めつけられているような少し強い圧迫感があつた。

普通であれば、不愉快になるような感覚だが、ゴツゴツしながらも仄かに温かいそれは不思議と私を落ち着かせた。

ゆっくりと目を開けると、目の前に徹がいた。

私を抱きしめながら、まるで安心しきつた子供の様に穏やかな寝顔である。

「まったく、いつも私の事を子供扱いしてくるくせに、貴様だって十分子供っぽいではないか。」

小さく文句を言いながらも、笑みが零れる。

そんな幸せが、私にはとても大きかった。

この、日々を与えてくれたのは徹だ…。

あまりに普通で、平凡な毎日を彼は、私にくれたのだ。



人にとっては何でもない幸せ。

だが、私にとっては大きすぎる幸せ。

それを、彼が与えてくれたのだ。

私だけではない。

ココにいる者達全員に、彼はその幸せを与えたのだ。

そんな徹が、誰よりも幸せではないのだ。

もっとも幸せであるべき人間が、一番辛い…。

胸の中に広がる、安らかな気持ちに罪悪感が沸いた。

コイツの夢を見た。

たいした覚悟もせず、軽い気持ちでコイツの夢を覗ってしまったのだ。

軽率で愚かな行為。

最後の、あの甲高い音がいつまでも耳の奥にこびり付いているのだ。まるで、私を戒めるかのように。

ちよつと考えれば分かる事だった。

こんな幼い子が一人で放浪しているのだ。

なにかあったのだと、思ふべきだった。

だが、私はそれを怠った。

その巨大な力が、狡猾な知恵が、眩しすぎるほどの優しさが、私を惑わせた。

いや、そんなのは言い訳だ。

私は舞い上がっていたのだ。

自分が受け入れられた事に、平凡な暮らしが出来る事に。  
だから、見逃したんだ。

愚かだ。

あまりにも愚か過ぎる。

徹の夢を見て、私は初めて徹が死ぬんだと実感した。

確かに、奴も人間なのだから死ぬんだろうと漠然と思っていた。  
だが奴の力と知恵があれば、死にはしないんだろうと勘違いしていたんだ。

確かに奴の力は巨大だ。

ある程度の力と、異常なほどの技術は確かに持っているだろう。

だが、ただの人間なんだ。

魔法も気も使えない。

非弱な人間なんだ。

極当たり前の事、だが私は徹が死にそうになったその瞬間になって  
ようやく、その事を実感したのだ。

今までの出来事から考えてみると、徹は何処か遠くから来たという  
のは間違いないだろう。

彼は、その知恵からは想像がつかないほどの常識知らずだったのだ。

誰でも知っている様な事をまるで知らないでいた。そこから考えると、まだこの辺りに来て時間も経っていないのだから。

たった一人で、何も知らない土地にいる。

それは、成長しきっていない少年には辛い。

彼の腹をゆっくりと指でなぞった。

あの後よくよく見てみると、銃創以外にも色んな傷が彼には刻まれていた。

どれ程の危険が彼に降りかかったのかは分からない。

だが、それはけして生易しい物ではなかったのだろう。

ソレを、傷の一つ一つが証明していた。

この幼い様子からは想像が出来ないほどの苦難が彼を襲ったのだろう。

それは、彼自信が不安定になってしまうほどに。

徹の夢を覗いた次の日だった。

奴は、私に風呂の有無を聞いてきたのだ。

夢を見る前であれば、常識を知らないだけだと思っただろうがその時は、そうでないと感じていた。

いくら文化が違うと言っても、命に関わる部分が違うはずがないのだ。

首を絞める、心臓を貫くと同じ様に、風呂に入るというのも命に直結する。

そんな事をワザワザ聞いて来る筈がないのだ。

慌てて、彼を風呂に入らない様に説得をした。

後から聞くと、どうやらメアも私と同じ様な事を聞かれたらしい。どうやら、今の奴はかなり不安定な状況にいるようであった。

とりあえず、奴が自殺しない様に私達は徹を見張る事にした。

私達というのは、私とメアの二人だ。

徹は救われた者たちにとつての希望なのだ。

そんな徹が自殺を考えているなどと大勢が知ってしまったら混乱すると判断して、二人にした。

昼間は、それとなく彼と共に行動し、夜は一緒に寝る事にした。幸い、吸血鬼は夜行性のため、彼が少しでも動けばスグに目が覚めた。

そうやって徹を見張り続けたが、しばらくの間は徹は何も行動を起こさなかった。

だが、ある日。

いつもは動き回っている奴が、難しい顔をしながら空を見上げてい

ただ。

私はまだ信用に値しないのだろうか？

徹は不安や弱音は一切私に言おうとはしなかった。

確かに、そうやって弱音を吐かない姿は凄いとは思っ。

何も知らない者にとっては何でもないのであるが

奴の過去を知ってしまった者として見ていると、その強さに泣きそうになる。

なまじ強いからこそ言いだせない。

奴の身体についていた傷以上に、奴がぼろぼろに見える。

限界以上に傷つき、助けを求めているのではないだろうか？

だが、強いからこそ必死にソレを抑えて、我慢して、そして再び傷ついているのではないだろうか？

「という訳で、風呂を作るぞ！」

奴は明るく言い放つと、風呂を作る準備をし始めた。

その明るさも、無理やり作り出しているのだろう。

「アホか貴様は！」

気付けば、私は奴の後頭部を叩いていた。

目には涙が溜まり、今にも零れそうになっているのが自分でも分かる。

「ど、どうしたの！？エヴァちゃん。

お腹が痛いとか？」

心配そうに聞いてきた。

そう、コイツはまだ私の心配をするのだ。  
自分がそれどころではないというのに。

情けない事に声が出ず、首を振る事しか出来なかった。

「誰かにいじめられたの？」

それとも、お昼が足りなかった？」

あげてくる例が子供染みていたが、それでも奴は私を本気で心配していた。

「　　が死　　う　　だ。」

普通に喋ろうとするが、途切れ途切れでしっかりと発音が出来ないでいた。

「うん？」

なに？」

優しく聞きて来る奴に

「お前が死のうとするからだ！」

私は、叫ぶように言った。

「大丈夫だって。オレは死ぬ気はないよ。」

「だったら、風呂などに入るな！」

もうプライドも何もない。

ただただ、徹に生きて欲しかった。

「そういうワケにもいかないんだよ。」

「どうしてだ！？」

やめる、絶対に入るな。入ってはならんからな！」

もう、今の私に考える力など残っておらず、ただ思うがままを口に出す。

「エヴァちゃん、あのね」

「私のモノにならなくても良いから、私が徹のモノになっても良いから。」

呼ばれたいのなら、テツ兄いと呼んでやるから。

だから、だから…。」

頼むから死なないでくれ。

お願いだ…。」

「エヴァちゃん、よく聞いてほしい。」

言いながら徹は私の肩をつかみ、その漆黒の目で私を覗く。その瞳は、何処か神秘的で吸い込まれそうな錯覚に陥った。

そして、徹はゆっくりと語り出した。

徹の推測が交じった環境や風呂の事を。

「だが、その考えが間違っているかもしれないではないか。」

そう、それはただの推論なのだ。

もし間違っていたら、彼は黒死病の被害にあう可能性が高いのだ。

身体がおぞましい黒紫色になる、あの怖ろしい病に…。

「たしかに間違っているかもしれないけど

オレが昔住んでいた所は、毎日の様に風呂に入っていたから、エヴァちゃんが言うように急に死んだりはないから大丈夫だよ。」

平気な様に言うが、それは黒死病の怖ろしい死に様を知らないのか、それとも平気なふりをしているだけなのか…。

「どうしても入らないといけないのか？」

「うん。」

とりあえずオレだけでも入っておけば、皆の抵抗だって少しは薄くなるかもしれないし…。」

困ったような笑みを浮かべながら、徹は答えた。

自殺ではなかった。

だが、それは類似した事であった。



他の人のために身体を張る。

こう言えば、見栄えは良いだろう。

昔話などに登場する英雄達も他の人のために身体を張る。

だがだ。

だが、残された者はどうなる？

昔話の様に、『めでたしめでたし』で終われば良いが、世界はそんなに甘くはない。

徹だって、その事は分かっているはずなのだ。

いくら徹だと言っても、死を恐れないはずはない。

だが、奴は困ったような笑みを浮かべながら答えるのだ。

他の人のためだと。

メアが言っていた。

徹は寂しい太陽だと。

気高く、雄々しく、優しい。

だが、悲しい太陽だと。

時には自分の身をも燃やしながら、周りを温かく包むと…。

確かに、そうなのかもしれない。

奴は自分を下に見過ぎている。

他の人さえ幸せならば、自分などはどうだっていいと考えているのではないだろうか？

もし、そうだとしたら私は徹の事を許せないだろう。

奴の価値はそんな物ではない。

人に価値をつけ、比べるのは愚かな行為かもしれないが、そんな事は知らん。

私にとっては、奴がもっとも大切なのだ。

そして、これからも奴が救う人間も大勢いるだろう。

ソレを見捨てて、奴は風呂へと入ろうとするのだ。

確かに、そのおかげで命が救われるかもしれない。

だが、それでも…。

色々と言いつきを並べてみたが、結局のところ私は奴を死なせたくないんだ。

だが、奴は私が何を言ったとしても風呂に入ろうとするだろう。だったら

「分かった。もう何も言わんよ。」

こう言うしかないではないか…。

だが、私は悪い吸血鬼だ。  
タダというワケにはいかないな。

「ただし、条件が一つ。」

くっはははははは。  
どうだ？

悪の契約だ。怖ろしいだろ！？

「で、何？

その条件って？」

「あんな、私は悪い吸血鬼なんだぞ。

もうちょっと、不安がったりしないのか？」

「うん、全然。」

まったく、少しぐらい怯える。

「ふん、つまらない男だ。

条件とはな

私も一緒に入れる。」

だが、コレは仮初めかりその契約だ。

そのまま受け入れられてしまっても困る。  
悪の契約なのだから、裏ぐらいあると考えるべきだろうが、お人好しのコイツはそんな事を考えもしないだろう。

まだ僅かな期間しかこの者と行動をしていないが、コイツの性格はなんとなく分かった。

怖ろしいと思えるほどの、知略、戦略眼を持っている。

だが、どこかで甘い。

一度信用した人間には、とことん信用しきるのだ。

何度も裏切られているだろう。

それでも、奴は信じていく。

まるで騙された自分が悪いというが如く。

この契約の裏には私のエゴが隠されている。

私には一つだけ方法があるのだ。

奴が死なない…。

いや、死ねなくなる禁忌の技術が私にはあった。

それは、奴に噛みつき、吸血鬼の血を奴の身体に入れる…。  
奴を吸血鬼にする技術。

だから、共に風呂へと入り、奴が体調を少しでも悪くしたら

私は、奴を吸血鬼へとする。

これは私のエゴだ。

奴に恨まれようが、何をされようが、私は構わない。

ただ、奴に生きて欲しいのだ。

ふふふふ…。

これでは、私を吸血鬼へとした『奴』と同じになってしまう…。

きっと徹は私を恨み、軽蔑をするだろうな…。

そう考えながらも、心の奥底では優しい徹だったら許してくれるだろう

と、思っている自分に気付き嫌気がさした。

もう、私は誇りある悪などではなかった。  
ただ、自らの欲望に忠実に生きる、下賤な悪だ。

「別に良いけど、怖くはないの？」

やめてくれ、私にそんな優しい言葉を投げかけるな。

私は、お前を裏切ろうとしているんだぞ？

どれだけ、吸血鬼が世界から拒絶されるか知っていながら、お前を吸血鬼にしようとしている  
愚か者なんだぞ…。

「あのな、私は不老不死の吸血鬼なんだぞ。  
怖いワケがないだろうが。」

本当は怖かった。

奴に嫌われ、恨まれる事が。

だが、それ以上に、奴が死ぬ方が怖ろしかった。

「それじゃ、お風呂を作ろうか。」

私の心中を知っているのか、知らないのか…。

それは、奴が微笑みながら言う姿からは予測がつかなかった。

第二章 革命編

その16

裏(前書き)

遅くなりました、裏章16話です。

楽しんでもらえたら幸いです。

（side エヴァンジェリン）

風呂作り？なる物を徹と二人で行った。

私が生まれた頃に、風呂は黒死病の原因として忌避されはじめたと聞いた。

それは、急速に広まっていったのだろう。

物心が付いた頃には風呂はなくなっていった。

だが、それが何かは知っていた。

裸になり、お湯に浸かるのだ。

そう、は、裸になるのだ…。

相手は12、3の若造なのだから、恥ずかしがる必要もあるまい。

そもそも、奴と初めて出会った時も、裸だったではないか。

そんな変な言い訳をしながら、徹が完成した風呂に水を流し込んで



いる姿を眺めていた。

その下に、火を入れて、水を温める。

大きな鍋が熱せられている。

その様子は、傍目からは何かの料理をしている様にしか思えなかった。

これに私達が入るのか…。

なかなか、シユールな光景だろうな。

ようやく、湯が沸いたらしい。

「お風呂だあ！」

言いながら、徹は服を脱ぎ始めた。

私に背中を向け、上着を脱ぐ徹…。

その背中には、右上から左下にかけて、大きな傷が走っていた。

その傷を見ている私に、気付かないふりをしながら、徹は腰に布を巻きつける。

そして、もう一枚の布を湯に浸けて身体を拭き始めた。

私も脱がなくてはいかな…。

ん？考えてみればコレはチャンスという奴ではないか？

ココで上手く奴を魅了すれば、奴が私のモノへとなる日が確実に近づくはずだ。

私も、同じ様に裸へとなり

「ふむ…。

とりあえず、私も拭け。」

告げた。

くはははは、どうだ!?

幼いお前には、刺激が強すぎたか?

赤くなり、慌てふためく徹の姿を想像しながら、様子を見ると。

「分かった分かった。」

と言い、普通に背中を拭かれた…。

な、なぜだ!?

すべすべのモチ肌だぞ。

どうして、反応がまったくない?

…ま、まさか

男に興味があるという、特殊な性癖を持っているのか、コイツは!?

いかん、それはいかんぞ。

「ほら、残りは自分でやってね。」

私の焦りなどまったく気付いていない様子で、徹から布を渡された。そして、そのまま風呂へと入っていく徹。

こうなったら、仕方ない。

肌と肌を触れさせる事によって、徹が誤ってしまった道を修正してやるうではないか。

ぱっと見で分かるが、あの風呂は小さい。だから、一緒に入れば自然と肌を寄せ合う事になるのだ。

まさに、完璧な策略。

「おい徹。

私も入るのだが…。」

安心しろ徹。

私がしっかりと貴様の道を修正してやるからな。

「ちょっと待っていてね。」

言いながら、徹は立ち上がった。

腰に巻いていたはずの布は、何故か頭の上にある。

ふむ、なかなかの…。

って、私はなに冷静に評価を下そうとしているんだ!?

くっ、まさか私が先制攻撃を受けるとは…。

だが、奴に悟られてはいけない。

そもそも、”アレ”を見てなんか変な考えをしているとばれたら、奴から痴女の烙印を押されてしまう。いかん、それは色々といかん。

「はい、後ろを向いて。」

なんでもないような表情をしながら、奴の言う通りに後ろを向いた。

すると、私の腹に手をまわし持ち上げてくるではないか。

私は酷い思い違いをしていたのかもしれない。

奴は間違はなく私に欲情していたのだ。

だが、それを鉄壁の理性で何とか押しとどめていたのだ。

そんなギリギリな奴を、わざわざ魅惑しようとしたのだから、こっぴごなつても仕方はないのだろう。

ふふふ、だったら予定は変更だ。

こっぴごなつたら、さらに奴を魅惑してやるつではないか。抗う事が出来ないくらい、きっちり。

ただ、しっかりと責任は取らせるがな。

「なっ、何をする!?!」

くっくくく、完璧だ。

こうやって、微妙な拒絶を入れる事によって、男を焦らすテクニク。

正直言ってしまうえば、私は男との経験がない。

だから、わざわざ恥を忍んでメア達に教えてもらったのだ!!

なんとも怖ろしいテクニクだ。

この後はもう決まりきっている。

『オレはもう我慢が!!』

エヴァちゃん!!』

『あ〜れ〜。』

となるらしい。

その後は、自分のオリジナルティーのある行動をとるのだが、ココまでいったら勝ち決定である。

「暴れないでね〜。」

そっついながら、奴は自分の膝の上へと私を座らせた…。

まったく発情などしていない様子で…。

ちょっと待て、よく考えてみる。

お互い布一枚まっとうしていない裸同士。

さらに、この体勢は色々ギリギリ過ぎる状態なんだぞ…！  
そんな状態なのに、まったく反応がないとは…。

女としてのプライドやら、悪の吸血鬼としてのプライドもズタズタだ…。

「悪の吸血鬼が…。」

私のプライドをズタズタにした奴は、何でもない様子で

「エヴァちゃん、オレ等は木の椅子に座っているから熱くないけどさ

金属の部分には触っちゃダメだよ。

火傷しちゃうかもしれないからね。」

などという注意をしてきた…。

とりあえず適当に頷いたら頭を撫でられてしまった。

あいかわらず、コイツは私を子供扱いしてくるのだ。

いつもであれば文句の一つでも言うのだが、今回は別の事に気を取られていてそれどころではなかった。

こんな危険な体勢にも関わらず徹はこれほどの余裕を持っているの

だ。

まったく、ここまでドキドキしている私がバカみたいではないか。

まあ、私の状態は置いておくとして、今重要なのは奴が余裕であるといった点である。

つまり、奴が男色である可能性がさらに上がったということだ。

何とかしなくてはならんな。

とりあえず、皆と相談しなくてはならぬな…。

〈side メア〉

いつもは帰ってくるはずの時間なのにまだ徹様は帰ってきていなかった。

普通であれば多少の心配ぐらいはするだろうが、私ほど不安でまみれる様な事はないだろう。

他の人達も少し大げさだと、呆れていた。

だが、私にはそれだけ不安になる理由があった。

徹様が自殺をするかもしれないのだ。

そんな私の心配を知らぬかのように、エヴァちゃんと仲良く帰ってきた徹様。

なんともなかった事にホッと安心した後に、ぐつぐつと怒りが沸いてきた。

散々心配したのだ。

だというのに、エヴァちゃんとイチャイチャして帰ってくるのだ。少しくらい、イライラしても仕方ない。

「徹様、どこへ行っていたんですか？」

ちよつと、言葉の端に刺をつけながら尋ねると

「お風呂に入ってきたんだよ。」

思いもよらない答えが返ってきてしまった。

「徹様、一体何を考えているんですか！？」

エヴァちゃんも止めて下さいよ！！」

徹様の自殺を防止するために、もしその兆候を見せたら力尽くにでも止めるとエヴァちゃんと約束をしたのだ。それを破る筈はなかった。

なにせ、私もエヴァちゃんも徹様に依存しているのだから。

「メアさん、ちよつと落ち着いて。」



「落ち着くなんて無理ですよ!!」

あなたが死んでしまったらどうするんですか!？」

今の私はかなりの興奮状態なのだろう。

こうやって、頭の中では冷静なのだが、身体が勝手に興奮状態に陥ってしまい困惑してしまっている。

普段では出す事のないような怒鳴り声を徹様に浴びせてしまい、そして瞳からは涙が溢れ出ようとしている。

さらに、言葉を浴びせようと口を開きかけた時

「メアさん、よく聞いて。」

徹様の両手が私の肩を掴んだ。

そして、目に入ってきたのは真剣な彼の顔と、漆黒の瞳であった。

まだ、落ち着いたワケではない。

落ち着いたワケではないのだが、不思議とその瞳を見ていると、出かかった言葉が何処かへ行ってしまったのだ。

そして、ゆっくりと説明された。

私達のお風呂の考えが間違っている事、お風呂によって病気が減る事などなど

不安そうにしていた私を見たからか、徹様は優しく微笑みながら言ってくれた。

「大丈夫だよ。メアさん。」

メアさんにも同じ事をやれっていうワケじゃないから。」

違う。私が不安になった理由はそうではないのだ。

本当に怖いのは、貴方様がいなくなる事なのだ。

酷い拷問にあい、神父達からは金づるや性の対象として気持ち悪い目で見られ、そして仲の良かった友からは裏切られた。

誰も信じられなかった。

何も信じられない、信じてはいけない。

そんな、暗い世界を徹様は明るく照らしてくれた。

下を向き、蹲っている私に手を差し伸べ立ち上がらせてくれたのだ。

まだ、私は不安定なのだ。

自分の事だ、自分が良く分かっている。

そんな私が、もし徹様を失ったら？

考えるだけでも怖ろしい。

また、暗い世界に入ってしまうのではないか？

また、下を向いてしまうのではないか？

それが怖いのだ。

一度太陽を見つけてしまった人間にとって、もっとも怖ろしい事は、再びその太陽がなくなってしまう事なのだ。

再び言おう。

私達は徹様に依存してしまっているのだ。  
もう、どうしようもない程に。

ふふふ、酷い女だ。

徹様の事を心配している様で、実際は自分のためなのだから。

まったく、酷くて傲慢で哀れな女だ。

けど、それでも私は…。

「いえ、そういう事が言いたいワケじゃないんです。

なんで、徹様はそんな怖ろしい事が出来るんですか？

確かに、徹様が言う事が正しければ問題はありません。

ですけど、間違っていたら死んでしまうかもしれないですよ!？」

貴方に死んで欲しくない。

私のために生きていて欲しい。

そんな危険な事はやめて、普通に生きて欲しい。

どこにも行かないで、私の隣にいて欲しい。

様々な”欲しい”という傲慢。

徹様を縛りつけたという独占欲などの感情が醜く私の中で混ざり  
あう。

そんな言葉、私が醜いと分かってしまう欲望の塊が先ほどの言葉に、  
にじんでいた。

「文化の違いかな？」

オレにとっては、そんなに怖い事じゃないんだ。  
むしろ、オレの暮らしていた所だったら健康のためだったんだよ。  
しかも気持ちいいんだよ、お風呂ってさ。」

そんな、私の醜い欲望に気付かないまま、徹様は困ったような笑み  
を浮かべながら頬を人差し指で搔いていた。

「メア、諦める。」

私も何度も考えを改めさせようとしたが、徹には無意味だったよ。

たしかに、徹のいうように風呂とは気持ちいいもだったしな。」

…まるでエヴァちゃんも一緒に入ったように聞こえるんですけど？

「徹様、エヴァちゃんも入れたんですか!？」

こんな子供に、そんな危ない事をやらせてはいけません!！」

お風呂っていうのは、お互い裸になるんですよね!？」

という事は、エヴァちゃんと徹さんが…。

「とりあえず、エヴァちゃんは吸血鬼だから見た目の年齢とは違っ  
からね。」

エヴァちゃんの意見を尊重しただけだよ。」

「それはそうですね。」

いや、そうじゃないって。

そこが問題なんじゃなくって、間違いがあつたらどうするの!?

別に間違いが合つては良いとは思うけど、それは主に私のような身体が成熟した女性にするべきであつて、エヴァちゃんのような未発達の女性には倫理的にどうか、とりあえず色々と危なすぎるのでやめておくべき事であつて、そもそもいくら早熟な貴族様であつてもある一定以上の年齢にならなくてはそういう事はやつてはいけない事になつているから、エヴァちゃんには早すぎるというか、いやもう何十年も生きている人には間違いはないんだけど、それ以前の問題で身体は幼いままなのだから無理をさせてはいけなくて、はつそつ言えば以前彼女が皆に性について聞いてきた事がありましたけど、それつてまさか今回の事を見越して聞いてきたというワケなの!？な、なんていう策略。そういえば私なんてノリノリで必勝ほ

「それ以前に、吸血鬼は不老不死だからな。

風呂ごとときで死ぬような事はないさ。

というワケで徹、また一緒に入るぞ。」

「うん、別にいいよ。」

あの『あ〜れ〜』を使つてしまわれたとすると、もしかすると徹様はすでに

…つて、やつぱり

「徹様、エヴァちゃんと一緒にお風呂に入ったんですか!？」

「えっ、うん。」

気持ちよかったよな、エヴァちゃん。」

「ああ、そうだな。」

ああ、すでにエヴァちゃんに遅れをとっている!!  
そもそも、裸の付き合いというのは男の人を虜にするもっとも原始的かつ効果的な方法と祖母が言っていたし。

「徹様、私もお風呂に入る事にします!!」

気付けば、私は叫ぶように言っていた。

第二章 革命編

その17

裏(前書き)

久しぶりの更新。

中々感覚が掴めなくて苦労しました。

楽しんで貰えれば幸いです。

Side エヴァンジェリン

徹が皆に風呂についての話しをしている間に、私とメアで緊急会議を行った。

この問題は非常に深刻なものであり、早急に解決しなくてはならないのだ。

「というわけで、メア

何か良い案はないのか？」

「エヴァちゃんの気のせいじゃないですか？」

メアの希望的観測をしたくなる気持ちも分からないでもない。だが、幾つもの証拠に近い現象が起こっているんだ。

「メア、よく考えてみる。

コレだけの女達と一緒に寝て、何も無い男がいるか？  
女と裸で密着して、何も反応しない男がいるか？」

「それは…



そう、実は徹様は女性だったという可能性があるじゃないですか。「  
な、なかなか飛躍した答えが出てきたな…。」

「ふむ、信じたくない気持は分からないでもないが、それでは本末  
転倒ではないか。」

「大丈夫です。私は徹様が女性でもいけます。」

その発言を聞いた瞬間、なぜかつすら寒く感じたがとりあえず無視  
しておこう。

「何がいけるのかは聞かないでおこう。」

そもそも、私は奴と共に風呂に入ったのだぞ。

しっかりと、アレがあるのは確認したから、女性という事はないぞ。

「

「その辺りをもっと詳しく、生々しく、ねっとりとお願ひします。」

「ちよっ、そんなに迫ってくるな！」

そもそも、それは今話す事ではないだろうが。  
今は、別の問題が

って、そんなに悲しそうな顔をするな。

後で話してやるから、な？」

全く、何故私がメアを慰めなくてはいけないんだ？

最近、私の性格がぶれてきてしまっているような気がする。

どうも、ここで暮らしていると調子が狂うみたいだ。

特に、徹やメアと共にいる時の狂いつぶりといったら、目も当てられないほどである。

「とにかく、話を戻すぞ。

この、深刻な問題…。

『徹が、男色である可能性が非常に高い』についての解決策を早急に考えなくてはいかん。」

たしか同性愛というのは、禁止されているような気がした。

だが、そのような禁止何ていう物は正直言ってあまり意味のないものだ。

そもそも、こんな事を知っている私の方が稀なのだ。

私達は字なんてものを読む事が出来ないで、そういった禁止されている事だの何だのというものはあまり関係がない。

まあ、流石に殺人や窃盗などは当たり前のようにはいけない事なのだが、風呂や同性愛など他人に迷惑がかからないものというのは特に裁かれるような事は無いのだ。

確かに、知られれば周りから多少白い眼で見られるだろうが、それだけだ。

そもそも、ここは独立した村なので、そういった禁止事項などは無いに等しい。

「もし徹様が同性愛者でしたら、私達のためにも徹様を正しい道に導くべきかもしれません。」

ですが、いまいち信用に欠けると言いますか…。」

「つまり徹は男色などではなく、ただ女性への興味が薄いと言いたいのか？」

そうは言ってもだな、裸で危険な体勢にも関わらず、まったく反応をしなかったんだぞ。」

「そもそも、その危険な体勢というのは、一体どういう物なんですか？」

ふむ、そういえばメアに説明していなかったな。

「裸で、膝の上に座った。」

「…もう一度お願いします。」

「裸で、膝の上に座った。」

やはり、コレは相当危険な体勢なのであろう。

今までは、適当だったメアの顔が真剣になり始めていた。

「徹様の顔に出ていなかったただけの可能性はどうですか？」

「メア、忘れていたようだが徹も裸だったのだ。しっかりとアレの確認もしておいたが、反応は全くなかったぞ。」

「エヴァちゃん、すみませんでした。」

ようやく、メアも事の重大さに気付いたようだ。彼女の顔は、先ほどとは違い真剣な顔つきへとなっていた。

「いや、良い。」

私の方こそ説明不足だったようだからな。」

その後からは、非常に有意義な会議が行えた。

今のところの目標は、徹に女の魅力というものを教え込む事によって、男よりも女（というよりも私達）の方が良いという事実感させるのだ。

「恐らく、性癖は中々治る物ではありません。ですが、そこを治すのではなく、私達の虜にしてしまえば治らなくても問題は無いかと。」

「ふむ、つまりやはり男が好きになる対象なのだが、その男以上に”私達”を好きにさせれば良いという事か？」

確かに、結婚などをした場合、男は他の女を見たりするかもしれないが、ただそれだけだ。

愛人を囲ったりする場合もないわけではないが、それは貴族においてのみで、普通の男には出来ない。

浮気が全くないワケではないが、徹はその様な事を出来るほど器用な男ではないというのは分かりきっているので、その辺りの問題はない。

つまり、他の者よりもただ”私達”を好きにならせてしまえば、結婚なりなんなりをすれば、私達の勝利だという事だ。

他の男とは違い、目移りするのが女ではなく男にするかもしれないが、それは別に問題ではない。

簡単に書くと 私達>男>女 にしてしまえば良いという事だ。

ふむ、新しい可能性が見えて来たな。

今の所の方法は二つ。

まず一つ目は徹の性癖を正常な形に戻し、そして私達に振り向かせる方法。

二つ目は徹の性癖はそのままだが、”私達”を好きにさせる方法。

この二つだろう。

どちらの方法にしる私達が徹に女、又は私の魅力を見せつけなくてはいけないという事には変わらない。

「メア、確かに私達は協力しているが…。」

「ええ、分かっています。」

「協力はしていますが、敵対しているという事には変わりありません。」

「そうだ、今回は非常事態故に協力をしたが、徹に選ばれるのは一人のみ。」

「というより私は独占力が強いからな、2人で徹を分けるのは我慢がならないんだよ。」

「大丈夫ですよ。私も独占力は負けないぐらいつよいですから、エヴァちゃんの気持ちは良く分かりますよ。」

気付けば、私達は笑っていた。

「くつくくくくく。」

「ふふふふ。」

初めて出会った時を彷彿させる。

だが、あの時とは圧倒的に違う笑みであった。

徹の方も徹の方で、話が終わったのだろう。

「眠くなったから、寝るね。」

「おやすみ。」

言いながら、徹は男部屋の方に入ろうとした…。

徹よ、そうはいかんぞ。

貴様は、私達に骨抜きにされなくてはいけないんだからな。

「徹。

お前はそっちではないだろ？」

「そうですよ、徹様。

男性の皆さま、徹様をけして部屋に入れないうでくださいね。」

どうやら、メアも同じ事を考えていた様だ。

男共は一斉に部屋へと入ると、立てこもった。

どうやら、かなりしつかりと押さえているらしく、徹が扉を押ししたり引いたりしているが、ウンともスンとも言わない。

だが、この後が問題であった。

徹は、扉を叩きながら

「頼むから、開けてくれよ。」

と言ったのだ。

それも、かなり真剣に。

徹が女であるのだったら、分からないでもない。

もし、女が男しか居ない空間に閉じ込められれば、身の危険を感じ、このような行動をとっても何もおかしくはない。

だが、逆なのだ。

徹は男で、女しかいない空間に閉じ込められるのだ。

確かに多少の程度の違いはあるが、大抵は喜ぶ。

もし喜ばないとしても、ここまであからさまな拒絶は普通はないはずだ。

しかも、すでに何度も共に寝ているに関わらず、このような状態なのだ…。

ただ、恥ずかしがっているだけかと思ったのだが、風呂に入る時は何も反応しなかったし…。

つまり、アレだ。

やはり、奴は男色だったという事だ。

メアとアイコンタクトをとり、互いに頷き合う。

「さてさて、徹様

眠いのだったら、あちらで寝ましょう。」

「そつだぞ。

眠いのだろ？早く行って寝ようではないか。

ちなみに、他の男共よ。



夜が明けるまでに一歩でもその部屋から出てみる。  
死ぬよりも恐ろしい目にあわせるぞ。」

「エヴァちゃん。その時は私も一緒にさせてください。」

まだ、男が乱入してきた事が記憶に新しかったので念を押しておいた。

そして、私達は徹を連れて寝に行くのであった。

何度か、時間系列がバラバラで読みづらいという意見を貰いました。

そこで、どのような書き方をしたら良いかをアンケートしたいと思います。

もし、よろしければ教えてください。

? 今まで通り、『表10話、裏10話』ごとに書く。

( つまり、表×10、裏×10 )

? 表と裏を交互に書く。

( つまり、『表章1』、『裏章1』、『表章2』 )

? 時間系列の通りに書く

( つまり『表1話』『裏1話』『裏2話』のような形になります )

? その他

ちなみに、一話の中に表と裏を混ぜるのは、この作品では出来そうにありませんので、それはなしの方向でお願いします。

なお、期限は裏章20話を更新するまでです。

恐らく、7月上旬になるかと思います。

感想や、活動報告の所などに書いてくれれば良いので、よろしくお

願  
い  
し  
ま  
す。

Side エヴァンジェリン

村は急速に安定し始めた。

汚物の処理や風呂に入らせる。

そういった環境改善政策？とかなんとかを徹は力をいれ進めてきたおかげで、病にかかる人達の数はぐっと減った。

まあ、実際に徹の言うように風呂に入ったり汚物の処理のおかげで本当に減ったのかどうかはやはりまだ疑ってしまう所なのだが事実として病人は減り、そして風呂に入ったからと言って急に死んだような人も出なかつたため、確信はないけどなんとなく言う通りになっているといった感じである。

さらに、村の面積を広げるために伐採を行い、畑の面積も増やした。

生活に必要な物資は殆ど村の中で作る事が出来るようになったおかげで、外から買わなくてはいけないものはエールぐらいの物だった。

流石に買い続けているだけでは、その内限界が来てしまう事も分かっていたので、こちらも余った食物を売る事によって、その辺りのバランスはとっている。

数か月という日数でコレだけ出来れば十分であった。  
村人達もこの結果に満足し、そして多くの事を教え、精力的に働き  
続けてくれた徹やマギに対して大いに感謝をしていた。

徹を手伝い、マギにメアと共に魔法を教えてもらい、そして風呂に  
入り、寝る。

単調だが、充実した毎日であった。

他の者から見ればつまらない毎日だったのかも知れん。

だが、私達にとってはその一日一日が大切で、そして幸せな日々で  
あった。

まだまだ、やらねばならない事も多々あり、決めなくてはいけない  
事も多くあったのだが、とりあえずの所は落ち着きを見せ始めたそ  
んなある日の事。

いつものように他の奴らと共に朝食を食べていると。

「あっ、そういえば、オレってなんか不老っぽいや。」

唐突に、本当に唐突に徹が呟くのだった。

「…へ？」

「だからオレが不老っぽい。」

特になんともなく、本当の自然体で笑いながら話す徹。

その様子と話している内容とのギャップが激しすぎて、どうやら思考が追いついて来ていないようだ。

皆も私と同じ様な状況らしく、あれ程騒がしかったのだが、今では沈黙に包まれていた。

そんな異様な雰囲気気付いていないのか、それともあえて無視しているのかは分からんが奴は話を続ける。

「いやね、もうココに来て何カ月も経っているのにさ、髪の毛も爪も一切伸びて来ないんだよ。

もともと、不老不死疑惑があっただけで、その内の不老の可能性が高くなっちゃったみたい。」

不老不死。

死なず、老いず、生き続ける事。

そして、それは人間が叡智の先に追い求める最終目標である。もっと大切な物があるはずなのに、何故か人間が憧れてやまない呪い。

いま流行っている学問である錬金術もまた、その不老不死くだらぬモノを求め発展している。

どうやら不変である金を不老不死に見立て、云々といった話だった気がするが、私には関係がない。それよりも、問題は別の所だ。

馬鹿共が”たかが”不老不死のためにナニかを捨てるといっものは全然構わない。

そんな事私の知った事ではないし、それを覚悟の上でやっているのだろう。

ただ、奴は違う。

徹が、そんなくだらない事を自分のためにするとは思えないのだ。

奴がその様な決断をするのは、他の者のためか、それとも私のように強制的にやらされたのかのどちらかしか思い浮かばないのだ。

そして、最も気になる部分が不老不死”疑惑”というところである。

その言葉からは、彼がまだ不老不死になっている実感がないという事が楽に推測出来る。

これは私もそうだったのだが、不老不死などという物を実感するというのは非常に長い時間と多くの経験が必要となる。

つまり、彼はまだ不老不死になってから時間があまり経っていないという事だろうか？

色々と考えながら誤魔化しているが、私の内は歓喜で渦巻いていた。

あまりにもこの村の居心地が良すぎて忘れがちだが、私の目的は徹を私のモノにする事だ。

もっと単純に言うのなら、奴を吸血鬼にし、私と共に永遠を生きてもらうつもりでいた。

なに、私の”モノ”なのだから全然構わぬだろ？

だというのに、奴はすでに不老だという。

完璧にそうだと決まったワケではないが、可能性としてはかなり高いであろう。

それだったらだ、それだったら、すでに勝負はついたに近いと言える。

永遠という月日は人間が一人で生きていくには寂しすぎるのだ。たった数十年しか一人で生きていない私ですら狂いたくなるほど、いや実際は狂う一歩前というところまで追い詰められていたのだ。

その寂しさは徹だって、耐える事は出来まい……。  
という事は、奴は私と共に生きていくしかないのだ。

もう一人で生きなくても済む。  
全てに拒絶されたとしても、1人だけは私と共にいてくれる。

そう思うと、喜んではいけないと分かりながらも、どうしても嬉しくなってしまうのだ。

そんな醜い感情を必死に色々と考えながら誤魔化そうとしていた。

何せ私は自分の事しか考えていないのだ。

徹が自ら望んで不老不死などになるはずがないと分かっているながらも、奴の心配をするでもなく同族が出来た事を喜ぶ己がいるのだ。

そもそも徹を私のモノにするつもりだった所で、私はあまりにも酷ひどい事を行っているのだ。

普通、自分を受け入れてくれた大切な人を吸血鬼にするだろうか？



吸血鬼というのは、世界から拒絶される存在だ。

大切な人をそんな存在にしまっていいのだろうか？

本当に大切な人であるのだったら、そんな血塗られた世界に呼び込むのではなく、逆に光の世界に行かせるべきではないのだろうか？

何度も行つた自問。

徹をメアに任せ、何度去ろうとしたか。

マギに徹を支えて欲しいと頼み、何度去ろうとしたか。

だが、どうしても出来なかった。

世界という奴は、とことん私が嫌いらしい。

全てに拒絶される地獄から、やっと救いの手が差し伸べられたのだ。だが、次はその手を離せと強要する。

それでも、私は思わずにはいられないのだ。

叫ばずにはいられないのだ。

私が人と共にいたいというのは、そんなにいけない事なのか？

私には、1人の人と共にいたいというそんな小さな希望すらも持つてはいけないのか？

何度も何度も、問い続けた。  
けれど、答えは見つからなかった…。

全く、あまりに自分が愚かでイヤになる。

頭を振り、無理やり意識を切り替える。

そもそも、私がどんな風に思っても意味などないのだ。  
感情などというものは勝手にわき出てくるモノなのだから、知った  
事ではない。

だから、今大切なのは2つだ。

私にとって、奴は大切な者である事。

そして、不老不死の先輩として、奴を助けられるのなら助けてやる  
事。

コレだけだ。

私としては、徹が共に生きてくれるというのならそれほど嬉しい事  
はない。

その気持ちぐらいは伝えてやらんくてはな。

たく、本当に奴には困ったもんだ…。

ほんの少ししか喋っていないというのに、ココまで私を葛藤させ、  
あまつさえ一生共に生きて欲しいと再確認させるんだからな。

というよりも、自分の5分の1程度しか生きていない子供に、ココまで引っ掻きまわされるとは…。

もしかしたら、将来、奴はとんでもない女泣かせになるのかもしれんな…。

第二章 革命編

その19

裏(前書き)

短めですが、更新します。

side メア)

「あつ、そういえば、オレってなんか不老っばいや。」

唐唐突に徹様は呟いた。

「…へ？」

皆も困惑しているようで、先ほどまで騒がしかった雰囲気は既に霧散しており、ただ徹様の事を見つめていた。

「だからオレが不老っばい。」

自分は不老だ。

普通の人が言ったら、冗談、又は精神異常を疑われる言葉だが、徹様が言ってしまうと現実味がありすぎる。

そもそも、魔法使いや吸血鬼が身近にいるのだから、徹様が不老だとしてもそこまで不思議ではない。

「いやね、もうココに来て何カ月も経っているのにさ、髪の毛も爪も一切伸びて来ないんだよ。」

もともと、不老不死疑惑があったんだけど、その内の不老の可能性が高くなっちゃったみたい。」

「不老不死疑惑って、どうしてそんな疑惑が出てくるんですか!？」

普通に生きていればまずない疑惑であろう。

というよりも、周りにそんな疑惑を持っている人など普通はいない。

「うん

なんか良く分からないうちに、押しつけられたというか…。」

彼は、お得意の困った様な笑みを浮かべながら答えた。

その言葉が非常に重かった。

何がなんだか、分からないうちに押しつけられた。

了承すらしに、無理やりに押しつけられた不老不死という異形な能力。

ただでさえ、徹様はその才能故に畏れられているというのに、そこにさらに異形な能力までつけられたのだ。

それは、あまりにも寂しすぎる。

そもそも不老不死などという物は、上の人にとってはどんな事をして

でも得たいと思う物なのかもしれないが、私のような庶民からしてみれば、なぜそんな思いを持つのか理解が出来ないし、興味もない。唯一関係している所と言えば、貴族サマなんかは不老不死になろうと金を食べているらしく、その汚物から金が取れるのだ。それをかき集めて稼いでいる人間がちらほらいる、ぐらいである。

私達のような人間にとっての幸せなんて、本当に小さい物だ。

ただ、人と繋がり、子を産み、皆で生活出来ればそれで幸せなのだ。子供の頃はもつと単純だった。

お腹一杯になれば幸せ。

美味しい物が食べれば幸せ。  
皆が笑っていれば幸せ。

不老不死なんてそんな、大げさな物なんてなくても十分に幸せになれるのだ。

いや、むしろそんな物なんて妨げにしかない。

これでは、まるで徹様は幸せになってはいけないようではないか。誰も近寄れず、誰もが近寄らない孤高の道。それを、無理やり歩まされている様な錯覚に陥る。

もしかしたら、徹様は誰よりも幸せだと思つる者もいるのかもしれない。

なにせ、それほど長い時を共に過ごしていないにも関わらず、戦い、

政治、発明、人心掌握といったありとあらゆる才能に恵まれている事を私達に知らしめし、そして不老不死という普通の人間には手に入れる事は出来ないような特殊な物までも手に入れてしまっているのだから。

だが、それは、本当に幸せな事なのだろうか？

私達は、貴方のおかげで幸せになりました。

聞しかなかった、私達の世界に、光を与えてくれたおかげで、幸せになれました。

ですが、貴方はどうですか？

幸せですか？

きっと、尋ねても彼は何も言わず、困った笑みを浮かべながら頬を掻くのだろう。

彼の孤高の道…。



自ら歩もうとしていないにも関わらず、彼はその道を歩むしか道はないのかもしれない。

…いや、1人だけ居る。

彼と共に、ずっと道を歩んでいける人間が1人だけ。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

吸血鬼つというぐらいなのだから、彼女も不老不死ぐらいもってるだろう。

いや、持っていないくては困る。

そもそも、彼はどうしようもない程優しい人間なのだ。

確かに、孤高の道なのかもしれない。

だが、私達のようにそんな彼の事を放っておけない人間も何人もいるはずである。

今さら気付いたのだが、彼は不老不死なのかもしれないといった。た。

これは、孤高の道という可能性も確かにあるのだが、彼がより多くの人間を救うための物という考えられるのではないだろうか？

もし、後者だったら、彼は孤高の道とは真逆の道を歩む事になるだろう。

不老不死ではない私は共に歩めないのは、ちょっと寂しいが、徹様

が幸せだというのなら…。

エヴァちゃんに譲ろう。

ただ、これで私が諦めたと思ったら大間違いである。

私が死ぬまでの間は、無理やりにも私は徹様と共に歩いていこうではないか。

エヴァちゃんに譲るのはその後からである。

それまでの間は、ずっとエヴァちゃんは私のライバルですよ？

第二章 革命編

エピソード(前書き)

いろいろと、捏造しまくりです。

初代マギステル・マギは誰なのか？

古くから、この論争は研究者の中で激しくされてきたが、残念ながら真相は分かっていないとしか言いようがない。

その研究者達から話を聞いていくと、彼等の意見は主に4つの者に分かれていた。

王族派、犯罪者派、天才派、虚言派の4つである。

(省略)

さて、次に天才派の人間が考える初代マギステル・マギについて語ろうかと思う。

彼の名は、マグリード・ギリユー。

この名を聞いてすぐに誰かは分からぬであろう。

事実、この名は殆ど使う事がなく彼は他の者達に別の異名を使うようにさせた。

彼自身もまた、その名を語っているのだから仕方ないと言ったら仕方ないのだろう。

彼の異名とは『マギ』。

そう天才魔術師、マギである。

彼の残した物は非常に偉大である。

従来の魔法技術とは全く違う方向性を導き出し、それを開拓した人間である。

それにより、魔法という技術の幅が広がった。

現在使われている認識障害魔法と人払いの魔法においては、今もなお彼の技術を基に構築しているのだ。

彼が、この理論を発表したのは晩年1500年初期。

それから500年近く経っているにも関わらず、その理論が根本にあるのだ。

だが、それだけでマギステル・マギであるとは言えない。

確かに彼の発見は大いに魔法技術の発達に尽力したと言えるであろうし、その功績は彼が偉大な魔術師である事を示しているが、それがマギステル・マギの条件ではないのだ。

何度も言っている様にマギステル・マギとは、自分の危険をかえりみず、多くの人々を直接救う人間に与えられる称号、又は仕事である。

確かに彼の発見により多くの人を救ったであろうが、それは間接的でありマギステル・マギとは方向性が違うのだ。

では、何故彼が初代マギステル・マギと言われるのか。

これは彼の生きた時代背景が根本にある。

彼が生きた時代は、中世ヨーロッパであった。

そう魔女狩りの時代である。

そもそも、この魔女狩りが起きた原因には我々の先祖が関係しているという説もある。

その説曰く、中世ヨーロッパという非常に貧しい時代に魔法使いが魔法を使っている様子を見てしまい、そこから魔女狩りが爆発的に広がったという。

確かに、この可能性というのは非常に高いと言わざるおえない。

先ほど言ったように、マジギが認識阻害魔法を創り出す前というのは自分の身を隠すような魔法は存在しないのだ。

そもそも、旧世界の人間に魔法を見せてはいけないという概念があったのかどうかさえ不明である。

現在、旧世界の人間に魔法を見せてはいけないと徹底している理由も過去の失敗から学んだと言えは全く違和感がない。

そもそも、旧世界と魔法世界との交流が長い間経っていた理由というのも、この魔女狩りの事件が原因ではないかという説さえ出ているのだ。

そんな時代、彼は同じ魔法使いとして大いに責任を感じた様であり、魔女狩りの被害者となった者たちを救いだした。

その被害者達には行く所は何処にもなかったので、彼は認識阻害魔

法の技術を使い、誰にも見つかる事のない隠し村を作りだしたのだ。これはマギステル・マギに相応しい仕事であろう。言われもない罪をかぶされた人々を救いだし、そして後の生活までも保障しているのだ。

(省略)

そして、彼が初代マギステル・マギであると言われるようになった大きな原因について私は記そうかと思う。

最近発見された彼の日記、これが今日の多くの研究者達が彼を初代マギステル・マギだと叫ぶようになった原因である。

そもそも、この日記がなければ彼が村を作っていたという事すら知らぬままであったであろう。

その日記には、こう書かれていたのであった。

『我々を大いに助けてくれたにも関わらず、徹とエヴァンジェリンは村から追い出された。』

もし、本気を出して抵抗すれば、力でねじ伏せられたに違いないと

いつものに彼達はそれを行わず、オレに挨拶すらないままひっそりと消えていった。

オレは追い出したあいつ等の事を許す事は出来ないであろう。

誰がお前の事を救ったと思っている？

誰がお前のために働いていたと思っている？

誰がこの楽園を創ったと思っている？

彼等なのだ。

そう、彼等が全てを救い、創りあげて来たのだ。

オレは、あいつ等を許す事は出来ない。

ただ、それを防ぐ事を出来なかった自分自身も許せそうにない。

ここに居る、人達はオレの事を偉大な魔法使いなどと言って来やがる。

友人を救えなかった人間の事をそんな風に言ってくるのだ。

貴方がいるおかげで、村を創る事が出来た。

貴方のおかげで、病気が減った。

貴方のおかげで、村を幸せに出来る。

と。



そんな物、オレのおかげでもなんでもないというのに、彼等はオレに向かつて言うのだ。

だったら、そのように名乗ろうではないか。

偉大な魔法使い、マギステル・マギと。

友人すら救えない偉大な魔法使いとして、その名を名乗っていいことではないか。』と。

『「初代マギ・ステルマギ」論争』より一部抜粋

## 第二章 革命編

### エピソード（後書き）

アンケートを閉め切ります。

アンケートの結果、時間系列に書くようになりました。

ちょっと、自分が書きやすいように改造しますが、基本はこの様に書こうと思います。

ご協力ありがとうございました。

幕章 村の日常編 その1

side 徹

ええと、アレだよ。うん。

一応言わしてもらうけど、オレって女つ気が全くない人間なんだよね。

いや、正確には『なかった』が正しいけど、それは置いておこう。

とりあえず、オレは『彼女居ない歴〃年の数』という非常に不名誉な公式が成り立っているほど女つ気がないんだよ。

というより、そもそも接点すらないワケであって、周りに居るのは野郎共のみという非常に暑苦しい空間で生きた来たわけですよ。

そんなオレが男女比が2:8という謎すぎる空間に来てしまったというだけで勘弁して欲しいというのに、何故か女性の方々の玩具として気に入られてしまったようで、男空間に逃げ込む事すら出来ない状況であります。

とりあえず、エヴァちゃんに関しては亜子ちゃんの世話をしていたおかげで全然問題がないどころか、もう可愛くて可愛くて。

きつと、父親ってこんな気持ちなんだろうな…。

もし、結婚するような事になったらオレ、100%泣く自信があるぞ。

というより、アレだ。

絶対、相手の男を一発殴る。

いや、エヴァちゃんの結婚を認めないワケじゃないぞ。

ただ、オレからエヴァちゃんを取り上げるのだ。

それぐらいしたって、罰はあたららない、よな？

とりあえず、エヴァちゃんに関しては全然問題がない。

他は、マリーさんのようなお婆ちゃん（とはいっても、現代で考えれば『おばさん』と言われるぐらいの年齢なのだが）も問題はない。マリーさんからも非常に良くしてもらっており、エヴァちゃんと良く焼き立てのパンとかを貰って餌付けされた。

いや、作りたてのパンって本当に旨いんだよ。

ほかほかのふにふにで本当に美味いんだって。

とりあえず、問題なのはそれ以外の女性である。

やはり、教会側は魔女狩りの際、性的欲求を満たそうとしていた様で、見た目麗しく、さらに13〜22程の年頃の女性が大勢いるのだ。

つまり、殆どの女性というワケになるのだ。

別に彼女達に苛められているというわけではない。

むしろ、いろいろと良くしてもらっている。

ただね、過度なスキンシップが非常に精神上よくないんだよ。

ぶにぶにしたものが、身体に当たるし、耳に息を吹きかけられた時なんて、ビクッってなるし、ほんと勘弁してほしい。

というより、コレって絶対あれだよな？

完璧に遊ばれてるよね！？

確かに、オレは一般的な男と比べれば、そついった欲求は薄い方だけだよ、オレも男なんだよ。

流石に、この状況は辛い。

とりあえず、必死にポーカフェイスを装っている。

きつと、派手に反応したら、さらに遊ばれそうだし。

うん、やっぱり何も反応しないのが一番だよな。

まあ、既にバレバレなような気がしないでもないが…。

しかも、13歳の子供までオレに対してそついった事をやってくるのだ。

現代であれば、ただの子供に過ぎないし、オレだってあまり慌てないであろう。

しかし、ココは現代ではなく中世ヨーロッパである。

つまり、13歳でも大人扱いであり、子供を産んでも全く問題ないのだ。

多分そのせいであろう。

13とは思えないほど色気とでも言えばいいのか？

とりあえず、そんな感じのモノを未発達な身体に纏まとわせて、オレをからかってくるのだ。

ほんと、たまったものではない。

さらに、酷いのはメアさんだ。

彼女の場合は本当にキツイ。

何せ、一緒にお風呂に入らせられるのだ。

確かに、ペストが流行る前の風呂は混浴であったような気がする。ヨーロッパはどうか知らんけど、少なくとも日本は江戸ぐらいまでは混浴だったはずだ。

だから、確かにメアさんの意見も分からないワケでもないのだが、確実に鼻血が出る自信があるオレとしてはそこは譲れなく、必死に反論したのだが…。

言いくるめられました。

オレだって頑張ったんだよ！

必死に、混浴にすると風紀が乱れ得る、まあ簡単にいうと売春場になるとか言って説得したのだが、たった一言

「とはいっても、入り方が分かりません」

によって、オレは負けました。

とりあえず、メアさんにしっかり教え、お風呂教育係として他の女性にお風呂の入り方を教えてもらう事にしました。

これはきついけど、村中の女性と一緒にお風呂に入ると比べれば随分とマシである。

しかも、どう頑張っても自家製お風呂では小さすぎて、一緒に入る事は出来ないおかげで、色々と助かった。

うん、本当に助かった。

）side メア）

徹様の人気は凄い物であった。

まあ、正直言つてこれは仕方がない事であろう。

今まで、私達『女』という存在は大した存在では無かった。

12、3になったら近隣の男と結婚し、子供を多く産み、30ほどになったら死ぬだけの存在なのだ。

そして、生まれた子供もそれを繰り返していく。

男も男で、畑をただただ耕していくだけ。

確かに、女も畑を耕すのを手伝いはするが、それでも男達の中には『たかが女』という意識が何処かにあったような気がする。

まあ、それはギリギリな生活を考えれば仕方がないといえば、仕方がないのかもしれない。

そこには、貴族サマが盛んに言う、愛だの恋だのといった物は無く、そうしなくてはならないから、そうしているだけである。

というよりも、女には拒否権という物がほとんどない。

村の男が「あの娘が欲しい」といえば、大抵はその男と結婚する。時々、別の男が「オレもあの娘が欲しい」と言って、取り合いになる事はあるが、それは大抵は男同士の間で相談して終わりであり、『女』の意見は殆どないと言ってもいい。

まあ、そうでもしなくては、12、3で結婚するなんて事が難しいのであろう。

だが、徹様は違った。

私達の意見を聞いてくれた。  
考えを述べる機会を与えてくれた。



確かに、初めはとまどった。

いきなり、自分の考えを述べるように言われたのだから。

でも、『女』が何も考えず生きて来たワケではない。

『女』だって色々と感じ、考え、生きて来たのだ。

ただでさえ、徹様は私達の命を救ってくれ、さらに安全に生活が出来るようにしてくれたのだ。

そして、さらに本当に大事にしてくれる。

ふふふ、これでは惚れるなと言う方が無理である。

人妻も結構いるが既に夫とは、魔女狩りの際に縁が切れ

というより、夫にすらも『淫乱な魔女』などと罵りを受けている者達ばかりなので、もうそんなくだらしない男などに未練などないだろう。

そもそも、教会は若く綺麗な女を集めたがっていたせいで、人妻といえども結婚してばかりの女ばかりが集められたせいで子供もいなく、夫ともそんな長い時間を共にしたワケでもないため、本当に未練がないようである。

彼女達のアプローチはかなり凄い。

これは、くだらない男を知っているからこそというのもあるだろうし、少し年齢を気にして焦っているというのもあるであろう。

ココに居る女性全員は、既に行き遅れに近い状態であった。

そういう私も、15と完璧に婚期を逃している。

私の場合は、3年もあの牢屋に閉じ込められていたため、まだ結婚はしては居なかったが、それでも15では行き遅れという奴である。

既に人生の折り返し地点である事を考えると、すぐにも結婚をし、子供をもうけたい。

恐らく、これはココに居る女性のほぼ全員が思っている事であろう。しかも、皆同じ人の事を狙っている。

全く、何十人も女性の虜にするとは、流石徹様とでも言うておくべきでしょうか？

さて、そんな風に何十人も女性から徹様はアプローチを一身に受けています。

もう、純粋な若い娘から、妖艶な大人まで、ありとあらゆる女性から、ありとあらゆる手段で、彼の事を振り向かせようとしております。

中には、裸になり彼の布団に潜り込んだ人までいるにも関わらず…。

全然反応を示しません。

「エヴァちゃん、一体どうしましょうか？

いくら男色だといえども、ココまでされれば、普通は襲うはずなんです…。」

正直、ココまでされれば、男の本能で襲ってくるはずなのである。事実、夫が相手をしてくれない時の対処方法として、マリーさんから教えてもらったため、普通は襲ってくるのだろう。

「むむむ…。」

というよりも、奴はそんなにモテているのか？」

恒例となった、作戦会議である。

「はい。」

というか、見てて気付かなかったんですか？」

「少しベタベタしすぎているとは思ったが、そこまでモテているとは知らなかったな。」

というより、裸で布団に潜り込んだなど、初めて知ったぞ。」

「それは徹様が性教育はある程度育った後にしると、しきりに念を押ししてきましたので、皆さまエヴァちゃんに気付かれないように内緒で」

「って、お前達まで私を子供扱いするのか!？」

徹様がエヴァちゃんを子供だというのだったら、私達はそれに従うまでですし…。」

これを言つと、怒られそうなので黙っておきましょう。

「はあ、まあ良い。」

だが、もうそこまで来てしまうと、奴のモノが反応しないとしか考えられぬのだが。」

「いえ、それはないです。」

夜、徹様が寝ている最中に刺激を与えたところ、しっかりと反応を示しました。」

「メア！！」

お前、何をしているんだ！！」

「調査ですよ。」

エヴァちゃんの言っていた通り、なかなかのモノでした。」

ほんと、徹様は身体に似合わずなかなかの…。」

「先を越された…。」

「前座だけですよ。」

「私もやる」

「徹様にばれないようにしてくださいね。」

だいぶ、話が脱線してきたので、とりあえず戻すとしよう。

「それよりも、本当にどうしますか？」

私もお風呂で裸になったのですが、全く反応がなかったので、正直私達の力だけで徹様を振り向かせるには無理があるかと…。」

「つまり、なにか？」

他の奴等にも協力させるといつのか？」

「はい。」

徹様が男色というのは彼の沽券に関わりますので、そこは秘密のままですが、彼を落とすのに協力してもらおうかと。」

「ふむ、確かに徹が1人でも女を求めるようになれば、そこから芋づる式に私達まで来るかも知れない。」

だが、それでは奴の独占が出来なくなるんだぞ。」

「はい、それは分かっています。」

ですが、そもそも、この村で男性を独占しようという考えが無理に近いです。

ここに住む男性の半分近くが老人なんですよ。まともな若者は10人ほど。」

そんな中、一番人気のある徹様を独占してしまったては、村が機能しなくなってしまう。」

ちなみに。二番目に人気なのはマギさんである。

「だ、だが…。」

「はあ、まったく。

良いですか、エヴァちゃん。

徹様ほどの器の持ち主でしたら、妻が1人というワケにはいかないでしょうが。

確実に、それでは不幸になる女性が、数多く出てしまいます。

それともなんですか？

徹様には、妻の2、30人すらも養えないほどの甲斐性がないとでも？」

もし、妻がダメなら妾という手もある。

確かに、私も独占欲が強いといえは強いですし、出来る事なら独占したいとも思うが、これは私に限った事ではない。

女であれば、誰だっと思ふ事ではないのだろうか？

確かに、妻が何十人というのは、少々多すぎる気もしないでもないが、徹様という前提が付くのであればけして多くはないだろう。

まったく、徹様が孤独にならないよう努めていこうと思っていなの…。

なんなんですか、この人気っぷりは。

心配していた私が、馬鹿みたいだ。

「いや、そんな事はないぞ。

奴だったら、100人でも200人でも大丈夫に違いない。

違いはないんだが…。

それでは、少し寂しいではないか…。」

言いながら、俯くエヴァちゃん。

はあ、まったく。

「大丈夫ですよ。

確かに、徹様は男色です。

ええ、私達がどんなに魅了しても、一切振り向かないほどの生粋の男色です。

ですが、徹様はエヴァちゃんをしっかりと見てくださっているじゃないですか。

貴方の異端を、全て受け止めてくださったじゃないですか。

一緒にお風呂にだって入ったんでしょ？

もっと、自分に自信を持ちなさい。

しかも、徹様でしたら大丈夫ですよ。

もし、何人も妻が出来たとしても、その寵愛を分割して与える事何  
てしませんよ。

彼は、その優しさの全てを1人1人に向けて、全霊をかけて下さい  
ますよ。

なにせ、妻でもなんでもない私達に、ココまでの優しさを与えてく  
ださるのですから。」

「うう〜、そうかな？」

まったく、私より何十年も長く生きているというのに、この娘は…。

「はい、大丈夫ですよ。」

でも、だからこそ私も放っておけないのだろう。



幕章 村の日常編 その1（後書き）

セーフ？アウト？

とりあえず、言い訳を。

中世ヨーロッパという時代では一夫多妻は肯定的に見られておりました。

今の日本では、ただの浮気と認識されると思いますが、当時では一種のステータスに近いものでした。

つまり、それだけの女性を幸せに出来るだけの力を持っているという事です。

ですから、彼女達にも独占欲はあったでしょうが、そこまで一夫多妻という物に嫌悪感がなかっただろうという推測です。

まあ、簡単に言いますと

暴走しちゃった。テヘッ

という事です。反省はしています。ですが後悔はしていません。

## 幕章 村の日常編 その2

Side 徹

この村に来てからというものの、毎日充実した生活を送っている。

前では考えられないような時間に起き、飯を食って、まず畑仕事をする。

これが非常にきつい。

初めは毎日のように筋肉痛に苦しめられていたんだけど、最近ではどうやら馴れたみたいだ。

そこで、次に木を切る作業となる。

マー君監修のもと、認識阻害魔法をかけながら、村の面積を増やしてくのだ。

これは、オレ達が来たせいで、村の面積が足りなくなったというのも理由の一つだが、コレからも人口が増えていく事を見越してである。

まだまだ、魔女狩りの被害にあっている人間が多く居る。

そんな人達を助けるつもりなんだから、この村をもっと大きくしな

いといけないのだ。

ちなみに、この切った木は家の材料となる。

オレが作った、適当ハウスをちよいちよいとリホームしているのだ。  
というか、あれだね。

適当ハウスは段々と家に近付いているので、この調子で頑張っ  
ていきたい。

そして、その後は戦闘訓練が始まる。

ちよつとカツコよく言ってみただけど、簡単に言つと、エヴァちゃん  
やメアさんの魔法の的になるだけである。

というか、魔法ってすんごくカツコいい。

アレだぜ、アレ。

手から、ビームみたいな物をだすし、手から火をだしたり、氷を出  
したりと、まさに魔法！！って感じ。

出来る事なら、目から光線を出して欲しいんだけど、ビジュアル的  
にヤダと言われてしまいました。

絶対格好良いと思うんだけど、どつやら皆には理解されないようだ。

なお、マジに聞いたところ、やるつと思えば出来るらしい。

そこで、風呂に入って、夕飯を食って、就寝である。

うん、非常に充実している。

ただ最近、朝になると、左右に1人ずつ、女の人と同じ布団に入っているのをどうにかして欲しい。

どうやら、ローテンションを組んでいるらしく、一か月で二周する入ってきているという事が最近になってようやく分かった。

side マギ

徹とは、どういう人間なのか。

もし、聞かれたらオレは一体どう答えるのだろうか？

非常に魅力的な人間である事は確かである。

ありとあらゆる事に対して才を持ち、それに奢る事のなく、他人に対して誠実にあるうとするその姿は、人々を魅惑されてやまない。

疑い深いオレすらも奴に惹きつけられているのだから、その魅惑の力は相当な物であろう。

ただ、それが全てではない。

どういえば良いのだろうか？

奴が、人々を惹きつけるのは、奴が誠実だからだけではないし、ましてや才が原因という訳でもない。

いや、確かにそれも一端であるだろうが、それは本当に僅かではない。

器とでも言えば良いのだろうか？

酷く曖昧で、言葉に出来ないにもかかわらず、大きいと、敵わないと分かってしまう底知れぬナニカに酷く引き寄せられているのだ。

そんな徹だからこそ、皆を説得出来たのだろう。

初め、徹が「魔女狩りで捕まった人達を助けたい。」と言った時、正直言つて無理だと思った。

いや、徹であればなんとかすると思うが、リスクが大きすぎるのだ。

下手をすれば、この村を巻き込む可能性があるのだ。

確かに、村の皆も同じ立場に居たのだから、助けたいという気持ちはあるだろう。

だが、それ以上に、ようやく手に入れた平凡な生活を守りたいという気持ちの方が強いと思っていた。

村の皆が納得しなくては、流石に徹のその行動を容認する事は出来ないのだ。

だから、無理だと思った。

だが、奴は皆を説得してしまったのだ。

魔法でさえ、完璧に人の心を動かす事など出来ないのに、奴はそれを成し遂げてしまった。

オレは戦慄したよ。

そう、オレは畏れた。

奴を畏れたはずなのだが、そのくせして惹かれ続ける。

ほんと、奴は一体なんなんだ？

〈side エヴァンジェリン〉

女達の間で、『独占禁止法』が結ばれた。

なんの独占が禁止されたかなど、言わずとも分かるだろう？

まあ、アレだ。

欲求不満というか、いろいろと限界を迎えた様で、「もう良い！！襲う！！」となった。

まあ、私の気持ちも同じであるのだから、特に文句もない。

いささか、私だけでは無いというのが不満であるが、それは私だけでは無いので我慢である。

とりあえず、私達が魔法で、徹の眠りを深くする。

そして、徹が寝ている間に、子種を仕込むのだ。

ちなみに、初めは私とメアが美味しくいただいた。

意外と評判は良く、征服感が満たされる？のような事を言っていた。生理が遅れている人間がチラホラと出てきているので、既に赤ん坊がお腹の中にいる人もいるだろう。

私は吸血鬼なのだから、子など出来るはずもなく、というより処女すら再生してしまうので、毎回毎回大変なのだ。

メアは生理が来た様なので、子は出来ていないようだ。

その確認が済むと、いつものものに私は問うのだ。

「なあ、メア。

本当に吸血鬼になるつもりはないのか？」

と。

筋違いだという事は分かっている。

何せ、徹が不老だと知った時、私は初めて自分の身体に感謝したのだ。

卑怯にも、これで私が勝つたと、何も努力する事なく、ただ吸血鬼だという理由のみで、徹を手に入れられた事を心から喜んだのだ。

だが、それでも、後になって気付かされるのだ。

私は徹と共に居られる。

だが、メアは？

2人目の友達は、私のライバルは、何の落ち度がないというのに、ただ徹が不老不死だからという理由で徹と共に歩めないのだ。メアからしてみれば、コレほど悔しい事はないであろう。

「はあ、まったく。」

何度言ったら分かるんですか？？

何度言われても、私は吸血鬼になるつもりはありません。」

この断る理由が、『吸血鬼の様な化け物になりたくない』であったら、私はこう何度も問う事なく、直ぐに諦めていたであろう。

だが、違うのだ。

「エヴァちゃん。」

私は貴方に任せたくんです。

確かに、エヴァちゃんが言う様に不老不死になって、永遠に近い時を3人で共に過ごすのも良いかもしれませぬ。それは非常に、楽しいと思います。

でも、それじゃダメなんです。」

何度もされた説明だ。

「良いですか？



エヴァちゃんの、その相手も吸血鬼に出来るというのは魔法の一手なんです。

1人で居続ける事がない様にするための魔法の一手。

貴方は、もう徹様と共に居られるんでしょう？

だったら、その一手をわざわざ使う必要なんてないですよ。

その一手は禁じ手なんです。

あまり使いすぎると、世界中の人間が吸血鬼になってしまう可能性もあるんですから。」

分かっている。分かっているいは居るのだ。

もし、私が大切だからという理由で、誰かを吸血鬼にしたとしよう。だが、その誰かにも大切な人が居るワケで、その誰かも大切な人を吸血鬼にする。

その大切な人にも、別の大切な人がいて…。

結局、永遠と広がってしまうのだ。

それは、随分と初めの方から気付いていた。だからこそ、私は命じたのだ。

『私のモノになれ』と。

全てを捨て、私と共に永遠を生きると、命じたのだ。

「だったら、私のモノになれ、メア。」

「イヤです。」

「そもそも、私は徹様のモノですし。」

「だ、だったら、徹が頼めば。」

「徹様はそんな事を頼むようなお方じゃないですよ。」

「これは私の我儘なのだ。」

「分かっていは居るのだ。」

「ただ、どうしても納得が出来ないのだ。」

「私はお前とともに生きていきたいんだよ。」

「もし、子がメアに宿れば、もう話し合いの余地はないだろう。」

「子が出来れば、彼女は人間としてその子を育てようと思うはずだ。」

「そもそも、その子が不老不死でない可能性もあるにはあるのだが、それは限りなく0であろう。」

「というより、もし子が不老不死ならば、妊娠なんて出来ないであろう。」

「お腹の中で、子が大きくなる。」

「これも老いの中の1つなのだから。」

不老不死という物は、数を増やす事が困難だったり、特別な方法でなければ増えないため、世界中が不老不死で溢れないのだ。

もし、不老不死が簡単に不老不死の子を作る事が出来るのだったら、今頃は世界中不老不死だらけである。

だが、徹は普通の生物と同じ方法で子を成す事が出来る様なのだ。これは、徹は不老不死だが、その特性は遺伝しないと考えるべきであろう。

もしかしたら、彼の不老不死は私とは違うモノかも知れない。何ていうのだろうか？

そもそも不老不死は人間には不可能なのだ。

だから、不老不死になるには私の様に吸血鬼のような、違う存在になる必要がある。

それにも関わらず、徹は人間のまま不老不死になっている様な、そんな異質を感じる。

「私だって、エヴァちゃんと一緒にいたいという気持ちは確かにあります。

でも、これはケジメなんです。

私は私が思うように徹様を支えます。

エヴァちゃんや徹様から見れば一瞬かも知れません。

ですが、その一瞬を私は生涯を使って、支えていきたいのです。

あと、アレですよ。

例え不老不死で、化け物と呼ばれようとも、人間の私が友達で居続ける事が出来るっていう証明もしたいですね。」

照れたような笑みを浮かべながら言った、そのメアの言葉に、私は不覚にも嬉しくなってしまったのだった。

幕章 村の日常編 その3

side 徹

魔女狩り。

学校で教わった名前であり、そしてその処遇も聞かされた。

曰く、魔女狩りとは、なんにもしていない人が魔女だと疑われて火炙りにされるそう。

話を聞いて、まあ哀れには思ったが、それ以上に次のテストの方が気になっていた。

出るとするなら、穴埋めで『魔女狩り』と記述するぐらいだろう。

この先生は、なかなか厳しく漢字で書かなくちゃバツにされるから、魔の字だけはしっかりと覚えておこう何て、そんな事を考えていた。

あまりに軽い、『魔女狩り』という言葉。

実際にココに来て、殺されそうになり、認識が変わったと思ったが、それでも甘かった。

村の皆を説得する事は案外簡単だった。

何せ、皆も魔女狩りにあつて、その理不尽さを知っているから、救いたいという気持ちが強かったのだ。

後はもう、助けるだけである。

まあ、ぶつちやけマー君の魔法があれば何とかなると思っていたワケですよ。

ビバ・人任せ。

やっぱりオレの様な普通の人間には出来る事は少ないワケですよ。

まあ、魔女狩りの被害者を助けたいって言いだした責任もあるワケですし、オレも出来るだけの事はするつもりでいるけど、やっぱり限界があるんだよね。

そんな役立たずなオレだけど、まあ多少は命の危険って奴もあるわけですよ。

出来れば、やりたくないけど、やらないと、オレ自身が罪悪感で押しつぶされるので、ちょっと頑張るか！！って思ったんだよ。

その後はスイスイと進んだ。

情報収集をするとすぐに場所は分かった。

というか、町全体が魔女の火炙りという祭りがあると盛り上がって

いたので情報収集というほど大層なことにはやっていない。

あまり、時間がないようなので、マー君の認識阻害魔法を使って、二人で魔女達がいると言われた所に乗りに込んだんだ。

もう一度言おう。

オレの認識は非常に甘かったんだ。

地下に扉を開けると、ムワツとした臭いが漂っていた。

そして、そこでは男が己の欲望を満たしていたのだ。

女を縛り、衣類を引き裂き、無理やり欲望を満たす男…。

あまりに、むごい。

彼女達は、見せしめとして火炙りにされるのだ。

そんな彼女達が襲われている。

この空間では、女という存在が、ただ男の欲望を満たすためだけの存在になり果ててしまっているのだ。

彼女達は一切の抵抗をしていなかった。

ただ、何処を向いているか分からないその瞳が、あまりにも悲しすぎた…。

そして、次の女性を味わおうとする男の腕。

その男の首に手を回すオレ。

そして

キュッ

締め落とした。

オレが暮らしていた時代の日本というのは、平和だった。

少なくとも、オレの周りは平和だった。

そんな、平和ボケしたオレには、この空間はあまりにも異質で、悲しかった。

気付けば、女の人の瞳に光が戻っていた。

そして、オレを写すその瞳にあるのは、怯えと困惑

まあ、そりゃそうだろう。

なにせ、オレは今まで彼女を襲っていた存在と同じ『男』だ。しかも、いきなり人の首を絞めておとす様な人間なだから、その感情は至極当然であった。

数人は、『まだ』であった様で、しっかりと服を着ていたが、他の



数人は既に、終わった後であった。

もう少し、早く来れば、彼女達がこんな思いをしなくても済んだのかもしれない。

とは言っても、所詮それは結果論である。

頭の中は冷静なつもりでいた。

ただ、身体はどうやらそういうワケにはいかないようだ。

自分でも涙が溢れ出てきているのが分かる。

何による涙なのかは分からない。

悲しいのか、悔しいのか、何がなんだか分からなかったが涙だけが止めどなく溢れてきた。

「ごめんな。ごめんな。」

口からは涙声で聞きづらい謝罪ばかりが漏れた。

ああ、ダメだ。

情けない。というか中途半端に頭が冷静だから、すんごく恥ずかしい。

それを聞く彼女達の瞳には、やはり恐怖を抱いているのだ。

「……………ごめん。」

それだけ言い、オレは外へと逃げた。

ちなみに、気絶男と、マギを忘れずにしっかりと連れて来た。

とりあえず、後はエヴァとメアに任せるしかない。

女同士なんだから、オレが相手するよりもマシだろ。

side マギ

目の前では徹が子供の様に涙を流し、謝り続けていた。  
その様子は、年相応の物であった。

ただ、このように年相応の態度をとる理由という物が異質であった。  
そもそも、彼の存在自体が異質である。

徹の周りの空気だけが、この世界の物とは違う様な色を帯びているように見える。

通常、色という物は、別の色を過剰に加えれば、その加えた色になるであろう。

確かに、微妙に違いはあるだろうが、ほとんどは同じ色である。

だが、徹の場合は違うのだ。

世界という、過剰な色に染まることなく、奴は周りを染めて行くのだ。

やるつとすれば、奴はすぐにでも王になれるのではないか？

徹帝国…。

なかなか面白そうではあるな。

まあ、とにかく奴は異質であり、今も正直いって、何故謝っているのかが良く分からない。

言いたい事は分かるのだ。

確かに、オレ達がもう1日でも早くココに来れば、確かに彼女達はあの男に抱かれる事は無かっただろう。

だが、それは結果論である。

オレ達はオレ達の中で出来うる最善を尽くした結果がコレなのだ。

命を救えただけで十分であろう？

しかも、彼女達がここで暮らすつもりであったのなら、魔女狩りの被害にあわなくとも、後々あの男に抱かれているのだ。早い遅いかの差である。

というより、この世界で生活を送っているのなら、夫でもない男に抱かれるのはしょっちゅうである。

まず、初夜権という物がある。

これは、夫婦になった時、一番初めに女を抱くのは神父や、代表者で無くてはいけないという物である。

例外として、結構な額の金を払った人間は、初夜の権利を買い取る

事が出来るらしいが極少数である。

まあ、なんか処女が云々言っていた様な気がするが、結局のところ性欲発散をしたいだけであろう。

その次に、魔女狩りの裁判方法である。

魔女は、悪魔と契っているため、処女である女は魔女では無いという事らしい。

それを手っ取り早く調べるために、抱くのである。

まあ、これは良く省略される。

なにせ、有罪であればかなりの金銭が手に入るのだから、抱く事なく有罪にする場合が多々あるのだ。

しかも、わざわざこの時抱かずとも、火炙りの前に抱く事が出来るのだ。

なにせ、火炙りされる人間は処女ではないという決まりがあるため、抱くのだ。

今回、女性達が抱かれた原因はこれである。

確かに、可哀想とは思うが、これが普通なのだから仕方ないではないか。

誰もが、オレに同意するであろう。

数は力なのだ。

だからこそ、仕方ない。どうしようもない。

被害者である、女性達ですら諦め、受け入れている。

だが、徹だけは違った。

彼だけは違ったのだ。

諦めるでもなく、普通だと思つてもなく、受け入れるわけでもない。

彼は、真正面から常識と戦おうとしていた。

いや、いつだって彼は戦っていたのだ。

風呂に然り、衛生に然り…。

彼は、戦い続けた。

自分のためではなく、他人のために、戦い続けていたのだ。

事実、彼の影響を受けた者達が数多くいた。

もっとも良く変わったのは村に住む女性達の態度であろう。

常に、男よりも一歩引いて、絶対逆らう事など無かった女性達の意識が変わったのだ。

もう、その変わりようと言ったら、ちょっと不味いぐらいに。

どうやら、毎夜毎夜寝ている徹を襲っているとか…。

まあ、村の事を考えれば子供が多く出来るといふのは喜ばしい事で

あるし、徹との子だったら、とても良い子が生まれるであろう。

少々、徹が不憫の様な気がするが、女が襲われる場合の扱いと比べれば、ずっとましであろう。

何せ、襲われた女や神父に抱かれる女達の扱いは、性欲を満たす”道具”として扱われるのだから、ずっとましである。

しかも、これは彼女達なりの男に対する復讐という意味合いだって含まれているのだからな。

まあ、彼女達は気付いていないだろうが。

散々、泣きながら謝った徹は、最後に一度謝ると、オレを連れてへと出て行った。

後は、メアとエヴァに任せるらしい。

そして、徹は神父の気付け（って言うらしい）をする前にオレに

「コイツの、アレ

一生、起たない様にする魔法をかけてくれ。」

と言ってきた。

初めてオレは禁術を使った。

幕章 村の日常編 その4

side 徹

オレが不老って奴の証明はしっかりとされた。

何せ、30年経っても全く変わっていないままなんだよ。

ずっと、17歳ボディーなんだよ。

それでさ、160ちよいつていう身長から全く変わらんわけだわさ。

まあ、何が言いたいかというとだね、オレが村に来てからスグに何十人もの子供が生まれたわけだよ。

その時、13歳の子も妊娠しちゃってさ、あの時はめっちゃくちゃ焦った。

未来、というかオレの居た世界??

とにかく、前の居た場所だと女性の結婚って16歳からだったワケ  
って、未成熟な女性が妊娠すると身体を壊すからだと思っただよ。  
つまり、最低でも16になるまでは子供を身籠って欲しくないんだ

よ。

それで、ココでは13だと極普通。16で行き遅れだったさ…。

また改革宣言をだしました。

まあ、こちらは案外簡単だったよ。

前回のお風呂改革が効果絶大で病人の数が多大に減ったっていうのが評価されたんだと思う。

ちなみに、13歳の女の子は無事に可愛い女の子を出産しました。

そういえば、メアさんもその時15歳だったんだよね。

つまり、メアさんも16になる前に出産した事に…。

とりあえず、その後以降は大丈夫だと思う。

それでだね、今その子達は30弱になるワケですよ。

もうバンバンに背が抜かれて、しかもオレより大人っぽい感じになっちゃって…。

嬉しい様な悲しい様な複雑な気持ちです。

年頃の子供を持つ、親の気持ちって奴かな？

とりあえず、ココに居る皆が父親、母親として、子供たちを育てた。

この30年という間に色んな事を行った。



学校もどきを作り、字を書けるようにさせた。畑も多く耕し、家も多く作った。

魔女狩りの被害者達は救い続けたし、彼女を襲っていた神父達も起たない様にもし続けた。

魔女狩りの被害者達が逃げたつてばれると、この街が見つかるかもしれないから、幻術を使っていたらしいけど、魔法について詳しい事は良く分からなかった。

そう言えば、村人の数も滅茶苦茶増えた。

詳しくは数えていないけど、500人以上は住んでいるんじゃないかな？

それに伴って、食料の量とかも増えたけど、教会からちよるまかした金品や広げまくった畑のおかげで、結構余裕がある。

後、変わった所と言えば魔女狩りの勢いが30年の間で急速に衰え始めているのだ。

これが、自分達が間違っていたと気付いたからだったら良かったのだが、原因は違う。

被害者の人間達を片っ端から助けまくっている際、襲っていた人間を禁術で起たない様にさせまくっていたら、いつの間にか巷ちまたでは

「魔女狩りに参加するとイ〇ポになる。」

との噂が流れに流れ、事実神父達が起たなくなり、そんで起つようにお祈りをしている姿が恒例となっているため、急速に魔女狩りが衰え始めた。

…後の歴史の教科書がどうなるか、非常に興味が沸く。

まあ、そのおかげで段々と人々の考えも変わり始めているため、後数年もしたら村の外に出れる様になるだろう。

そんなこんなで、魔女狩りの脅威がなくなり、平凡ながらも幸せな生活を送り始める事が出来たワケだ。

それでだ。

そんな、豊かで幸せで大勢が暮らしている村に一つだけ問題があるみたいなのよ。

なんか、2人ほど不老の人間がいて、不気味とか怖いとかと言われているんだわ。

うん、オレとエヴァちゃんですね。

まあ、仕方ないっていえば仕方ない。

人数が少なければ、そりゃ説得も楽だし、仲間意識も強い。

30年前だったら、村の人間全員が家族みたいな感じだったが、流石に500人以上もいると、そういうワケにもいかない。

今はまだ20〜30人程の小さなグループだけど、もしこれが過激

な事をし始めたりしたら困る。

だから、そろそろだと思っんだ。

いやさ、流石に何百年生きる人間がさ、ずっと一か所に留まるワケにはいかないと思っんだよ。

小さい時から、コツコツと広げて行った村だから、愛着もあるし、仲の良い皆とも別れたくはない。

だけど、イヤ、だからこそ今別れる必要があるんだと思っ。

出会いもあれば、別れもある。

それは、生きているなら仕方ない事だろ？

ついでに、せっかく過去に来たんだから、色んな所を周ってみたいとも思っているんだよ。

もしかしたら、教科書に載るような偉人達と話が出来るかも知れないんだよ！？

そう思っつと、ちょっと楽しみじゃない？

side エヴァンジェリン

「っっていうワケで、エヴァちゃん。

村を出ようかと思っただけど、一緒に行かない？」

いつもの様に、徹の森林伐採の手伝いについて行くと、徹は言っの

だった。

かなり、凄い事を言っているにも関わらず、奴の口調にはその重みがなさ過ぎて、一瞬戸惑ってしまった。

「急にどうしたというのだ？」

何時かは来るとは思っていた。

奴という存在は、世界に多大な影響を与えるであろう。

事実、奴によつて魔女狩りが殆ど無くなったといつても良い様な状況になったのだ。

そんな徹を、世界が放っておくはずがないのだ。

「ええくとだね」

徹はゆっくりと言葉を選びながら、村の状況、自信の希望といった胸の内を吐き出していった。

そして、最後に締めくくった。

「もし、エヴァちゃんがココに残りたいっていうんだったら、オレはそれが出る様に尽力するよ。」

でも、もし良かったら、一緒に旅をしない？」

と。

その言葉が、どれ程嬉しく私が思ったか、お前は分かっているのか？

もう、ある意味結婚宣言だぞ。それは。

「ああ。」

耳まで熱い顔を隠すように、頷きながら言う。

全く、情けない事に大した返事が出来ないではないか。

思い起こせば、この言葉を引き出すのに30年間もかかった。

くっくくく。

初めは、2年ほどで奴を私のモノにするつもりだったのだが、30年もかかった。

しかも、私のモノではなく、友の様な、伴侶の様な、相棒の様な、微妙な関係で。

だが、悪くはない。

ここで過ごした30年も、この微妙な関係も、悪くはない。

「良かった。流石に1人だと寂しいしね…。」

それでさ、皆に内緒で明日の夜行こうか。」

「皆に内緒なのか？」

「うん、一応ね。」

やっぱり、不老っていう事で快く思っていない人間だっているからね。  
そんな人間を送り出すために、宴会とかやったら、確執残しちゃうでしょ？

おまけに、そういうの苦手だし。

だから、内緒で。」

「分かった。」

その話はこれで終わり、いつもの様な普通の会話へと移って行った。

徹の言う事は正しいであろう。  
確かに黙って出て行けば、確執もなく、村の平穏は保たれるであろう。

だが…。

メアだけだ。

メアだけには言うておく。

私のライバルであり、友…いや親友であるメアにだけは、別れを伝えなくてはならないと思うのだ。

## 幕章 村の日常編 エピソード

中世から、この森には、幻の村があるという。

この森に入っただけの子供が、唐突に行方不明になり、二日もしたら、様々な『お土産』と共にふらりと返ってくるというのだ。

近くの村では、かなり有名な事であり、10人居れば5〜6人の子供が経験しているというのだから、その割合は絶大であろう。

この不思議な現象は中世から続いているという。

つまり、行方不明になった子の親達も経験しているのだ。

中世では、病気になった子供たちを森に連れて行くと、忽然と姿をけし、そして元気になって帰ってきたという話もある。

ただ、隣人でも、どうしようもないと判断されたときだけは、親子と共に村に招待されるといふ。

そんな幻の村人達の事を、親しみを込め森の隣人と呼んでいた。

その隣人のおかげか、その森でどんなに迷子になっても、いつの間にか知っている道に出たり、野生の動物達も人間を襲った事はないらしい。

そして、幻の村へと迷い込むと、必ず昔話をしてくれるという。

昔々、大きな災害から大勢の人々を救ってくれた英雄がいました。

彼は、その身を使い、どんな災害からも村人達を守ってくれていたのです。

子供好きで、優しく、そして強い彼は、大勢に頼りにされていた。

ですが、災害が過ぎ去ると、村人の中に彼の大きすぎる力が怖くなる人達が出て来てしまいました。

それを知ると、彼は、自分と同じ様に怖がられる少女を連れて何処かに行ってしまったのです。

内緒で行ったので、彼等を見送る事が出来たのは、1人の女性のみでした。

それを知った村の人達は嘆きました。

原因となった人達を追い出そうともしました。

ですが、彼はそんな事を望んでいない事も皆知っていたのです。

皆が争いにならない様に、彼は出て行ったのです。

争いをするワケにはいきませんでした。



ですが、どうしても村人は彼に対してお礼と謝罪をしたいと思うのでした。

めでたしめでたし。

そんな、昔話である。

これを聞いた子供は、英雄が可哀想だと思い、そして大人になるにつれて思うのだ。

この話に出てくる村人というのは、隣人達の事ではないかと。

なんだかんだで、旅に出る事になった。

30年も前の話だけど、お爺さんが言っていた事

『限界を無くす』っていう意味がなんとなく分かったんだ。

今さらだけどさ、オレって30年間毎日畑仕事やら、木を切りまくって森林伐採とかをしていたワケよ。

でも、フンツ！ってやったら、上着が破れるとか、腕がムキムキにもならず、むしろココに来た時と比べても全然変化は無かったんだ。見た目だけは。

村にいる間は、全てが日常で毎日やってきた事だから全く気付かなかったただけどさ、身体能力はかなりって言っつていい程伸びていたんだ。

考えてみれば、畑仕事とか、木を切って運ぶ仕事って結構な重労働でしょ？

そんな事をやっていれば、体力も力も凄い事になるわけだよ。

今さら気付いたよ。

人間にはどうしても越えられない壁って奴があるでしょ？  
オレも、肘を鍛えすぎて、ちょっと悪くしていたんだよ。

なんか、骨が筋肉に負けた？

とりあえず、そんな感じで肘を悪くしてたんだ。

さらに、現実的ではないかもしれないけど、筋肉を付け過ぎた事によって代謝が高くなりすぎる事もありうると思うんだ。  
つまり、ずっと全力疾走しているのと変わらないような燃費になる可能性もあるって事。

でも、今のオレはそんな所は一切ない。

普通畑仕事や、木を切るといった仕事は腰に大きな負担をかけていると思うんだけど、いかんせんココに来る前よりよっぽど楽なのである。

これはあくまで予測だけど、どうやら限界を無くすっていうのには筋肉の限界を無くすだけではなく、骨や、栄養吸収効率、燃費、その他諸々の全ての限界を無くしているように思える。

つまり、オレは強靭な肉体を手に入れる事が出来るという事だ！！

そして…。

なんなんだろ？

うん、凄い事なんだと思うよ。

人間の身体の不自由さっていつの？

そういつた限界っていつのは、格闘技をやっていると何度か直面す

るんだよ。

オレも接骨院に通院していた事があるし、その苦勞って奴も、まあ人並みに分かっているとは思う。

けどさ、別にこれって必要無くない？

プロの運動選手なんかはさ、確かに必要だと思うよ。

でもさ、そういうので活躍している人間って5%以下じゃない？普通に生活するぶんには必要ないっしょ？

昔はさ、めちやくちや筋肉を付けたいつて思っていた。

友達は、筋肉が付きやすい体質でさ、オレと同じ量の筋トレしかしてないのにオレよりも力があつて羨ましかったんだ。

でもさ、そんなのが無くても普通に生きて生けるんだよね。

確かに、畑仕事で腰痛にならなかつたり、森の伐採は多分普通の人と比べたら結構楽だったのかもしれない。

そこを考えればとてつもないプラスなのかもしれないけど、なんか違つよね。

なんていうんだろ。

今さらだけどさ、肉体労働以外に使い道くない？

しかも、この時代の肉体労働にスポーツ選手みたいな道ってなさそうだし、一番この力が使えるのつて兵とかでしょ。

ちよつと、また人を殺めるのはやめておきたいというか、やりたく

ないし…。

確かに、普通の生活であれば便利な力かもしれないけど、ちょっとデカすぎじゃない？この力って。

しかも、あれば便利っていうだけで、普通に生活している上ではあまり使い道がある様には思えないし…。

というか、もう銃みたいな奴もあるんだから、ソレくらって一発で死んじゃうつしよ。

もしかしたら、『皮膚の固さの限界なし』とかのおかげで銃弾を防御たりするかもしれないけど、そこまで不思議人間になりたいとは思えんし、そもそも皮膚の固さってどうやってきたえるよ？

あれか、一人で自分を叩いたりするのか？

傍目から見たら、危険人物すぎるだろ。

新しい世界に目覚めちゃったりして…。

『強靱な肉体』って聞くと、なんか凄い超人で、悪をやっつけるヒーローみたいなイメージあるけどさ、いくら力があつたとしてもさ無理でしょ、1人じゃ何もできないよね。

やっつける悪を探すのにも一苦労しそうだし。

多分、不老なオレ達は一か所に留まる事は出来ないから、多分ブラ

ブラと旅をし続ける事になるんだろう。

それには、確かにこの能力は便利なのかもしれないけど、別に無くても構わないんじゃない？

というかさ、限界を無くすだけだと、無くしちゃいけない限界も無くしちゃうよね？

足の臭いの限界が無くなったりしたら悲惨すぎる…。

靴を脱げば、敵は居なくなる。

半径2キロに人はおらず、500メートル以内に居る人間は全て気絶している。

山賊とかにあった時の決め台詞は

『オレに靴を脱がせる気か？』で決定だ。

まさに無敵。

彼が戦場で駆け回れば一騎当千いや、一騎当万の働きを起こす。  
ただし裸足に限る)

彼にやられた者達は口をそろえて言うのだ。

『奴に靴を脱がせたらならん。地獄をみるぞ。』と。

「流石に、ふざけ過ぎだな。」

うん、ふざけ過ぎている。

ていうか、非常にイヤである。  
ちよっと、勘弁願いたい。

うん、こつやって考えてみると、この能力ってやつかいじゃない？

あまりにも抽象的でよく分からんし、さらに普通に生きて行く上で必要かどうか不明な能力なのだ。

確かに、兵や運動選手みたいな人間にとってはコレほど欲しい能力はないだろう。

でも、ぶつちやけオレには必要無い。

確かに便利かもしれんが、まあその程度だ。

そう言えば、今ん所のオレの力ってどの位なんだろう？

とりあえず、持っている石を目の前にある木に投げつけてみる。

石は木にめり込んだ…。

これは危ない。

というか影になって気付かなかったんだけど、人が近くにいたらしく、大慌てで逃げてしまった。

非常に悪い事をしたと思っている。

というか、運が悪かったら死んでいた可能性もあるのだ…。

そう考えると、血が引いて行く。

謝ろうにも、彼等は何処かに行ってしまったし…。

これからは気を付けないといけないな…。

うじうじと悩んでも仕方ないという事は分かっているけど…。

仕方ない事なのかもしれないけど。

それでも、人をまた殺しそうになったという事実はオレに重くのかかった。



「それじゃ〜エヴァちゃん、罨の所を見てくるね」

反省を終え、罨の所へ行く事にした。

あの時代とは違って、保存食なんて便利な物はそう多くはないため、基本は現地調達なのだ。

「うむ、頼んだぞ。」

最近の飯は、ウサギやキツネ、たまにクマといった野生動物と適当な果実である。

雑草とかも適当に食べようかと思ったんだけど、毒物である可能性もあるため断念。

というか、健康面で考えると非常に問題有りなのかもしれないけど、腹は膨れているので気にしない事にした。

そんなこんなで、罨を仕掛けた所に行くと、かなりの大物がかかっていた。

木から片足を取られ、ブラインと引っかかっている男性…。

流石に食うワケにはいかない。

結構森の奥に仕掛けたので、人間がかかるとは思わなかった…。とりあえず、罨をとりあげてあげる。

人を罫にかける気はなかったとはいっても、やはり非はこちらにある。

謝った所、彼は心が広いのだろう。スグに許してくれた。

お肉が手に入らなかったのは残念だが、まあ仕方ない。

あの男の人が大きな怪我をしなかっただけ、運が良かったとおこつておこつて。

他の場所も周って見たけど残念ながら全滅。

ただ、幸い人間がかかっているという事は無かったので、そのまま放置して、明日になったら又見る事にした。

ちよつと落ち込みながらエヴァちゃんの元へと戻った。

「どうだったんだ？」

「残念ながら全滅。

とりあえず、適当な実を持ってきたから、これと焼いた干し肉を食べようか。」

出来れば干し肉は保存用として使いたくは無かったんだけど、仕方ない。

バンバン肉を焼いて、食べていく。

「うん、やっぱり干し肉よりも生肉を焼いた方がオレは好きだな。」

「仕方がないだろ？」

こうやって腹が膨れるだけで幸せだぞ。」

「確かに、そりゃそうだけど、あの肉汁がジユワって出る瞬間の事を考えると……。」

あれは、本当にたまらない。

確かに、野生の動物だから、筋張っているけどやっぱり上手いんだよ。

それと比べると、干し肉ってちょっと味気ないんだよな。

贅沢っていえば贅沢かもしれないんだけど、やっぱり美味しいもの食べたいじゃん。

ちなみに味付けは塩である。

コシヨウも欲しかったんだが、高すぎる。

もう、ふざけんなよって言うぐらい高い。

あれだぜ、コシヨウと金って殆ど同じぐらいなんだぜ……!

つまり、コシヨウ1g買ったら、金1g払わないといけないわけ。

現代っ子なめんな……!

そんな高いコシヨウ絶対買わん……!

ただな、塩だけっていうのも飽き始めて来たんだよな。

もう30年以上ほとんどが塩だったんだぜ…。

もう、我儘言っただけよ？

というか、そうやって考えてみると日本って凄く恵まれていたんだと思う。

料理のサシスセソなんて言えるんだぜ？

コッチなんて殆どが塩だったというのに。

特に醤油と味噌。

この二つは本当に凄い。

後、米も食いたいな。

白米に味噌汁、沢庵食って…。

そういえば魚も最近食ってない。

生魚食うって言うたら、絶対エヴァちゃんドン引きだと思っ。

もしイカとかタコも食うって言うたら、あのお風呂事件と同じ様になるんじゃないかな？

世界の色々な食べ物と文化を見て回るのも良いかもしれないな…。

「ちて、ちてそうさまでした。」

それじゃ、エヴァちゃんお風呂の準備お願いしていい？」

「ああ、任せろ。」

とりあえず大鍋と出して、それを火の上に固定。

そこで、後は、エヴァちゃんの魔法で、氷を鍋の中一杯に入れて完成。

うん、魔法って便利だ。

というか、旅先でお風呂に入れない一番の原因って水だと思うわけよ。

それが、魔法でバンバン出せるっていうのは非常に助かる。

確かに大鍋を運ぶのはかさばるけど、まあそんなに重いワケでもないので大した労力ではない。

段々と熱を持ち、氷は水に、そして湯へとなっていく。

そこで、丁度いい温度になった後、いつも通り、エヴァちゃんが入った。

「ん、やっぱり気持ちいいな。」

エヴァちゃんの後頭部に向かって話しかける。

もう、お風呂に入る時は、エヴァちゃんは膝の上らしい。

「しっかしアレだよな。」

アレだけ歩いたっていうのに、オレ達は殆ど疲れていないし、足も特別はったりしないんだから、不思議だよな。」

「何を今さら言ってるんだ？」

「うーん、確かに今さらかもしれないけどさ、改めて考えるとねいろいろな責任があるなって。」

「責任だと？」

「そつ、責任。」

格闘技をやっている時だつてそうだった。それほど強いつてワケでもないのに、拳だけで人を殺せるような身体で、それに伴う責任があった。

人の身体を簡単に壊せる凶器だった。それ以上になつたんだから、責任もそれ以上になるっていうのは当たり前である。

「まっ、先生からの受け売りなんだけどね。」  
さて

「そろそろ出るか？」

あまり入りすぎているとのぼせちゃうし。

そういえば、前オレがのぼせちゃった時、皆に死ぬんじゃないかって本気で心配されたのも良い思い出だ。

「お前は、一体…。」

ん？

どうしたんだ？

え〜と、そろそろ（お風呂から）出ようかって言ったんだよな。そんで、エヴァちゃんは何か凄く驚いた表情でさっきの言葉を言った…。

なんか、よく分からんけど、なんか勘違いしてるんだろうな。何と勘違いしたんだろ？

「お風呂からだよ。」

うん、分かってくれたようだ。

「よし、それじゃ出ようか。」

ほら、エヴァちゃんが出てくれないとオレが出れないよ。」

「ああ、分かった。」

エヴァちゃんが退き、ようやくオレも動けるようになった。

そして、オレもお風呂から出ると、エヴァちゃんがいつもの様に待ち構えており、そして言うのだ。

「早く、私を拭かないか。」

風邪になるぞ?」

微妙すぎる脅し文句を。



第三章 世界放浪編 その3

裏

Side 狩人

オレの斜め前にはマントを羽織った悪がいた。  
確かに彼女達は上手く誤魔化していたと言えるだろう。

その幼い身体、そして上手く自分を隠す謎の技術。

そう、確かにそれは素晴らしい物であった。

だが、いかんせん匂いまでは誤魔化せていない。

悪が悪である故に感じる事の出来る、匂い。

そして、第六感が告げる。

彼女は、人を喰らう吸血鬼バケモノだと。

隣にいる男が次の獲物だろうか？

それとも、バケモノへと魂を売った愚か者だろうか？

前者だとしたら哀れであるが、どちらにしろもう殺すしか道はない。

彼が哀れな子羊だとしても、吸血鬼が生きたまま連れてくるのだ。既に、死徒になっているとしか思えないからである。

ただ、2人して日光の下を歩いている様子や、男の方から感じる違和感がない様子から、その可能性は限りなく0であると考えられる。そこから導き出される答えは1つだけ。

彼は、世界中の人を裏切った罪人であるという事だ。

彼女の幼い顔のせいで鈍る決心を鼓舞し続ける。

吸血鬼は、殺さなくてはならない存在なのだ。生まれた時から悪とされる存在。

と。

そこに自分の思考を挟む余地はない。いや、あつてはいけない。

そもそも、吸血鬼という存在は死途だろうが、真祖だろうが、自分から進んでなるといふ事象は殆どない。

勿論、不老不死を求めて自ら進んで吸血鬼になる者もいるだろうが、あまり可能性は高いとは思えない。

とはいえども、吸血鬼は滅ぼさなくてはいけない悪であるのだ。

例え、無理やり吸血鬼にされたとしても。

人の生き血を吐きそうになりながらも、己が生きるためと涙を流しながら飲んでいたとしても。

オレは滅ぼさなくてはならないのだ。

吸血鬼を滅ぼさなくてはいけない理由は、不老不死だからでも、その強大な力でもない。

答えは、その繁殖能力にある。

その繁殖方法が、吸血鬼同士による性的接触によるものであれば、まだ救いはあったのかもしれない。

それであれば、共存も出来たであろう。

吸血鬼は、人間から血を貰う代わりに、吸血鬼は人間には出来ない力仕事をする。

確かに、吸血鬼の方が人間より力はあるが、人間の血がなければ生きていけないので、人間を傷つける様な事はしないでであろう。

ただ、そうではないのだ。

性的接触などではなく、彼等は人間に噛みつく事によって相手を吸血鬼へとしてしまうのだ。

たった1人しか吸血鬼がいなくても、その食事だけで吸血鬼が増えてしまうのだ。

吸血鬼が毎日1人ずつ、血をすすっていけば

1人が2人に。

2人が4人に。

4人が8人に。

と増えて行き、10日も経てば、オレが住んでいた村の全員が吸血鬼になってしまう。

そうやって増えて続けて行くとすれば、1年も経たないうちに人間は全て吸血鬼へとなくなってしまつてしまつてあろう。

故にオレは滅ぼさなくてはならないのだ。

それは勿論、人類のためでもあるが、吸血鬼のためでもある。

思い出すのは、吸血鬼の少女。

オレは泣きながら彼女の胸に杭を打った。

彼女もまた、泣きながら笑みを浮かべていた。

そして

頭を振り、全てを追い出した。

納得するための自己弁護など、後で幾らでも出来るのだ。

いま必要とされるのは、効率良く彼女達を殺す冷めた思考である。

現在の2人は休息をとっている。

そろそろ日が落ちる。

今日はまだ満月から程遠いから、彼女の力も全開というわけではないであろう。

ただ、夜は彼女の時間故、攻め込むわけにもいかない。

出来る事なら日が昇っている時に、大人数で不意打ちをすれば、何とかなるであろう。

男は、俯き手で石を弄びながら地面を見続けており、吸血鬼は少しつまらなそうに、男の様子を眺めていた。

そして、男は顔に小さな笑みを浮かべ。

「流石に、ふざけ過ぎだな。」

小さく呟くのであった。

体中の血が一気に冷める。

オレが見張っている間、彼はずっと地面を見続けていただけだったにも関わらず、オレを見つけたというのだ。

すぐに逃げ、仲間の元へ駆けようとした瞬間。

ドスッ

オレのすぐ傍の木に石が投げられたのだ。

当たったとしたら、死んでもおかしくない様な威力の物が。

もう、なりふり構っている余裕などなく、少しでも彼から離れられ

る様、這いつくばる様に逃げる。

そして、唐突に味会つ浮遊感。

何が何だか分からないまま、オレは逆さ釣りにされたのであった。

### 第三章 世界放浪編 その4

裏

Side 狩人

完全にオレの負けだった。

あの少年は、オレをただ追っ払ったのではなく、予め用意していた罠へと導くために石を投げたのだ。

普通こっちはいかない。

当たり前である。

いくら、ある程度進路を予想できたとしても、こんなに上手く行く筈はないだろう。

だが、あの少年はそれをやってのけてみせた。

彼が罠を仕掛ける所を見たにもかかわらず、オレは見事に引っかかってしまった。

簡単に引っかかった理由の一つに、その罠が原始的で単純だったと  
いうのもある。

地面を見れば気付く様な、一切の魔法を使わない原始的な罠に、自分  
が掛ると思わず軽視していたのだ。

オレが軽視するというのも、彼の計画の一部だったのである。

そして、オレが逃げようとするよりも早く、彼はオレの所へとやってくるのだった。

「うわっ、大丈夫ですか!？」

そんな、白々しい演技をしながら。

この後は、何が起こるだろうか？

とりあえず、オレの血が奪われるというのは決定事項であろう。

先ほどの少女が死徒であるのだったら、血を吸われたとしても、オレは干からびて死ぬか、死徒になるだけですむ。

だが、もし彼女が真祖だというのなら、オレは操り人形へとなり、そして…。

オレだけが死ぬのだったら、まだ良い。

だが、オレのせいで仲間達を危険にさらしたくは無かった。

とはいえども、今のオレに出来ることなど何も無いというのも事実。舌でも噛み切ってやろうかと思っただが、そんな事しても死ねないので却下。

手持ちのナイフや、杖を出す事も考えたが、彼がソレを許すとは思えなかった。

コレから行われるであろう事を考える。



とりあえず、身につけているナイフや杖を奪い、そして縄で縛る、又は骨を折るなどして身体の自由を奪い、そして吸血鬼へと献上する。

そして、彼女が死徒であった場合は、まあ血を吸われ続け失血死、又は死徒化。

真祖であった場合は、同じ様に血を吸われれば失血死、悪ければ死徒となり操られ仲間達を襲撃。

その後は、真祖の食料として生かされ、血がなくなったら捨てらる。

まあ、そんな所であろう。

そして、オレがやらなければいけない事と言えば、何処かで隙をついて逃げる。

それが不可能であれば、操り人形になる前に死ぬ事。

僅かな隙だとしても、見逃す事がない様、彼の観察をする。

一見すると、隙だらけである。

何処にでも居そうな幼い異人にしか見えない。

だが、それが逆に不気味であった。

オレの思考を、行動を、感情すらも読み、畏へとかけた男が、素人の様に近付いて来るのだ。

その動作の一つ一つに目が離す事が出来ず、ゆっくりと伸びてくる手に、オレは身体を強張らせた。

「本当に、すみませんでした。」

目の前で、頭を下げる少年にオレは困惑する事しか出来ないでいた。彼はオレの持つ武器を取るワケでもなく、拘束する事すらせずに畏を解除し、謝り続けているのだ。一体、これは何の策略だろうか？

もし、オレを困惑させる事が目的ならば、それは十分に達せられているだろうが、わざわざオレを困惑させる意図もあるまい。

全てはオレの勘違いで、偶然畏にかかった？

いや、それこそあるまい。

「ああ、別に気にする事はない。」

「そうは言っても…。」

本当に申し訳なさそうな顔で彼は謝っているのだ。こちらとしても、反応に困ってしまう。

「足元を確認しなかったこちら側の落ち度だ。気にしないでくれ。」

会話としては間違っていない筈なんだが、間抜けな発言をしているようにしか思えない。

だが、彼からこの三文芝居を始めたので、間違っではないだろう。

「そう言ってくれれば助かります。」

「それは良かった。」

ではオレは、そろそろと帰るとするよ。」

そう言い、彼から離れようとする。

「ちょっと待って下さい。」

コレが落ちていたんですけど、貴方のですか？」

そう言う彼の手にはオレの杖とナイフが握られており。

「なっ。」

「やっぱりそうだったんですね。」

夜の森は危ないですから、しっかりと持っていないとダメですよ。

特に今夜なんか真っ暗ですからね。」

「あっ、ああ、ありがとう。」

震えそうになる手で彼から杖とナイフを受け取った。

命の危険など何度もあった。

異形な者に襲われた事だった何度もあった。

だが、そんなモノよりも笑顔でオレを見ている、この少年の方がずっとオレは怖ろしく感じた。

吸い込まれそうな漆黒のその眼には、情けない程に顔を歪めたオレが映っていた。

〈side エヴァンジェリン〉

徹と共に風呂へと入る。

毎日共に入り、そして毎日徹の膝の上に座っているというのに、奴のモノが反応した事は一度としてない。

最近では、なるべく密着するようにと彼の身体を背もたれにしたり、彼と向き合って座り、抱きついたとしているのに一切反応がないとはどういう事なのだ！？

もう、こうなったらスリスリペロペロ作戦しかないのか！？

だが、それをやって反応がなかったとしたら、女としてのプライドも粉々になるだろうし、徹からは痴女という不名誉な認識をされてしまうかもしれない。

そんな私の葛藤など知るよしもない徹は足を身体を伸ばしと風呂を満喫していた。

「しっかしアレだよな。」

アレだけ歩いたっていうのに、オレ達は殆ど疲れていないし、足も特別はったりしないんだから、不思議だよな。」

ゆっくりと彼は漏らした。

「何を今さら言ってるんだ？」

何十年間と付き合ってきた私達の異常に対する発言。それを今さら不思議と言うのだ。

「うーん、確かに今さらかもしれないけどさ、改めて考えるとねいろいろな責任があるなって。」

「責任だと？」

「そつ、責任。」

罨を見回っていた時に何かあったのだろうか？

その言葉は、いつもの彼とは雰囲気違っていた。

「まっ、先生からの受け売りなんだけどね。」

彼は珍しく昔の事に触れる様な発言をしてきた。

いや、珍しいというより、30年近く共にいて初めての発言だった。

『その先生とは？』

もっと、彼の事を知りたかったが、私が問いかけるよりも先に

「そろそろ出るか？」

言った瞬間、何人もの叫び声が僅かに聞こえたのだ。

どうやら、その叫び声の主達は異常なほどに混乱を起こしており、時折『吸血鬼』や『魔法』、『杖』といった単語が混ざっていた。

「お前は、一体…。」

何をしたんだ？

どうして分かったのだ？

聞きたい事は山ほどあったが、困ったような笑みを浮かべた彼を見て初めて出会った時の事を思い出した。

たった一人で教会に喧嘩を売り、そして私達を救った策略を。そして、あの時感じた畏れにも似た何かが久しぶりに私の中を渦巻いた。

だが、昔とは違った。

あの頃は、ただ恐れしかなかったが、今ではそれ以外の物も共に渦巻いていたのだ。

それは信頼であり、頼もしさでもあった。

どうだ、私の相棒は凄いであろう。

ちょっと自慢でもあり、ちょっとした嫉妬も感じていた。

そんな私の気持ちに気付いているのか、いないのか。

私には分からなかったが、彼は優しく笑みを浮かべながら

「お風呂からだよ。」

そうやって誤魔化すのであった。

まあ、オレだって色々と覚悟はしていたワケだよ。  
うん。

オレが原因で歴史が変わるかも知れないって。

その想像通り、歴史はオレの知っている物から外れてた。  
大きな流れは変わらなかつたけど、確かに外れた。

そのせいで、不幸になった人も、逆に幸運になった人も大勢いると  
思う。

とは言っても、まあ人生つてのはそんな感じだから仕方ないちゃ仕  
方ない。

だってさ、人が何千人も死んだ大地震の原因が、10年前にそこを  
歩いた振動が原因だ！！

とか言われても仕方ないんだよ。

歴史を変えたっていう自覚はあるんだけど、あまり歴史を知らない  
から、オレは罪悪感にまみれるっていう事態にならずに済んだんだ  
と思う。

同じ様に、歴史を知っているのに救えなかつた命に関しても、あま  
り考えずに済んだ。

けれど、それは『知らなかつた』からこそ、そんな考えでいられた  
のだ。



「はっははは…。」

これは、流石に…。」

オレの目の前には麻帆良学園なるものが広がっていた。

ちなみに、100年ぐらい経ったら、オレの親父とお袋が、2歳になるオレを連れて引越してくるはずだったのだが、学園内に引越して無理だよね？

ていうか、多分あの辺が家っていう所には、なんか滅茶苦茶でつかい木があります…。」

こりゃ、シヨックがデカイ。うん。

とつか、今さらだけどココの世界でオレって生まれるのかな？

考えない事にしておこ。

「さて、エヴァちゃん。

随分と変わっちゃったけど、ココがオレの故郷だ。

うん、本当にめちゃくちゃ変わっちゃったもんで紹介とかは出来ないから勘弁ね。」

「ふむ。

良い所ではないか。

どうして、100年近くも来る事を渋っていたのだ？」

「そりゃ、内緒。」

さて、コレからどうする？

100年もこの国に居たんだ。

そろそろ、別の所に行く？」

まあ、オレとしては故郷だから何十年居ても苦じゃないから、幾ら居ても良いんだけど。

そういえば、この国で戦争が起こるんだったよな？。

たしか、第二次世界大戦。

そこで、どこだっけ？

ひ、ひ…??。

いかん、思いだせない。

まあ、『ひ』何とかに滅茶苦茶凄い爆弾が落とされて云々って言われ続けた覚えがある…。

まあ、400年以上も昔の話を、ここまで覚えていて言う事はソレだけインパクトがある事だったんだろうな…。

もっとインパクトがあったのは、親父が酔っ払って口紅を塗った姿。コレは、400年経った今も鮮明に思い出せるのだ。思い出したく

もないのに…。

ん???

…第二次???

名前だけを考えるなら、2回目の世界で行われた戦争って事だよな？

1回目は？

ちょっと待て、思いだせ。

オレの時代に、戦争はなかった。

うん、まあ世界ではあったかもしれないけど、オレの周りは平和だった。

少なくとも、戦後すぐという雰囲気ではなかった。

そっやって考えると、50年、遅くても70年。

そんな短い期間に2度も世界大戦があるっていう事だよな？

うわぁ、思いだしておいて良かったよな、悪かったよな。

とはいっても、オレ1人じゃ何もできないだろうし…。

心苦しいけど、知っているだけで、オレには一切の力がないんだよな。

うん、エヴァちゃんと二人で何処か誰もいない様な所に逃げよ。  
きつと、滅茶苦茶高い山の上とかだったら巻き込まれないよね？  
ということだ

「よし、なるったけ早くこの国から出るぞ。」

「はぁ、貴様はいつも唐突だな…。」

それで？今回はどうしたんだ？」

呆れた様な顔で見られるオレ…。

オレとしては生きるために必死になっているんだけど、エヴァちゃんからしてみれば、何かいきなり慌てている変な人間なんだから仕方ないっちゃ仕方ないんだけど…。

何て言うの？

反抗期を迎えた娘を持つお父さんの心境って言うか。とりあえず、

その目はちよつと辛い物が…。

とりあえず、説得もしたさ。

多分、近いうち（多分50〜70年以内）に戦争が起きるかる。きつと、その戦争は（名前に）世界を舞台にやるような戦争。恐らく、2回もある。

説得力が皆無なのは分かっているさ。

オレだって、こんな事を大真面目に言っている人が居たら、ぶつちやけ引くよ。

それで、もしその人が『実は、未来人なんだ』とか言ってきたら、とりあえず精神科をお勧めするに違いない。

流石に、精神科を進められるワケにはいかない。

エヴァちゃんに、優しい顔で精神科を進められたら、きつと泣く。

というワケで、未来人発言はやめておこう。

「そんなワケで何処かに逃げようかと思っただけど、良い所知ってる?」

「世界規模で起こる戦争に巻き込まれそうにもない所。つまり、侵略するような価値が無い、又は誰も知らない様な所に行けば良いのだな?」

「うん、それが理想だね。」

侵略的価値がない。

それを考えれば、小さな無人島に隠れ住むだけでも十分かもしれない。

ただなあ、すごい爆弾の実験とか、それを使った見せしめとかがないとも限らないし…。

まあ、もしそうになったら、運が悪かったって諦めるしかないんだよな…。

「そうだな…。」

非常に悪そうな顔でニタリと笑うエヴァちゃん。

その笑みは10才ボディーには合っていない。

ただ、それを言うと泣きそうになるので、ぐっと堪える。

「魔法世界なんてどうだ？」

### 第三章 世界放浪編 その5

表（後書き）

一気に時代が進みました。

いや、本当は色々とおったんですよ。

中世の血まみれ婦人と対決したり、ドラキュラハンターと仲良くなったり、寝相で盗賊を倒したり、爪と指の間を蚊に刺されてしまったりと本当に色々とおったんです。

うん、多分。きっと、恐らく…。

とりあえず、次では再び時代が進み、ナギが登場する予定です。

第三章 世界放浪編 その6

裏

side ナギ

「うわああああ、ヘルプ、マジでヘルプミー。

って、あぶつ、かすつたああああー！」

「はあ、つたく。

お前と私が本気を出せば、こんな奴等、即効倒せるだろうに……。」

「いやいやいや、無理だからね。

というか、そんな挑発しちやダメだって……！」

そんな、声と共に、様々な種類の魔法と、木々を倒す音が森の中に響き渡っていやがった。

「うおっ、何かヤバそうだな。

さっさと、行くぜ。」

「いや、ナギ



ちよつと、待…。

「つたく、仕方ないな。」

慌てて移動、そして森の中に入ろうとしたが、その前に

「「うおっ」「

追われているだろうと思われる坊主と、それに抱えられている少女に鉢合わせになった。

「危ないから、早く逃げた方が良いよ!!」

言いながら、坊主は隣を駆け抜けて行く。

それとほぼ同時に、森の中から現れる何十人もの男達。

「はあ、たかがガキ2人をそんな大人数で追うとは、なさけねえな。」

「確かに、お前の意見には賛同するが、オレ達の事を待ってくれても良かったんじゃないか？」

「おっ、詠春。」

「早かったな。」

「早かったな〜じゃない!!」

おまえは「

「まあまあ、お説教はこいつ等をやった後ということぞ。」

全く、詠春は良い奴なんだけど、堅てえんだよな。

「逃げるなよ？」

まあ、私と詠春にかかれば、こんな雑魚共にそこまで苦勞する筈もなく、ぱっぱつと全員倒せた。

そんで、詠春から説教を受けながら戻ってみると

「おお、ようやっと帰ってきたようじゃの。」

「ふふふ、おかえりなさい。」

何故か、ガキ2人を混ぜて、飯を食っているアルとお師匠…。

そして、鉄板の上には、肉が何枚も…。

久しぶりの肉は上手かった。

「まだまだ、あるから、バンバン食べちゃって。」

黒髪の少年が持っていた袋から、肉をだし、鉄板へと乗せて行く。

「おう、ありがとうな。」

「うーん、こんな肉食べた事がないんだが、何の肉なんだ？」

そんな詠春の質問に、無表情だった金髪の少女がなんか黒い笑みを浮かべた。

うん、初めての变化だから少し驚いた。

そして、ゆっくりと

「ドラゴンだ。」

「ブフッ」

「うおっ、汚ねえぞ、詠春！……！」

「うわっ、詠春さん。」

ほら、飲み物。」

「ああ、すまない。」

言いながら、飲み物を渡す少年。  
うん、少年は良い奴っぽい。

「ちなみに、それは人食い草の樹液な。」

「ゴブツ」

「だから、詠春！！！」

肉にかかるだろうが！！！！」

そんで、金髪の少女は苛めっ子っぽいな。

「ねえ、エヴァちゃん。

もしかして、コレってあまり人気がない？」

「いや、旨いと思うが、アレが普通の反応だと思うぞ。」

そんなこんなで、色々と上手いもん（詠春曰くゲテモノ料理）を味わいながら、自己紹介をしていく。

どうやら2人は徹とエヴァンジェリンというらしい。  
名前と容姿的に見て、徹はたぶん詠春と同じ日本の人だろう。

「よっし、それじゃ私の番だ。」

「サウザンドマスターのナギ・スプリングフィールドとは、私の事だ。」

「あれ？」

「反応がいまいちなんだが…。」

「ちなみに紅い翼アラルフラのリーダーかつ紅一点…なんだけど…。  
知らない？」

「え、ええ、知ってますよ。」

「荒らぶる薔薇ですよね。いや、そんな凄い人達に助けて

へっ？何エヴァちゃん？

「荒らぶる薔薇じゃないの？」

「荒れる薔薇？それも違っつて？」

「ナギ。子供に気を使わせてどっつするんじゃ？」

「へん。良いもん良いもん…。」

「コレから有名になっていくさ…。」

「壊滅的に似合わないな。その口調…。」

「うるさい詠春。あっち行け…！」

「まあ、そんな感じで紹介は終了。」

ちなみに、無理やり全員分のサインを徹に渡してやった。

「今日は本当にありがとうございました。」

それじゃ、エヴァちゃん、そろそろ行くつか。」

「そうだな。」

「しつつかし、本当に良いのか？」

何だったら、街まで送っていくぞ。」

「心配は無用だ。」

あのくらいだったら、私だけでも何とかなる。」

「全く、エヴァちゃん…。」

素直にお礼言わないとダメだよ。

まあ、気持ちは嬉しいけど、オレ達も旅しているから、大丈夫だよ。次合った時は、空飛ぶ豚を用意しておくね。」

「ああ、楽しみに待ってるぜ。」

まあ、そんな感じで2人と別れたわけさ。

ただ

「アル、どうしたんだ？」

いつも変だけど、徹達とあってから、もっと変になっているぞ。

あと、詠春も2人の名前を聞いた時からちよつと変だし。」

アルの様子がずつと変だったのだ。

詠春はちよつと。

「おや、私が変わりましたか？」

「おう、だって何時ものアルだったら

金髪幼女、ムツハー

つて叫んでいるはずだろ？」

「フッフ、貴方が私をどう思っているのか、1時間ほど問い詰めた方が良くもしれませんね。

それで詠春。あなたは何を感じたのですか？」

「別に大した事じゃないんだがな。」

「それでも良いです。

どんな事でも構いません。」

「ちよ、ちよつとアル。

何を焦ってるんだ??」

本格的にアルの様子が可笑しい。  
いつもの飄々とした様子からは考えられない程、今の彼には余裕がないのだ。

「ふう、すみません。」

ただ、どうしても気になる事がありまして…。

詠春、それで何に気付いたんですか？」

「ああ、オレの住んでいた国。」

日本で、その『徹』と『へバ』っていう名前は結構有名なんだよ。」

「うん??」

へバ?、いや、まあエヴァと発音は似ているが……。」

「まあ、そうだな。」

エヴァンジェリンの方は、省略、更に発音が似ているだけなんだよなあ。」

「それで？」

それがどうして、貴方の国で有名なんですか？」

「幕末の時代、ありとあらゆる英雄の影に、彼等が登場している様だからだよ。」

英雄の影で登場する、結構薄い人間。

なんか、詠春と違ってそういう感じになりそうだな。



「もっと詳しくお願いします。」

「まあ、良いが、たぶん分からんぞ？」

とりあえず彼等は随分と広い地域を渡り歩いて、で色んな人にあっているらしいんだ。

特に有名なのは坂本章馬の暗殺を阻止した事とか、勝海舟の浮気に対して5時間説教したとかか？

他に、彼等の話というと、困っている時にフラッと来ては、1、2日程、適当に話をしながらのんびりとしていくってというのが有名だな。」

「なんか、ムカつく奴等だな。」

だってよ、困っている横で、のんびりと紅茶とか飲みながら優雅に過ごしているんだろ？

迷惑を通り越して、ムカつくぜ。それ。

「いや、普通はそうなんだがな、ココが不思議な事で、彼の相手をしていると悩みが解決するらしいんだよ。」

「はあ？」

「別に、大した事を言っているワケじゃないんだ。

ただ、普通の会話。

誰でも知っている様な事とか、よくある昔話をなんとなく話しているんだけど、その言葉で良く閃きが起こるらしいんだ。

それで、いくつもの戦争を防いだらしんだから、面白いよな。」

坂本竜馬とか、勝海舟とかは知らんけど、なんか凄い相談役だったって事か？

「ふむ…。」

という事は、貴方はその有名な方の名前と同じだったから、少し驚いたという事ですね。」

「まあ、それもあるけど、少し面白くなって思ったただけだ。」

「面白いとは？」

「いやね、その徹達が会った人達っていうのは、彼等と出会った後に有名になっていったんだよ。」

「えっ？」

「じゃ、私達も有名になるって事か??？」

「おっ、こりゃ本当にアイツに上げたサインの価値が上がるかも知らないぞ。」

「まあ、100年以上も昔の話だからな。」

「ただ、縁起はいいだろ??？」

「ナギ、何か悩みとかは…ある筈がありませんね。」

「どづいつことだ、コラア。」

「では、詠春、ゼクトはどうですか。」

「特には。」

「わしも同じじゃ。」

というよりも、どうしたんじゃ？

随分と幼子に執着するではないか？」

うんうん。

そこまで、執着する事はないと思う。

いや、確かにアイツ達の飯は上手かったし、徹は良い奴だったし、エヴァも面白い奴だったけど、そこまでアルが執着するナニカが2人にあるとは思えなかった。

「ナギや詠春はともかく、ゼクトすらも気付かなかったんですか？」

「ちよつと待て。」

気付くとは何にじゃ？」

「ですから、徹が気も魔法も全く使っていない事ですよ。」

彼は、気も魔法も使わずに、何十人も魔法使いから逃げていたのですよ。

少女と大きな荷物を抱えて。

しかも人間が、です。ある意味ナギ以上のバグですよ。」

いうと、ため息を吐くアル…。



「何達観しちゃってるのエヴァちゃん。」

諦めたら、そこで試合しゅっしょおおおおお……！」

「別に、諦めてなどいないさ。」

あんがい再開は早かった。

### 第三章 世界放浪編 その6

裏（後書き）

今回の話で、賞金首云々を書くつもりでしたが、無理でした…。

まあ、ネギVSエヴァまでには出てくると思います。

### 第三章 世界放浪編 その7

裏

Side ラカン

「ターゲットは、この三人の男。」

言いながらクライアントが取り出したのは3枚の写真。

フードをかぶった優男、東洋系の青年、銀髪の幼子、がそれぞれに写っていた。

「それに…」

この少女だ。」

最後に取り出した写真には、赤髪の少女写った物だった。

他の3人は隠し撮りっぽく、無表情なのに対し、最後の少女だけは何故か満面の笑みを浮かべてブイサインをしている。

うん、絶対コイツバカだ。

「フン…なんだ。

ガキじゃないか。」

「子供と思って油断していると、痛い目を見るぞ。  
オスティア回復作戦の失敗」

云々…。

「まったく、話が長くていかんねえ。」

「こっちもプロだ。」

「この世界じゃ、幼いから弱いなんちゅう法則なんて、簡単に崩れるって事ぐらい分かっている。」

「君が望むなら部下をつけよう。」

「正規兵ではなく、傭兵・賞金稼ぎになってしまおうが…。」

「いらねーよ。」

自分の力を過信しているワケでも、ガキという見てくれに油断しているワケでもねえ。

「一人で充分だ。」

あるのは20年近く積み重ねて来た経験の絶対的な自信のみ。

「それは頼もしい。」

「後一つ情報だ。」

先ほど言った通り、ターゲットはこの紅き翼だが、時々行動を共にしている二人組がいる様だ。」

「おいおい、なんだ？」

「その二人組もやれって言うのか？」

「いいや、そうではない。」

「その二人は別に捨て置いていても構わない。」



ただ、その二人の名が『テツ』と『エヴァ』という子供らしいのだよ。」

「はあ??？」

いや、だからどうしたんだ？

「『未来を見る男』と『闇の福音』。賞金はテツが600万ドル、エヴァが200万ドル」

「いやいやいや。」

ちよつと待て。

なんだ？そいつらは？

こつちも職業柄、賞金首の情報は一通り見ている。

しかも、そんな大きな額だ。普通だったら間違いなく確認をしているはずだ。」

「だが、そんな奴等聞いたこともないと？」

「ああ、その通りだ。」

「当たり前だ。」

深度Aの機密情報だ。」

「はああ？」

意味がねえじゃねえか。」

ほとんど誰も知らない賞金首って事だろ？

「言いたい事は分かる。」

ただな…。

絶対寝返るんだよ。彼等の首を狙った者達は。」

「なんだ？そりゃ？」

「言葉通り受け止めて貰って構わない。」

彼等が賞金首となって500年弱。

彼等は誰も殺さず、自分達を狙ってきた者達は自分側に引き込んでいった。

正直言つて異常だ。」

「何か魔法やら、薬物やらで、気を狂わすのか？」

「いいや、そのような物は一切使っていない。」

賞金稼ぎ達が自ら進んで彼側に着いた。」

おいおい、なんだ？その意味の分からない奴は…。

しかも、その能力はかなり重要なじゃないか？

「彼等を狙う者全てが、彼等の仲間になる…。」

それを重く見た過去の政府が、彼等を隠ぺいした。

だが、彼等の危険度が分かるように。」

「賞金はかけたまま、深度Aに隠した。」

「その通りだ。」

紅き翼に居る二人が、その『テツ』と『エヴァ』だと決まったワケではないが、特徴は大体合っていた。」

敵側の奴等も仲間にする奴。

しかも、薬や魔法を一切使わずに仲間になるっちゅうのは精神に異常をきたす事がない…。

敵側の情報、装備、兵力…。

それらが一気に手に入るって事だろ？

「クライアントさんよお。」

それで、結局なにが言いたいんだあ？」

「『注意してくれ』というのが一つ。」

そして、その二人が賞金首であったら、こちら側に引き込んで欲しい。

引きこんだ場合、彼等の賞金の3倍払おう。」

それだけの価値があるってこつた。

「それも、依頼かい？」

「いや、こちらはおまけだ。」

貴方への依頼はあくまでも紅き翼を壊滅させる事。

先ほどの情報は、頭の片隅に置いてくれるだけで充分だ。」

「…分かった。任せておきな。」

依頼を受けた後、紅き翼を追いながら情報を集めて行く。

どうやら、彼等は比較的のんびりと戦場を渡り歩いているらしい。

奴等の力が強すぎるせいで、逆に使いどころがないみてえだな。しかも、強すぎるもんで味方にすら不安を与えちまう。

まあ、のんびりしてられるワケつつゝのは、そんな所だろう。

ただ、よく分からののが『テツ』と『エヴァ』の存在だ。

紅き翼つちゅゝのは、どこでも大騒ぎをするもんだから、すんげえ情報が集めやすいんだが、あの二人は全然集まらない。

紅き翼の傍に時々いるつちゅゝのは分かるが、それ以外が全く分からない。

生真面目剣士はお色気に弱い。

酒屋で色気ムンムンの姉さん（アエリ（22才））から聞いた。

とりあえず、コレで東洋系の青年を攻めて行くか。

魔法のダッチ○イフ

ボンキユボンを3人。

保険として、ちょっとこれに興奮したら不味いよな〜ってのを1人。

これで、完璧だな。

ああ、そついや設定があつたつけ…。

すんげえ、チツコイ奴もいたからな〜。

とりあえず、設定はE（誘惑のみ）にしておくか。

感謝しろよ？ムツツリ剣士。

「という事で徹。

オシヤレをしよう。」

「どうしたの？

急に。」

「いやな。ココん所ずっと変なのに追いかけているじゃないか。

」

まあ、確かに最近はずっと1度は盗賊やら、竜やらに追いかけてまわされている。

「そんで、逃げ回っていると何故かナギさん達の所に行っちゃって、助けてもらってるんだよね。」

「それでだな。私が思うに、あの厄介事は貴様が引き寄せているとしか思えん。という事で、見た目を代えたら、引き寄せられなくなるかもしれないだろ？」

「いやいや、もしかしたらエヴァちゃんが引き寄せているのかもしれないよ。」

「というか、見た目を代えただけで、そういうのって変わるか??」

「まあ、正直言って、そんな事はどうでもいいのだ。

暇だから、貴様で遊ばせろ。」

「すごい本音が出たね…。」

「うむ。というワケで早速着替える。

なに、既に服は準備してあるからな。ほら、コレだ。

ほらほら、早く着替える」

「はいはい、分かったよ。」

なんか、変な服だな。

えーっと、コレは上からかぶるのか？あつ、エヴァちゃん手伝ってくれるの？ありがと。

やっぱり文化の違いって奴かな。

随分とひらひらとしている…。

ふむ、そこで最後に動物の耳付きカチューシャを付けるんのか…。  
あれ？カチューシャって女性モノじゃ…。

うん？

ちょっと待てよ…。

頭には、動物の耳付きカチューシャだろ？

そんで、服は上下繋がっているタイプ。

うん、ちょっとカチューシャが変な気がするけど、ココまでだった  
ら、それほどでもないよな。

そこで、膝上にある、服の裾。  
異常までにヒラヒラしている足元。

膝よりも高い黒い靴下。うん？これはソックスというのか？  
へえ、よく知ってるね。エヴァちゃん。

そこで、ヒラヒラとソックスの間にはオレの太もも。

絶対領域が重要??

それは、ちよっと違うんじゃないか??

エヴァちゃん。髪の毛を留めようとしなくて欲しいな。うん、良いよ。いつものみたいな適当な奴で。

ああ、もう留めちゃったか…。

後さ、オレを鏡の前まで連れて行くことするのはヤメテ欲しいなあ。

いや、出来れば見たくないなあ。

うん、見たくないんだよ。

ダメ??

いや、エヴァちゃん。

コレ鏡じゃないよ。うん窓だよ。

窓の向こうに女装した変な男がいるだけだって。うん、そうに違いない。

変な人なのに意外と愛想がいいなあ。

だって、ほら。手を振ったら返してくれるんだぜ。



現実を見る？

分かった。分かったよ。

後3秒だけまって。うん。覚悟を決めるから。

3

2

1

「なんじゃこりゃあああああああああああ。」

「ハツハツハハハ。」

いいじゃないか。似合っている。似合っているぞ。」

すごい、上機嫌なエヴァちゃん。

「嬉しくない。」

というより、早くオレの服を返してよ。

もう、ヤダあ。」

もう、ほんと恥ずかしいし、自分変だし、泣きそうだし…。

というか、途中で気付けよ。オレ！！！！

「ダメだ。今日一日はコレで過ごすぞ。」

「いや、そっちの方が色々ダメだって！！

いい年の男が女装とか、本当に色々とアウトだから！！

というか、誰が得するの！？コレ！！！！」

「主に私がおもしろい！！」

というよりも、紅き翼ばかり構っていた罰だ。

今日一日はその格好だぞ。」

「いや、確かにそうかも知らないけど！！！！

というか、変な趣味に目覚めちゃったらどうするのさ！！！！

「ん？」

目覚めるのか？」

想像してみた

…鏡の前で女装してポーズをとるオレ。

ゴスロリのカタログを真剣に見つめるオレ…。  
うん、キメえ。

「いや、目覚めないと思う。」

「だったら、良いではないか。」

「いやだ。オレは、こんな格好で外に出たくないiiiiiiiiiii!」

「あつ、後、『オレ』じゃなくて『私』って言う様に。」

「へっ!?!?そこまでこだわるの!?!」

イヤだぞ!!オレは男だああああああ。」

男に吟味にかかわる。というより、私とか言ったら、もう引き返せない様な気が…。

「ほら、オレじゃダメだと言ったではないか。」

何とか、『僕』で妥協して貰えた。  
本当に、イヤだ…。

「さて、では街から出ようか。」

「エヴァちゃん。本当にコレで行くの？」

出来れば、一日中宿に籠っていたいんだけど。」

「さて、行くぞ。」

あっ、そうそう。荷物は影の中に入れておいたからな。背負って行かなくても良いぞ。」

「影??？」

「魔法だ。魔法。」

流石に、その姿で大荷物を背負っているのは、私が許せん。

今日はたっぷり可愛がってやるからなあ。」

「いや、なんかエヴァちゃんが怖いんだけど…。」

「くっはっはっはっは。」

ほら、早く行こうじゃないか。」

「いや、ちょっと足がスースーして…。」

動くのが…。」

しかも、少し動いただけでめくれ…。」

「気にするな、気にするな。」

ほら、早く行かないと日が暮れてしまっぞ。」

前々からさっぽいとは思っていたけど…。  
というか、立場が逆転しちゃってないか？コレ???

なんだかんだ言っていたけどさ、一応オレが女装している理由って、厄介事を引き寄せない様になって事だったよね？

それがさあ

「なんで、こうなるのさあああああ！！」

「日頃の行いだろ？」

現在、エヴァちゃんを抱えて、逃走中です。

犬の尻尾を踏み、逃げたら、盗賊のテリトリーで、さらに追われ、騒いでいたらドラゴンが目を覚ましてしまったらしく、ドラゴンにも追われ、そしてさらに、盗賊達がオレ等を捕まえようとして投げた剣みたいなのがドラゴンの足の裏に刺さってしまったらしく大きな声で鳴いて、ドラゴンの集団にも追われ…。

そして、一番不思議なのは、何故か全員でオレ等を追っているんだよ。

いや、普通さ犬とか盗賊とかさ、ドラゴンが来たら逃げるよね？？それが、何故か逃げる事なく…というか積極的に協力してオレ等を追い詰めようとしているワケよ。

うん。

「絶対、厄介事の度合い上がっているよね!？」

「うむ、そうだな。

後、徹。

もうちょっと、上手く走らないと、めくれるぞ。」

気にしている余裕がありません。

「もおおおお、いやだあああああああああ。」

叫びながら、猛然と走り抜けた。

もう、必至だよ。コッチは。

ただ、いかせん走れば走るほど、追っかけてくる規模も増え  
て…。

「意味が分からん!!!意味が分からん!!!」

「凄いな、これは。

グリフォンにペガサス。あれはフェニックスか!!!

ケルベロスまでいるだ!!!

おい、徹見てみる!!!」

「見ている余裕何てないいいいいいい!!!」

なんとか、なんとか逃げきろうと、走り続けた先は、崖になっていた。

しかも、なんか破壊音っていうの？

凄い轟音と、砂煙、火も出ていた。

「なははは…。」

「こりゃ、無理かもしんなああああいいいいいいいい！！！！！！」

『百重千重と重なりて走れよ稲妻』

「そう言いながらも、走り続けている所が私は好きだぞ。」

『また、大呪文か！！』

「ありがとうおおおおおおおおおおおお。」

もう、こうなったら崖からジャンプで飛び降りるぞ。  
うん。

エヴァちゃんが魔法で浮かせてくれる事を期待しよう。

『いくぜ。』





『千の雷！！！』

ちよつと不味いって言うほどの衝撃が襲ってきた。

ただ、不幸中の幸いっていうのかな？

オレ等を追っかけてきていた、過激すぎるストーカー達はさっきの衝撃に巻き込まれたみたいで、死屍累々。

まあ、マジで死んではいないっばかったので、とりあえずは一安心。

「って、何だ、こりゃ！？」

叫び声のする方向を見れば、やはりナギさんの姿が…。

どうやら今回も助けてもらったらしい。

「ナギさん。ありがとう！！」

もう感謝感激だよ。

だって、あれだよ。

あの終わりの見えないマラソンをしなくても良いって事だよ！！

「お、おおづ。」

ていつか、てめえ、誰だ？」

「何言ってるの??？」

「昨日、助けてもらったばかりだっていつの日に？  
ボケた？」

「おい、徹。」

ナギの相手ばかりしてないで、こっちの相手もしろ。」

「ゴメンゴメン。」

それで、エヴァちゃん。どう？

怪我とかは無かった？」

「無論。というよりも私は吸血鬼なのだか」

「て、テツウ!?!？」

「喧しいぞ、鳥頭。」

いやいや、ダメだつてエヴァちゃん。

何十回と助けられている命の恩人だよ。彼女は。

「いい女だ…。」

ぽつりと知らない声が響いた。

その主を見ると、凄い筋肉がいた。  
うん、こりゃやばいって感じで筋肉だ。

丁度、目線の辺りにある腹筋は、ボコボコだった。  
男に生まれたからには、少しこっぴうマッチョに憧れる事ってある  
よな？

少なくとも、オレはちょっと憧れていた。

そのデカイ人がこちらに歩いてきた。

「なんだあ？

戦っていて、ようやく私の魅力に気付いたってか？

ただなあ、残念だけど私のタイプじゃ

って、何も言わず通り過ぎんなあああ！！！！」

「ふふふ。残念だったな、鳥頭。

このデカイ奴は見る目があったというワケだ。  
ただな、非常に残念だが、私には既に心に決めた…おい、何故私も  
通り過ぎる？」

そして、オレの目の前に腹筋が来た。

「俺はジャック・ラカンだ。

名前を教えてください。」

「オ…僕？」

僕は村重徹。」

将を射んとせば先ず馬を射よ作戦だろう。

ナギさんかエヴァちゃんか、どちらか分からないが、とりあえずどちらかに惚れちゃったラカンさんは同じ男であるオレに頼んでいるんだ。

惚れた女性を紹介してくれと…。

意外とオレはこういうのに、鋭いからな。

うんうん。

確かに、ナギさんは文句も言わずオレ達を助け続けてくれるカッコイイ女性だし、エヴァちゃんもちよつと素直じゃないけど、根は凄く良い子だ。

ただなあ、ナギさんとはかく、エヴァちゃんとラカンさんって犯罪チツクだよな…。

というか、アレだな。

父親の心境っていうの？

エヴァちゃんは、凄いい子だから、エヴァちゃんを選んで欲しい様な。

エヴァちゃんに離れて欲しくないから、選んで欲しくない様な…。

複雑な心境だ。

ただ、もしエヴァちゃんの事だったら、一発ラカンさんを殴らなく  
ちやいけないんだけど…。  
絶対効かないだろうな…。

とりあえず、筋トレをするべきか？

第三章 世界放浪編 その10 裏

side 犬(8才)

吾輩は犬である。名前はまだない。

街のそばで、勝手にご主人と決めた者を待っている。

太陽の温かさが、心地よく、ウトウトしていると、尻尾を踏まれた。

この、踏んだのがドラゴンとかだったら、痛かったかもしれないが、実際は吾輩の半分程度の人間。痛みなどは、ほとんどない。

いつもであつたら、軽く噛みついてやるのだが、その踏んだ人間とというのが『あの御方』だったのだ。ドジなご主人である。

格好が少し違っている様な気がしたが、いつもの落ち着く様な匂いは変わっていないかった。

尻尾を振り、吠えながら近付いていくと、いつもの様にご主人は金色を抱えて走り出す。

いつもの追い駆けっこですね。ご主人。  
今日こそ捕まえてみせますぞ。

↳ side 盗賊↳

「兄貴らしき奴が、やって来やした…。」

「ワシ等はな、恩に報いるためにも、兄貴を追わなくちゃいけねえんだ。てめえも分かってるだろ!？  
それを、『らしき』だと!？」

「そうは言いやしても…。  
とにかく、見て下さい。」

ジヤネから渡された双眼鏡を覗く。

いつも通り、『あの人』は、姉御を抱えて走っているのだが…。

「なんじゃ、こりゃ?？」

兄貴が、姉御になっていやがった。

「そうなんです。」

確かに、兄貴なんすけど、姉御になってるんす。」

考えられるのは2つ。



兄貴が女装している。

実は、今まで男装していた。

である。

答えは、すぐに分かる。

女の2人旅ちゅうのは、あぶねえ。

まあ、当然だわな。ぶっちゃけ野郎より、アマの方が良い値が付く。

さらに、アマだけなんて、こっちからしてみれば襲いやすい。

少しでも、リスクを減らすために、あの人は男装していたってワケだ。

そうやって考えてみると、あの人を何時までも兄貴呼ばわりするっちゅうのは失礼だよな？

「おい、野郎共!!」

これから、兄貴の事は大姉御と呼べ。分かったか!？」

応!!

40人強の部下が一斉に返事を返す。

「野郎共、大姉御に追いつけねえっと、話すら聞いて貰えんぞ!!」

恩に報いるためにも、行くぜえ、野郎共お。」

（side ドラゴン）

叫び声、鳴き声、地を揺らす音、巻きあがる砂埃、精霊達の歌い声。眠りから目覚めれば、その全てが我を襲った。

『汝達よ。』

何故、あ奴等を追いかける？』

我は問う。

たった2人を、追いかける者達へと。

「んなの決まってるだろ！？」

必要だからだ！！」

「いい。近くに居る？居たい？楽しい。好きい。」

グウウ、ワンワンワン

人は駆けながら叫び、精霊は舞いながら歌い、犬は吠える。

私の飛ぶ速度と同じ速度で、人と犬は駆け、精霊は舞う。

彼等をそこまで、掻き立てる者が、この先に居る。

千年以上生き、失ったはずの好奇心が疼きだした。

この者達がどの様に駆けて行くか、見たい。

あの者が捕まったら、どうなるか、知りたい。

あの者達がどんな者なのか、感じたい。

様々な欲望が渦巻き、好奇心を刺激する。

『くはっはっはっはっは。』

楽しい。楽しいぞ。

こんな愉快なのは、何百年ぶりだ。

どれ、我も加勢しよう。』

火袋から取り出した、炎の基を肺に溜め、そして

「バカ野郎お！！！」

「だめ。ばつ。やあ！！！」

下の者から剣を投げられ、精霊達からは突風を受けたせいで、炎はあらぬ方向へと飛んでしまった。

『何をするのだ？』

我は、あ奴等を止めようと…』

足に刺さった剣を振り落としながら問う。

「姉御と大姉御を怪我させるワケには、いかねえだろおが！！！」

「あの人。好き。痛い。ダメ。苦しい。やあ」

それが、この戯れの規則か…。

『分かった。

では、こうしよう。』

これ程楽しい戯れだ。

もっと大勢でやろうではないか。

規則を守った上でな。

我は吠える。

大勢の仲間が集まる。

いつの間にか、別の幻獣達も集まりだした。

亜人も、精霊も、獣も、人間も。

全てが協力していた。

精霊は風を使い、皆を押し。

人間は叫び、皆を誘導する。

獣は人間を乗せ、亜人は獣の誘導を。

各々が、己の力の限り尽くし、隣を支え、そして駆けて行く。

我はもう一度、雄叫びを上げた。

さあ、皆の者。

我等が姫に、早く追いつこうではないか。

side ラカン

むっ、また鳥頭がアンチヨコを見だした。

「百重千重と重なりて走れよ稲妻」

この詠唱は

「また、大呪文か!!」

さつきは時間がなかった為、気合い防御を使ったが、今だったら溜めれる。

「いくぜ。」

「コツチもだ。」

チラッと、黒い影が見えたが、よそ見している暇なんざねえ。



に、魅入ってしまった。

「って、何だ、こりゃ!？」

ナギが声を上げると同時に

「ナギさん。ありがと!！」

彼女は、俺から目を外し、ナギの元へと向かって行った。

それと同時に、固まっていた俺は、ようやく動ける様になる。

彼女のいた所には、金髪の少女もいた事に、今さら気付いた。

ただ、その姿は、少し綺麗過ぎた。

「何言ってるの??」

首を傾けている少女を見ると、やはり金髪の少女とは違い、服は所々破れており、肩には痣が出来ていた。

そして、俺とナギの間には、おびただしい数のモノ達が横たわっていた。

礼を言う少女と、横たわるモノ達を見るに、あの少女は追いかけていたんじゃないか？

その様子が、鮮明と思ひ浮かべれた。

金髪の少女を身体を張って、守りながら、駆けてくる黒髪の少女。

「いい女だ…。」

気付けば、俺は彼女の目の前で

「俺はジャック・ラカンだ。  
名前を教えてください。」

名を訪ねていた。

というか、アレだ。

まじいぞ。発言して思ったんだが、そっけなさすぎた。

しかも、この子の身長って俺の胸よりも小さいんだぜ!?

こんなデカイ人間が、あんな威圧的に名前を聞いたら、絶対ビビって

「オ…僕?

僕は村重徹。」

普通に返ってきた。

しかも、笑み付きで…。

度胸も据わっていやがる。

これは、ちっと本格的にヤバいな…。



「お前、バカそうだな。」

ガトウに、呼ばれ本国首都までワザワザ出向いたら、協力者にあつて欲しと言われ、会った男。

それが今私の顔を覗き込んでいる、この失礼な男だ。

ウエスペルタティア王国の、アリカ王子。

鋭い眼、白い肌、そして綺麗な金髪。

見た瞬間、ズキーンってきたよ。何せモロに好みのタイプだ。

だと言うのに、最初の言葉が『お前、バカそうだな。』だってえ！？

「ああ〜ん、てめえ。

喧嘩売ってんのか！？」

王子だろうが、なんだろうが売られた喧嘩は買うぜ？

「しかも、キレやすいと…。」

ム、ムカつくううううううう。

「ぶっ殺す。」

「全く、言葉使いもなっていない」

「はいはい、そこまで。」  
間に入ってきて来る、ちっこい影。

その声は、かなり聞き覚えがあり…。

「徹!？」

最近見ないって思ってたら…。

なんで、お前がココにいるんだ!？」

「ん？」

まあ、いろいろ会って…。

というよりも、アリカはナギさんに頼る側でしょう？  
なのに、あんな風に喋っちゃダメでしょうが!！」

「し、しかし」

「言い訳はしない!!」

そんなんじゃない、いつになっても友達が出来ないよ!！」

「いや、俺にはテツがいれば。」

「そう言うワケにもいかないでしょうが。  
だいたい」

何やら、長くなりそうなので、徹の傍に居たエヴァちゃんを手招きをして呼ぶ。

ちよつと不機嫌そうな顔だったが、来てくれた。

「どうしたんだ？鳥頭。」

「いや、一体どういう状況なのかな？って思つて。」

完璧に委縮してしまつている王子さんを見る。

「徹に懐いている。」

「いや、アレは懐いているというよりも…。」

もしかして、ラカンみたいに徹の事を「

「いや、奴は徹が男だと知っている。」

忌々しい事に、一緒に風呂にも入っていたしな。」

徹と王子さんが一緒に風呂か…。」

なんか、それは非常に危なそうというか

ジュルリ

… ちょっと待て、私！！

へっ！？

なに、さっきの

いや、確かに可愛い系の徹と、綺麗系の王子さんはぴったりだと思  
…。

ぴったりってなんだ！？

なんなんだ！？一体。

不味い。不味いぞ！？

ジャックか！？

ジャックのせいか！？

そうだ、そうに違いない。

ジャックが徹にアプローチかけてるせいで、私も何か変な感じにな  
つちまっているに違いない。

つゝわけで

「おい、ジャック。

責任とって、私をなお…せ…。

アレ？

なあ、エヴァちゃんジャックは何処に行った？」

「エヴァちゃん言うな。

ジャックはあっちに行つたぞ。」

指さす方を見ると、徹に喋りかけているジャックが…。

まさに修羅場…。

「アル!!!」

カメラだ。カメラを寄せ!!」

「どっぞ。」

〈side エヴァンジェリン〉

「はあ…。」

カメラを連写している鳥頭のせいで、自然とため息が出ってしまった。

白男と筋肉。

こいつ等のせいで、私が徹と過ごす時間は確実に減っていた。

しかも、一番勝負所の風呂でさえも白男の週5回となってしまうのだ。

非常に忌々しい。

「金髪幼女、ムツハー…。」

ため息と幸せが逃げますよ。」

言ってくる優男…。」

「お前な…。」

毎回毎回、会うたびに何を言っているんだ!？」

「金髪幼女、ムツハーと言っています。」

「そういう意味じゃない!！」

「冗談です。」

これは、ナギがイメージした私を忠実に再現しているだけですよ。」

「…ガトウ、詠春、一緒に飲みに行かないか？」

なんか、無性に飲みたい気分になった…。」

「付き合うぜ。エヴァンジェリン。」

「ああ、俺も行くよ。」

出来れば、徹も共に連れて行きたいが…。」

徹が来れば、間違はなく他の者も着いて来るだろう。」

流石にそれは、看過出来ん。

「そういえばガトウ。」

最近、胃に優しい胃薬を見つけたんだが。」

「おっ、それは良いな。後で教えてくれ。」

俺も、がっつりと効果がある奴を見つけたからな。後で教えてやる  
ぜ。」

今日は全てを忘れるくらい飲む事にしよう。

第三章 世界放浪編 その12

表

うん…。

今、オレは猛烈に悩んでいる。

いやね、ラカンさんに相談されたじゃん。オレ。

ナギさんがエヴァちゃんのどちらかは知らんけど、紹介して欲しいって。

それは別にいいんだ。

ラカンさんが良い人だっていう事も、もう知っているから、エヴァちゃんを任せても問題はない。

ただなあ、絶対泣くだろうな…。うん…。

ただ、もしラカンさんがナギさんの事が好きだった場合…。

好きな人が重なってしまうのだ。

オレってば、案外勘が鋭いんだよね。特に、恋愛事情に関してかなり凄い。

そんな、オレの直感が告げているんだ。



アリカも、ナギさんに惚れているって。

普段からアリカって、一歩引いているんだよ。  
あまり、人に近付き過ぎない様になって感じで。

そのアリカが、初対面のナギさんと口喧嘩した。  
しかも、仲良さげにだ。

何だかんだ言いながらも、ナギさんもアリカに構ってくれている所を見ると、けして仲が悪いワケではないだろう。

ただなあ、ナギさんってラカンさんとも仲が良いしなあ。

もしかしたら、ただの友達っていう感覚なのかもしれないし…。

だあ、分からん。

とりあえず、ラカンさんはナギさんと同じサークルに入っているから、多分一歩リード中。

アリカは、巻き返しを狙って、ただいまナギさんとデート中だ。

何か困った時様に、オレの念波番号を二人に渡してあるし。  
うん、完璧だ。

うんうん…。

あれ？ラカンさんに渡した覚えはあるけど、アリカに渡したっけ？  
しかも、何かポケットの中に、念波番号が書かれた紙があるし…。

はれ？

やっべえ、アリカに念波番号を渡すの忘れてた！！  
ラカンさんと一緒に渡したつもりでいたわ…。

とりあえず、今日のデートは自力で乗り越えて貰

「うわっ。」  
「むっ。」

ミスった。よそ見してたせいで、ぶつかっちゃったよ…。

「すみません。」

「いえ。お気になさらず。」

そう言つと、白い髪の青年は落とした紙を拾い、そのまま行ってしまった。

そ〜いえば、オレも持っていた奴落としちゃったっけ…。  
え〜と、あったあった。

拾おうと、近付いたらドデカイ爆発が行き成り起き…。

「ぬほぁぁぁぁぁ。」

オレと紙は爆風で飛ばされた。

紙は燃えたが、幸いな事にオレに怪我はなかった。

それで、何か良く分かんけど、ウロウロしている内に事態は収束。

後から聞いた話だと、テロが起きたとか何とか…。

唯一の幸運は、死者、重傷者が出なかった事ぐらいであろう。

とりあえず、これに巻き込まれてしまった事は不運としか言いようがない。

騒ぎが収束して数時間後。

アリカは、仕事の都合で帝国へと行く事になった。

そういえば、アリカって何の仕事してんだっけ？

今度会った時に、聞いてみよ。

そして、テロの翌日。

復興作業エヴァちゃんと手伝う事にした。

ナギさん達は、どうしても外せない用事があるとかで、今日はこの場に居なかった。

ある程度、区切りもついた頃には、既に周りは真っ暗。

皆で地面に座り、飲めや歌えやの大騒ぎ。

そんな時に、ナギさん達が話題になっていた。

いや、元から凄いのは知っていたよ。

何せ、しょっちゅう命の危険から助けられているのだ。そりゃ、良く知っている。

ただ、初めて会った時、ナギさんが有名人っぽい発言してたじゃん。

それが、ちょっと気になっていたんだけど、その話題でようやく知った。

なんと、ナギさんのサークル。

散ったピラは『魔法けいどろ』で世界的に有名で、世界ランク16

位という凄い成績を持っていたんだよ。

これは、確かに自分有名人発言をしても仕方ないと思う。  
事実、魔法けいどろファンの間ではかなり人気だったのだ！！

新たな新事実に感動。

しかも、自分の傍に有名人がいたと驚いていると、念波が飛んできた。

「あつ、ゴメン。」

何か念波が来たみたい。」

そう言い、席をはずし念波に出る。

『わ わしだ。』

聞こえて来たのは老人の声。

「ワシさんですか…。」

うん、多分知らない人だ。

この声は何処かで聞いた事があるような気がするけど…。  
でも、ワシさんなんて知らないし。

『ん？』

誰だ？君は？』

念波の相手が代ったのだろうか？

いや電話と違って、そう簡単に代える事は出来ないから、多分違う…。

「誰だつて言われても…。

徹ですが。」

『テツ…。

そうか、君が“あの”テツか。』

老人の声から行き成り若くなり、しかもオレの事を知っている様に  
適当な事をいう相手…。

間違いない。イタズラ念波だ。

もしかしたら、オレの個人情報がまほネットつで晒されているかも  
しれない…。

あれか！？ちよつとえっちい奴を見たのがいけなかったのか！？

『追い詰めようとした所での手痛い失敗。

まるで、僕の行動全てが見透かされている様な不気味さ。

どうやら、みらいひと未来人という二つ名は伊達ではないみたいだね。』

「へっ？いやあ、ちよつと…。」

『既にばれていると言つのに、その何も知らないという態度…。  
忌々しいを通り過ぎて、怖ろしくすら感じる。』

良いだろう。今日は僕の負けだ。次に会う時を楽しみにしているよ。」

一方的に切られる念波…。

ワインをチビチビと飲んでいるエヴァちゃんの元へ戻る。

「なんだっ たんだ？」

「ただのイタズラ念波だった。」

第三章 世界放浪編 その13

裏

（side ナギ）

最近は、完全なる世界についての内偵をやってんだが、まあぶっちゃけ私やラカンみたいな人間には向かない仕事だから、暇なわけだ。

その暇な時間。

ここんとこ、忙しかったから羽を伸ばしてゆっくりと休むつもりだったんだが…。

全然休めねえんだ。

なにせ、私の眼の前じゃ

「というワケで、徹遊びに行かせる。」

「今日は俺と買い物に行こう。」

「あつ、アリカ。てめえ、何抜け駆けしようとしてんだ!!  
徹、こんなモヤシ置いて、俺と一緒に行こうぜ。」

もちろん、エヴァの嬢ちゃんもエスコートするぜ。」



エヴァちゃん、アリカ、ラカンによる、徹奪い合い合戦が始まるからだ…。

しかも、徹本人はと言うと

「よし、それじゃ、皆でどっかに行こうか。  
ナギさんも来る？」

最近おいしい料理のお店を見つけてさあ。」

全然気付いていない様子なんだよなあ。

しかも、なんだかんだで皆を纏めているのだから、相変わらず凄い。

「あつ、私はパス。」

うん、あの空間に居られる自信がない。

一度、一緒に行ったんだけどさ、もうヤバイヤバイ。

私を挟んで、ラカンとアリカは目線で勝負してるし。

徹の膝の上へと陣取ったエヴァちゃんは、勝者の目。それに気付く素振りすら見せない徹は、普通に飯を配ったり食べたり…。

はたから見ている分には面白いんだけど、巻き込まれちゃうと、胃が…。

「ええい、いつも皆とではないか。

私は2人で行きたいんだ!!」

「俺もだ。」

「俺は、別にエヴァの嬢ちゃんが一緒でもかまわねえが。」

上から、エヴァちゃん、アリカ、ラカンの順である。  
なんだかんだ言いながら、ラカンは面倒見が良い。

あの見た目と、普通の馬鹿な所では想像がつきにくいけど、ちっちゃい子を見る時の目が違っている。

そういう所は、ラカンの良い男度??  
まあ、そんな感じの点数は高い。

アリカもアリカで、イケメンって感じの見た目と、何だかんだで優しく不器用な所を見ると、彼もまた点数は高いと言える。  
まあ、どうも私とはウマが合わないらしく、嫌われてはいないだろうが、仲もそんなに良いわけでもない。

そんな良い男二人が、男に迫っているのだ。  
なんか、うん…。  
非常に複雑な気持ちだ。

「なるほど…。  
確かに、2人つきりの方が、お互いの認識が高まるよね。」

それじゃ、アリカはナギさん所へGO。  
デートのお誘い頑張って。

そんで、ラカンさんとエヴァちゃんも二人で遊びに行ってきたらどう?  
「

…ん?

なんか、話の流れが変じゃね?

｝side アリカ

何かよく分からないまま、俺はナギと買い物をする事になった。

ちなみに、ラカンとエヴァンジェリンは、エヴァンジェリンの我儘で留守番。

テツは、一人で散歩をするようだ。

「なあ、アリカ。

いくらテツに言われたからって、ワザワザ嫌な奴と一緒に買い物なんてしないで良いんだぞ？」

…嫌な奴？

ナギは、自分の事を言っているのか？

「い、いや、別にお前の嫌っていないぞ？」

ただ、テツが楽しそうにお前の事を話していたから」

「なるほど。

テツを盗られると思ったわけだな。」

その言い方じゃ、まるで俺が嫉妬しているみたいじゃないか。

「違うぞ、違うからな。」

あまりにも、カッコイイとか凄いとかが言うから期待したら、お前みたいな奴が出てきてだな」

「ああ、はいはい。  
分かった、分かった。」

ナギの表情を見る限り、絶対分かっていないと思うのだが、これ以上抵抗しても意味がなさそうなので堪える。

「あつ、そういえ…。  
ん？」

中途半端に止められた言葉。

いつの間にか、ナギの表情は険しい物になっていた。

「危ねえ!!！」

ナギの叫び声。

身体はナギに引っ張られ、それと同時に爆音が響き渡った。

「大丈夫か？アリカ。」

「ああ…。」

だが、流石にこれはないんじゃないか？」

助けられて文句を言うのは、非常に心苦しいのだが、流石にお姫様だっこってというのは…。  
はた目から見たら、女の子にお姫様だっこされている青年だぞ。  
いろいろとマズイ。

「気にすんな。

しかし、こんな街中でデカイ魔法を使いやがって。死人が出てねえだろうな!？」

「つまり、これは。」

「ああ、奴らの刺客だろ。」

『奴ら』の言葉に、俺は齒を喰いしぼる。

終わっているはずの戦争を無理やり長引かせ、甘い蜜をすすする組織。『完全なる世界』。

あいつらは民の命を材料に、甘い蜜をすすするのだ。

そんな屑共に、国の民は喰われているのだ。

しかも、それだけじゃ飽き足らず、こんな街中で俺達を狙ってのテロ行為。

あまりにも、ふざけている。

「よしつ。アリカは皆の所に戻ってな。

私は奴らの本拠地をぶっ潰しに」

「俺も行く。」

「あああ？」

「お前の方が、俺なんかよりもよっぽど強いが、女一人行かせるのは俺の主義に反する。」

しかも、俺の魔法は役に立つぞ。」

「…しゃくねえな。」

いいぜ、行くぞ。アリカ。」

ナギと共に、敵の基地を襲った成果は上々と言えよう。

『完全なる世界』と執政官との繋がりが、はっきりとした形で分かる文章が出てきた。

その証拠さえあれば、この戦争を終わらせるには十分だろう。

俺がやるべき事は、帝国側と接触。

一番接触しやすいのは、帝国第三皇女か？

とりあえず帝国と接触し、この戦争の無意味さを知らしめ、こちら側には争う意思がない事を示さなくてはならない。

テツと離れ離れになってしまうのは、少し残念だが…。この戦争が終わったなら、共にいる時間も増えるだろう。それまでの我慢だ。

〈side 白髪の青年〉

「あの執政官がテロに関与!?!? 確かなんだね。ヴァンデンバーグ元捜査官。」

今、僕の目の前ではマクギル議員が念波で会話していた。

しかし、もうそこまではなれているとはね…。これじゃ、僕等の計画が潰れてしまう。

「証拠の品とナギ君を連れて来てくれ。」

流石に、それを看過することは出来ない。

マクギル議員は念波を切り、弾劾手続きのために、法務官に念波を繋げようとするが

「流石に、それは妨害させて貰うよ。」

彼が繋げようとした念波に雑音を織り交ぜ、さらに相手へと繋げるための番号を途中で切る。

「なっ、貴様何時から!？」

「そんなのはどうでも良い。

とりあえず、貴方はココで退場して貰おう。」

使うのは単純な転移魔法。

ココで攻撃魔法を使つては厄介事が多くなつてしまふ。

転移した場所にいる、部下達がマクギル議員を上手く処理してくれるだろつ。

とりあえず、そちらはどうでも良い。

今重要なのは、彼を模倣する事。

時間もあまりない。

札とマクギル議員の髪の毛を使い、変装する。

自分では分からないが、傍目からは今の僕はマクギルに見えているはずだ。

そして、部屋に転移魔法の魔法陣を仕掛ける。

これは、魔力で見破られるワケにはいかないので、小規模かつ単純なモノに留める。

それを行いながら、変装魔法の微妙な調整も同時進行で行っている。



彼等が到着した。

紅き翼の三人。

ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ

ジャック・ラカン

ナギ・スプリングフィールド

赤き翼の戦闘能力が高いナギとラカンが共にいるのが、少々困った所だが、頭が弱いので、扱いは適当で良いだろう。

今、問題なのはガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ。

ココまで情報を集めてきた手腕。

そして、その情報の断片から真実へとたどり着く、その考察力。

共に脅威だ。

とりあえず、今の僕がしなくてはならぬ事。

マクギル議員になりすまし、紅き翼を操作する。

について言えば、彼こそが一番邪魔であろう。

ただ、逆に彼さえ乗り越える事が出来れば、この計画は達成できる。

「御苦労。」

会話の主導権を握ろうとしながら、口を動かす。

「証拠品はオリジナ」

「おりゃあ!?!」

あらゆる想定を考えているつもりだったが、どうやら僕は甘かったらしい。

「ちょ、ナギ。

お前、なにやってんだよ!?!」

「元老院議員の頭、いきなり燃やして。

ただでさえ寂しかった髪が、悲惨な事になっちまうぞ!?!」

いきなり、魔法で頭を燃やされるという想定はしていなかったよ。

「バーカ。

よく見てみるよ、おっさん。」

燃やすという、簡易な現象の割に込められた魔力が莫大なせいで、変装魔法が維持できなくなってしまった。

「よく分かったね。サウザンド・マスター。

こんな簡単に」

「おりゃあああ!?!」

おっと、次は無詠唱の稲妻か。

「話ぐらいいは、聞いた方が良いかと思うがね。」

「うつせえ。」

こっちはドロドロの四角関係でストレスが溜まってんだ。諦めて、喰らいやがれ。」

叫びながら、突っ込んでくる。

仕掛けておいた転移魔法を起動させ、仲間を召喚。

左右からの不意打ちを喰らわせるが、彼はいとも簡単に耐え抜いてしまった。

これで仕留めれば楽だったのだが…。

仕方ない。

奥の手を使うとしよう。

執政官から、得た情報。

マクギル議員の専用回線へと、念波を繋ぐ。

そして、マクギル議員の声真似をしながら、言うのだ。

紅き翼は帝国側のスパイだったと。

これで、彼等は孤立する。

どんな強者だろうが、全ての国から敵対されては何も出来まい。

「わ　わしだ。」

ありとあらゆる、筋道を立て、そして最も効率的に紅き翼を陥れる事の出来るモノを選択しているつもりだったのだが…。

『ワシさんですか…。』

どうやら、初めから躰いたらしい。

意思の疎通が全く出来ていないのだ。

そもそも

「誰だ？君は？」

念波をする相手が間違っていた。

執政官が間違った情報を僕に与えた？

それとも、僕が記憶違いをしたのだろうか？

そもそも、この念波の番号は僕が直接執政官の元に行き、情報を貰ったのだ。

電波や念波を用いて、傍受される様な事がないように、紙に書くと言う原始的かつ信頼のおけるモノにした。

執政官も何度も確認したし、僕自身も何度も確認をした。

そうやって、慎重に慎重を重ねた物が間違っていたという可能性は限りなく低いだろう。

執政官が裏切ったというのも、考えにくい。

どこかで、あったはずなのだ。

この間違いを起こす要素が…。

『誰だつて言われても…。  
徹ですが。』

戸惑う様な、その声で何時かの少年を思い出す。

あの日、僕とぶつかった少年。

そして、落とした情報…。

つまり、あの時入れ替えられたという事か？

そして、『テツ』という名前にも聞き覚えがあつた。

「テツ…。

そうか、君が“あの”テツか。

追い詰めようとした所での手痛い失敗。

まるで、僕の行動全てが見透かされている様な不気味さ。」

未来を見る男。

歴史を編む者。

人を操る者。

全てを見透かす者。

多くの二つ名を残し、それでいながら謎に包まれている人物。

それらを全て総括した二つ名があった。

100年以上前に出版された『テツ』と『エヴァ』にスポットをあてた小説のタイトル。

その二つ名は、あまりに仰々しく、そのタイトルに失笑を覚えたが、今となっては笑う余裕なんてなかった。

「どうやら、みらいひと未来人という二つ名は伊達ではないみたいだね。」

『へっ？いやあ、ちょっと。。。』

「既にばれていると言つのに、その何も知らないという態度…。忌々しいを通り過ぎて、怖ろしくすら感じる。」

「良いだろう。今日は僕の負けだ。次に会う時を楽しみにしているよ。」

「こちらとしても、余裕がないため、一方的に念波を切る。」

「さて、という事だ。」

「どうやら僕は未来人の手のひらで弄ばれていたに過ぎなかった様だ。」

「ちょっと待て。」

「未来人が云々ってどういう事だ!？」

「というより、テツが関係あるのか!？」

「答えてやりたいのは山々だが、僕としてもあまりココに居るわけ

にはいかないのだよ。

悪いが、逃げさせて貰うよ。」

残留魔力の対処法を施した転移魔法をする。

呼んだ二人も、それぞれの手段で戻ってくるだろう。

「なっ、ちょっと待ちや」

叫んでいるサウザンド・マスターの声は途中で途切れ、自分が転移に成功した事がはつきりと分かった。

ここに来て、まさかのイレギュラー…。

しかも、その相手がああの未来人だ。

計画を見直す必要が出てきたようだね。

第三章 世界放浪編 その14 裏

Side ナギ

「なっ、ちょっと待ちやがれ!!」

私が言うよりも前に、白髪の男は転移しちまった。

しかも、あいつの部下らしき奴らも各々の方法で転移をしたらしく、既に影も形もない。

今回の奴らの目的。

偽の情報を流し、私達の動きに制限をかける事。

これを阻止出来たのは良い。

恐らく、逆転の一手だったのだろう。

確かに、彼等の思惑通りに事が進んでいたら、状況は一気に変わっていた。

私が、マクギル元老院議員の正体に気付く事が出来なかつたら、得た証拠を相手側に渡していたかもしれない。

下手をすれば、奴の操り人形になっていた可能性もあった。

そして、あの念波が繋がっていたら、世界中を敵に回していた可能



性もあつた。

もし、そうなら最悪だ。

せつかく、戦争を終わらせる情報を持っているというのに、その証拠の価値はなくつちまうんだ。

まさに、逆転の一手。

運に頼るような物でもないし、下準備もしっかりとしていた。

私達としても、相手方がこの様な手で来るとは思ってもいなかった  
ので、成功するはずだったんだ。

そして、私達は危機に陥つちまう。

そう、普通であつたらそうなたはずなのに、たった一人の少年によつて、その作戦はダメになつちまつた。

「くそつ。なんだつてんだよ!!」

なんで、ココでテツの名前が出てくんだよ!!」

こう言うてはなんだけど、徹やエヴァちゃんには、こういった面での期待は一切していたなかつた。

そもそも、あいつ等との出会いは唯の偶然であり、そして縁も腐れ縁。

アラルブラに所属しているワケでもないし、特別凄い所も、まあ、男女関係を除けば特にない。

ただ、私が気に入つた奴等。

そんな彼の名が、こんな場面で出てきたんだ。  
混乱するなってほうが、無理だろ？

「……ナギ、お前何にも知らなかったのか？」

「って、ラカンは、なんか知ってるのか!？」

「……まあな。」

おい、ガトウはどうだ？なんか知ってるか？」

「いや、知らない……。」「

ゆっくりと、煙草の煙を身体の中に取り込み、吐き出す。

「それで、ラカン。あんたは、何を知ってるんだ。」

相変わらず、ガトウのおっさんは渋いねえ。

「……実はだな。」

「「実は???」「」

僅かな間。ラカンは何かを見定めるかのように、私達の目を覗き込む。

その表情は何時もとは全然と違う。

こんな表情で話すのだ。かなり重大な事

「徹は、女の子なんだ……！」

だったら、良かったなあ……。

「だああああああ。おめえ、まだ諦めてなかったのか！？  
あいつは、野郎だって何度も説明しただろ……！」

「そういう設定って事だろ？」

大丈夫、分かっつてっからよ。

確かに女の二人旅っちゅゝのは危ねえからな。そりゃ男装するってのは良いアイディアだよな。」

「期待したら、これだよ！？  
くっそ、私はまだしも、おっさんのダメージが半端ねえ事になっ  
んぞ。」

無言で胃薬を、バリバリ流し込んでんだぞ！？  
ちっとは自重しやがれ！！」

絶対、アレは身体を壊す量だって……。

「だっはははは、すまんすまん。」

まあ、徹の事は直接聞きゃ良いだろ？

それよりも、今はマクギルのおっさんだろ。」

「まあ、確かに色々と問題も出てきたな。」

「一先ず、こちらも状況の説明、態勢の立て直し。」

最後に、証拠を使えば……。」

ようやく、胃薬を飲みこんだガトウが話に加わってきた。

「この、糞くだらねえ戦が終わる。ってな。」

女性が糞とか言うな。とかガトウに言われたが、そんなのは無視だ。  
無視。

「はあ……。」

まあ、そう言う事だ。

善は急げだ。とりあえず俺は説明と、元老院議員の搜索願を出して  
くる。

こちら側は俺に任せてもらって結構だ。

だから、お前達は。」

「ああ、おっさんの胃がコレ以上荒れる前に戻るとするよ。アッチの説明は任せておきな。私の華麗な戦闘シーンを鮮やかに説明してやるぜ。」

きつと、アレだけで20分近くは話せるぜ。  
とりあえず、台本は用意しておかなくちゃいかな。

「いや、その辺は適当で良いぞ。」

「おめ、それじゃ殆ど話す事が無くなっちゃうじゃねえか。」

「って、貴様はそれだけを話すつもりだったのか!？」

あっ、マズイ。

また、おっさんの胃にダメージが……。

「さ、流石に冗談にだぜ……。ああ。」

とりあえず、おっさんの胃のためにも色々とフォローを頑張らないとな……。。

↳side ラカン↳

ガトウとナギがバカな事を言いあってるのを見て、とりあえず俺はため息を一つ吐き出した。

なんだかんだ言いながら、とりあえず話をそらす事に成功はした。

あの白髪野郎が言った言葉……。

アイツは、テツの事を知っていた。

しかも、『未来人』なんちゆう二つ名まで言っていたな。

思いだすのは、クライアント依頼人の言葉。

600万ドルの賞金首となった、テツという存在。

そして、教えられた二つ名は、『未来を見る男』。

あまりにも、似すぎている二つ名。

多分だが、『未来人』と、『未来を見る男』というのは同じ人間だ。それが、俺等の知っているテツなのか、それとも全然知らない別の誰か、なのかは分からないが……。

まあ、多分、俺等の知っているテツが未来人であっていると思うが、何せ、テツとエヴァっていう二人が一緒に旅をしていて、さらに、黒髪と金髪という特徴もあってるし。流石にこの全てが偶然とは言えんよな？

てつきり俺は、他の奴等も知ってるモンだと思ってたが……。  
まさか、知らなかったとは。

俺が紅き翼に入った理由。

それは、奴等が気に入ったちゅうのも確かにあるが、もう一つ。テツとの接点が欲しかったっていうのもあった。(なにせ、週に3回ぐらいは偶然で会えるんだしな。)

コイツはかなり不純な動機何だがな。

とりあえず、それだけだ。

他の奴等はどうかなんちゅうもんは良く知らんが、まあ俺はそんなもんだ。

ぶつちやけちまえば俺はこの戦争がどうなるうが知ったこっちゃねえし、さらに言っちまえばどうだっていい。

テツとの接点についてだが、裏技として、テツ達のグループに入るとていうのもある。

女の二人旅だ。俺みたいな用心棒も一人ぐらい必要だろ？

というよりも、初めはそうするつもりだったんだ。

ただ、流石に、朝から晩までずっと一緒っていうのは、ちょっと抑えられなく……ゲフンゲフン。

「おいおい、どうしたんだ？筋肉だるま。

いきなり咳き込んで。」

「いや、何でもない。気にすんな。」

少し怪訝そうに首を傾けたが、再びガトウと話始めたので、とりあ





いつの間にか侵入してきた青年。  
おそらく、完全なる世界の人間だろう。

何も抗う事が出来ず、ワシは転移させられた。

警備を潜り抜け、魔法障壁や結界を無視、さらにワシを外へと転移  
させるとは……。恐るべき力だな。

周りを見て思う。  
敵に囲まれている自分……。

思った以上に冷静な頭が叩き出す答えは

死。

こんな事になるくらいだったら、少しはワシも魔法の練習でもして  
おけば良かったな。  
まあ、どれだけ鍛えたとしても、ワシは平均以下の魔法使いにしか  
なれないだろうがね。

ふと思い出すは幼い時。

彼等の様な英雄に憧れた、少年時代……。  
絶望的なほど、自分に魔法の才能がなく、違う道へと移った。

政治の世界では魔法はなど、必要ない。

そもそも、大きな魔法など、衛兵や傭兵の様な戦う者達に必要なだけであつて、普通に暮らしている人間にとっては生活に密着している魔法だけで十分生活出来るのだ。

だから、ワシは違う道へと移つた。

幼き時の夢はいつの間にか忘れ、そして今を懸命に生きて……。

後悔はしていない。人生に悔いがあつたワケでもない。

そりゃ、まだ死にたくはないが、そんなもん皆一緒だ。

それでも、不思議と幼い時の夢を思い出したのだ。

父へと、母へと言つた言葉を。

現実を知らない、子供の言つた微笑ましい言葉を不思議と思ひだしたのだ。

そして、気付く。

ああ、ワシは……

「彼等が羨ましかつたのかもしれない……。」「

どんな、絶望的な状況下に居ても自分の力で全てを切り開く彼等の強さが、羨ましかった。

そんな、英雄達が放つ光に魅せられた。

そういえば、もう一つ別の光があったな。

紅き翼の魅せる光とは違う光。

周りを包み込む様な暖かく照らす光。

そこにあるのが当然の様に、気付かない間に近くにあった光が……。

初めて会った時はビックリしたわい。

あの仮面王子を笑わせていたんだからな。

ふふふふ、紅き翼とテツがどうやって生きて行くか……。

それを見届けれん事が心残りだが、覚悟を決めるとしよう。

出来れば、彼等の行く道に幸多からん事を

「ふい〜……」。

あつ、トイレ何処にあるか知ってますか？」

第三章 世界放浪編 その15 裏

Side マクギル

唐突にテツが現れた時、僅かな混乱が生じる。

何せ、この地域には強力な認識阻害魔法と人払いの魔法が掛っていたのだ。

それにも関わらず、まるで何でもない様にココを訪れた。

しかも、彼等から見れば、テツという存在は一般人であったのだろう。ゆえに、僅かな混乱と、隙が生まれたのではないのだろうか。ワシを考えておる。

そこから、次々と展開が変わっていった。

状況の理解が追いつかず、ワシはタダタダ流されて行く一方であったのだ。

まず、響き渡ったのは犬の遠吠え。

そして

「お前らは、我らが主を傷付けようとしたか？」

何故か黒龍が出てきたのだ。  
それだけでも驚きだというのに

「野郎共、出番だ!!  
気張っていけや!!!」

「やれやれ、全く。  
相変わらず貴方はうるさいですね。  
まあ、気持は私も同じなんです。」

「頑張る、好き、守る。  
えい、えい、おー。」

人間、亜人、幻獣から精霊までもが集まってきたのだ。

そして、行われるのは戦いとは呼べないほど一方的すぎる戦いだっ  
た。  
テツに抱えられながら、逃げたため結果までは分からないが、まあ  
圧倒的な勝利であつただろう。

side ナギ

「ここまでが、ワシが知っている事だ。  
その後、彼はワシを人通りの多い所へと送って行き、そのまま何処  
かへ行ってしまった。」

マクギル議員は最後にそう締めくくり、周りを見渡した。

円をかきながら座っている私達の真ん中には一枚の手紙が置かれている。

「ふむ……」。

その助けに来た者達の言葉を考えると、徹はかなりの地位にいる人間なのかもしれないな。」

「だが、それにしたって妙な点多すぎじゃねえか？」

「確かに、ガトウの言うとおりですね。」

それなりの地位に居るのだったら、あそこまで自由には出来ませんよ。」

アルが締めくくり、微妙が間が出来上がった……。

私の目の前には、何度も読み返した手紙が置いてある。まあ、手紙って言っても、そんな大したものじゃない。

『過激なストーリー力達が、来たので逃げます。』

あつ、でも何か助けられちゃったみたいなので、御礼言っておいて一応、オレからも言っておいたけど、まあ、よろしく。では、またそのうち会いましょう。』

たった4行だ。

正直、手紙っちゅうよりも書き置きって方が正しい。

過激なストーリーカって奴は、多分マクギル議員の話に出てきた黒龍達の事だろう。

この文面を読み取るだけだったら、ただストーカから逃げ回っているうちゆう事になるんだが、あれ程大規模なストーカはありえん。そうやって考えると、この文面は何かを誤魔化しているとしたか思えないんだけど……。

とりあえず、今回テツがやった事というと

まず、何らかの方法で白髪の青年を騙す。マクギル議員を救出した後、白髪の青年と念波でやりとり……。これにより、完全なる世界はいきなり窮地に立たされたって事になるだろ？

さらに、何かテツは未来人なんちゆう二つ名を持っていて、なんか凄い軍隊を持っていて、今はどっかに行った……。

ダメだ……。

私の頭じゃ、色々と無理すぎる。

ただ

「今回の件でテツは、確実に完全なる世界に目を付けられたんだろ？」

そう、それが心配なのだ。

私達が見た限り、テツは戦闘能力が高いワケじゃない。

唯の身体能力があれ程高いっていうのは確かに異常って言えば異常だけど、気やら魔力を使えば、彼以上の身体能力にはなれる。テツも気か魔力でも使いりゃ、かなり強くなるのだらうが、そっち

系はホントに何にも出来ないらしいのだ。

「まあ、心配すんな。

あの2人だったら余裕だろ？」

呟くのはラカン。

正直言つて、一番意外な所から、一番意外な言葉を聞いたって感じだ。

「ふふふ。ラカン。

意外ですね。てつきり貴方が一番心配しているかと思っていましたよ。」

……いい加減隠し事をやめたらどうですか？」

いつもの様に、口は微笑みの形をとりながら

それでいて、目は、その口とはまるで反対の光を灯しながら、アルは聞くのだった。

「いや、別に俺は何も」

「テツの写真5枚」

「実はだな、テツは『未来を見る男』、それでエヴァは『闇の福音』っていう二つ名があつてだな、それぞれ600万と200万の賞金首らしい。賞金がかげられたのは500年弱前。ちなみにこの情報



は深度A。初めは不老不死が原因で賞金を掛けられた……。

つて、アル。

お前、それは卑怯だろ!?

つい、反射的にしゃべっちゃまったじ」

「+4枚。」

「そんで、大勢の賞金稼ぎが彼等を襲うが、その全てが失敗。テツとエヴァは賞金稼ぎを一人も殺す事なく、その全てを自分達の陣営に引きずり込んでいったらしい。」

うわぁ……。

ポロポロと情報が出てくるよ……。

「深度Aの機密となった理由は? +4枚。」

「テツ達を襲っていたはずの人間が全て寝返る。それを危険視した政府が、これ以上テツ達の戦力を上げないようにするために深度Aへと隠した。ただ、その危険さを分からせるために、賞金は懸けたままらし

つてお前、卑劣過ぎるだろ!?

いや、これはアルが卑劣というか

「ラカン、バカすぎるだろ?」

「惚れた弱みだ!!」

仕方ねえだろ!?

まあ、今回は緊急事態だし多少は問題ないだろ。  
しかも、テツが本格的に動き出したからな、こんぐらい知られてい  
るっちゅうのもテツも分かってんじゃねえか？」

流石のラカンも、何の考えも無しに暴露したワケでは無かったよう  
で、ほっと一息。

「では、他に知っている事の全てを教えてください。」

「お前なあ……。  
流石にコレ以上はお」

「妙に肌色が多いテツの写真。」

「全部、ネガごと渡せ。」

「もちろんです。」

妙に肌色が多い……。  
上半身裸とかって事だよな??

っていう事は、その写真を見ればラカンの勘違いが、ようやく終わ  
る。

それで、謎のドロドロ4角関係も終わって、おっさんと詠春は胃薬  
を手放す事が出来る。

まあ、ラカンのショックはヤバいだろうけど、何時かは知る事だし、  
仕方ないよな。

おっさんと詠春は分かりやすいほど、目を輝かせながらサムズアップをアルへと向けていた。

「とは言っても、まあ大した情報はないぜ。

この情報をくれたのは帝国の奴で、2人を帝国に引き入れたら賞金の3倍払うって事と……。後、何かあつたけな？

ああ、すまんが限界だ。

お前達を追いかけてくる時によ、色々と情報を集めたんだが、テツとエヴァに関しては、たまにお前達と一緒にいるってぐらいしか分からなくてよ。」

「そうですね……。」

まあ、良しとしましょう。

とりあえず、テツの普通の写真13枚。」

一枚ずつ確認をし、そしてジャケットの内ポケットへとしまつラカ  
ン……。

その顔は、崩れまくっていた。

この後、この崩れた顔が青くなるんだらうな。  
天国から地獄っていうか、なんか、うん

ご愁傷様。

「それで、ラカン。」

例の、肌色が多い写真とネガ全部です。」

「おう、それじゃ、そいつを全部この箱の中に入れてくれや。」

そう言いながら、ラカンが取り出したのは何の変哲もない、木箱。ちよつと可笑しいとは思うが、もしかしたら、アレなのか？

テツの色っぽい写真は、他の奴には見せないぜ！！

みてえな？

「????？」

ええ、別に良いですけど。」

どうやら、アルも可笑しいとは思っているんだろう。

ただ、それでも怪訝そうな顔をしながら、箱へと写真やらネガをダバダバと入れている。

「はい、これで全部です。」

「よし、それじゃ〜」

鼻歌でも歌いそうなほど、機嫌良さげに笑いながら、ラカンの右腕には気が収束されていき。

「ラカン？」

「一体、何をして」

轟音。

つづいて、爆音。

気付けば、ラカンの右腕は木箱に突き刺さっており、その木箱は火を灯していた。

「なっ!?!」

「ラカン、お前何やってんだ!?!」

「ああ?」

「何って、こんなもん見るわけにはいかねえだろうが?」

「なんとというか、返ってきたのはラカンらしくない言葉だった。」

「ちなみに、木箱の周りでは詠春とガトウが」

「くう、俺達のメシアがあああああ。」

「諦めるな!?!ガトウ。」

「一枚でも救い出せたら、胃薬とオサラバ出来るんだぞ!?!」

「みたいなやりとりをしながら、慌てて火を消している。その光景に」

涙が出そうになった…。

「なんだあ？らしくねえじゃん？

おめえ、随分前に温泉でおっぱい演説して、女湯に乗り込もうとしてたじゃねえか。」

バカの声が大きすぎて女湯まで聞こえてたんだがな。

そんな、煩惱の塊つつくか、エロエロが大好きなラカンが生真面目な事言うのだ。

流石に、こりや変だろ？

問いかけるが、へらへらと笑いながら、適当に流そうとしてくる。

「まさか、おめえ。

テツだからか？」

あつ、固まった……。

なんて言うかさ、ラカンも被害者なんだよな。

確かに、ガトウや詠春は（主に胃的な意味で）被害を受けているんだけど、ラカンだって（主に性的な意味で）被害を受けている。

しかも、かなり本気っぽいじゃん。

そう思うと、ラカンが可哀想で、可哀想で……。

現実の悲惨さを思い知っていると

「あつた。一枚だけ、一枚だけ無事だったぞ!!」

ガトウの、本気で嬉しそうな声が聞こえた。

隣に居る詠春が持っている写真が、2人が勝ち取った成果なのだろう。

「さあ、ラカン。コレを見る。」

そう言い、ラカンに見せつける写真。

そこには、まあ当たり前だけどテツがいた。

上半身裸。

背中にある、大きく斜めに切り込まれた傷跡は、幼い身体と相まって、非常に痛々しく見える。

そして何故か、スカートを履かされ、女の子座り。

カツラだろうか？髪が長くなっており、さらに振り向きながら涙目の上目使い。

「わ、わざわざ、それを拾い上げますか……。」

アルの声が響き、ラカンは鼻から赤い液体を流していた。

第三章 世界放浪編 その16 裏

side ナギ

「ついに、この時が来たんだな。」

ようやく見つけた、完全なる世界の本拠地。  
空中王宮を眺めながら、自然とさっきの言葉が、口から洩れる。

「どうしたんだ？いきなり？」

「いや、徹達と別れてから、なんか随分と遠くに来たなあって。」

徹達と分かれて、およそ3カ月。

さらわれた、アリカとテオドラを救出したり、敵を倒したり、帝国と連合に同盟を設けさせたりと、騒がしく、忙しい日々を思い出す。

「なんでえい、おめえ。らしくねえぞ。」

「うつせえ。最終決戦なんだぜ？」

ちっとぐらい黄昏たっていいじゃねえか。」

「ダメだな。つくか似合わねえよ。」



「うつせえ。」

既に、帝国と連合の部隊の準備は終わっている。ただ、どうにも万全とは言い難いものではあったが……。

「連合・帝国共に本隊到着まで、どうしても時間がかかってしまう。どうにかして決戦を遅らせる事は出来ないか？」

連合側の様子を見てくれているガトウが、遠距離念波を使いながら尋ねてくる。

出来れば、私としても完全な状態にしたいんだけど

「……無理ですね。」

彼等は既に世界を無に帰す儀式を始めてしまっておりす。

黄昏の姫御子もまた、彼等の手の内。

もう、限界です。」

3カ月前の事件により、完全なる世界は追い詰められ、なりふり構っていられなくなった。

奴等がやるうとして『世界を無に帰す儀式』。

この、奴等にとっては存在意義にも等しい、儀式の準備すらも中途半端なまま、不完全な状態でやるうとしているのだ。

何が起こるか分からないという点で、この儀式の脅威は相当な物である。

周りを見渡す。

全員戦闘準備は終わっており、心構えも十分である事も目を見れば

分かった。

周りの奴等は皆、私を見詰め、私の言葉を待っている。

全く……。

適当にブラブラしてたら、いつの間にか私も偉くなっちまったな…

…。

「よおおし。野郎共!!」

行くぜ!!……!!」

応

千以上の声が轟き、最後の戦いが幕を開けた。

side ラカン

「やあ、『サウザンド・マスター』また会ったね。

貴方の様な強い女性と何度も会うというのは、けして嫌では無いんだがね。」

「なんだあ？ナンパは間に合ってたんぞ？」

くだらない事を言い合いながらも、互いが互いを見極めようと観察している。

「そう言うワケじゃないさ。」

ただ、この辺りでケリを付けをつけようじゃないか？という提案だ。そもそも、僕としてもナンパするのだったら、もっとおしとやかな女性を選ぶしね。」

「ぜってえ、おめえボコす!!!」

叫びながら、一人、白髪男へと特攻していくナギ……。  
おいおい。

敵側としては、一対一で正々堂々なんてやる必要はない。

白髪男の左右に居た奴等、全員がナギを仕留めようと、攻撃を繰り返す。

まっ

「そんなに、簡単にやらせはしねえんだがな。」

男の振り上げられた拳を握る。

そして、その手を力尽くで引っ張り、そのまま顔面へストレートをぶち込んでやった。

「たくよお、だいたい女一人に、野郎が五人ちゅうのはどうなんだい?」

何となくの感覚で、上手い事全員が一対一に持ち込めたっていうのが分かる。  
つゝ事はだ。

俺は、コイツをブン殴りゃいいつちゅうわけだ。

ただただ、打つ。

正面からの打ち合っているせいで、さっきみたいに、上手く拳がはいらない。

だからこそ、ただただ打つ。

回転を上げ、威力よりも手数を増やす。

体中が酸素を求めるが、それを無視し、打つ。

速く、速く、速く。

求めるは乱打。

競うは耐久力。

下がれば、そのまま攻め込まれる。

打つのをやめれば、拳の嵐に巻き込まれる。

故に、俺と奴は足を止め打ち合う。

既に、拳の速度は互いが認知出来る速度を超えており、相手の目線と長年培った勘で避け、防ぎ、撃墜させる。

打つ、打つ、打つ、打つ。

そして、出来あがった僅かな間。

吐き出し続けた息を、奴は僅かに吸った。

その瞬間、奴は嵐に巻き込まれた。

「ぶはあ ああああ。  
疲れた……。」

周りを見渡すと、詠春、アル、ゼクトの方もほぼ同時に終わっていた。

そして、ナギはというと……。

「見事……。  
理不尽までの強さだ。」

白髪男の喉元に稲妻の槍を突きつけていた。

「黄昏の姫御子はどこだ？  
……消える前に吐け。」

2人は言葉を紡ぎ続ける。

「フ……フフフ……。  
まさか君は未だに僕が黒幕だと思っているのか？」

男が呟いた瞬間

バシユツ……。

一筋の光線が、男とナギを貫く。

光線の元をたどると、僅かに揺らめく影が見えた。

「いかんツ!!」

一番初めに反応したのはゼクトであった。

ゼクトは複雑な幾何学を描く魔法陣を何重にも発動させる。

「むっ!!」

咄嗟の反応。

何かに気付いたワケでも、何かが見えたワケでも無かった。

ただただ、ゼクトが示す方向に腕を伸ばし、気での防御をしただけ。ゼクトの行動につられて反応しただけだったのだが……

それは正解だった。

気付けば、目の前にバカみたいに魔力が込められた魔法が迫っていたのだ。

「ぬうっうっ。」

無理やり、抑え込もうと、さらに気を込めるが

ボキユッ

腕が引きちぎれた。

「バ、バカな……。」

ゼクトの防護陣を貫通し、さらに俺の気を限界まで込めた防御すらも腕ごと持って行ったのだ。あまりにも、力が違いすぎた。

地が削れ、舞っていた粉塵が、風により晴れる……。

そこには、ソレが立っていた……。

体中の細胞が警告をならす。

背筋が凍り、冷や汗が流れ続ける。

格が違うんじゃない。

存在その物が違っていた。

「ぐっ……。」

何とか、立ち上がるうとするが、身体が動かない。

「こっからは、私に任せな。ラカン。」

肩に穴をあけながらも、ナギは立ち上がっていた。

「いけません!! ナギ!!」

その身体では「

血を流し過ぎて、朦朧とする意識の中、ナギとアルのやりとりが聞こえてくる。

途切れ途切れで聞こえてくる、声から判断するに、ナギとゼクトの2人である化け物の下へと向かうのかなんとか……。

「待て、ナギ。」

奴は……別物だ。態勢を立て直せ。」

「バーカ。んなコトしてたら間にあわねえよ。」

任せておけ。無敵のサウザンドマスター様が何とかしてやるからよ。」

「ダ、メ だつ、行くな。行くなナギ……」

「とりあえず、両腕の止血を。」



コヒュー、コヒュー……。

「ダメだ、アレは別だ……」

朦朧とする意識の中、ナギへと向け、ただただ言う。

体中が警告を発しているのだ、マズイ、逃げろ、勝てないと。

それをナギへと伝える。

あれは、ダメだ

コヒュー、コヒュー……。

「ラカン!!」

ナギは既にいませんよ!?

ラカン!!聞こえていますか!?!」

side アル

コヒュー、コヒュー……。

普通では無い呼吸。

喉に穴が開いた?それとも肺??

詳しい事は分かりませんが、とにかく今のラカンの様子が普通ではないという事は分かる。

「ラカン！！ラカン！！聞こえてますか！？」

魔力が少しでも残ってれば、治癒を掛ける事も出来たんですが、ナギの治療に全ての魔力を使ってしまい、まともな物が出来ない。とりあえず、気休め程度にはなるかと、治癒を唱えますが、発動すらしてくれません。

ラカンと詠春。

2人は動けないナギを守るために、身を盾にし、あの一撃の直撃をくらいましたからね。

やはり、ダメージは私達3人と比べてかなり大きいでしょう。

せめて、両腕から流れる血を止める必要がありますね。

すでに、意識を失っている可能性もありますから、気道の確保。

呼吸音は可笑しいですが、とりあえず、呼吸はしている。

「ぐっ、ナギ……。」

どうやら、詠春も目を覚ました様だ。

「助けに、助けに行かなければ……。」

言いながら、詠春は起き上がろうとしている。

「いけません。詠春！！」

死んでも可笑しくない怪我なんですよ！？」



「グダグダ、言ってんじゃねえ!!!」

ぶん殴る。

「たとえば、明日世界が滅びると知ろうとも、あきらめねえのが、人間ってもんだろおが!!!」

殴り、蹴り、溜めた魔力を矢として放出し、そしてまた殴る。

まだ、グダグダと野郎がうるせえ。

グダグダとワケが分からん事をのたまわって、しかも何だ？人間を救うとか、テメエはそんなに偉いのかよ!?

「人間を、なめんじゃねえええええええええええ!!!」

長年、愛用している杖に魔力をまとわせ、奴を貫いた。

これで、ようやく全てが……。

「私を倒し、お前は英雄となるであろう。」

背後から聞こえる声。振り返ると、そこには

「お、お師匠?」

私の声に反応することなく、お師匠は喋り続ける。

「だが、武の英雄に未来を造る事は出来ぬ。」

呟く、お師匠の周りは魔力が渦巻き、そして少しずつ魔力に指向性を持たせ始めていた。

「破壊しか出来ない愚かな英雄よ。自らに問うがよい。ヒトとは、身を捨ててまで救うに足るものか？」

貴様も我が2600年の絶望を知るがよい……。

コイツは、愚かな英雄へとなる貴様への手向けだ。」

そして、紡がれるは、世界を終わらせるための呪文

「リライツ　ぶべらっ」

「ん？なんか思ったより衝撃が少ないな？？」

あつ、アスナちゃん、大丈夫？」

第三章 世界放浪編 その17

表(前書き)

遅くなりました。  
久しぶりの表……。楽しんで貰えると幸いです。

### 第三章 世界放浪編 その17

### 表

拝啓

お父様、お母様。

早いもので、私が過去だか異世界だか良く分からない所へ飛ばされて、500年(くらい)の月日が経ちました。  
お二人はどのようにお過ごしでしょうか？

ちなみに、僕は走り回るほど元気です。

「こちらゼータ。未来人と闇の福音を発見しました。」

「S級重要人物だぞ。」

さっさと、ヤっちなまえ!!

いざとなったら、あの方の下へ無理やりにも送っちなまえば、あの方が何とかしてくれる!!」

はい、全力疾走で、一時間以上も走り回れるほど元気です。

季節の変わり目ですので、身体を崩されやすい時期です。くれぐれも、お身体にはご用心ください。

敬具

「で、エヴァちゃん！？  
なんで、オレ達追いかけてまわされてんの!？」

「相応の事をしたからだろ？」

つまり、オレが悪かったって事??  
覚えはないけど、なんか気付かないうちに悪い事をやっちゃったと  
か？

それだったら、謝るべきなんだろうけど……。

ちらつと後ろを振り返る。

目が血走り、怒声を上げながら追いかけてくる人々。  
その手には、ナイフやら剣やら、ドスやら、杖やら……。

無理。とてもじゃないけど、許して貰えそうにない。  
というか、こんなに怒るような酷い事を気付かないでやるほど、オ





ちよつと、色々と縮こまった気がする。

「ベータから、アルファへ。

追い詰めた。魔力を込めて、向こうへ転送しろ！」

「魔力、送りこみま」

唐突に声が途切れた。

今までは森の中に居たはずなのに、周りを見渡してみると、鉄格子  
……。

なんか、牢屋っぽい。

ただし、下にはふかふかな絨毯。大きなソファもあり、机の上には様々な果物が所狭しと並べられている牢屋であった。

血走った目をしながら追いかけてきた集団。

そこで、豪華牢屋へワープさせられた……。

これって、誘拐じゃね？？

確かに、牢屋が異常なほど豪華って所が変だけど、そこを気にしな  
かったら、コレは立派な誘拐みたいだ。

ふっはははははは。

甘いぞ。甘すぎるぞ。誘拐犯。

オレとエヴァちゃんは、8回も誘拐されているプロだぞ。  
こんな牢屋、簡単に逃げてやるわ!!!

「よし、エヴァちゃん。

魔法ぶつ放して、牢屋を壊しちゃって。ん??エヴァちゃん??」

腕の中に居たはずのエヴァちゃんが、居なかった。

もっと早くに気付けよ。オレ……。

うっん、大丈夫かな?エヴァちゃん。

まあ、いざとなれば魔法でなんとかするよね??

「エヴァンジェリンは別の部屋にいるよ。

可能な限り、君の手札を削らせてもらったというワケだ。」

何時の間にか、鉄格子の向こうに立っていた白髪の青年が話してきた。

多分、彼も誘拐犯の一員なんだろう。

なんか偉そうな雰囲気醸し出している所から、かなり上の人間なのかもしれない。

「ああ、安心したまえ。彼女に手は一切ださないし、不自由にはしないさ。」

まあ、とりあえずは一安心かな??

嘘の可能性もあるっちゃあるけど、事実自分は豪華な牢屋に入れているんだから、多分エヴァちゃんも大丈夫だろう。

ただ、時間が経つとどうなるか分からないから、ココから何とかして脱出はしなくちゃいけないワケで……。

「君だったら、既に分かっているのだから?この世界の真理を。そして、僕達がやろうとしている事を。」

白髪青年が何か言ってるが、適当に頷きながら流し、思考する。

とりあえず、今のオレに出来る事。つくか、やらんかちゃいけない事は、牢屋からの脱出。エヴァちゃんの救出。あつ、この建物の構造も知らんくちゃいけないな。

「だったら、率直に言っとしよう。」

未来人、徹。僕達の仲間にならないか?

頷くのなら、君達の安全は保障しよう。」

ミライビト???

名字、間違えてやがるよ。この人……。

まあ、名字の間違い云々は置いておいて、今重要な事はオレとエヴァちゃんの安全の確保。



その勘違いを正したいけど……。

でも、その勘違いのおかげで、酷い目に合っていないワケであって。

「だったら、どうする？」

オレを殺すか??」

「いや、止めておくよ。逆にこちら側に損失が出そうだしね。」

ほらあああああ。

絶対勘違いを正しちゃダメだよ。

正したとたん、殺されるよ。オレとエヴァちゃん!!!

「残念だが、君はそのままココに閉じ込めておくのが一番かもしれないね。」

ああ、安心して欲しい。エヴァンジェリンにも手を出さない。今一番怖いのは怒った君だからね。

ちなみに、この部屋は魔法や気が使えないようにしてあるからね。その辺の不自由さは勘弁して欲しい。

ただし、出来る限りの快適な空間……というより牢屋だね。

とにかく、それを君とエヴァンジェリンには与えたつもりだ。

もうまもなく、最終決戦が始まる。

出来れば、全てが終わるまで大人しくしておいて欲しいのだが……。

まあ、強制は出来ないかな？」

一方的に言う事だけ言って、立ち去って行く白髪君。  
とりあえず、手に入った情報で今自分が置かれている立場をはつきりとしないと問題だよな。

とりあえず、オレ達は誘拐された。

これは間違いがないだろう。

そこで、さっきの言葉から出てきた『組織』と『最終決戦』……。

つまり、こんな感じだろ。

なんか誘拐とかで商売をしている組織（多分、マフィア）がオレ達を誘拐した。

実は、その誘拐した男が、実はメチャクチャ凄い奴らしい。

今現在、マフィア同士の抗争があり、その抗争の仲間になって欲しいが、自分達の力では扱いきれないと判断。

仕方がないから、その男はとりあえず捕まえておくとして、間もなくその抗争の最終決戦を行うと……。

完璧だ。

コレだったら、さっき白髪君が言っていた言葉の辻褄が合う。

うん、予測は完璧なんだけどさ……。

このまま行ったら、オレ達抗争に巻き込まれちゃうよね!?

マズイ。非常に不味いぞ。

出来れば、最終決戦が始まる前に、エヴァちゃんを掴まえて逃げちやいたいんだけど、今閉じ込められてるしな……。

ドコオオオオン

響き渡る爆音……。

なるほどねえ、魔法世界の抗争だ。そりゃ爆音ぐらいなるよね……。

しかも、何か建物揺れたし……。

「ヤバいって、崩れる。建物崩れちゃうべ……！」

パニックになり、鉄格子を手でガシャンガシャンと揺らしまくると、鉄格子が曲がった。

忘れてたけど、オレの身体能力って良い方だったけ……。

よっしゃ、そう言う事なら。



鉄格子を両手で持ち

「どりゃあああああ。」

無理やり開く。

段々と、格子間の隙間は広くなっていき。

何とか、横になれば通れるくらいの隙間を作る事が出来た。

「案外、オレってスゲエ。」

自画自賛した後、ラカンさんが、自分の何十倍もある竜をひっくり返していたのを思い出した……。

「こじじゃ、コレぐらいが普通なのね……。」

ちょっと落ち込んだのは内緒だ。

とりあえず、エヴァちゃんの搜索をしなくちゃな。

とは言っても、建物の構造が分からんから、適当に歩き回るしか手がないんだけど……。

爆音が度々鳴り響くなか、小走りに右に曲がったり、左に曲がったり、こけて壁に激突したら、壁がグルリと回ったり……。そんなこんなしながら、辿りついた所には

「アスナちゃん……。」

変な光る模様の上に座るアスナちゃんがいた。

「……………テツ??」

そう問うアスナちゃんの瞳には、光がなく、鈍い色を携えていた。

「そのとおり。」

とりあえず、ココから逃げようか。ココってば滅茶苦茶危ない場所  
っぽいからさ。」

アスナちゃんを連れて、エヴァちゃんを捜して、抗争に巻き込まれ  
る前にオサラバ……………。

異常なほど難易度が高いよ、これ。

「ムリ、この上から私は動けない。」

どうやら、アスナちゃんは怖くて、腰が抜けた状態のようだ。  
とりあえず、抱えて逃げれば問題ないね。

「おっけ〜、おっけ〜。お兄さんに任せておきなさい。」

「ダメ、近付いたら消え」

今まで、多くの不安があったのだろう、何かを言いきる前に、言葉  
をかぶせる。

少しでもアスナちゃんが安心できるようにと。

「大丈夫、大丈夫、ご安心をっつとつとつと。」

途中で、地面に落ちていた小石に躓きながら、喋った。

躓いてしまったせいで、小石はそのまま飛んで行ってしまい、アスナちゃんの横をバウンドしながら進んで行った。

「あはははは、締まらないね〜。

とりあえず、アスナちゃん、脱出しようか。」

笑って誤魔化しながら、アスナちゃんに近付く。

淡く発光していた幾何学模様は、何時の間にか光を消しており、少し薄暗くなっていた。

アスナちゃんは抱えられたという事には何にも反応せず、ジッー  
ーっとオレを見てくるアスナちゃん……。

そんなに見つめられると恥ずかしいんだけど……。

「よし、アスナちゃん。それじゃ逃げるぞ。」

「うん……。」

そして、一步踏み出した瞬間。

ガアアアアアン

ブオオオオオオオン

今まで鳴っていた爆音とは一味違う物が響き渡った。

そして、足元からはミシツという、非常に嫌な音が聞こえる。

「いやあああああな、予感がするなあああああああ。」

とりあえず、ダッシュ。

足元に走るヒビから逃げるため、とにかく走る。

暫くの間、オレは頑張ったよ。

ゴールがあるかどうか分からない追いかけっこ。

ただ、10分もしないうちに、その追いかけっこには負けてしまい、オレは堕ちた。

ズドドドドッ

そんな、破壊音で俺は眠りを妨げられた。

出来れば爽やかな目覚め、といきたい所だがダメだったようだ。

目を開けば、石で出来た天井が半分と、アルの顔が半分……。

目が合うと、微笑むアル。

「ようやく、起きましたか。」

「ああ、起きた。起きたから、顔をどかしてくれ。」

視界の半分を占めるほど顔が近いのだ。

徹だったら、大歓迎なんだが、アルは勘弁願いたい。

「それで、調子はどうだ？」

「調子??」

「ああ……、ちと腕がイテエが、悪くわねえぜ。」

エヴァに聞かれたもんだから、そのまま普通に返事する。

身体を起ここし、周りを見渡すと、自分が高そうな城っぽい所の床で寝ていたようだ。

そっぴや、俺ってば墓守り人の宮殿で寝ちまったんだっけ？

「エヴァンジェリン、ラカンの腕は……。」

「幻肢痛って奴だろ？  
魔法性の義手でも与えてやれば治ると。」

徐々に頭の中の霧が晴れていく。  
最終決戦。  
拳の嵐。

そして、『奴』の姿。

「おい、ナギは??  
ナギはどう……ん??」

なんで、エヴァがココに居るんだ？」

「テツと共に誘拐されたそうです。」

あつ、そうそう。彼女に御礼しておいてくださいよ。  
エヴァンジェリンが治療してくれなければ、多分死んでましたから。」

「おお、そうか。エヴァの嬢ちゃん、ありが……誘拐??」  
ちよつと待て。

アルの言葉に結構ヤバい事があつたぞ。

いや、確かに自分の生命の危機も少しヤバい事なんかもしれねえが、それ以上にヤバい事だ。

アル曰く、エヴァは誘拐されてココまで来たと言う事だ。しかも、”徹と共に”……。

OK、とりあえず情報の整理と考察だ。

徹とエヴァは誘拐されてココ、墓守り人の宮殿へと来た。現在、墓守り人の宮殿では敵対組織の完全なる世界との最終戦争が始まっており、かなり緊迫した空気。

敵対勢力は、僅かな人間と大量な影の魔法による傀儡が主。最初は、もつと多くの勢力があったのだが、そいつらの粛清はある程度出来ているので、現在の敵勢力はそんなもんだ。

さて、そんな戦場に誘拐されてきた徹。

しかも、彼女はそりゃもう本当に可愛い女性だ……。

確実に安全だと言えるだろうか？

いや、言えまい!!

「徹はどうなったんだ？」

「……今の所行方不明だそうです。」

「……どうやら、エヴァンジェリンと別々にさせられたようです。」

「私の方は結構警備っていうのか？」

その辺が杜撰だったからな。楽に逃げれたよ。

というか、誘拐されたって事にもいまいち気付かないような待遇のよさでな。

普通の豪華な部屋に多くの食料付きだっただけ。さらに鍵すらも掛つていなかったしな。」

つまり、エヴァには何時逃げられても良かったって事だ。

そうになると、この誘拐の本当の目的は徹ということになる。

エヴァがそれだけ良い待遇だという事は、徹もそれほど酷い状況では無いと思うのだが……。

「っと、これで詠春の治療も終わりだ。

まあ、とはいっても応急処置に過ぎんからな。後で設備の整った所にでも行って来い。」

「ありがとうございます。」

「まっ、貸し1だ。覚えておけよ。」

やっぱり不安だ。

確かに、エヴァに何にも手を出したり、酷い事をしていないという点を考えれば、徹だけに暴力やらチヨメチヨメやらをやるっていう可能性は限りなく低いと思う。

ただ、その可能性っていうのは低いだけであって、ゼロというワケではないのだ。



確かに、徹は凄い娘だという事は俺自身良く知っている。  
ただ、それ以前に彼女は女性なのだ。

「ぐぐつ……。」

「動いてはいけません。ラカン。」

いくら応急手当をしたらからと言って、重症には変わりないんですよ。」

まあ、確かにな。

自分の身体だ。自分が良く分かっている。

さらに、痛む腕を見てみりゃ、両方ともなくなっていやがるんだぜ??

そんな身体だ。

自分が重傷つちゅうのも分かっているし、下手な事すりゃ死んじまうちゅーのも分かっている。

だけどな、それでも……。

「惚れた女のためだ。ここで動かんかったら、男が廃るってもんだ。」

腕が無いせいで、滅茶苦茶違和感があるが、何とか立ち上がろうと身体を起こす。

「……お前の気持ちは分かった。  
とりあえず、寝とけ。」

エヴァの声が聞こえたと思ったとたん、視界が闇に落ちた。

気を失う寸前見た、エヴァの顔は何故か苦々しかった。

↳ side エヴァンジェリン

「ありがとうございます。」

ホントは私がやるべき事だったのかもしれないが……。」

「せっかく治療したのだから、無駄に広げて欲しくなかったただだ。」

少し、本当に少しだが、自分の命を賭けてまで、テツを助けに行こうとしたラカンが眩しかった。

確かに、テツが危険に陥れば、私も助けに行こうとするだろう。

それこそ、命を賭して。

だが、テツはそんな危険になった事は殆どない。

テツのためにと覚えた治癒の魔法も、他の者に使う方が多いほどだ。

数回、ほんの数回、彼の危険を助けた事はあるのだが、自身が不老不死故、命を賭けるという状況にはなつた事はなかった。

テツをこうまで思ってくれている事が嬉しい。テツへの思いで負けた様で悔しい。

そんな、下らぬ感情が胸を渦巻いていた。

「……ラカン、心配そうでしたね。」

「まあ、徹だし大丈夫だろ。」

正直に言ってしまったえば、これに尽きる。

人々の動きを読む計算能力。

どんな所に居たとしても、自分の望む結果をだす柔軟な思考。

それを考えれば、過小評価しても十分に無事だと考えられる。

確かに、心配ではあるが……。

「そういえば、ラカン。」

この前指輪を買っていましたよ。

かなり良い奴。さらに魔法で伸縮自在の物を。」

「おい、まさかそれは……。」

嫌な予感がしてならなかった。

「ええ、この戦いが終わったら徹にプロポーズするつもりのようにです。」

「バカだ。アイツはバカだ!!!」

何度も何度も何度も、私達はテツは男だと言っているにも関わらず

……。

しかも、プロポーズだと!?

「ええ、私も『それは死亡フラグだからやめておきましょう』って再三忠告したのですが、無駄でした。」

「って、そつちか!!」

そつちを注意したのか!?

徹が男だからと教えるべきだろ!?

「いえ、その辺はもう既に諦めました。」

「そこは、一番諦めてはいけない事だろ!?

いつも笑顔を見せているせいで、全く分からなかったが、どうやらアルもアルで結構精神的ダメージがあるようだ。

しかも、そのダメージが大きすぎるせいか、変な方向に達観してしまっている。

「テツとラカンでしたら、きっと素晴らしい家庭を持つ事が出来るかと。」

あつ、きっと子供は二人ですね。

テツに良く似てのんびりとした長男、そして妹はラカンに似て少々活発な」

「出来るか!!アイツ等は男同士なんだぞ!!!」

どうして、子供が出来るのだ!?

なんか、アルも色々と限界が近い様だ。

「仲間を応援するのが、本当の仲間の様な気がしてきました。」

「仲間だったら、間違いを正すべきだろ!?

「私にも、結構重要な使命があったりするんですよ。私のマスターが友を思って頼まれた重要な使命が……。」

でも、ラカンのために、その使命を少し歪曲しちゃっても良いかなって思い始めるようになりました。」

「話の前後がどうしようもないほど繋がっていない!!!」

何とか、何とかしてアルを正気に戻そうとしていると

ズズン

突如大きな破壊音が鳴り響いた。

反射的に、その方向へと顔を向けると、ナギが『奴』に拳を決める姿が視界に映る。

そして、フード姿のモノが黒い霧となり霧散する様子だった。

「いやはや……。」

まさか、倒してしまうとは……。」

あんな軽口を叩いていた割に、緊張状態にあっただらしく、アルは深いため息を吐くと同時に肩の力を抜く。

「これで、一通りの戦争は終わったのか??」

「ええ、そうです。」

まさか、ナギがああな化け物を倒すとは……。」

ふむっ

「まるでナギが負けると思っていたみたいではないか。」

「事実思っていましたよ。」

……勝っちゃったみたいですけどね。」

『金髪少女はあはあ』

「念波が来たみたいですね。」

「……貴様、先ほどの奴はなんだ？」

「着信音ですか??」

「そんな、アホみたいな着信音、今すぐ変えろ。」

「フフフ。」

ナギ、全く驚かれますよ。貴方には。貴方はいつも私の予測を」

「人の話を聞けえ!!!」

## 外伝

Side 千雨

そして…

ナギは魔法世界に知らぬ者なき英雄となり、世界は平和になった。

メデタシ、メデタシ

「って訳だ。」

最後に、おっさんはそう締めくくったのと同時に、どっと周りが沸く。

「すげえ、おっさんマジで英雄じゃん。世界救ってるし。」

「最後、大スペクタクルやったしなあ」

「にしても、気になったのは」

などなど。

とにかく、周りは沸いていた。

だが、どうにも私の胸の中では霧がかかっており、どうにも周りと同じようにはなれないでいた。

霧、形容しがたい不信感とでもいうのだろうか？

なにかが、引っかかっている。

おっさんの事だから、嘘は言っていない。

これは間違いない。

だが……。

何かが可笑しいのだ。

「もつとも奴がマギステル・マギとして活動するのは、この後の10年間だな。」

「なるほどな。」

嘘は言っていない。

確かにその通りだろう。

とはいっても

「まったく。おっさん。」



何がハッピーエンドだよ。

いろいろとはしよったろ??」

大事な部分をすつとばしていたんだ。

「オスティアの事なんて、オールカット。

しかも仲間だった徹やエヴァンジェリンを、麻帆良へと封印した理由なんて、触れもしやがらねえ。」

「どーゆう事??」

千雨ちゃん。」

「ラスボスを倒しても、世界はそう簡単に平和にはならねえって事さ。」

実際には戦争が終わっても、色んな問題が残ってたんだろ。

さらに、このオスティアじゃ、人災か災害か分からん様なデカイ規模の”何か”も起こったはずだ。」

「そうか。」

その最後に残された最大の問題が……

あいつらなんですか?」

「少し違うが、そんな所さ。」

「そして、僕達はそれをやらなければいけないと……。」

「とうとうより、あの遺産を受けつくだお前達にしか出来ない事……  
って所かな??」

まっ、若い世代にバトンタッチってだな。」

そう言いながら、おっさんの身体は透けて行く。

「おっさん。その身体は!??」

「ん??」

まっ時間切れって奴だな。」

なんでもないかのように、笑みを浮かべながらおっさんは、消えて行く。

「ぼーず。」

まあ、そんなに気負うな。

世界云々なんて別に大したもんじゃねえし、考えんでもいいしな。

ただ、これだけは覚えておけよ?

お前には幸せになる義務があるっちゅう事を。」

「ラカンさん!!!!!!」

「あれから、もう半年も経ったんだな。」

最終決戦を前に、私の口から、そんな言葉が漏れた。

「いきなり、どうしたんですか？」

千雨さん。」

聞いてくるネギは、半年前と比べ、随分と身体つきが良くなっており、年齢詐称薬を食べた姿に近づいていた。

「いやな、半年前の事を思い出してだな。」

私も、随分とファンタジーに染められちゃった。ってな。」

「ははは、すみません。」

「まったく、私は平凡が良いって何度も言ってたっていうのに、お前は無理やり……。」

まっ、今さら逃げるってワケにはいかねえんだがよ。」

なにせ、最終戦直前だ。

いくら私と言えども、流石にこのタイミングで逃げ出すつもりはな

いぢ。

「まあ、文句なら、この戦いが終わった後に存分に聞きますよ。」

そう言いながら、コイツは、前を見据える。

「よし、行こう！…皆！…！」

その合図と共に、皆は飛び出した。

時代に、新しい旋風が巻き起こった瞬間であった。

外伝（後書き）

とまあ、冗談はこのくらいにしたいと思います。

ちよつと、ふざけたかった。

反省はしているが、後悔はしていない。

ちなみに、今回のお話、本編には全く関係がないのでご了承ください。

第三章 世界放浪編 その19

裏(前書き)

短めです。

『フフフ。』

ナギ、全く驚かれますよ。貴方には。

貴方はいつも私の予測を』

『人の話を聞けえ!!!!』

等々、向こう側は相当騒がしかった。

「ハハハハ……。」

とりあえず、全部終わったよ……。

「姫子ちゃんは、テツが救出してくれた。」

そして……お師匠は……。

『こら、エヴァンジェリン。やめなさい!!』

って、ラカン!?

どうして起き上がった!?

って、何処に行こうとしているんですか!?

ああ、もう!!!!!!!!!!』

向こう側では、かなり騒がしい。

いつもの、その騒がしさ……。

その、何気ない『いつも』が、お師匠がいなくなった事を一層際立たせた。

「……とりあえず、詳しくは合流した後で話ささ。」

それまでの間に、色々整理しなくちゃいけないな。

その後、傷で動けなかった私達は救出され、救護施設へと入れられる事になる。

施設の設備が、かなり良かったため、2時間程度で、日常生活に差し当たりのない程度には回復が出来た。

↳ side アリカ↳

戦争が終わった。

この報告は、一気に知られわたり、皆が浮かれ、祭り気分であった。

連合と帝国。

殺し合った仲であるため、複雑な心境である事は違いないが、それでもお互い歩み寄ろうとしていた。

お互い、相手方に恨みはある。

それでも、異常なほど浮かれる事によって、彼等は、それを忘れようとしていた。

これは、民達の鋭い感覚というのもあるだろう。



普通だったなら、ここまで簡単に歩み寄ろうとはしない。  
ましてや、つい数十日前まで戦争をしていたのだ。

ただ、彼等は何となく感じていたのだ。

この戦争に、どうしようもない気持ち悪さを、何かが違うという違和感を。

だからこそ、歩み寄ろうと考えられるというのもあるのである。

街が一望できる広場へと辿りつく。

そして、そこには……

「テツ……。」

何処か、憂いを帯びた目で空を見つめるテツがいたのだ。

「おっ、ハロー。」

振り向くと同時に、笑顔を振りまき始めた。

「この騒ぎがなんなのかって思ってたらさ、なんと戦争が終わったからだってよ。」

いや、オレってば世間に疎いせいか、戦争が起きていたって事すら知らんくてさ。」

彼は、道化のふりをし続ける。

まるで、それが義務とでも言うのが如く……。

「テツ。」

「へっ??」

あれ??

……うん。なんで抱きつかれてるの?オレ。」

既に、タガは外れていた。

「テツ……。」

俺と共に来てくれないか……。」

何かを、背負っているテツを楽にしてやりたい。

危険な状況である、自分を支えて欲しい。

共にいたい。

自身の望み、彼の幸せ。

膨大な量の思いが俺の中を渦まき、矛盾を生じさせている事を分かりながらも、俺はテツに願う。

その願いが、自分本位の物と、気付きながらも、俺は止める事は出来ないでいた。

「オレは」

テツがゆっくりと、言葉を紡いでいる途中に

「何をやってるんじゃない?」

「おい、コラッ。」

モヤシ野郎!……!」

予想外の事が起きた。

「いやっ、こ、これはだな……」

「言い訳は良いから、さっさと手を離せ！……！」

そ、そうだ。

とりあえず、テツを離さぬと、面倒な事というか、非常に恥ずかしいというか

「俺が一世一代の大告白をしようって時に……この、モヤシ野郎は……。」

「って、貴様はまだプロポーズをする気なのか!？」

「応、もちろんだとも。」

それでな、エヴァの嬢ちゃん。

どんな所が良いか、アドバイスが欲しんだが……。」

「ええくと、俺はこれで。」

「おっと、アリカ。」

逃がさねえぞ。テメエには聞きて〜ことがあるからな。」

言いながら、俺の襟首をもつラカン。

無理やり逃げようとするのだが、ビクともしない。

助けを求めるために、紅き翼の面々の方を向くが

「なあ、詠春。」

俺さ、旅に出ようと思うんだ。」

「良いな。」

俺も丁度旅したい気分だな。」

「フフフ。」

きつと大丈夫ですよ。

きつと、テツとアリカは幸せになれますよ。

だから、マスター。安心してください。」

「マズイ。アルの目が、何処か遠くを見ちまっているよ!!」

「むう………」

向こうの方が、大変そうだった。

というより、何故かアスナに睨まれているんだが……どうしたんだ???

### 第三章 世界放浪編 エピローグ

アリカ・アナルキア・エンテオフュシア

歴史的悪人と言われ、彼の名が一番初めて出てくる人間は、けして少なくはないであろう。

「災厄の王」とも呼ばれた男。

彼こそが、かつて魔法世界を二分化した戦争、『大分裂戦争』を引き起こした張本人である。

この戦争では、紅き翼と言った英雄をだす一方で、彼、アリカ・アナルキア・エンテオフュシアのような、悪を生みだした。

いや、戦争によって生み出されたというには少々語弊がある。なぜならば、彼自身が戦争を引き起こしたからだ。

当時、彼は賢王と称えられていた、父王を大分裂戦争の混乱を利用し、殺害。

オスティアの王となる。

彼は父が「完全なる世界」の傀儡であったため、クーデターを起こしたと後々語るが、当時のメガロメセンブリアの調査結果から極めてその線は薄いといえるであろう。

ただし、不可解な点が多々あり、様々な研究が行われている。

書物に載っている事として、まず彼が大分裂戦争を引き起こしたと  
言う事。

彼が完全なる世界、紅き翼の両方と関わりを持っていた事。

そして、大分裂戦争を終わらせるのに、彼の力がなければ不可能で

あつたという事である。

アリカは、幼い頃から優秀な人間であつたが、常に無表情であつたと伝えられる。

その表情から、なににおいても興味を持っていなかった。

その無表情は有名であり、仮面と呼ばれていた。

人との関わりも無く、王族としてどうしても出なくてはいけない状況にならない限り、彼は表へと出る事は無かつた。

これは、自身から出なかつたのか、それとも出させて貰えなかつたのか。

その辺りは謎であるが、閉ざされた空間により、彼の精神は歪になつてしまつた。

常々聞かせられるのは、自身が後の王になると言う事。

それと、王になるために強制される勉強。

彼の世界はそれだけで占められていた。

それゆえ、彼は自身が王になるべく存在。王にならなくてはいけない存在だと思ひこみ始める。

年を重ねることによつて、彼のその思ひは歪んだ形で強くなる。

そんな時、彼は『完全なる世界』を知る。

当時から、王になるための勉強をしていた彼としては、その組織を掌握する事は、造作もないとは言えないが、可能であったのだろう。

帝国と、連合を裏で操る『完全なる世界』。

それを、さらに裏で操りながら、彼は大分裂戦争を起こした。

その混乱に乗じて、自身が王となるために。

だが、途中で綻びが起きる。

『完全なる世界』が暴走を始めたのだ。

そして、『完全なる世界』が求めたのは、魔法世界の消失であった。

流石に、それを見逃す事は出来なかった。

彼は、王になりたいのであって、混乱を望んではいなかったのだから。

紅き翼が得た、完全なる世界が裏で操っている証拠を手に、帝国の第三皇女と同盟を結ぶ。

そして、孤立した完全なる世界を攻めに入った。

戦後、アリカはメガロメセンブリアにより、裏切りの証拠をつかまれ、ケルベラス渓谷にて処刑される事となる。

『世界の悪人』より一部抜粋



幕章 赤き翼編 その1

Side 徹

ゼクト君が、中二病になり、家出しました……。  
いや、だってアレだよ!?

なんか、世界の危機だの、仲間になれだの……。  
喋り方も変わっていたし、もう、完璧に中二病が発病しているよね  
!?

とりあえず、適当に合わせながら、丁重にお断りした所、ショック  
だったのか家出をしちゃいました……。

客観的に見れば、そんな感じの別れ。

でも、これは彼の冗談だったんだろうね。

確かに、ゼクト君ってチッコイけど、実はかなりの長生きらしい。  
まあ、オレ達と同じって事だ。

そんな、年食った人間が中二病を発症するだろうか？  
多分、ないと思う。

丁度戦争も終わり、キリも良いって思ったんじゃないかな？  
それで、一人旅に出る彼なりの別れの挨拶……。

まあ、随分と”アレ”だったけど。

でも、バカをやってくれたおかげか、別れがあまり悲しい物になら  
なかつたな。

寂しいけど……。

そんな事を考えていたせいか、アリカに心配かけてしまい、慰めら  
れてしまった。

いきなり、抱きつかれたりしてかなり驚いた。結構マジで。

side ラカン

「何をやってるんじゃない？」

「おい、コラッ。」

モヤシ野郎！……！

見た光景は、衝撃的な物であった。  
何せ、テツがアリカに抱きしめられているのだ。

俺だって、一度もそんな事がないっちゅうのに、

「いやっ、こ、これはだな……」

「言い訳は良いから、さっさと手を離せ!!!」

俺が一世一代の大告白をしようって時に……この、モヤシ野郎は……。  
」

上に来ているジャケットのポケットに指輪を入れ、テツがOKしてくれば、スグにでも結婚しようっていう意気込みだっというのによ!!!

「って、貴様はまだプロポーズをする気なのか!？」

「応、もちろんだとも。

それでな、エヴァの嬢ちゃん。

どんな所が良いか、アドバイスが欲しんだが……。」

他の奴等から聞いた所

猫耳を付け、胃薬を片手に、ラカインパクトを放ちながら、テツにプロポーズするように言われた……。

流石の俺でも、こんな事やっても上手くない事ぐらい分かっている。

というか、人が真剣だっというのに、アイツ等ぶざけ過ぎだろ？

まあ、そう言うワケでテツに一番近くって、まともなアドバイスをくれそうな嬢ちゃんに聞いてみる。

「ええ〜と、俺はこれで。」

「おっと、アリカ。」

逃がさねえぞ。テメエには聞きて〜ことがあるからな。」

逃がさないように、モヤシの襟首を持ち、ぶら下げる。

何とか逃げようとしてるみてえだが、無駄だ。

「えっ、ラカンさんプロポーズするの!?!」

「応。」

それでだな、どうやってプロポーズすればいいかって悩んでいてな  
っ!!!!!!」

いたって普通の反応だ。

ダチが、プロポーズする云々言っているのだ。

そりゃ、気になるであらう。

俺だって、助言が欲しいから、こつやって堂々と話したんだが

流石に、本人の前で、話しちゃダメだろ……。

「へ〜。  
そうだね……。」

オレだったら、男らしくが率直にってのが一番良いと思うなあ。」

テツは『男らしく率直に』プロポーズされたい。

いや、さっきは本人の前で相談してたせいで落ち込んだが、テツが  
されたいプロポーズ方法を『本人から』教えて貰ったっていうのは、  
ある意味プラスじゃねえか？

「男らしく、率直にか……。」

「そそつ。」

まあ、オレの個人的なものだからね。役にたつかどうかは分からん  
よ?。」

いや、むしろ一番必要な情報だぞ。それは。

「テツ。」

好きだ。結婚してくれ。」

勢いで言った感はある。

だけど、この気持ちは、本当の事で、一か月以上ずっと言おうと思  
っていた事。

自然と心臓は高鳴り、喉が異常なほど渴く。

そして、テツが口を開く瞬間が異常なほどゆっくりに見えた。

「そそっ。」

そんな感じで、直球でいけば良いと思うよ。」

間違いなく、この瞬間、時間は止まっていた。

そんなこんなで、気付けば俺は温泉に入っていた。

勢いとは言え、覚悟を決めたプロポーズが、まさかの勘違いで終わってしまった、意気消沈している間に、他の奴等に連れてこられたらしい。

温泉っていえば、オスティア名物のため、混んでいるのだが、外が祭りのため、随分と空いていた。

「確かに、全く俺は男として見られていないのかもしれない……。」

なんの感慨もなく、テツは普通に勘違いを起こしたのだ。

これは、テツにとって俺が恋愛の対象として全く見ていないって事……。

はぁ……。

こうなりや、当たって砕けるか。  
なにも、プロポーズは一度しかしちやいけないっていうワケじゃねえしな。

流石に、しつこ過ぎちやいかんが、まあ何とかなるだろ。

「いや、それにしても良い湯だね、タカミチ。」

「いや、あのお、テツさん。」

あまり、ウロウロされると問題があるといつか、見つかるといつか……。」

「見つかるって、何に？」

「と、はっけ〜ん。」

あつてはならない声……。

そして、その声に視線を当てれば、テツとタカミチの姿が……。

↳ side ガトウ〜

怖れていた状況。

それは、完全なる世界が魔法世界を崩落させることであつたり、未熟な儀式により崩落以上の何かが起こつたり、等々。まあ、様々な物があるだろう。

そんな中に、これも含まれていると思うんだ。

『温泉でラカンとテツが会つ』

うん、何が起こるか想像が出来ない。

そんな、怖れていた状況が今、眼の前で広がっていた。

異常なほどのストレスを感じ、口が寂しくなる。

無意識の内に、手は胃薬を探しているが、温泉に入っているため、残念ながら持っていなかった。

「「はあ……。」」

無意識に吐いたタメ息は、何故か詠春と同時だった。

「ああ、テツ。

ちよつと、ラカンと、俺達とで大人の会話があるからな。

タカミチと一緒にサウナとかでも行つててくれないか？」

とりあえず、タカミチを使い、テツには退場して貰う事にしよう。彼が居ちゃ、まともな会話が出来るとは思えないし。

「りよ〜かい。

つていうワケで、タカミチ君、行こつか。」



「あつ、ハイ。」

とりあえず、テツの退場は、彼が非常に素直な性格だったため、本当に簡単に終わった。

そして、次……。

「ああ、ラカン……。

とりあえず、俺達の言った通りだろ??

テツは男なんだ。」

ラカンのケア(?)をしなくちゃいかん。

何せ、ラカンは男にプロポーズしようとしていたのだ。

彼の精神的ショックは、かなりモノであろう。

とはいっても、不幸中の幸いって所だろう。

テツへのプロポーズは、未遂で終わっていた。

とりあえず、非常にギリギリな所だが、ラカンはまだ、引き返せられる所に居るのだ。

ココでしっかりとラカンが色々を受け止めてくれれば、俺と詠春の胃薬生活も終わってもんだ。

詠春は、その辺りを全部俺に任せるつもりで、隣で頷いているだけだった。

「とりあえずだな、お前はしっかりとそれを受け止めてだな、新しい人を……。」

おい、ラカン？

お前、鼻から流れている、その赤い液体は何なんだ？

どこかで、ぶつけたんだよな！？

そうだと行ってくれ！！！」

「お前な、惚れた奴を見りゃ、鼻血ぐらいでるだろ？」

何でも無かったかのように、頭に乗せてあった手ぬぐいで鼻をふき取るラカン……。

「ラカン、まだテツが女だと思っっているのか！？」

なにも、身体に纏まとっていない状態で、テツは俺達の前に現れたのだ。ぶっちゃけ、胸が全くない事も、下半身に男の勲章がしっかりとあったのも、見えていた。

それだけ、確たる証拠があったのだ！！

流石に、それだけを器用に見ないようにする事は無理であろう。

「いや、しつかりと分かったぜ。

テツは、男だ。」

……まさか。

俺が感じ取った嫌な予感を、隣の詠春も同じように感じ取ったのだろう。

静観を決め込んでいた詠春がたまらず、口を出す。

「ラカン、お前

いくらなんでも、それだけはダメだ!!!

お前、もう一度考えてみる。真実を見るよ!!!」

「そつだぞ。

生産性が全くない、意味のない事っというか、もうだあああああ  
ああ。

とにかく考え直せ!!!!」

「はあ、全く。

全然分かっていないみてえだな。

俺はな、テツだからこそ惚れたんだぜ？

そりゃ、些細な勘違いがあつたが」

「全然些細じゃない!!!!」

思わず、漏れた叫びを無視して、ラカンは話しを続けやがる。

「そんな小さい事で、俺の気持ちは変わらん。」

「全然小さくない。っというより、変わるべきだろ!!!その気持ち  
は!!!!」

詠春の叫びも上がった。

全くの同意見だ。

「真実？意味？

そんな言葉、俺の性にゃあ、何の関係もねえのさ。」

うっん、アルにでも頼んで俺を女に出来ねえいかね？？

そうすりゃ、アイツとの子も出来るし。

等々。

呟くラカンの隣で、俺達は真っ白に燃え尽きていた。とりあえず、胃薬の量がまだまだ増えて行くと思う。

〈side エヴァンジェリン〉

「それで、アル。

私に一体何の用だ？」

何時もの様に、笑みを浮かべ、アルビレオ・イマは私を見つめる。あからさまに、テツ達を風呂へと誘導しし、そして私だけを、この場へと残した。

明言はしていないが、彼が私に何らかの用があると言う事は間違い

がないであろう。

「テツとラカンの明るい未来設計についてのご相談をした

冗談です。ですから、その断罪の剣をしまってください。」

仕方ないので、アルの喉元に付けた断罪の剣を解除してやった。

「それで、結局なんなんだ？

貴様の用は？」

「……組織、ナイト・メア。

悪の研究組織とされ、事実その組織が研究していた事は協会からは禁忌とされるものでした。」

唐突に、アルは流暢に喋り出した。

何時もの笑みは消え、語る様に、ゆつくりと言葉を紡ぎだす。

「一体、何を言っているんだ？

貴様は??？」

話の前後が繋がっていない、唐突な話し。

あまりにも、彼らしくない、破たんした話し方。

「その禁忌の研究とは、吸血鬼の真祖に関する物。

今から、500年近く前から、100年もの間続けられていた物です。」

私の問い掛けは無視されていた。

何が何だか分からないが、とにかく私はアルの話しを聞かなければいけないようで……。

「ある家系が、代々長を務め、そしてその長は自身を『ナイト・メア』と名乗っていました。」

ちなみに、その『ナイト・メア』というのはですね、初代長にちなんでつけられた称号のような物なんですよ。」

全く意味のない、関係のない、取りとめのない

そんな会話。

理解が全く出来ていないのに、不可解な事に私の心臓の鼓動は早くなっていた。

「初代長の名は『メア』。」

夢を操る魔法を得意とし、人間ながら吸血鬼の友となった女性。

彼女の名と、その得意魔法から『ナイト・メア』と呼ばれるようになり、何時しか長の称号となりました。

そして、彼女が研究したのが、吸血鬼の真祖という呪いをとき、人間と戻る様にするための魔法。」

随分と、久しぶりに聞く名前が出てきた。

人間でありながら、私のライバルであり、友であった、懐かしい名前。

「……あれだな。」

まあ、今の私は非常に動揺しているさ。  
何せ、随分と久しぶりに聞く名前が、全く関係のなさそうな貴様から出てきたんだからな。

だがな、どうも不可思議な所が多くてな。

とりあえず、アルが言っている”メア”は、私が知っている者と同  
一人物で間違いないのか？」

「ええ、間違いないはずですよ。」

「ふむ……。」

そうなつてくると、余計分からん事があつてだな。

アイツは、テツ至上主義みたいな奴でな、テツが不老不死故の孤独  
にならない様にと、私を頼った様な女だ。  
いや、私に譲つたとしても言おうか？

とにかく、奴は私に不老不死を期待していて、けして、この呪いを  
とく事に執着していたワケじゃないんだよ。

奴自身はな、弱き人間でも化け物と、生涯の友になれると証明しき  
つたんだ。」

メアが紡いだ言葉は、何百年経っても、色あせる事なく、今でも残っている。

『エヴァちゃんや徹様から見れば一瞬かも知れませんが、その一瞬を私は生涯を使って、支えていきたいのです。』

あと、アレですよ。

例え不老不死で、化け物と呼ばれようとも、人間の私が友達で居続ける事が出来るっていう証明もしたいですね。』

この言葉に、どれほど救われたか。

この言葉を聞いた時、どれほど私が涙を堪えたか……。

「そんな彼女の誇りを傷つけるような嘘を付いたのならば、いくら貴様とは言えども、私は許さぬぞ。」

断罪の剣を首元へ突きつけ、僅かに皮膚を切り裂く。

「フフフフ……。」

「アルビレオ・イマ。

何が可笑しいのだ？」

「いえいえ、少し嬉しくなってしまうですね。

まあ、お気になさらず。」



とりあえず、このままでは私が串刺しにされそうなので言い訳をさせて貰いますね。」

断罪の剣が見えていないかのように、アルビレオ・イマは微笑み、そのまま『言い訳』をし始める。

「彼女、メアは確かにテツを大切に思っていました、それと同じように、エヴァンジェリン。」

あなたも大切に思っていたのですよ。

確かに、テツは不老不死なのかもしれませんが。

ですが、貴方とは違い、彼の不老不死は不安定……とでも言うのでしょうか？

とにかく、メアと共に居た時、彼の不老は目で見えてましたが、不死という点は確認出来ていない状況でしたよね？」

まあ、確かにアルが言う様に、テツの不死が事実であるかどうか、当時は勿論、今でも良く分かっていない。

まだ、彼は不老不死疑惑という状態で止まってしまっているのだ。

「そして、さらに彼は人間のまま不老不死という不自然さもある。グールや、吸血鬼などといった様に、人間以外のモノになる事無く、彼は不老不死になってしまったという状況……」。

そんな不可思議で不安定な不老不死でしたら、唐突に無くなってしまっても不思議ではないでしょう？

貴方も考えた事があるはずですよ。

唐突にテツが普通の人間へと戻り、寿命で死んでしまったとしたら、再び貴方は孤独になってしまうと……。

もう一度言います。

確かに、メアはテツの事を大切に思っていました。

ですが、貴方の事も同じように大切と思っていたのですよ。

さて、こんな言い訳ですが、いかがでしょう？

いや、これでダメだと、流石に私も困るんですが……。」

未だ、喉に突きつけていた断罪の剣を離してやった。

くそっ、メアと分かれて500年近くも経っていると言っのに、アイツにまた泣かされそうになるとは、屈辱だ。

「仕方ないからな。  
それで納得しといてやるさ。」

「フフフ。声が震えていますよ。」

「震えてなどいない!!!」

とはいえども、そう叫ぶ声すら僅かに震えており……。

「まあ、良いでしょう。」

さて、組織『ナイト・メア』が残した禁書、『アルビレオ・イマ』  
に載っている研究成果、貴方に全て渡しましょう。

あつ、メアが研究した夜用の魔法も盛りだくさんなので、楽しみに  
してくださいね。」

言いながら、アルは人差し指を私の額へと当てた。

## 幕章 赤き翼編 その1（後書き）

どうも、新しい小説を書こうかな？と画策していたら、更新が遅くなったまどろみです。

ちょっと、今回は詰め込みすぎました。

とりあえず、アルの『マスター』発言に関するフラグと、メアさんのフラグを回収しました。

そして、ラカン……。

彼に言わせなかったセリフも無事、言わせる事が出来、非常に満足した回でした。

事実、ラカンに関しては、そのセリフを言わせたいがために、テツに惚れさせちゃったんですよ。

皆さん、どのセリフが分かりましたか？

ヒント、原作の278時間目です。

## 幕章 赤き翼編 その2

Side 徹

アスナちゃんとエヴァちゃんとお出かけ中。

あまり笑わないアスナちゃんを、どうにか笑わせようと頑張っていたんですよ。

ソフトクリームを食べたり、2人からアーン攻撃を受けたり。

交代で肩車をしたりして。

結局笑わせる事は出来なかったけど、アスナちゃんは楽しそうだったから、とりあえずは良いかな？

なんて思って、そのまま帰宅しようと思ったら……。

何故か兵隊さん（多分800人弱）に囲まれてしまいました。

右を見る、全身鎧を着た兵隊さんがいっぱいいた。

左を見る、全身鎧を着た兵隊さんが、やっぱりいっぱいいる。前と後ろは省略。

ちなみに、上には大きな戦艦がいて、肩の上にいるアスナちゃんが教えてくれた。

「村重徹、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。戦犯者、アリカ・アナルキア・エンテオフユシアの重要参考人として、ご同行願いたい。」

一番、角の多い兜をかぶった兵士さんに言われる。

『ご同行願いたい。』  
「分かりますと言うと、『一緒に来て。お願い。』って感じなんだけど……。」

絶対強制だよな!?!これ!!

「テツ。どうするのだ?  
全員吹き飛ばそうか?」

「むうう。」

「いやいやいや、何物騒な事言っているの!?!  
つて、ホラ!?!エヴァちゃんの発言のせいで、皆構えちゃったじゃん!?!」

多分だけど、アスナちゃんも睨んでるよね!?!  
エヴァちゃんと比べたら可愛い反抗だけど、あまり相手を刺激しちゃだめだよ。」

随分とゴツイ槍っぽい奴をオレ達に向け始めるし。  
しかも、なんかこの人達つて、公務員みたいなんだわ。  
流石に、国家を相手にするのは無理です。

エヴァちゃんは、兵隊さん達をけん制するかのように、両の手に、

なんか黒くて渦巻いた奴を出してるし……。  
顔は見えないけど、多分アスナちゃんも睨んでいると思う。

「はあ、とりあえず、大人しく付いて行くんで、さっさとしちゃってください。」

エヴァちゃんも、それをしまう。」

「いや、だが……。」

エヴァちゃんはエヴァちゃんなりに、オレを守ろうとしてくれているのは分かるし、非常に嬉しい事ではあるんだけど……。

「まあ、大丈夫だから安心して。」

言つとエヴァちゃんは両手のダークマタ つばい奴をしまった。とは言つても、未だ兵隊さん達を睨んだままなんだけど……。

〈side ナギ〉

「くそっ!!」

やられたぜ!!」

叫びながら、壁を殴る。

肉体強化していない拳が僅かに割れ、血が流れた。

「落ち着きなさい。ナギ。」

ほら、手から血が出てるじゃないですか……。」

言いながら、私の手に治療の魔法をアルがかける。

「こんな状況で落ち着いてられるか!！」

メガロメセンブリア元老院に拘束されているのだ。  
正式には、護衛と言う名の拘束である。

アリカが、『完全なる世界』と繋がっている疑いから、拘束。  
さらに、アリカが、紅き翼の抹殺を依頼したという情報から、紅き  
翼の護衛という名目で、閉じ込められているのだ。

やろうと思えば、ココから逃げ出す事なんて簡単なんだけど、いか  
んせんアリカという人質がいる。  
監視もされているみたいだから、何か不穏な行動をとりゃ、アリカ  
の命が危ない。

「だいたい、なんでアイツが拘束されなくちゃいけないんだ!？  
アイツが、世界を救ったも同然じゃねえか!？」

「アリカ王が、邪魔だからだろうな。」

紫煙を吐きだしながら、ガトウが呟いた。

邪魔？

政治的な実力とかは全く分からんが、アイツが民の事を第一に考え  
ているって事ぐらいは分かる。  
そんな、アイツが邪魔？



「どづいつ事だ？」

「完全なる世界という敵をいち早く見破り、それと繋がっていた父王をクーデタによって殺し、さらに戦争の終了にも大きく貢献したアリカ王」

一方のメガロメセンブリア元老院は、完全なる世界という敵を見抜けなかったどころか、組織に加担していた人間が多い事を世間に見せつけちゃったんだ。

出る杭を打っておかないと、自分の身が危険だからな。だからこそアイツ等は焦って、こんな強引な方法で事を進めているんだろうさ。」

「それこそ、可笑しいだろ！？」

そんなの、自分がワリイだけで、アリカは何も悪くねエじゃないか！？」

「世の中そんな事ばかりですよ……。」

しかし、まあ呆れますね。

500年前に似たような事して、テツに潰されかけたっていうのに……。

あの人達の恐ろしさを忘れちゃったんですかねえ？」

一人、焦る様子なく何時もの笑みを浮かべながら言い放つアル。  
つていうか

「はあ！？」

いや、ちよつと待て？

潰した！？

そういえば、テツを危険視して、深度Aにテツの情報を入れているって話をラカンが言っていたな。

個人の方でMM元老院を潰すとか、そりゃあ〜危険視されても仕方ないわな。

「まあ、そんなワケですから、多分大丈夫でしょ？」

とりあえず、今は英気を養いましょう。

扉の外で聞き耳立てている監視さんにも頼めば何でも持ってきてくれそうですし。」

とりあえず、私は30冊ほど本をお願いします。

そうですね〜、夜の魔法が多く書かれた本が良いですね〜。エヴァに教えてあげないといけませんし。フッフ。」

「あ〜、それだったら俺は、煙草と胃薬頼む。

煙草の銘柄は、イニヤサシクっていう奴な。

胃薬はあるだけ、全部の種類を持ってこい。ついでに胃に良い薬草類と、それをすりつぶす奴も一緒に頼むぞ。」

最後の一本を吸い終わったガトウは空になった箱を悲しそうに見ながら注文をし始める。

「あつ、胃薬は俺の分も頼む。」

それに、便乗する詠春。

最近、2人とも胃薬マスターを名乗り始め、全国のストレスで胃で

悩む人達から崇められ始めているだとか、何とか聞いたが何処まで本当かは分からない。

「だったら、俺は酒と、金。」

滅茶苦茶、俗に染まっている事をいうラカン。とりあえず、金は却下された。

「なんだよ。ケチだな。」

「それじゃ、僕は食べ物。」

あっ、師匠、後で訓練よろしくお願いします。」

ちやつかりと頼むタカミチ。

一番まともだ。

「っていうより、お前達、テツって言葉が出たとたん落ち着きすぎだ!!」

「まあ、落ち着け。ナギ。」

いや、だってよ、こついうややこしい状況での頭脳戦はテツの得意分野だろ?」

「という事です。」

私達に出来る事は、テツが戦力が必要だと言った時に力を貸すぐらいです。

故に、今は英気を養う事ぐらいしかできないですよ。」

アルが言っている事は間違いではない。

間違っではないのだが、やはり不安になるというものである。

恐らく、全員が同じ事を思っているだろう。

いくら、テツを信頼しているとは言えども、やはり不安なのだ。

だからこそ、バカをやる。

まあ、基がバカというものもあるが。それでもバカをやって、少しでも不安や無駄な緊張をほぐすのだ。

「よし、って事でタカミチ。

暇だし訓練やるか。」

「はい。よろしく願いします。」

「フッフ。なるほど。

この魔法は要チェックですね。

エヴァに教えましょう。」

そう、こうやって能天気にながらも、きつと内心ではかなりの不安が……

「むむつ。

この薬と薬と組み合わせれば……。

すまん、ガトウ。訓練ついでに、無音拳ですり潰してくれ。」

「しゃ〜ね〜な。」

「あつ、アル。」

そういえば、頼みたい事があつてだな、俺を女にする魔法の開発をしてくれないか？

いや、テツとの子とかも、欲しいな、って思い始めてな。」

不安に思つて……

「フフフ。ダメです。」

テツはエヴァの物ですよ。」

「なっ!？」

意外な伏兵が!？」

不安に思つて……。いるよな？

幕章 赤き翼編 その3

Side アリカ

クーデターによる父王の殺害、完全なる世界との関与、等の疑惑がかけられ、俺は牢屋へと入れられた。

そして、思うのだ。

ああ、また戻ってきたのだな。と

思い出すのは、幼き時代。

本に囲まれた一室の中で、民を窓から見下ろし続けてた日々だった。

親らしき男と女と並び、2人と手を繋ぐ、少年の姿。

世界で最も自分が幸せであるかのように、満面の笑みを浮かべる彼が眩しく、羨ましかった。

友らしき少年と少女が手を繋ぐ姿。

互いに怒鳴り合い、泣きそうになりながらも、離れぬ手が、俺にはない絆を見せつけられているかの様で、悲しかった。

羨ましく、悲しく、妬ましい。

そんな外の世界。

俺の世界は空っぽだった。

無機質な瞳。

感情の籠っていない言葉。

たった一枚の窓を隔てるだけで、まるで違う世界が広がっているというのに、俺には、そちら側の世界に行く権利がなかった。いや、行ってはいけなかったのだ。

ほんの少しの間だけ、外の世界に行ってしまった。

これはその罰なのかもしれない。

冷たく、カビ臭い牢屋が随分と懐かしく、そして空しかった。

side マクギル

「いやあ、マクギル殿。

貴方が証言してくれるとは非常にありがたいですよ。」

「一元老院として、当たり前前の行動ですよ。

災厄の王を野放しにしてなどおけませんからね。

これからの平和のためを考えればお安い物ですよ。」

笑みを浮かべながらの会話をし続ける。

「いやはや、マクギル殿の勇氣ある行動には感服しますよ。」

「いやいやいや。」

災厄の王と完全なる世界の関与を見つけた、貴方の勇氣を見せつけられた時、ワシも行動しなくては。っと思いましてな。

せっかく、ワシが帝国と手を結ばせ訪れさせた平和。コレを潰すワケには行きませんよ。」

「確かにそうですね。」

多くの者は、帝国と手を結ぶ様に働きかけたのは災厄の王と聞いてるんでいる。

本当の英雄は誰なのか。

アレを処刑した後、真実をしつかりと広めなくてはいけませんなあ。」

英雄。

自分が死ぬかと思ったあの時、ワシはその二文字に大いに惹かれた。

あと、どれほどあるか分からない自分の人生。

そんな残り短い生涯を考えるに、唯一、自身が英雄になれる方法ではないだろうか？

幼き頃、憧れた夢。

くだらなく、現実を知らない子供が見る夢……。



それが、叶うかもしれないのだ。

ワシの証言が最後の決め手となり、アリカ王の処刑方法、処刑の日時が決定した。

彼の処刑はケラベラス渓谷にて5日後に行われる事になった。

アリカ王が捕えられて二か月も掛ってしまったが、ようやく決定したのだ。

彼の処刑に関する部隊の作成などやらなくてはいけない事は山ほどある。

何冊かの本を手に持ち、自分の部屋へと向かっていると

「マクギル元老院！！！」

背後から、声を掛けられた。

振り返れば、幼い少年の姿があった。

「おや？どうしたんだい？

クルト君？」

「一体、どうしてアリカ様を裏切るような真似を！？」

「一体、貴方は何を考えているんですか！？」

「ワシは、英雄になりたいんだよ。

死ぬ寸前になって気付いたんだ。

自分は紅き翼や、テツの様に、輝く英雄になりたいと。

こうすれば、ワシは英雄になれる。」

「そんなの、英雄なんかじゃない!!」

そんな方法で、テツさんやナギさんにはなれるはずがない!!」

そんな事は分かっているさ。

「……やらなくてはいけない仕事があるから失礼するよ。」

クルト君に背中を向け、そのまま自室へと向かう。

「貴方には失望しました。」

背中に向けて放たれた言葉が、少し痛かった。

side ナギ

アリカの処刑が正式に決まった。

MM元老院の生贄として、民衆の恨みをアリカに向けるため、アリカはケラベラス渓谷で、生きたまま喰われる。

私達が命を掛けて戦ってきた返事がこれなのだ。

「なあ、私達、なんのために戦ってきたんだろうな？」

思わず、私の口から洩れてしまった本音。

皆が思いながらも、けして口に出さなかった言葉を、思わず私は漏らしていた。

「ナギ、それは」

「分かつてはいるんだよ。」

別に、元老院共みたいな奴等ばかりじゃないって事なんて！！

それでもさ、ようやく戦争を終えてスグにこんな事されたら、どうしたって考えちゃうんだよ……。」

『ヒトとは、身を捨ててまで救うに足るものか？』

変わったお師匠が言っていた言葉が、どうしても脳裏をよぎる。

世界を救った事に後悔はしていない。

それは間違いない。

ただ、それでもやはり疑問に思ってしまうのだ。

どうして、私達は戦ってきたんだろう？と……。

五日後、ケルベラス溪谷にて  
Side アリカ

ゆっくりと、一步踏み出るたびに、俺は死へと近づいて行く。

恐怖はない。  
だが、空しいのだ。

「魔獣うごめくケルベラス溪谷。  
魔法を使えぬ、その谷底は魔法使いにとって、まさに死の谷。

古き残虐な処刑法ですが、この残酷さをもって、ようやく魔法世界  
全土の民も溜飲を下げる事となりましょう。」

元老院の小さな呟きが、異常に良く聞こえた。

奪い、奪われるだけの日々。

空っぽの世界の終わりが、今だというのなら、それも良いだろう。

俺ごときが、外の世界の礎となれる事をせめての誇りとしようでは  
ないか。

……こんな事を考えているのがばれたら、またテツに怒られちまう  
かもしれないけどな。

まあ、最後なんだから許してくれよ？

そういえば、俺の手を取ってくれた礼、まだアイツにしていなかったな。

それが心残りっていえば心残りか……。

なんだ。

俺、空っぽなんかじゃなかったんだな。

全く、最後の最後まで、アイツからは貰いつ放しじゃないかよ……。

「……………ありがとうな。」

誰にも聞こえないだろう呟きと共に、俺は落ちた。

Side クルト

止まれ、止まってくれ。

一歩アリカ様が踏みしめるたびに、僕は祈り続け、奇跡を望み続けた。

ドラゴンがアリカ様を助ける。  
テツさんが何かの奇跡を起こす。  
唐突にMM元老院が崩壊する。

滑稽で、ありえない奇跡だと分かっているながらも、そんな奇跡ぐらいしか、アリカ様が助ける事が出来ないのだ。

分かっていた事だが、奇跡は一つも起こる事なく、アリカ様は思った以上に、あっけなく落ちて行った。

「あ、アリカ様……。」

あまりに、アリカ様の死が軽く、あっけなかったため、胸の内から一番初めに湧き出たのは戸惑いだった。

まだ、頭は理解していない。

けど、目には涙が溜まって行く。  
そして、涙腺が崩壊する寸前。

「泣くな、クルト君。」

僕の隣にいた、マクギルが声を掛けてきたのだ。

怒鳴り散らそうとした。

貴方のせいで、アリカ様は死んだんだ！！！と。  
裏切り者に怒鳴り散らそうとしたのだが、それより先に、マクギルが声を張り上げた。

「さあ、処刑はココでお終いだ。  
ココから先は、他言無用。」

無かった事となる。よろしいかな？」

パチリ

と、マクギルが指を鳴らした瞬間、兵士の全員が一斉に持っている  
槍を元老院達に向けた。

「「「な!?!」」」

「あつ、そうそう。」

他の部隊もあてにしない方がいい。  
何せ」

マクギルが喋っている途中、渓谷にいる魔獣とは違う、遠吠えが響  
き渡り、そして空から、ドラゴン達が現れる。

「黒き竜の傭兵団がいるからな。」

黒き竜の傭兵団。

突如、戦争に表れて頭角をだす。

ドラゴン、亜人、人間、精霊と普通では相容れない種族が入り混じ  
っている。

一番上に、姫と称される人間がいる事は分かっているが、それ以外  
は不明とされている傭兵団なのだが……。

「何故、ココにいるんですか!?!」

傭兵団とは名ばかりで、誰からの依頼も受けず、自由を重んじる組織。

それが、こんな面倒な事に手を貸してくれているかが分からないのだ。

「ワシも驚いたんだがな……。」

ワシを助けてくれた部隊があつただろ？」

白髪の青年に、転移させられた時の事であろう。

「あの時、助けてくれたのが、あの傭兵団。」

さらに、その主がテツでな。」

「そ、それじゃ、アリカ様は!？」

「テツが行ったさ。」

背後からの声に振り返ると

「エヴァンジェリンさんにアスナさん!？」

「少しは手伝いが必要かと思いきや、何もやる事がないとはな……。」

「エヴァ、不満気。」

確かに、ココに居る人間の9割が味方であり、数の暴力で、元老院達は既に壊滅。

周囲数十キロには、二個艦隊と精鋭部隊が三千人いるはずなのだが……。



戦闘音がない事を考えると、黒き竜の傭兵団によって、壊滅しているか、その全てが味方のどちらかであろう。

そんな、あまりにひどいリンチっぷりを考えると、エヴァンジェリオンさんの出番がないのは当然と言えば当然であろう。

「ぐっ、こうなれば、紅き翼よ。我々を助ける!!!」

余裕がなさすぎて、紅き翼に頼り始めた元老院。

「いや、助けてやりてゝのは山々何だけどさ。」

にやにやと笑うナギ。

「フフフ、ここに来る前に、貴方達が渡してきたギアスペーパーに契約をしてしまったので無理ですね。」

ちなみに、ギアスペーパーの中身は、今日、溪谷付近での戦闘及び敵対行為の禁止であつたらしい。

「というワケだ。」

まあ、テツや紅き翼には負けるかも知れないが、ちよつとは英雄っぽかつたらろ?」

言いながら、マクギルさんはニヤリと笑っていた。

side テツ

死の谷。

とりあえず、不思議パワーが使えなくなる谷らしく、そんな谷でアリカの死刑は行われた。

冤罪というか、何か非常にアリカがややこしい立場に居たため起きた死刑。

友達を助けたい。

たったそれだけ。

でも、俺にとっては、滅茶苦茶重要な事。

そんな酷く個人的な事に大勢の人が力を貸してくれた。

特にマクギルさん。

うん、あの人はマジで苦労させてしまった。

ホント、ありがとうございます。

そんで、唯一オレが活躍できる場がココである。

何せ、ココは気だの、魔法だのが使えなくなる谷。

他の人にとっては、かなりキツイ谷だけど、元から使えないオレに

とっては、普段と変わらない所。

まあ、もちろん、かなり危ないんだけど……。  
ココで頑張らないと、男が廃るよね？

つてなワケで、アリカが落ちた時、何とかキャッチ（お姫様だっこ）し、着地をした。

「テ……ツ……？」

え……？なぜテツが地獄に……？アレ？」

「ハロー。アリカ。」

ちよつと困惑気味のアリカを落ち着かせようと、何時も通りの挨拶を返して見るが、いまいち戻ってこない様子。

いつもだったら、のんびりと落ち着かせるんだらうけど……。

目の前の魔獣さんが、涎を垂らしだしているので、無理です。

とりあえず、ダッシュユー！！

「ぬはははは、日々ストーリーカーさん達から逃げ回ってきた脚力舐めんって、ダメ……！！

そこは、ダメえええええええ。」

胴が長い……！！

つていうか、障害物が少なすぎて、ちよつ、ヤバつ。

「答える……！！

何故だ……？何故お前がココに居る……？

前、言っていたじゃないか！？  
戦いは苦手だと、痛いのは嫌いだと。」

「確かに、戦い苦手だしいいいい、痛いのも嫌だけど。  
友達見捨てる方が、イヤなんだよ。」

「って、うぎゃあああああ、オレのマントおおおおおお。」

「この谷に居る魔獣……。」

「ミミズ型魔獣っていうの？」

「とにかく、そんなウネウネしてたバカデカイ魔獣が、オレのマントを食いちぎったワケですよ。」

「しかも、この魔獣達の口が非常に可笑しい。」

「今さっき気付いたんだけど、口が二段構え何ですよ。」

「つまり、口の中に、チッコイ口があるっていう状態。」

「より、餌を砕ける様にするために、行った進化なのかも知れないけど……。あまり頭の良い進化だとは思えない。」

「っていうか、それだったら前歯を増やすじゃなくて、奥のすり鉢状の歯を作るべきだと思う。」

「そんな、作業効率面で見たら失笑物の口だが、ビジュアル的観点から見ると、非常に恐ろしい。」

「あんな口の様子見せられたら、冷や汗ダダ。ちよっと、チビっても可笑しくないレベルである。」

「テツ、自分が何を言っているのか分かっているのか！？」



「なっ!？」

オレの呆れた発言に驚くアリカ。  
まあ、漫画とかの主人公だったら、ココで一発カツコいい事を言いながら、華麗に助けだすんだろうけど、オレには無理。

「だあ、とりあえずアリカが、大切だからオレは助けたいの!！」

「……へ？」

死ぬか生きるかの追いかけてっ中。  
もう、アドレナリンがガンガン分泌されており、自分でも何を言ってるのか分からないような状態。

「ぬおおおおお。」

秘技、ジャンピング崖登りiiiiiiiiiiiiiiiiiiii。」「

ジャンピング崖登り。

ジャンプしながら、崖を登るといふ恐ろしい必殺技である。

ジャンピング崖登り(ジャンプで崖を登る)、ハイジャンプ(頑張つて、高くジャンプする)、空中ドルフィンキック(少しだけ、浮遊時間が延びるような気がする)

の三連コンボのおかげで、何とかクロちゃん(黒龍)の背まで逃げ切る事が出来た。

うん、ホント生きた心地しない。

僅かに沈み始めた夕焼けのせいで、アリカの顔は僅かに赤く見えた。一方のオレは、命の危険だったり、アリカの危険だったりで、多分顔は真っ青であると思う。

ナギさん達とは違って、肝っ玉が滅茶苦茶小さい自分にチョッピリ絶望した。

でも、まあ……。

オレにしては頑張った方だよな？

**幕章 赤き翼編 その3 (後書き)**

今回、一番活躍した人間は、マクギルだと思う。



## 幕章 エピローグ（前書き）

ある意味、一番苦勞した話です。

注、パソコンじゃないと分かりません。  
注、パソコンでも分からないかも……。

どうしようもない時は、自分の直感に頼ってみましょう。

## 幕章 エピローグ

アリカ・アナルキア・エンテオフュシア

本来であれば、英雄を紹介する場で、彼の紹介をする必要性は全くないであろう。

当たり前前の断りを、まず入れさせて貰った。だが、災厄の存在を知り、そして、より英雄の凄さと言う物を知るべきだと思ったからである。

英雄とは、逆の存在。それが彼である。不思議な事に、彼の様な巨大な悪がいなければ英雄は誕生しなかったのではないかと思う。

はかいの限りを尽くし、世界を壊した男。

彼の説明は、これで充分であろう。

だというのに、彼は、死刑という逃げが出来た。

## 幕章 麻帆良編 その1

Side 徹

「っと、これで完成。」

ようやく、ログハウスが完成した。

昔取った杵柄って奴だな。

村で、家を作りまくったおかげで、案外簡単に出来た。

ようやく完成した我が城。

「たくつ、なんで私が今さら中学なぞ……。」

エヴァちゃんが言う様に、明日から学校生活が始まるのだ。

ちなみに、エヴァちゃんが中学3年。

オレが高校3年である。

「まあまあ。」

エヴァちゃんも納得していたじゃん。」

「確かに、納得していたが、30年も行かなくちゃいけないとは聞

「いない！！」

エヴァちゃんが怒りたい理由も分からないでもない。確かに、30年もの間中学生っていうのは、キツイ。

ナギさんが、『タイマー式登校地獄』の詠唱をミスって、期間が3年から、30年になっちゃったのだ。

しかも、上手い具合に解除が不可能状態。

いや、まいった、まいった。

とりあえず、ナギさんの紹介で、ココ麻帆良学園に来る事になった。なんか、学園長がナギさんの知り合いで、さらに戸籍とかを何とかしてくれるらしい。

代わりに、警備員をやって欲しいとか言われた。

まあ、適当に見回りとかしてくれって事だろう。

滅茶苦茶破格である。

というか、学園長凄い。

普通、戸籍の用意とか出来ないし、それほど大変な事をやらせてしまっているのに、見返りは見回りのみって、どんだけ凄いよ！？

そんなこんなで、オレ達は、麻帆良に暮らす事になったのだ。

世の中というのは、不思議な物だと、つくづく思ったね。

なにせ、この麻帆良。

オレが死ぬ前に住んでいた所の傍なのだ。

エヴァちゃんは覚えていないかもしれないけど、1000年程前に、オレ達はココを見に来ていた。

その時、オレの故郷のはずなのに、まるで違う姿をさらすココを見て、無性に虚しくなったのだ。

よく覚えている。

そして、ココに再び来る事はないと思っていたのだが、今では学生になるのだ。

ほんと、不思議である。

そんな、ナギさんに呪いを掛けて貰い、凄い学園長に頼り、不思議な経験をしたのも、ただ単に、エヴァちゃんに義務教育を受けさせたかった。

それだけのためである。

義務教育の授業はどうでもよかった。

なにせ、600年ぐらい生きているのだ。

その辺は、教師よりもよっぽど豊富な知識を持っている。

ただ、コミュニケーション能力。

エヴァちゃんの、この能力が絶望的なのだ。

ぶっちゃけエヴァちゃんの友達ってメアさんしか居なかったし……。

けど、考えてみれば当たり前だった。

なにせ、エヴァちゃんって、10才ボディーなのだ。

10才で不老不死。

そして、オレと会うまではずっと逃げ回っていたらしい。

その後、しばらくのあいだ、隠し村で暮らしていたけど、出てった後はずっと放浪……。

そりゃ、コミュニケーション能力なんて付かないわ……。

それで、考えたワケよ。

んで、出た答えが『学校に通う』って事だ。

コミュニケーション能力を鍛えるっていう事だったら、ある意味一番都合が良いと思う。

でもなあ、ちょっと苛められないか心配っていえば心配だよな。

何せ、外人、ちっこい、見た目幼い、口は悪い……。

やべ、めちゃくちゃ心配になってきた。

いや、でもエヴァちゃんって本当に良い子なんだよ!?

だって、反抗期とかなかったし。

というか、もし

「テツの服と一緒に私の服を洗濯しないで。」

とか言われたら絶対オレ、泣く。

だって、アレだよ。

未だにお風呂とか一緒だし、たまに布団の中に入ってくるし!!

しかも、気付かれていないと思っっているのか、オレが寝てる時、こっそりと入ってくるんだよ!!

ごそごそって動いて、布団の中にもぐって、オレの腹んとこに腕回して、顔を擦り付けてくるんだよ。

もうさ、可愛くて、可愛くて。

そもそも、エヴァちゃんって顔立ちもかなり整っているし、髪とかも昔から綺麗にしていたもんだからサラサラ。

大人になったら、確実に美人さんになるべ。

こんな、可愛いんだったら苛められるって事はないかな？

逆に、人気になったりして。

異性のクラスメイトをウチに連れてくるとか、言いだすかも!?

そこで、カレカノの仲とか、紹介されたら、泣くよ？オレ。

そこで、数年後に

「エヴァンジェリンさんを僕に下さい!!」

とか、言われちゃったりする可能性もかなりあるわけで。

……とりあえず、筋トレだな。うん。

ウチの可愛いエヴァちゃんを連れて行く輩に、拳をお見舞いするために、鍛えなくては。

私と、テツが学生となり、学校に通う。  
唯それだけだというのに、各々の思惑が複雑に絡み合っていた。

とりあえず、近衛 近右衛門は狂喜乱舞であろう。  
なにせ、最強の男が、たかが戸籍と面倒をみるだけで警備員となるのだ。

じじいとしては、非常に美味しいであろう。

次に、ナギ、アル、テツ、あと私。  
これも、比較的學生生活に肯定的だ。

もともと、この計画はテツが言い出したことなのだから、奴が肯定的なのは当たり前であろう。  
そして、私としては、ラカンやアリカなどといった、（ある意味）恐ろしい敵からテツを守る。かつ邪魔者が居なくなるというのは、非常に喜ばしい。

まあ、30年というのはあまりに長く、非常に不満ではあるが。

アルは、恐らくメアの願いだらう。

どうやら、私とテツとをくつつけたがっている様だ。



それに邪魔なラカンとアリカ、おまけにアスナの三人から私達を引き離し、かつ私とテツを近付けるには、非常に都合が良かったようであった。

そして、ナギ。

アイツは、なんていうか不幸とでもいうのだろうか？

とにかく、非常に可哀想だった。

彼女は、つい最近初めて恋愛という物を経験した。

よりもよって、アリカに……。

そう、テツに惚れているアリカにだ……。

ケルベラス溪谷でテツに救われてから、奴はかなり凄い事になっていた。

もう、ホントに……。

お前は乙女か……！！

と、なんと突っ込みそうになったか。

簡単な例を上げるのならば、テツの服の裾を持つアリカの姿というのはどうだろうか？

何と言えば良いのだろうか？

逆だったら、まだ分からないでもないのだ。

身体の小さなテツが、自分より大きなアリカの服の裾を握るのだったら、まだ分からないでもない。

ただ、逆なのだ！！

その不可思議な光景。現実離れしている、微妙過ぎる光景がのせいで印象が強すぎるのだ。

こんなの、まだ一例だ。

他にも、まだまだ恐ろしい物が多くあるが、私の精神の安定のために、振り返らない事にしよう。

そんな、精神に多大な悪影響を及ぼす、アリカに惚れてしまったナギ。

もう、不幸だとしか言いようがない。

とりあえず、ナギは諦める気はないようで、少しでも振り向いてももらえるよう、アリカとテツを離したいという思いがあるようだ。

まあ、私としては応援しているよ。

ラカン、アリカ、この二人は非常に不満であろう。

そのような反応をするというのは元から分かっていたので、彼らには何も言わず、出て行ってやったわ。

中立派は、ガトウ、詠春、アスナ。

ガトウと詠春は、この変化によって胃薬が減る事を期待しているが、増える可能性も高いため、どうでもいいらしい。

一方のアスナ。

彼女は色々と複雑な状況だ。

一応テツが、一緒に暮らす事を提案したのだが、アスナがそれを拒

否。

現在、アスナには掛けられている魔法があった。  
高度な魔法。

自身の流れる時を停滞させる魔法。

その呪いと言っても良い魔法を解くのに、少し時間がかかるらしい。  
一応、数年でけりが付くらしい。

その後、こちらと合流。

まあ、私達と一緒に暮らすとの事だ。

つまり、私とテツが2人だけで暮らせる期間はおよそ、2年。

短い期間ではあるが……。

奴を落とす絶好のチャンスだと言えまいか？

奴が難攻不落だという事は気付いてはいるさ。

だが、環境が変わった時こそ、絶好のチャンス。

さらに、アルから教わった夜の魔法もあるしな。

いざとなれば、既成事実だけでも……。

ああ……

そういえば、既成事実だけだったら、そういえば数千以上あったな。

いや、勿論了承取ったぞ！？

『今日、一緒に寝るぞ。』

『うん、分かった。』

という会話がなされている以上、十分了承されているだろうかというのに、奴はいつも先に寝ていて……。毎回私だけが、動く羽目になるのだ。

とりあえず、夜の魔法でそのへんも何とかしなくては。

↳side アスナ↳

現在の所、エヴァが一番有利。  
100年という、人間としては長い時を生きてきた私だが、その数倍もの時をテツと一緒にいたのだ。  
それだけ、エヴァがリードしている。

とはいえども、あまりに長く、近い場所に居すぎた。  
確かに大切に思われているだろうが、エヴァが辿りつきたい所まで  
発展してない様子。

次に、『アコ』という、謎の勢力。  
ときどき、出てくる存在。

ただ、何百年も前の人間らしく、現在生きているかどうかは不明。

そもそも、テツとどんな関係だったのかも不明。とりあえず、警戒は必要。

ラカン、アリカ。

ある意味、一番危険。

とりあえず、アリカはナギに任せる。

ラカンは、適当に無視。

テツが男色では無い事はしっかりと判明しているため、警戒の必要はなし。

テツを慕っている者は多くいるが、現状注意が必要と思えるのはこの4人のみ。

故に、私にも十分勝ち目はある。

様々な本を見せた時の反応や、普段の生活から、テツの分析を行ったら、以下の事が判明。

- 1、テツはおっぱいがC辺りが好み。
- 2、テツは普通より少し背が高い方が好き。
- 3、男色の気はなく、ノーマルである。
- 4、現在の所、下着や裸を見せたとしても、反応がない所から、子供に欲情するという事はない。
- 5、子供好きであるため、抱きしめ、膝に座る、一緒にお風呂、同衾は普通にやってくれる。
- 6、積極的に動けば、子供のソフトキスまでは許容の範囲内らしく、それ以上へは進めなかった。残念。
- 7、フレンチキスをした所、注意されたため、二度目は不可能である事が判明。おいしかった。
- 8、意外とウブであり、女性の裸の写真を見せた所、顔を赤く染め

た。別の女の裸を見せるのは不愉快であったが、調査のため我慢  
とりあえず一緒にお風呂に入り、消毒。

9、下半身についているソレは意外と立派。

コレくらいだろうか？

とりあえず、現在の身体であれば、好きなだけテツに甘えられる。  
所謂子供の特権という奴だ。

けど、それだと関係が進む事がないというのは確実だ。

現在のライバル……。

アコという者は全く分からないので置いておくが、私、エヴァ、ラ  
カン、アリカの4人を見ると、テツの好み（性的に興奮する範囲内  
に居る人間）が一人も居ない事が分かる。

事実、エヴァと私は子供扱いされ、下半身のアレは一度も反応した  
事がない。

ラカンとアリカは、問題外。

という事はある……。

私が成長し、発育が良くなったら、これは大きなアドバンテージと  
なるであろう。

なにせ、まともに性的に興奮する人間が私だけになるのだ。

いや、もし、身体が成長したとしても、テツが私の事を子供扱いす  
る可能性は高い！

だが……。

子供とは違う膨らみや柔らかさにテツが気付けば、そこから攻め込む事も出来る。

既に、共に居る年月ではエヴァに100年単位で負けているのだ。たかが数年、どうって事はない。

でも、その数年で、私はエヴァに勝てる身体を手に入れる……。

そして……。

## 幕章 麻帆良編 その2（前書き）

更新遅れてしまい、すみませんでした。

とりあえず、遅れた原因につきましては、活動報告に書かれております。

活動報告には、現状の報告、お知らせ、『流れて流されてネギまへのアンケートと、色んな事が書かれているので、見て貰えると助かります。』

特に、アンケートの方は、皆様の考えが聞きたいので、答えて下さると本当にありがたいです。



幕章 麻帆良編 その2

僕は、呼ばれたんだ。

声が聞こえたんじゃない。

手招きされたワケじゃない。

でも、呼ばれたんだ。

おいで、おいで。って。

だから、僕はそこに行った。

真っ暗で、ちょっと怖い森の中を歩いた。

いつもだったら、いっぱい怖いはずなんだけど、ちょっとだけだった。

だって、優しかったから。

暖かくて、ポカポカ。

木の枝が、葉が、土が、鳥が……。

みんな、みんな、包んでくれていたから。

みんなに手を引かれ、僕は歩いて行く。

『ココ、ココ。』

言われた、頼む？、約束。』

声が聞こえて、周りを見渡すけど誰もいない。

風がふわりと、僕の髪の毛を揺らした。

気付いたら、僕は広い場所に着いた。

真ん中に、おっきいな石の板みたいなのがある、広い場所。

近くに行ったら、模様が描かれているのが分かる。

ウネウネの、ミミズみたいな模様。

ぐにゃぐにゃで、繋がっていて、ふにゃふにゃ。

「それはな、墓だ。」

振り向いたら、男の人がいた。

「お墓？」

「そう。墓だ。」

謝りたくて、謝りたくて、どうしようもなくて……。  
そんな男の墓さ。」

「????？」

「ああ、すまないな。」

確かに、これじゃ分からないよな。」

男の人は微笑んでいた。

でも、口だけ。

なんか、寂しそう。

「……君は、迷子か？」

「迷子??？」

周りは、僕が全然知らない景色。

そして、ココも全然分らない所。

「うん、迷子。」

おじいさんも、迷子?」

「おじいさん??」

君には、オレが年寄りに見えるのか?」

聞いてくる男の人。

僕とは違う、高い鼻。

皺は一つもないし、白髪も全くない。

「見えない。」

でも、おじいさんだよ?」

お兄さんに見えるけど、おじいさん。

うん、やっぱりこの人はおじいさんだ。

「くっ、くくくく。」

そ、そうか。」

噛み殺した笑いだったけど、おじいさんの笑顔は、さっきのとは違う本物だった。

喜んでくれるのは嬉しいんだけど、なにが面白いのかな？

「おじいさん、どうしたの？？」

「くっくくく。」

マギだ。

オレの事は、マギと呼んでくれ。」

マギ。

おじいさんの名前みたい。

マギだったら、マーちゃん、マー君のどっちかが良いよね？  
やっぱり、男の人だからマー君？

うん、マー君だ。

「分かった。マー君。」

マー君、何かびっくりしてる。  
どうしたのかな？

「君……」

の名前も教えてくれないか？」

「僕？」

僕の名前はね……。」

（side マギ？）

一瞬一瞬で、この子供は表情を変えていた。笑い、困り、そして悲しそうに。

黒い髪と、吸い込まれそうな、漆黒の瞳が、かつての友を彷彿とさせた。

不思議な子供だった。

世界を読むとでもいえば良いのだろうか？  
オレと同じ物を見ているはずなのに、全く違う世界を眺めているようであった。

初見で、オレの正体に何となく、気付いている。  
その異常性もまた、古き友を彷彿させた。

「マギだ。」

オレの事は、マギと呼んでくれ。」

「分かった。マー君。」

いいながら、微笑む少年の顔を見て、オレは固まった。

完全に固まった。

その、少年の微笑みが、『アイツ』とそっくりで……。オレを、『マー君』と呼ぶ、呼び方が『アイツ』のようで……。

あまりに、この子が『アイツ』に似すぎていて、オレは固まっていた。

「君……」

君は、一体何なんだ？

問おうとするが、無理に区切る。

目の前の、この純粹そうな子が、こんな質問されても、どうしようもないと、分かりきっていたから。

だから、無理やり方向性を変える。

「の名前も教えてくれないか？」

君の名前も教えてくれないか？

途中、変な”間”があったが、即興にしては、上手く誤魔化せたと  
思う。

ただの、誤魔化し。  
その質問の答えに、大した期待もせず、ただただ適当にした質問。  
そんな、どうでもいい質問に返ってきた答えは

「僕の名前はね、てつ。」

むらしげ てつ。「

思いの他、重要であり、自分が求めていたモノであった。

『村重 徹』

オレ達を、輝かし続けた太陽であり、偉大な友でもあった男の名だった。

徹と、共に居た時の記憶は、もう何百年も前だというのに、鮮明に残っていた。

まあ、自分がそう作られたというのもあるが、オレにとって、それだけ大切だったというのも事実である。

そして、ふと思い出す記憶。

まだ、自分の名を彼に教えていなかったというのに、唐突にオレの事を『マー君』と呼び始めた事。

その時は、別の奴に聞いたのかと思ったが……。

もし、そうでなかったら……。

様々なロジックを、頭の中で組み立てていく。

そして、今さらオレは気付く事となる。

この少年が、認識阻害の魔法を避けて、ココにたどり着いたという事に。

そもそも、ココは徹とエヴァンジェリンの2人が何時か来るだろうと、想定して残したものだ。

登録された者以外は入ってこれないように、認識阻害の魔法を掛けている。

もちろん、偶然や、事故の可能性もあったが……。

オレは、彼の魔力情報を読み取る。

そして、涙した。



登録された徹と、全く同じ情報が彼の魔力から読み取れたから。

長い時を待ち、ようやく会えた、この瞬間。

そして、コレから訪れるであろう、少年の辛く長い人生を思い、オレは涙した。

ああ、そうだったのか……。

ようやく気付く。

徹は、何処の世界の人間だったのかを。

ようやく知る。

徹が、ココへ、皆を導けた理由を……。

ようやく辿り着く。

徹が、オレを初めから友として扱ったワケを。

徹は、幼い頃にココへきていた。

故に、魔女狩りの際、皆をココに導けた。

徹は、幼い頃、オレと友となっていた。  
故に、初めから友としてオレを扱った。

徹は、遠い遠い未来の住人だった。

そして、不老不死という重荷を背負わされ、何処とも知れぬ過去に送られた。

なにも知らぬ、知人は誰もいない、まるで違う世界に送られた。

気付けば、オレは徹を抱きしめていた。

泣きながら、抱きしめていた。

ああ、世界は何処まで残酷なのだろうか。

そして、オレは一言呟く。

「すまない。」

それは、本当に色々な物を込めた物であった。

彼が陥るであろう、残酷な運命。

コレを、オレには覆す事は出来ない。

どんなに頑張っても、過去があつてのイマなのだから、無理なのだ。

分かり切った事ではあった。  
何度も、思った事でもあったが、思わずにはいられなかった。

世界というのは、どうしてこんなにも

優しくないのだろうか。

数時間ほど、共に居た後、オレは徹を出口まで案内した。  
家族と共に旅行中で、偶然ココに来たらしい。

恐らく、彼の家族達は近くの村に居るであろう。  
ここから村までの距離は100メートルもない。

事実、コチラ側では、村が既に見えていた。

「徹、あそこが村だ。」

早く帰って、両親を安心させてやれ。」

言っと、徹は一つ頷く。

そして、溢れんばかりの笑顔でオレに言うのだ。

「ありがとう。」

またね。」

「ああ、またな。」

多分、この時のオレは穏やかな笑みが浮かんで居たんじゃないかと思う。

徹の後ろ姿が徐々に村へと向かっていく。

それと同時に、オレの身体が光の粒子へと徐々に変わって行った。

オレは、タダの記憶。

マギという存在は遠い過去に、既に亡くなっている。  
オレは、そんなマギが残した唯の記憶であり、記録。

確かに、オレはマギであるが、本人では無い。

マギの強い思いに、精霊達が導かれ、作った存在に過ぎない。

マギ自身も、自分の分身が作られているなど、想像もしてないだろうな。

役目を終えたのだから、消えるっていうのも仕方ないだろう。消えるっていうより、元に戻るっていう方が正しいか？

まあ、どちらでも良い。

とりあえず、マギ。

こちら側が一方的にした約束だったが、とりあえず果たしたからな。

最後の最後。

身体が薄くなり、存在すると、しないの境界。

そんな一番最後に

「またな、徹。」

何故か、そんな眩きが漏れた。

幕章 麻帆良編 その3 (前書き)

活動報告にて、『流れて流されてネギまへ』のアンケートを行って  
おります。

答えて下さるとありがたいです。

## 幕章 麻帆良編 その3

Side エヴァンジェリン

今の私は、大いに悩んでいた。  
一人脳内会議を行うが、答えが全然見えて来ないのだ。

その議題はというと

テツを、どうやって自分の物にするか。  
である。

およそ、500年もの間、常っと言っては語弊があるかもしれないが、それでも考え続けてきた事である。  
だが、今回の私は一味違う。

なにせ、頭から煙が出るほど、超本気なのだ。

不老不死の欠点とでも言うのだろうか？  
あまりにも、気が長すぎるのだ。



そのため、考えはするが、どうしても妥協する部分や持ち越しが出てきてしまう。

だが、今回は違う。

何せ、制限時間が設けられているからな。

麻帆良で共に暮らす期間として30年。

一か所に、これだけの期間、住み続けるという事は、かなり珍しい事である。

そして、その30年の内アスナが来るまで、数年間。

この期間は、2人つきりなのだ。

数年も、2人だけで暮らしていくというのも初めての事である。

この様な、大チャンス、逃すわけにはいかない。

というワケで、早速行動である。

悩んでいても、どうせ明確な答えなんぞ出るはずがないのだ。だったら、さっさと行動してしまった方が良い。

ミッション1

私を女として意識させる。

未だに、奴は私を子供として見ている節があるからな。とにかく、奴をムラムラさせる必要がある。

というワケで、まずバニラ味の棒付きアイス（半径3cm、長さ13cm）を使う。

そして、テツが見ている前で、舐める！！

重要なのは、ベロを出し、先端をねつとりと舐めまわす事。

さらに、途中で啜え、アイスをゆっくりと動かす。

これにより、アイスが、別の何かに見え始めるはずだ。

僅かに口の端からバニラの白い液体を零す事によって、テツはイケない想像をしまうであろう。

ふっはっははははは。

完璧だ。

完璧すぎる。

確実にムラムラするはずだ。

もしかしたら、私が寝ている時に、イケないイタズラをしてしまうかもしれないなあ。

そうになったら、どうするべきだ？

ワザと、寝たふりをしてやるべきか、それとも経験者として、色々やってやるべきか……。

『うわっ!?!?』

エヴァちゃん、起きてたの!？」

『ああ、起きていたとも。』

どうしたんだ?そんな立派にして。』

『いや、これは』

『ふふふふ、いや、良いぞ。』

お前はそのままでいろ。

私が色々と教えてやるからな。』

良い。

良いぞお!!

コレだ。これでいくぞ。

アイスも買ってきた。(6本入り、税込508円)

もう、理想的な太さ、長さである。

そして、ゆっくりとテツの前で舐める。

先端を舐め、溶けはじめたアイス。

溶けた白い液体が、垂れていき、それが手に落ちる前に、根元から

舐め上げる。

それは、テツのモノで何度も行った動きであり、馴れた物だ。

そして、さらにアイスを啜える。

口の中では、舌がありとあらゆる動きをしている。

そして、舌を動かしながらの上下運動。

ココまでは、完璧だ。

どうだ？

態勢のないお前としては、もう前かがみになっていたりするのか？

チラリと、横目で見てみると、下半身に反応はなし。

……なぜだ？

とりあえず、一番の見せ場。

口の端から垂らすをやってみた。

「ほらほら、エヴァちゃん。

垂れてるよ。」

言いながら、ハンカチで拭かれた……。

どうやら、アイスではダメだったようだ。  
だが、ココで諦めるわけにはいかない。

というワケで、次は魚肉ソーセージを使っ（以下略）

というワケで、次はチョコバナ（以下略）

というワケで、次はシュー（以下略）

という（以下略）

ミッション2

裸で誘惑する。

裸での誘惑。

ある意味、最も原始的。

それでいながら、確実に効果があるという方法だ。

それ故、この方法を取れば、確実にテツは性欲を持て余すはず。

『エヴァちゃん。どうして、そんな格好!?!』

『どうして?』

ふふふ、女が裸になる理由なんて決まっているだろ?』

『だ、ダメだよ。』

『こんなの。』

『ふふふ。』

『そう言いながらも、お前のココは随分と元気じゃないか。』

『いや、これは……』

『大丈夫だ。全部私に任せろ。』

最高だ。

最高過ぎるぞー！！

「もう、そろそろ良い時間だね。

エヴァちゃん。そろそろ、お風呂入ろうか。」

「ああ、分かった。今から行くぞ。」

……アレ？

ミッション3

テツを襲わせる。

テツという男は、非常に矛盾に満ちた男だ。

良く、嘘も着くし、常に道化の仮面を被っている。

だが、その嘘は優しく、道化の仮面は子供達を楽しませる。

ちやらんぼらんなくせに、誠実。

嘘つきにくせに、正直。

論理的なくせに、感情的。

そんな、奴については、何百年も付き合っているが、未だに分らない事も多い。

それでも、既成事実を作ってしまった場合、ソレを放っておけるような人間ではないという事は確かである。

結局の所、何が言いたいかというと

既成事実を作って、テツに迫ろう。

っという事である。

ただ、どうすればテツが襲ってくるだろうか？

……。

え〜と、下着とかで迫ったり？

でも、下着姿も普通に見られてるし。

そもそも、一緒の布団で寝ているのに一度も襲われた事が無いから……。

ミッション4

テツを襲え。

唯一成功。



**幕章 麻帆良編 その3 (後書き)**

本日、大更新をします。

頑張って行くつもりです。

幕章 麻帆良編 その4

Side アスナ

「本当によろしいのですか？」

「いい。

だけど、アル……。」

本当に……。」

「ええ、大丈夫です。

記憶は消えますが、貴方の思いはけして、消える事はありません。」

目を覚ませば、目の前にフードを被った男がいた。細い眼、口には微笑みが張り付いている。

「おはようございます。」

明日菜さん。」

「……あすなさん？」

おはようございます。は分かった。挨拶だって。だけど、あすなさんってのが、分からなかい。

頭の中で、単語を巡らすが、もっともらしい物が出て来ない。

「貴方の名前ですよ。」

神楽坂明日菜。

コレが、貴方のフルネームです。

あつ、そうそう。私の名前はアルビレオ・イマと言います。これからよろしくお願いしますね。」

そう言いながら、アルビレオ・イマは笑みを深くする。

「分かった。」

「それは良かったです。」

それですね。

麻帆良と一緒に行きましょうか。」

アルビレオ・イマが言った取りとめのない言葉。  
話しの前後は違和感があり、いきなりマホラっという場所に行こう  
という。

何故？どうやって？そこは何処なの？どういった所なの？

初対面の男からの言葉だ。

それぐらいの疑問は持つべきでだった。

さらに、自分の身体は5、6歳程の若い女性のモノである。  
誘拐や人買いの可能性も十分にあり、出来るのなら周りの助けを呼  
ぶ、叫ぶと言った行動が必要な場面であるかもしれない。

だというのに、何故か、そういった懸念がなかった。

「分かった。」

言うと、アルビレオ・イマは少し困った様に苦笑いをする。

「素直なのは非常に助かりますが、そうやって知らない人をスグ信  
用してはいけませんよ。」

「大丈夫。普通だったらすうする。」

アルビレオ・イマは特別。」

言うと、アルビレオ・イマは少し笑った。

世の中には、正解がない事柄が多い。

こんなんでも、一応500年以上も生きているんだから、そんな事は分かり切っていた。

そして、案外、正解がない事柄ほど難しい問題で、重いという事も経験上分かっていた。

だけど、それでも思わずには居られない。

考えずには居られなかった。

正解ってなんなんだろう？と。

アスナちゃんという子の立場は非常に複雑だった。

とはいっても、オレも全部知っているワケじゃないんから何とも言えないんだけど……。

とりあえず、彼女はその体質から魔法兵器として使われていたらしい。

初めて会った時も、その儀式の真っ最中だったらしい。

少しでも長い間、兵器として使えるように、成長しない時の魔法を掛けられる。

扱いは人としてではなく、兵器として扱われる。

自分の意志では無いのに、幾多の人を間接的に殺してしまう。

これでは、彼女から表情がなくなって当たり前だ。

そして、アスナちゃんを助け出した後。

ようやく人間としての時間が始まり、その時間には不必要な時の魔法を解除しようとした時、新しい問題が発生する。

時の魔法を解除する際、その間の記憶は消えてしまう。

思い出す可能性もある事はあるのだが、それでも可能性は限りなく低い。

はあ……。

思った以上に重いため息が出た。

隣に居たエヴァちゃんが、オレを見つめてきたので、頭を撫でて誤魔化す。

「子供扱いするな。」

と、少し怒った様子で言いながらも、撫でる手は払われないので、そのまま撫でておく。

記憶がなくなる事が良いか、悪いかは、オレには判断できない。だって、人殺しをした事や、物扱いされた時の記憶は、彼女が幸せ

になるには邪魔な記憶だろう。  
でも、だからと言って、それを消してしまう事が正しいのか、悪いのかは、分からない。

そんな状況の中、アスナちゃんは決めた。

記憶を消すと。

どんな思いで、コレを決断したかはオレには分からない。

気付けば、アスナちゃんとアルが乗っている電車が到着していた。  
ラッシュの時であれば、別なのだが、平日のお昼というこの時間帯である。

降りてきたのは、数人程度。

そのため、ゆつくりと改札口を通る、アルとアスナちゃんを簡単に発見できた。

どうやら、アルが気付いたようで、アスナちゃんを連れて歩いてくる。

エヴァちゃんの頭から手をどかす。

大した距離ではないので、2人がオレ達の目の前に来たのはすぐだった。

そして、オレは言うのだ。  
笑顔を浮かべながら

「ようこそ、麻帆良へ。」

初めまして。明日菜ちゃん。」

〈side 明日菜〉

脳内にある単語。  
意味は知っているけど、理解が出来ないような単語がいっぱいあった。

それは、家族だったり、友情だったり、と本当に多くある。

恋だの、愛だの、つと言った物。

これもまた、理解出来ない物である。

そして、惚れるという事も、同じように理解出来ない物である。



いや、正確には”あつた”と言った方が正しい。

アル（そう呼ぶ様に言われた）に付いて行く。  
目的地に到着するまで、三日ほど掛った。

そして、ようやく目的地に着いた時、彼はそこに居た。

優しく笑みを浮かべながら、金髪の少女を撫でる彼が……。

急に、胸が痛くなる。

ただ、この痛さは外部からの暴力、内側からの破壊とは全く違う種類の物。

キューと言った感じで、締め付けられるような感覚。

そして、勝手に頬は上気し、何故か涙も出そうになる。

いわゆる、一目惚れという奴だ。

彼は、私達を見て、深い笑みを浮かべる。

隣に居るアルは、軽く手を上げ、彼とコンタクトを取った。

どうやら、知り合いらしい。

そして、アルは彼に向かって歩いて行く。

必死に、自分の変化を表に出さない様にしながら、付いてく。

彼の前に到着した時、彼は言った。

「ようこそ、麻帆良へ。」

初めまして。明日菜ちゃん。」

その時の、声の優しさに、あまりに綺麗な笑顔に……

私は落ちた。

何か言おうとして、気付く。

私が、彼の名前すら知らない事に。

「……名前。」

たったコレだけの言葉。

それなのに、彼は分かった様で

「オレは、村重 徹。」

それで、こっちはエヴァちゃん。」

金髪の頭をポンポンと叩きながら、答えてくれた。

「ちょっと待て、テツ。」

ソレだと、私の名前が勘違いされる可能性が高いぞ!」!

言う、エヴァ・チャン。

「もう良い、自分で言うわ。」

良いか？私の名前は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだからな。

覚えておけ。」

コクリと頷く。

とりあえず、エヴァンジェリンの名前も分かったが、優先度は低い。

そして、行つのは脳内探索。

徹が（多分）惚れた自分が、何を行えば良いかを頭をフルに回転させて考える。

とりあえず、自分だけが好きじゃいけない。

相手も好きになってくれないとダメ。

お互いに好きだと、結婚し、子供を産む。

つまり、子供が出来る、互いに好きになる??

だったら、子供を作れば良い。

どうやって？

方法は分かるのだが、どうすれば徹がその気になってくれるかは不明。

「徹と私の子供が欲しい。」

とりあえず、素直に頼んでみた。

幕章 麻帆良編 その5 (前書き)

うぎゃああああ。

時間が足りないでござる。

今日のために準備した、プロットの半分も行っていないのに……。

とりあえず、本日3話目です

幕章 麻帆良編 その5

side テツ

「徹と私の子供が欲しい。」

この時、間違いなく世界は固まった。  
さて、今どんな状況か考えてみよう。

4、5歳の女の子が、ボディー年齢17歳のオレに向かって、子供  
が欲しいという。  
何と言うか……。

非常に不味いんじゃないか？  
この状況。

そして、状況はもっと悪くなる。

「まで、貴様。」

徹との子は私が産むんだからな。」

まさかのエヴァちゃん参戦である。

「だめ。  
私が産む。」

理想は、初めに女の子、次に男の子を産む事。  
でも、徹が望めば、何人でも産む。」

「私だって、テツが望むのなら、何人でも産んでやるさ。」

「私、良い奥さんになる。」

料理も、掃除も頑張る。」

「そんななりで、何が出来るというのだ？」

そもそも、女は尽くすだけじゃいかさ。

テツを支え、家を守ってやれるのは私だけだ。」

「エヴァ、自意識過剰。」

そんなの、当たり前。私だって出来る。

出来なくても、出来る様に努力する。」

10歳ボディーのエヴァちゃんと、5歳ボディーの明日菜ちゃんの  
口喧嘩。

喧嘩の内容は、どっちがオレ（17歳ボディー）の子供を産むか…  
…。

平日のお昼時。

人はあまり居ないとはいえ、けしてゼロというワケでは無い。

子供通しの微笑ましい喧嘩として、見てくれれば非常に助かる。

というより、エヴァちゃんと明日菜ちゃんの普通の喧嘩だったら、ココまで周りの視線が気にならないであろう。

『テツ、結婚しよ。』

『さて、貴様。』

私がテツと結婚する。』

みたいな感じだったら、非常に微笑ましいであろう。

だが、2人とも見た目とは裏腹に、持っている知識は非常に高い。それ故に

「そもそもだな、貴様。

初めては痛いんだぞ。」

「知っている。

でも、テツに捧げられるのだったら、きつと幸せ。」

「くっ、甘い。甘いぞお。

奴のモノの大きさを、貴様は知らないだろ？



そんな小さいナリじゃ、受け止められんさ。」

「逆を言えば、それだけ深く徹と繋がれる。」

この様な、微笑ましいとは言えない、色々とギリギリすぎる会話になってしまっているのだ。

周りから非常に痛々しい視線がビシビシと突き刺さるぜ。

アルに助けて貰おうと、視線を送ると、非常に良い笑顔が返ってくる。

どうやら、助けるつもりはないようだ。

どうやって、この場を収めよう？

頭を悩ましているうちに、ちょっとした疑問が脳裏によぎる。

それは、すなわち

どうして、明日菜ちゃんは、いきなりこんな事を言い出したのか？

である。

エヴァちゃんが参戦した理由は何となく分かる。

いわゆる、兄を取られたくない妹、又は父を取られたくない娘のよ  
うな気持ちであろう。

オレとエヴァちゃんには明確な繋がりはない。

まあ、500年も一緒に居たんだから、親愛だったり、家族愛だつたりという繋がりは勿論あるし、オレもエヴァちゃんも、互いの事を大切に思っている。

それでも、血の繋がりがや、夫婦といった、明確な繋がりが無いため、急に不安になったのであろう。

勿論、そんな不安など感じる必要はない。

500年も共に居続けたのだ。

そんな明確な繋がりがなくても、十分互いに繋がっていると、オレは思っている。

さて、問題は明日菜ちゃんの方だ。

彼女にとって、オレは初対面の男。

思いは無くならないとはいえども、記憶は無くなっているのだ。

そんな、彼女が、記憶がなくなる前に仲良くしていたからと言って、はたして唐突に、『徹と私の子供が欲しい。』などと言うのであろうか？

普通であつたら、言わない。

それは、間違いない事だ。

では、一体何故？

徹との子供が欲しい。

徹の子供を産みたい。

強情と言えるほど、明日菜ちゃんが、言う理由。

そして、記憶は消えるけど、思いは消えないという、アルの言葉。

笑顔を浮かべない、アスナちゃん。

無感情な表情で、肩車された男の子を眺めるアスナちゃん。

子供が欲しい。

2人。

でも、オレが望めば、何人でも……。

そして、良い奥さんになるという発言。

全部、分かった様な気がした。

記憶は消えるけど、思いは消えない。

それは、オレやエヴァちゃん、紅き翼の面々といった、知り合いに対する情を忘れないというのも確かだが  
逆に、家族の情を無意識のうちに求めた思いも、自信を空っぽだと  
いった虚無感も忘れていないと言う事。

表面上の記憶は失われているけど、奥深くに燻ぶる思いは何も変わっていない。

アスナちゃんは、オレに懐いていた。

残念ながら、彼女を笑顔にさせる事は出来なかったが、それでも嬉しそくにオレに肩車されていた。

そして、彼女は家族という物を、無意識のうちに求めていた。

この二つの思いが、彼女の中で渦巻いた。

そして、その疼きが出した答えと言うのが

『この男と家族になる。』

であったのだろう。

そして、明日菜ちゃんの中で、家族になる＝結婚。結婚とは、子供を産む事。

という、過程を経て、あのような発言が出てしまったのであろう。

コレが、正解かどうかは分からない。

もしかしたら、明日菜ちゃん本人だって、分かっているのかもしれない。

でも、オレには、そうしか思えなかったのだ。

「大体、お前みたいな小さな口ではしっかりと入るはずもない。」

「大丈夫、舐めるから。」

そもそも、後数年したら私だって成長する。

とりあえず、今は今の良さを堪能して貰う。」

まだ、ギリギリの話をしている2人の間に、割って入るオレ。

「むっ。」

「徹？」

ギリギリな議論は、これだけで収束をみせた。

なんていうか、もっと早くやっておくべきだった。

とりあえず、ヤバい状況の打破は完了した。

そして、次は明日菜ちゃんの希望を叶える番だ。

「と言うワケで、明日菜ちゃん。

家族になろうか。」

「なっ……」

「うん。」

2人の反応は正反対であった。

明日菜ちゃんは、喜び。

そして、エヴァちゃんは、絶望。

明日菜ちゃんの喜びっぷりは、一目見れば分かった。

何せ、笑顔が見れたのだ。

初めて見る、彼女の笑顔。それはとても、愛らしかった。

ココで、問題なのはエヴァちゃんの方である。

青い顔をし、彼女は今にも泣きだしそうに、目には涙をため、唇を震わせているのだ。

鈍感なオレだつて分かる。

エヴァちゃんは自分が捨てられないかと、怖れているのだ。

何百年も2人だけで居続けた。

それだけ、繋がり強いとも言えるだろうが、逆に言えば、それだけ変化がなかったのだ。

故に、エヴァちゃんはこの変化が怖かったんだと思う。

「大丈夫だよ。

エヴァちゃん。」

君を手放すつもりもないから。」

膝を付き、2人に視線を合わせながら、2人を包み込む。

右手にエヴァちゃん。左手に明日菜ちゃんが、すっぽりに入る。

「片方は愛人？」

いきなり、浮気？」

「一体、どう言う事だ？」

つまり、奴は昔から私を女として見ていたのか？」

腕の中でぶつぶつと、何か言っている様だが、声が小さい事、さらに二人同時に喋っていたため、いまいち何を言っているのかは不明だった。

「妹なのか、娘なのか……。」

どっちかは分からないけど、これで明日菜ちゃん。君もオレ達の家

族だよ。

ちなみに、お姉さんはエヴァちゃんね。」

言葉というのは、非常に難しい。

もっと色々な事を伝えたかった。

もっと分かりやすく伝えてあげたかった。

でも、今のオレにはコレが限界。

上手く伝わったかどうかは分からない。

でも、まあ……。

とりあえず、家族が一人増えました。

## 幕章 麻帆良編 その6 (前書き)

今回は、繋ぎの部分なので結構短めです。

もうちょっと更新したかったけど、タイムリミット。

とりあえず、抗ってみますが、たぶん今日中の更新は無理だと思います。

いや、やっぱり時間掛りますね。

恐らくですが、3月31日の大更新はこれで終わりだと思います。

大更新と言った割に、微妙な更新速度だったかもしれませんが、とりあえず頑張りました。

付きあって下さった方々、どうもありがとうございます。



幕章 麻帆良編 その6

side タカミチ

「よし、タカミチ。

今から、エロ本を買いに行くぞ!!」

授業が終わり、放課後になったとたんに、徹さんが放った。

しよっぱなから、飛ばし過ぎです……。徹さん……。

しかも、大声で言うてくるから、教室に残っている生徒からはニヤニヤだったり、若干の嫌悪感を抱いた様な視線が向けられている。

「おい、こら徹。

お前、一応未成年なんだから、先生の前で堂々と言うのはやめなさい。」

一応、注意する先生。

とは言っても、先生も男。

思春期特有の抗いがたい性的欲求を同じように経験しているためか、しっかりとした注意は出来ていない。

そもそも、自分の前で言うな、と言っているだけで、買うなどは言っていない。

「分かりました。」

先生に言わず、見つからない様に、こっそりと買ってきます。」

どつと、クラスが沸く。

先生は呆れた様な顔。

「よし、先生の了承も貰った事だし、さっさと行くぞ。」

今日のために、色々と下見もしてきたんだからな。」

「一体、何をしているんですか!?!」

思わず、突っ込んでしまった。

いや、だって普通は突っ込むでしょ?

「後、徹さんも知っているでしょ?

今日も、エヴァンジェリンの所で修行があるって。」

声を落としながら、話す。

徹さんが、一時間が一日になるエヴァンジェリンの別荘を使う事を禁止したせいで、纏まった修行時間が取れないのだ。

だから、少しでも時間を無駄にしないように、切りつめて行っしかない。

「あつ、エヴァちゃんにはしっかりとっておいたから大丈夫だよ。」

「え〜っと、なんて言ってきたんですか？」

嫌な予感がビンビンするんだけど……。

「そりゃ、勿論。」

タカミチとエロ本を買いに行ってくるって「

ホント、何してんですか、徹さん。」

というか、エヴァンジェリンもエヴァンジェリンで、どうして了承したりするかな？

「あつ、そうそう。」

エヴァちゃんから、「コレを渡せって言われてたんだっけ。」

ほれ、タカミチ。」

そう言いながら、徹さんから渡されたのは、シンプルな封筒だった。封筒を開けると、中から手紙が出てくる。

たぶん、今日休むため、夜やる自主練用のメニューが書かれている物であろう。

軽く、目を通す。

真剣に目を通す。

とりあえず、目を擦り、再び目を通す。

計三回ほど確認をしたが、書かれている言葉は何も変わっていないかった。

『テツに、10歳ほどの金髪の少女が出ている、アダルトな本を買わせろ。』

エヴァンジェリン』

流石に、そりゃないって……。

「おっと、忘れるところだった。」

「こっちは、明日菜ちゃんからの手紙らしいぞ。」

そう言われ、シンプルな封筒が渡される。

出来れば、開きたくないなあ……。でも、まあ、見なかったら見なかったで、後で明日菜ちゃんに文句

言われそうだし……。

ええ〜い。

『徹に、明るい色の髪の毛で、オッドアイの女性が出ている、アダルトな本を買わせて。』

ロリ関係だと、興味がエヴァに行くかもしれないから、15歳前後が理想。

神楽坂明日菜』

うん、想像通り過ぎて涙が出てきそうだよ。

徹さんに引つ張られながら、チョッピリ僕は涙を流した。

PS

エヴァンジェリンに言われた本。

10歳程の金髪の女性が出てくるエロ本は、日本では売っていませんでした。

素直に、それを報告した所、特にお咎めもなく終わった。

「日本にはない……。」

だったら、外国から持ってくる事は出来るのか？

じじいにも頼めば……。」

去り際に、エヴァンジェリンが零した言葉は聞こえていない。  
聞こえていないって言ったなら、聞こえていない。

PS (パート2)

明日菜ちゃんに言われた本。

明るい色の髪の毛で、オッドアイの女性が出ているエロ本は余りに  
条件が多く、細かったため、売っていなかった。

素直にそれを報告した所、「そう。」とだけ、返事があった。

「やはり、私の身体は希少価値。」

もう、これは私自身の身体を使って、徹の好みを変えて行くしかない？

でも、馴れられるのは危険。

エヴァの二の舞になる可能性がある……。」

僕は、何も聞こえなかった事にしておいた。

とりあえず、徹さんが大変な目にあわない様に祈っておいた。

PS (パート3)

徹さんは、一切のエロ本を買わず、ただ僕に買わせようとするだけだった。

「だってさ、最近タカミチってば、追い込み過ぎだったからね。

たまには、こつやってバカやるのも良いかなあって思ってさ。

エロ本???

ああ。

そりゃ、エヴァちゃんや明日菜ちゃんと暮らしてるんだからね。オレが買うワケにもいかないっしょ。」

徹さんの、あまりの普通の反応に、涙が出そうになった。

ああ、詠春さん、ガトウさん……。

貴方達が胃薬を手放せなくなったワケ、分かりました。

## 幕章 麻帆良編 その7

えいつ ふぁいあー あいすすとーむ

負けられない戦いがココにはあった。  
隣には、小学生になった明日菜の姿。

5年ほど前に、時の魔法が身体から抜け切り、いつの間にか身長は私を抜かしていた。

もう5年もすれば、胸も膨らみ、女らしい身体へとなるであろう。  
そう考えると、肉体で明日菜に勝つと言うのは難しくなっていくんだらうな。

そんな事を考えながらも、せっせかと、色のついたスライムを重ねて行く。

互いの腕は、たいして変わらないため、決着が中々付かない。

一進一退の攻防。

そんな中、空気の読めない電話の電子音が響いた。

「エヴァ、電話。」

「ええーい、そんな物無視だ。無視。」

「そういうのは、ダメ。」

「はっ、そう言いながら、私が電話をしている最中に勝手に進めるのだから？」



もう、10年近くも共に暮らしているのだ。  
そのぐらい分かるさ。

「エヴァだって、同じ状況だったらする。

でも大丈夫、絶対しないから。  
早くとらないと、徹起きる。」

言いながら、ソファーを見つめる明日菜。  
正確には、ソファーの上で寝ている徹をだが。

現在行っている勝負の景品だ。  
どちらが、徹と共に寝るか。

ソファーと言う非常に狭い空間。  
その空間であればどれだけ徹にひっ付いていようとも、全然不思議  
ではない。

つまり、これは徹に触れる絶好の機会なのだ！！

そんな、嗜好の景品が電子音如きに奪われるのは確かに不愉快。

「ちっ、分かった。

ただ、絶対勝手に進めるなよ。」

言いながら、電話を取りに行く。

まあ、基本的にここに電話をかけてくる人間なんぞ、知れている。

ジジイかタカミチ、可能性は低いが、アルかもしれない。

ちっ、下らん要件だったら即刻切ってやる。  
そんな事を思いながら受話器を取る。

「なんだ？」

いつもの問い掛けを（この様なやりとりをしている事が、徹にはねると少々うるさい。）すると、推測の通り電話の相手はジジイであつたのだが、どうも様子が可笑しい。

電話の向こうから感じる雰囲気、どうも切羽詰まっている。

あの飄々としているジジイが、だ。

そして、ジジイから告げられた言葉は

「徹君が、重体を負つたというのは本当なのか!？」

余りにも、予想外の事であつた。

なにせ、徹なのだ。

世界最強の存在。

そんな彼がデマとはいえ、重傷を負つ。  
笑えない冗談である。

さらに、本人は暢気にお昼寝タイムだ。

「奴だったら、リビングで昼寝中だ。」

たくっ、ジジイ。変なデマに振り回されるな。」

とつとつと、電話を切り、勝負に戻らなくてわな。何とかして、一度途切れてしまった集中力を戻さねば、私の勝利はない。

大体、明日菜が本当に勝手に進めていないかも怪しい。まあ、勝手に進められていたら無効試合として、もう一回初めからやれば良い。

むしろ、そっちの方が、途切れた集中を戻すことが出来、私にとってはプラスかもしれぬ。

「そうじゃな。」

あの徹君が銀行強盗如きに傷を負うはずなどないのお……。まあ、重体の徹という少年には悪いが、安心してしまったよっじゃ。

「ジジイの言葉でイメージが頭をよぎる。」

一瞬だけ、徹がアコという少女を守る姿がよぎる。500年程経ち、薄れながらも、けして消える事のない記憶。

彼の夢を見て、私は自身を戒めた。

不老であり、最強であるが、徹も死ぬ可能性があるという事を。

彼は、何でも出来る存在ではなく、私たちと変わらぬ存在であるという事を、私は知った。

その戒めを忘れた事はない。

いつか、恩を返そうと思う思いも、彼に依存している私の自覚も、全て忘れたことはない。事

だが、夢の内容は忘れていた。

あの、当時としては不可思議な空間を私は忘れていた。

今頃になって、思い立った予測。  
それが、私の胸を締め付ける。

「確かに、可哀想だとは思いますが、儂の生徒ではなく、知り合いでもない。

人々を救った英雄に対して、このような感情はどうかと思うんじゃないかのお……。

もちろん、儂としても全力を尽くす」

「ジジイ。

全てを詳しく話せ。」

今、私の頭の中にある予測。

あまりにも現実離れをしており、鼻で笑われるような、そんな滑稽な物。

出来るのなら、私も鼻で笑いたい。

そんなはずがない。下らない。馬鹿馬鹿しい。  
そのどれでも良い。とにかく否定したいのだ。

だが、どうしても否定出来ない自分がいる。

「ひよっ？

エヴァンジェリン、テレビを見ておらんのか？

今、何処もそのニュースをやっとるぞ。」

受話器を持ち、そのままリビングに向かおうとするが、出来ず、仕

方なしに電話全てを持つが、電話線が届かない。  
無理やりひっぱり、電話が切れた。

ああ、もう。

これだからハイテクってやつは！！  
簡単に壊れるから、いかん。

色々慌てていたせいで、念波という便利な物に気付くまで5分ほどかかった。

どうやら、ジジイも失念していたようだ。

「明日菜。

チャンネルを変えろ。」

私の方だけ、色付きスライム+透明スライムが量産されていたが、とりあえず無視。

そして、チャンネルを変え、一番初めに出たのは

村重 徹重体

という、文字であった。

明日菜は、呆然とこの文字を見、徹を見て落ち着いたように息を吐き出す。

そして、そのままニュースを見るようであり、顔をテレビに向けていた。

「ジジイ、この徹という少年の傷は？」

明日菜に聞こえないよう、小声で問いながら、私はソファで寝ている徹の服をめくる。

「……………銃によるものじゃの。  
主に腹部に受けたらしい。」

まったく、いきなりどうしたんじゃ？

付属病院からのカルテは、確かココに……………。

おお、あったあった。」

「腹部。」

水月に一発、左の脇に2発、左胸にも一発あるな……………。  
この切り傷は……………違う傷か。  
後は、右足の付け根のすぐ上……………。」

震えそうになる手で、ゆっくりと傷口に触れながら彼の傷口のある部位を言っていく。

「……………エヴァンジェリン、どうして」

「多くの古傷があり、一つ一つ上げればきりが無い。  
が、中でも左胸を真横に走る傷、あとは背中の上から右下にかけ

て大きな傷が目立つ……。

どうだ？

当たっているか？」

何も言わず、ただ聞いていたジジイの様子から、問わずとも答えな  
んぞ分かっていた。

だが、それでも間違いであるかもしれないという希望を捨てること  
が私には出来なかった。

「あつておるぞ。」

銃を受けた箇所、目立つ古傷の箇所。

エヴァンジェリンの言った通りの事がカルテにも書かれておる。」

「……そうか。」

それだけを言うと、念波を切った。

まったく知らない、500年もの昔……。

しかも、全く違う国。

そんな所へ、不老という異常な体にされながら飛ばされたのだ。

不幸の比べあいなど、するつもりなど毛頭ない。

だが、それでも、私は思わずにはいられない。

どうして、徹だけが、こんなにも苦しい目にあわなくてはいけない  
のだ？と……。

それと同時に、自身のダメっぷりが嫌になる。

何度だってチャンスはあったのだ。  
銀行に入った事だって、数度ある。  
銀行強盗を題材としたドラマも見た事だってある。

そのたびに訪れる、デジャブを、よくある事と無視しなければ、気  
付けたらうに。

違う、そうではないだろ？

そうじゃない。

そんなんじゃないのだ。

認める。認めなくちゃ、いけないんだ。

ただ、気付いていなかったわけじゃない。  
気付かないはずが、ないじゃないか。

いくら、夢の記憶が薄れようとも……。  
あれほど強烈なデジャブが何度も来ているというのに、よくある事  
などと思っはすないじゃないか……。

気付いていながらも、気付かないふりをしていたのだ。

私は!!!



自分さえ偽り、無自覚に気付けないようにしていた。  
もう、どうしようもない証拠が出てきてしまったから、ようやく気付けたが、これがなかったら私は間違いなく、ずっと気付けないでいたに違いない。

愚かだ。愚か過ぎる。

愚かで、浅ましく、厭らしい！！

私は、私は……。

怖かったのだ。

今だって怖い。

私の世界は、徹が作ってくれたのだ。

徹が未来からやってきた、時を越えてきた徹が私の世界を彩ってくれたのだ。

そんな徹が、もし時を越えなかったら？

たぶん、無意識のうちに気付いていたんだと思う。

だから、私は気付かないようにしていた。

だって、私がやろうとすれば、幼い頃の徹を守るから。

徹の身体中にあつた傷跡。

幼い頃に出来た物も多々あると言っていた。

死にかけてた事も何度もあると言っていた。

守るべきなのであろう。  
愛おしい相手なんだから。

助けるべきなのだろう。

自分を救ってくれた恩人だから。

だけど……。

もし、幼き頃の彼に関わった事によって、彼が時を越えなかったら？

逆に、彼に関わらなかった事によって、時を越えなかったら？

ギチギチと、鎖が私を縛る。

私は怖かったのだ。

気付かないように、気付かないようにとじていたが、気付いてしまった。

怖くて、自分が嫌になって、哀しくて。

気付けば、雫が頬を伝っていた。

「私は、お前と共に居ても良いのか？」

小さな啖きが漏れた。

500年もの時を共に居ながら、今更の言葉だ。

だが、私は……。

side 徹

一発で、これは夢だと分かった。  
別に、頭がボーっとしているからでもなければ、視界に霞がかかっていたからでもない。  
猫が空を飛んでいるのを見たからでも、6メートルほどのネズミが居たからでもない。

夢だと分かった理由。

それは、エヴァちゃんが泣いていたからだ。

しかも、オレの目の前で。

エヴァちゃんが泣かないという事ではない。  
確かに、珍しいが何度も隠れて泣いていたというのも、オレは知っていた。

村を離れる事になった時も、知り合いが亡くなった時も、エヴァち

やんが泣いていたのをオレは知っている。

オレに見つからないように、コッソリと。

オレに心配させないように、すぐに笑みを浮かべていたのも、知っていた。

エヴァちゃんが、ここまで素直にオレの前で泣いてくれたのは、あのお風呂の時間が最初で最後だった。

多分、この夢はオレの願望。

エヴァちゃんには甘えてほしいのだ。

別に、エヴァちゃんを子ども扱いしているワケではない。確かに、エヴァちゃんは子供っぽいが、それでも大人だ。

一応は、その認識はある。

いや、まあ、たまに子供扱いしちゃうんだけど……。

まっ、それは置いておいて、とにかくオレはエヴァちゃんにもうちよっただけでも、甘えてほしい。

確かに、エヴァちゃんが可愛いからっていうのもあるよ？

こんなに可愛い子に甘えられたって気持ちも無いとは言わない。

でもさ、それ以上に

オレにも少しぐらい支えさせて欲しいんだよ。

大人ぶって、泣き虫なのに、冷酷なふりして……。

あやふやで、ころころと変わるエヴァちゃんに、オレは救われていたんだ。

何百年っていつぶざけた年月。

ワケが分からなくなるぐらいの長い時間。

それを、こうやって過ごせたのは、君が……。

「私は、お前と共に居ても良いのか？」

涙を流しながら、問いかけるエヴァちゃん。

今にも、消えてしまいそうな、震える声で、問いかけられる。

抱きしめたかった。

今にも消えそうなエヴァちゃんを。

けれど、自分の身体は動かない。

白い霧が濃くなっていき、エヴァちゃんを隠し始める。

酷く嫌な予感。

まるで、エヴァちゃんが何処か消えてしまいそうな、そんな予感。

何か、しなくちゃいけない。

そう思うのに、身体は動いてはくれなかった。

泣きそうな、彼女を抱きしめてやりたい。

遠くに行ってしまういな、彼女の手をとり、繋ぎ止めたい。

けど、そのどちらも、オレには出来なくて

「当たり前だよ。」

むしろ、エヴァちゃんが居なくなったら、オレは泣くよ?」

唯一出来たのは、そうやって、声をかける事だけだった。

幕章 麻帆良編 その8 (前書き)

ちよつと、文章の時間軸に違和感があるかもしれません。

幕章 麻帆良編 その8

Side 亜子

テツ兄いは、随分と変わり果ててもうた姿やった。  
色んな管が兄いの身体中巡らされとって、ワケの分からんよおな沢山の機会に囲まれとった。

ピッ、ピッ……

そんな無機質な電子音が、ピクリとも動かへん兄いが行きとる事を教えてくれとったが、その音はあまりにも弱々しいねん。  
慌ててやって来た、おじさんとおばさん。  
おばさんは、兄いの様子を見た瞬間、呆然と立ち尽しとるんや。  
おじさんは、痛々しい兄いの姿を見つめとった。

「どアホ息子が。」

おじさんの咳きが思った以上によお響いたん。  
テツ兄いは、アホやから、よう入院しとった。  
勝手に身体が動いたとか、ゆーて、いつも大怪我しとんねん。  
いつもいつも、誰かを助けて、巻き込まれて大怪我しとんねん。

ほんま、いつもいつも……。



ウチも、助けてもろうて、大きな傷作らせてもうて。  
兄いアホやから、ほんまアホやからな。  
いっつも、いっつも傷だらけになってん。  
それでな、笑うんや。

ウチを助けたときやって、そうや。

兄いの横で泣いておるウチをな、笑って撫でるんや。

ウチな、テツ兄いに謝らんといかん。  
だってな、兄いが怖かったんや。

「OK、じゃこちらも終わらせるな。」

言いながら、男がウチに銃を向けた時。

ほんま、ドラマみたいな展開やったんや。

お母さんが見とった、ドラマ。

でな、ウチ狙われとるちゆうに、全く何も思わんかったんや。  
ただ、ああ死ぬんかってだけ。

そんな事、思ってたらな、兄いがウチを助けたんや。

男の腕を、折ってな。

そんな時の兄いの目が、怖かったんや。

平然と、何でも無い様に腕を折って、そして、その後

大勢を殺した兄いが、怖かったんや。

多分、兄いやから、ウチが怖がつてたの分かったと思う。  
悲鳴、めっちゃ上げてもうたしな。

兄いが、兄いじゃなかったみたいで。

そないな事、思っちゃアカンって分かっておる。  
分かっておったんや。

兄いは、ウチ達のために、人を殺したちゆうのは、分かっておった  
んや。

分かっておったんやけど、ウチは……。

せやから、ウチ謝りたんや。

兄いに。

せやから兄い、はよう起きてや。

もうな、もう、ウチ、我俣もお願いもしいへん。

兄いが褒めてくれた、料理やって、毎日作つたる。

せやからな、せやから

「起きてや、徹兄い。お願いやから。」

呟いたと、ほぼ同じ時

ピ

異様なほど、甲高い機械音が耳に刺さる。  
慌てた様子で、動き出すお医者さん。

ウチは、何も出来ず呆然とするだけやった。

ウチ、頭そんなによくないから、今お医者さんが何をやっとするのか、全然分からへん。

せやけど、あの音が、徹兄いを遠くへ連れてっっちゃう事だけはわか  
つとつたんや。

「嫌や。

ウチ、ウチ」

唐突に世界が光に包まれたんや。

真っ白な世界やった。

光がなくなると、兄が消えておったんや。跡形もなく。

視界が真っ白になったんは、ウチだけじゃなかったようで、皆が大慌てしとった。

真っ白になったんは、ほんの数秒。

その間に、兄いはどっかに消えてもったんや。

後々知ったんやけど、どうやら今時の光ちゅうのが、どうやら世界樹の発光らしん。

ほんま、一瞬やったけど、かなり強く光ったらしんや。

それが、原因でな、真っ白になったらしい。

次の日、その発光でクラス中が盛りあがったなあ。

まあ、とりあえず、唐突に徹兄が消えたんや。

初めは、皆大慌てやった。

皆して、病室の中を探し回ったんやで。

お医者さんなんて、パニックになって変な木の棒を取り出したかと思つと、ぶつぶつ独り言言つておったし。

ウチだつて、真面目な顔して、机の引き出しん中まで探したんやで？

ほいたらな、おじさん、真面目な顔で

「そこは、もう探したよ。」

つて。

あの、真面目なおじさんがやで？

警察まで来てな、ほんま大騒ぎやったんや……。

結局、兄いは見つからんかったけどな。

おじさんから、聞いた話なんだけど兄いって昔旅行先で神隠しにあつたらしいやん。

皆の目の前で、急に消えて、大騒ぎしとつたら、ひよっこり森ん中から出てきて……。

きつと、今回もそんな感じなんやろ？

ウチ等、信じとるんやで。

周りが進めて来とつた兄いの葬式なんて、やっておらんし、兄いの部屋も昔のまんまや。

たまにウチ等で掃除してな、本棚の後ろにあつたエツちな本やつて、おばさんと一緒に見つけてもうたわ。

とりあえず、兄いにお説教しなくちゃいかん事が一つ増えたちゆうわけや。

なあ、兄い。

ウチ、また兄いと会つた時にな、胸張れる様、がんばつとるよ？

部活もやつとるし、勉強やて、トップやないけど上位におるし、どうや、出来た従妹やろ？

どうせ、徹兄いの事や。

全然女人人にモテないんやろ？  
徹兄い、常にマイペースやからなあ。

せやからな、ウチが徹兄いもろうてあげるからな。安心してな。

料理やて、掃除やて、上手になつたんやで？

もう、中学生やし、身体もな、随分と大きくなってな、胸だつて出てきたんで。

おじさんや、おばさんに会つたんび、女らしゅうなつたつて、言われるんや。

まあ、お世辞何やろうけどな。

そいでな、そいで……。

ウチ、徹兄いに伝えたい事、一杯あるんやで？

謝つたり、お説教したり、自慢したりな、ほんま、一杯言いたいことがあるんやで？

せやから、はよう帰ってきてや。徹兄い。

## 幕章 麻帆良編 その8（後書き）

原作より、ちょっと、前向きで、ちょっと強い部分が表にでた和泉亜子です。

うっん、口調がとても難しい。

正直、これで大丈夫なのか不安です。

PS、まどろみとして、ツイッターなる物をやるつかどうか悩んでいる最中であります。

活動報告では、確認しない人も多そうですし、何よりツイッターは手軽そう。

という訳で、皆さんに意見を聞きたいと思います。

意見は、感想にでも、適当に書いてくださると嬉しいです。

幕章 麻帆良編 その9

Side テツ

『なるほど、と言うことはワンちゃんに上げるのは、極力やめたほうが良いと言うわけですね。』

『ええ、そうなりますね。』

そもそも、人間と犬は違う存在だという事をしっかりと飼い主は分かっておく必要があります。

自分と同じものを犬にも食べさせたいという気持ちも分からない事は

寝ぼけ眼で、ぼうつと、どうでも良いテレビを眺めていた。

ぼかぼかしており、外からは猫の鳴き声が聞こえる。

そんな、昼下がりであった。

昼飯を食べたばかりだからかな？  
結構眠い。

このまま、のんびりとお昼寝タイムってのもいいかもしれない。  
明日菜ちゃんは、お友達と出かけてるし、エヴァちゃんは部活関係



で遅くなるとか言ってたしなあ。

寝ちゃっても、咎められることはない。

でも食っちゃねって、身体に悪いだらうしなあ。

ちよつと、腹ごなしの散歩でもしようかね？

学園長に頼まれた見回りもそろそろやるべきだらうし、ちよつと良  
いかも。

うん、そうしよ。

それじゃ、とりあえず片づけを……。

あつ、やべえ……。

さっき、ぼつつとしすぎていたみたいだ。

エヴァちゃんが楽しみにしていたクロスワードの所に、さっきの番  
組の内容を無意識のうちに書き連ねていたのだ。

内容は、びっくりするぐらい意味のない物だ。

ウチ、犬も猫も飼ってないし……。

まあ、クロスワードは見づらいたらうけど、出来ない事はないだら  
うし……。

後で謝ろ。

私の足取りは軽かった。

なにせ運が良い事に、予定よりも随分と早く部活が終わったのだ。

明日菜も、今日は予定があるらしく、多分まだ帰っていないだろう。  
つまり、これから数時間はテツと二人きりということだ。

ふっふふふ。

これが日ごろの行いと言う奴だな。

「今帰ったぞ。」

むっ？

テツの返事がないぞ。

昼寝中か？

それだったら、一緒に寝るかな？

……バカモノ、今は昼だぞ？

ただ、共に寝るだけだ。

うむっ。

確かに、明日菜が来てからというものの、回数が大いに減ってしまった。  
（一緒に暮らす者にはれない様にやるとするのは、大変なのだ。

）

だいたい、私は毎回毎回処女が再生してしまうんだ。  
さらに、私の身体は出来上がっておらず小さいうえ、奴のソレが大  
きいという状況だ。

快樂より、痛みの方がよっぽど強い。

その痛みが2、3日も続くのだ。

そんな、マイナス要素しかない物を、真昼間からやる必要性など一  
切ないだろ？

そうだ。

そうなのだ。

例え、奴と一緒にいる事に安心感を覚えようとも、寝ながらも私に  
強く抱きしめてきて、その力強さに胸が苦しくなるうとも、下半身  
の痛みが愛おしく感じようとも……ええっと……。

テツは一体何処に居るのだ？

ソファアの上ではなく、寝室で寝ていてくれると色々と助かるのだ  
が。

ボックスティッシュを片手に、軽く家の中を探してみたが、テツの  
姿は見当たらなかった。

出かけてた様だ。

ええ、いい、こうなったら奴の布団に包まって寝てやるぞ。

テツの部屋に移動しようとしてリビングを横切と、テーブルに新聞が出  
しっぱなしだった。

あまり、見栄えもいい物ではないので、ソレを片付けようと、手を伸ばした瞬間、私は固まってしまった。

「まったく、テツ、お前の頭はどうなんてんだ？」

ため息を一つ吐きながら、再び手元を見つめる。

たった4文字しか存在しない。

たったの4文字だ。

これが『LOVE』だったり、『愛してる』とかだったら、舞い上がっていただろう。

まあ、奴にそんな物期待するだけ無駄さ。

見つめる先には、奴の字で

『ネギ危険』

とだけ、記されていた。

＼side 近右衛門＼

唐突にエヴァンジェリンから訪れた念波。

それが、わしの頭を悩ませている原因じゃった。

言われた事は酷く単純な事。

ネギ君に、危険が迫っているかもしれないと言っただけじゃ。

そう、テツ君が示唆した。

エヴァンジェリン曰く、徹君のこういつた予測は9割がた当たるそうじゃ。

予測と言つには、あまりにも正確性が高すぎる情報。

すでに、その域は予測を通り過ぎ、未来視といっても過言ではなからう。

そして、恐ろしいのが、これがあくまで、予測であると言つことじゃ。

隠者や、特殊な装置を使って、情報を得たワケじゃなく。

彼が手に入れる情報など、わしが手に入れる物よりもよっぽど少ないぐらいじゃろう。

情報収集能力がない彼が、わしも知らんような情報をどうして持っているのか、普通であつたら不思議に思うところじゃろう。

わしも、初めは不思議で仕方がなかった。

わしはてつきり、卓越した情報収集能力が彼に『未来人』という二つ名が与えられた原因と思つておつたからの。

情報収集能力が高いというのは、後に起こることも分かるということじゃ。

その二つ名が付いたとしても、全く持って不思議ではあるまい。

それじゃって、十分に凄い事じゃ。

じゃが、村重 徹という男は、わしの想像をより遥か上の男じゃった。

奴はただ、推測しているだけだったのだ。

何気ない仕草で、心を読み、テレビのCMで世界を読み、穏やかに吹く風で未来を読む。

もちろん、推測であるため外す事もあるが、圧倒的に当てる可能性のほうが高い。

徹君は、あまりに人の欲望に敏感すぎる。

不幸中の幸いは、彼が意識しなければ、人の心のうちを読めないという事じゃ。

無意識のウチにも、人の心を読めるのなら、エヴァンジェリンや明日菜ちゃんは、ここまで苦勞する事はなかっただろう。

さらに、無意識のうちに読めるのなら、そちらの方が都合が良いのも事実。じゃが、わしは安心してしまったんじゃ。

徹君の力は大きく、巨大である。

その力に、幾度も助けられてきたわしが、このような事思っただいにかんかもしれぬし、もしかしたら徹君を侮辱している事と同義なのかもしれぬ。

それでも、わしは安心してしまったのだ。

人の心を読む。それは夢の様な能力なのかもしれぬ。

誰しも、一度や二度、人の心を読みたいと思つた事もあるじやろう。

だが、それはあまりにも哀しすぎるではないか。

見たくもない、心が読まれるのだ。

どんなに頑張つても、どんなに素晴らしい者でも、湧き上がる気持ちはどうにもならんのじゃ。

そんなモノばかりを、見てしまふ。

そんなもの、あまりにも哀しいではないか。

この思いじゃって、彼を侮辱しているとわし自身分かつておる。分かつておるが、どうしても止まらぬのだ。

どれだけ歳を重ねようと、どうにもならん。

じゃから、わしは意識しないと読めないという事に安心したんじゃ。

まだ、まだ徹君に僅かな救いがあると、安心したんじゃ。

その能力によつて、数え切れぬほどの苦痛があつたはずなのに、安心したんじゃ。

わしには、想像付かないような苦悩があつたはずなのに、安心してしまつたんじゃ。

徹君の事について考える事なんて、後でいくらかも出来る。

今はそんな事をやってる暇なんぞないんじゃないからな。

救えるはずの子供があるのじゃ。  
それを救わないワケにはいかん。

力量的にも、人柄的にも、一番信頼がおけるタカミチ君に、行って貰おうかの？

大学には、適当に話を付けておけば良いじゃろう。

そうになると、彼が抜けた部分の調整は、別の者に……。それは、後でやれるからの、とりあえず今はタカミチ君に連絡をとるべきじゃ。

その様に、これからの事を考えておると、頭の端にちよつとした疑問が生まれた。

何故徹君は、ネギ君が危険と言うことしか知らせなかったのだろうか？

分からなかったというのなら、それまでだが、何かが可笑しいような気がする。

そもそも、エヴァに対しての書き置き、さらにあれほど短い物で済ます理由がないはずじゃ。

そういつた疑問を、無理やり押さえ込みながら、作業をしていく。疑問は確かにあるんじゃないが、今必要なことではあるまい。

湧き出そうな疑問と戦いながら、大学への言い訳を報告書にまとめていると、大きな音と共にドアが開かれた。

「学園長、明日菜ちゃんと木乃香ちゃんの誘拐未遂が発生しました。

」



ノックもなくいきなりドアが開けられた事、タカミチ君の唐突な言葉、それらの性で一瞬固まるが、すぐに持ち直す。

「誘拐未遂？」

とりあえず、誘拐されたワケではなく、未遂だという事なので、あまり慌てる必要はないじやろう。

「ええ、徹さんが対処してくれました。

あの方が居なかったら、多分防げなかったかと……。」

タカミチ君の言葉で、わしは先ほどの疑問がようやく解決したのだ。何故、徹君があれほど曖昧な形でネギ君の危険をわしに伝えてきたか。

純粹に、時間が足りなかったのじゃ。

2人を救うために必要な時間が。

「まったく、わし等は徹君に救われてばかりだな。」

小さく呟きいた後、タカミチ君から詳細を聞き、念波を使い、ガンドルフィーニ君にこの後の処理を指示する。

「タカミチ君、すまないが少し、待ってとってくれ。」

タカミチ君の返事を聞きながら、次は徹君へと念波を飛ばす。

↳ side テツ↳

ぽかぽかとした、いい天気で、非常に気分よく散歩していたら、落ちた。

うん、何を言っているか分からないかもしれないけど、事実なんだよ。

ホント、それは偶然だったんだ。

世界樹の下をのんびりと散歩してたら、地面がすっぽ抜けて落下。滑り台っぽく、滑って、到達点にいた男の上に着地……。

そんなもって、次に目に入ってきたのは、涙が僅かに浮かんでいる木乃香ちゃんと、それを庇う様にしている明日菜ちゃんの二人が驚いたような顔だった。

「あははは、ハロー。」

とりあえず、笑って挨拶をするが、反応はなかった。

話を聞いていくと、どうやら二人とも誘拐されそうだったらしい。世界樹の木の下に追い込まれ、同じように落下。(どうやら、誘拐

犯がわざわざこの穴を用意したらしい。用途は普通に犯罪だけど、能力は凄いと思う。」

まあ、その後は、オレが落下してきて、誘拐犯を気絶させたとの事。なんていうか、締まらないなあ。

『誘拐犯を撃退!!』

っていうカッコいい言葉なのに、ただ落ちて踏んじやっただけというね……。

「まあ、2人とも無事で良かったよ。」

うん、これは本心だ。

抱きつきながら泣いている木乃香ちゃんを撫でながら、助けが来るのを待つ。

いや、まあ10才にもならない子だ。泣くのも仕方ないよ。

タカミチに念波でSOSしておいたから、多分来るでしょう。

明日菜ちゃんは、ちょっと離れている。

まあ、多分木乃香ちゃんに遠慮しているんじゃないかな？

明日菜ちゃんだって怖かったはずなのにね。

「明日菜ちゃんもおいで。」

複雑な年頃故の恥ずかしさからか、真っ赤な顔になりながらもトコトコと近づいてくる明日菜ちゃん。

「明日菜ちゃんも、よく頑張ったね。」

無理やり、明日菜ちゃんを抱き寄せた。

明日菜ちゃんは、甘え下手だから、こうやって無理やりぐらいが丁度いいんだよねえ。

そうやってると、念波が飛んで来た。

『唐突ですまないのお、徹君。』

まず、誘拐を未然に防いでくれた事、感謝するぞい。』

『いえいえ。そんなにお気になさらず。』

明日菜ちゃんと木乃香ちゃんには、魔法は内緒なので、2人に勘付かれない様に、念波を送る。

『そういう訳にはいかんのお。』

わしはが、徹君に感謝してもしても、全然足りておらぬ。

それだけの事を、徹君はしてくれたのじゃよ。』

ただ穴に落ちただけのオレに、ココまで言うとは……。

なんていうか学園長に対して、罪悪感に似た何かを感じてしまう。

『ああ、どういたしまして。で良いんでしょうかね？』

それですね、今世界樹の下に閉じ込められて……。

念じながら、木乃香ちゃんの髪の毛をわしゃわしゃと撫でる。

よく、エヴァちゃんから撫でる時は髪を崩すなど言われているんだが、うまく出来なかったようで、木乃香ちゃんの髪の毛はある意味

前衛的な物へと変化しつつある。

『それについては、ガンドルフィーニ君が迎えに来るように手配したぞい。』

君からの念波をタカミチ君がすぐ伝えに来てくれたからのお。』

『どうも、助かります。』

誘拐犯の対処も終わっているし、迎えもしっかりと来る。

これで、とりあえずは安心である。

『ああ、それでな。徹君が書いたネギに関してじゃが……。』

それ以上の情報はなにか、ないかな？』

一安心したところで、あまりに急な話題転換。

と言うか、いきなりどうしてネギが出てくるのか分からない。

そこで、脳裏を過ぎったのは、クロスワードに書きちゃった『ネギ危険』という文字。

どうやら、学園長の愛犬がネギを食べちゃったらしい。

『……下手したら命に関わります。』

詳しくは知らないけど、大量摂取したら、命に関わるとか言っていたよな？

『出来るなら、すぐに対処をした方が良いでしょう』

吐かせたり、医者に連れて行ったりとか。  
対処が早ければ早いほど、良いだろう。

『分かった。助かったぞい。』

あつ、そうそう。

出来るなら木乃香の事を今日一日頼んでいいかのお？

今回の事件、木乃香が明日菜の個人を狙った可能性が高い。

とりあえず、落ち着くまではそちらで預かって貰いたいんじゃないが。』

『別に良いですよ。』

そう念じるのと、ほぼ同時に、ガンドルフィーニ先生の救助がやってきた。

〈side 木乃香〉

白馬に乗った王子様。

明日菜が、頬を染めながら徹さんをそない例えたん。

こう言うちゃアカンやもしれへんけど、ウチ、その言葉聞いて笑ってもつたん。

確かに、徹さんは優しい人って思うんやけどな、白馬に乗った王子様ってのは似あわへん。

徹さんの印象って言うのは、優しゅうて、物腰が柔らかいって感じや。

良い人って言うのは分かるんやけど、なあ？

せやけどな、ウチの間違いやったん。

たまたま、タダの偶然やと思う。

でもな、明日菜（お姫様）の危機に、颯爽と登場した徹さんはな、確かに王子様だったん。

ウチには、そう見えたん。

徹さんが来たとたん、ウチ安心して、明日菜が近くにおるちゅうに、徹さんに抱きついて泣いてもうたん。

うう、ウチとしては最大の失敗やわ。

## 幕章 麻帆良編 その9 (後書き)

とりあえず、ツイッターをやってみようかと思えます。  
使ったこと無いので、どうなるやら……。

URLは下に表示しておきます。

とりあえずは、試しという感じです。

感想・意見。

適当に書いてくれると嬉しいです。

<http://twitter.com/madoromi>



## 幕章 麻帆良編 その10

Side 超鈴音

昔、ココでは未来とでも言うべきだろうネ。

そこで私は天才という言葉が欲しいままにしてきたネ。

10代にして、タイムパラドックスを矛盾のままにも打ち破る方法を発見し、それをタイムマシンに組み込む事に成功したヨ。

その改良したものが、今私の持つカシオペアネ。

712

客観的に見ても、コレの開発が出来た私は確かに天才だろうヨ。

少しばかり、自意識過剰のような考え方だが、自分を普通などと評価したら逆に文句を言われるネ。

まあ、私が自意識過剰なのか、否かなどはどうでも良い事ヨ。

とにかく、周りからは天才と言われ続け、解けぬ物などないと評価されてきて、未来からこの時代にやってきた火星入。それが私ネ。

天才といわれた頭脳。

そして、未来から持ってきた情報。

そんな大きなアドバンテージを持ちながらも、テレビを前に頭を抱える様子は、きっと私を知る者であったら、驚愕するネ。間違いなくヨ。

難しいクイズ番組に頭を悩ませているわけでも、ニュースの専門家が言っている事が分からないというわけでもないネ。  
その番組は視聴率が30%を超え、幼い子でも知っている様な人間を題材にした物ヨ。

普通であれば、頭を悩ます必要が殆どないような番組ネ。

ましてや、天才と呼ばれる頭を悩ますはずなどは無い筈ネ。

いや、もしかしたら天才故にこの番組から、世界の発生へと思いを巡らせ頭を悩ませている可能性はあるが、今の私には、世界の起源に思いを馳せるような余裕は無いヨ。

ただ単純に、タイトルの意味が分からなかったからであるヨ。

別に、タイトルに深い意味が込められており、それ読み取ろうとしているワケでないネ。

深い意味もなにも、たった数文字。

さらに、理解できない部分は、たったの一文字ネ。

そこから読み取れる情報はあまりにも少ないし、もし何らかの意味があったとしても、それは重要ではないヨ。

頭を抱えている私の前に、テレビはでかかと頭痛の種を映し出していたネ。

『大河ドラマ

徹』

大河ドラマ。

確か、日本史に基づいたドラマと記憶しているヨ。

つまり、徹というのは、一応存在した人間という事になるネ。

常識並みに日本史を知っていると思い込んでいた私としては、全く聞き覚えの無いこの人間の名前を見て、随分とマイナーな人間を題材にした。

とぐらいにしか思っていなかったヨ。

そう思っていたんだが、馬鹿レンジャー全員知っていたネ…。

明日菜サンに至っては、思い人と同じ名前で、かなり興味があったらしく、かなり色々と知っていたヨ。

その知識は、ハカセや夕映サンの追隨を許さず、唯一渡り合ったのが、亜子サンだけだったネ。

ただ、別に歴史が特に好きでもない亜子サンがあればほど詳しくたというのは、不思議だったが、別にどうでも良い事ヨ。

問題なのは、殆どの人間が知っていることを、私の知識に入っていない事ネ。

未来で、わざわざこの時代の小中高の教科書を取り寄せ、一通りの勉強をやり、さらにこの時代の流行や常識をしっかりと身につけたにも関わらずヨ。

確かに、未来の情報は歪められている可能性もあるであるヨ。

だが、流石にココまで有名な過去の偉人の存在自体を消すような事はまず無いネ。

というより、あり得ないネ。

いや、もしかしたら徹という英雄のスクリーンダルが見つかり、人気が無くなっていったという可能性も無くはないのだが、だからといって当時の資料に徹の名前が存在していないのもおかしいネ。

未来から見た過去というのは、外から何らかの力を受けない限り、

その内容は変わる事はないネ。

過去の定義や、外の定義など、夕映サンが非常に好きそうな議論を、今繰り広げる必要はないネ。

とりあえず、言える事は、私がココへ来るよりも前の過去が変わるはずがない、ということネ。

理論上はそうであるはずなのに、変わってしまった過去。

一体、どういう事ネ？

考えられる可能性を、頭に巡らす、その殆どが非現実的な物ばかりヨ。

テレビの映像を見ながら、考えを巡らす。

……はっ!？

意外と面白くて、普通に見ちゃったネ。

というか、これは卑怯ヨ。

徹という存在は誰もが知っているが、彼の幼少時代や、彼と常に共にいる、少女、へバちゃんとの出会いもまるで分かってないネ。

へバちゃんが洩らした言葉から、徹に救われたらしいというのは分かってはいるのだが、それ以外は一切分かっていないヨ。

そんな中、一話目は、外国からへバちゃんと共に、日本へ密輸してくる話ヨ。

完璧な番組側の創作なのだが、普通に面白かったヨ。

というよりネ、大河なのに、徹という存在が滅茶苦茶なためか、なんか色々と凄かったネ。

一応、ココでの知識を補完、修正する必要があったため、徹という存在について調べてみたら、信じられないような事実が、山のように出てきたネ。

切腹を命じられた回数9回、武士の誇り云々で殺されそうになった回数15回、逃げ出した回数10回、他の者に助けられた回数3回、後は死んだふりとか、病気のふり、適当に言い包めたりなどネ。絶対嘘ヨ。コレ。

そう思いはするのだが、コレ全部証拠があるらしいヨ。

逆に、証拠がないものは数に含めていないらしいネ。つまり、多分もっと殺されかけているはずヨ。

当時の武将の地位や、徹本人の地位を考えるに、彼、本物に滅茶苦茶過ぎるネ。

ちなみに、ネットでは、『日本一番有名なロリコン』、『ロリコン英雄』として名高いヨ。

しかも、へバちゃんの容姿は、金色の髪、白い肌。つまり白人ヨ。

故に、『金髪少女の開拓者』（二重の意味を含めているらしいが意味は不明ヨ）としても、有名ネ。

とりあえず、私の知っている歴史と、色々な物が変わっているという事は調べていくうちに自然と分かったヨ。

クラスメイトの様子が調べてきた情報と違ったから、ちょっとした違和感は確かに感じてはいたヨ。

実際に会うのと、情報とでは差が出るのは当たり前と思ひ、多少の違和感は仕方ないと思ひ込んでいたが、そうではなかったネ。

事実問題、未来の情報があてにならないというのは、非常に大きな問題ネ。

クラスメイトの人間、世界の様子というのは、未来の情報と、大きな差はないヨ。

だからといって、未来の情報をそのまま使うというわけにはいかないネ。

未来での情報がある故に、固定概念が出来、失敗するという可能性も大いにあるからネ。

カシオペアの反応から、ココが私の居た未来と直結しているというのは事実ネ。

つまり、ココでの計画が成功すれば未来を変える事は出来るヨ。過去の改変と言うイレギュラーが起きた理由は、全然分かっていないが、それだけは分かったネ。

未来の情報があまりあてにならないと言う、この状況下で未来の改変を巧く出来ないかもしれないネ。

……いや、結局私の計画、『麻帆良祭の熱気を用いて、旧世界へ魔

法をばらす』

コレを行った後、未来の情報はあてにならなくなるヨ。

その時期が少しばかり早くなっただけネ。

未来の技術、そして私の頭脳。

資金や、人脈を伸ばす必要があるが、私が巧くやれば、あの未来は、巧くえられるヨ。

麻帆良祭を利用するにあたって、近衛近右衛門、高畑・T・タカミチ、そしてエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

この3人の対処が成功の鍵ネ。

そして、その中で一番与し易いのは、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

正義よりも、悪の方が、私には都合が良いネ。

さらに、私の持つデータの正確性に疑問はあるが、麻帆良にいるという時点で彼女の悪は、ただの悪ではないヨ。

つまり、約束さえ取り付けられれば、彼女の助力は期待できないまでも、彼女の妨害がなくなるヨ。

これは、非常にデカイネ。

私にしか準備できないもので、彼女に必要と思われる物。

未来からずっと考えていた物ネ。

幸いと言うべきか、歴史の通り、エヴァンジェリンは結界によって普通の女性と変わらない身体能力になってしまっているネ。

その弱体化と、人形使い（ドールマスター）としての技術を考える  
と、やはりロボットを与えるのが一番良いと思うヨ。

エヴァンジェリンと同じクラスに入れるように、ガイノイドタイプに設計を行い、彼女がロボットとばれない様に、認識障害を彼女のコアに組み込む……。

とりあえず、考えうる技術的な問題はないネ。

もし、エヴァンジェリンが別の要求をするなら、それもそれでよしネ。

明日にでも、直接エヴァンジェリンに協定を提案するネ。

こちら側のメリットは、彼女の強力な力を私に向けない事。

あちら側のメリットは、力のない彼女をサポート出来る、優れた従者の提供。

出来れば、向こう側から私になんらかしらの要求をしてくれば、都合が良いのだが、そうも言ってもらえないネ。

とりあえず、明日菜サンに大河ドラマのダビングを頼みに行つてから、明日の協定について、細かい所を考えるネ。



## 幕章 麻帆良編 エピローグ

徹

幕末において、活躍した人間である。

ここで、著者は人間と書くべきか幕末志士と書くべきかで大いに悩み、あえて人間と書いた。

これが正解か否かは、人によって代わるであろう。

苗字はあるのかないかすら不明。

生まれも不明。

彼が表舞台に出るまで、どういった事をしてきたかも不明。(ただ、海外にいたと言う事はへバの証言から分かっている。へバに関しては後ほど記述する。)

さらに、死因所か、彼が最後に埼玉辺りで見つかった後の消息不明。

という、不明ばかりの人間である。

事実、彼が何を行ったか、はつきりとしているのは、たった5〜6年程度。

だというのに、今日徹という男の人気というのは、異常なほどに高く、日本人で一番初めに思い浮かべる偉人が彼だと言う人も決して少なくないであろう。

こういつてしまっただけは何だが、徹は武士でも何でも無い、ただの人間である。

畑仕事をしたり、釣りをしたりと、色々とやっていたようではあり、彼が何者かは不明だが、武士でないというのは間違いないであろう。刀も持たず、金も全くなく、さらに後ろ盾は皆無。

まあ、それらは当たり前であろう。

何せ、彼等は密航したのだ。  
その密航してきた理由を聞いた所

『へバちゃんが俺の故郷を知りたいって言ったからだけど。』

と返ってきたらしい。

この答えを聞き人間は皆、徹という男の器がでかいのか、それともただの阿呆なのかで、大いに戸惑ったという記録が残っている。

彼を幕末志士と書かず、人間と書いた理由は、この辺りにある。

彼と言う人間は、人のために働く事はあったが、国のために働いた事が一度もないのだ。

小、中の日本史の教科書に、彼の名前が載っていないのはそのためである。

彼がやった異業（誤字に非ず）は多々あるが、その中に国を変えるような物はなかった。

彼の影響を受けた物は多く、今、偉人と呼ばれる人間も大勢いる。にも関わらず、徹は何も成さなかった。

『まあ、そういった事は他のモンに任せるさ。』

俺みたいな怠け者には、そんな大変な事、無理無理。』

徹の言葉の一節である。

仕官等の話を持ちかけられた時、毎回徹は先ほどのような言葉を発したらしい。

『幕末の英雄』より一部抜粋

## 外伝 ナギとアリカ（前書き）

3ヶ月ほど前とったアンケートの第三位と五位だったナギとアリカの2人を主人公にしてみました。

とりあえず、原作に入る前に、いくつかの外伝を書き、伏線の回収を行います。

とりあえず、アンケート1位だったメアさんもその内出しますので、お楽しみに。

## 外伝 ナギとアリカ

Side アリカ

「今まで、我慢してきたが、もう限界だ。  
私と結婚しろ、アリカ。  
テメエの子を産ませろ」

俺の胸倉を掴み、叫んだナギ。

ナギに渡された、給料(?)三か月分の指輪の箱を片手に、呆然と  
していた。

あの時の俺は、本当にアホな顔をしていたんだと思う。ついでに、  
情けないほどパニックを起こしていた。

なにせ、ナギの頬が赤く染まっていたことも、俺の胸倉を掴む手が  
僅かに震えていた事にも気付かないぐらいだったからな。

胸倉を掴まれている故の苦しさか、それとも、別の”何か”による  
苦しさかは、分からなかったが、ゆっくりと言葉を発した。

己を支え続けてくれた女性に。

あの時の、選択は間違っていなかったと、お腹を大きくさせたナギを見ながら思う。

自分のお腹をゆっくりと撫で回しながら、笑みを浮かべる彼女。

子供が出来る前の彼女からは想像が出来ないほど、その笑みは穏やかだった。

「どうしたんだ？アリカ？」

私の方をじっと見つめてさあ。見惚れていたか？」

言いながら、俺を見るナギの顔には先ほどとは違う、悪戯をしている子供のような笑みを浮かべている。

「ああ、見惚れていた」

恐らくは、ナギが想像していたのとは違う回答。

不意打ちだったからか、一気に顔を赤く染め上げるナギ。

「そ、そういえばさ。」

この子の名前、考えてくれたか？」

笑えるほど下手な話題転換。

そんな、ナギの下手な話術、思うがままに返事を返せる事が、俺には幸せだった。

「また、唐突だな」

ナギの膨らんだお腹を眺める。

予定では、一ヶ月もしない内に生まれるだろう、新しい命がそこにはあった。

医者曰く、その子は、ほぼ間違いなく男であるらしい。

「……そうだな。」

マギ、マギなんてどうだ？」

ナギよく似た名前。お前のように、強く、光り輝く子になるよう祈りを込めて。

side ナギ

「また、唐突だな」

少し悩む素振りを見せながら、アリカは言葉が続ける。

どうせ、くそ真面目なアリカの事だ。

悩む素振りを見せながらも、私がこの子を身ごもった時からずっと考え続けてくれていたに違いない。

「……そうだな」

ほら、すぐ思いついたふりをした。

「マギ、マギなんてどうだ？」

生真面目なあいつの事さ。

本気で悩みに悩んだんだろう。

けどなあ、流石にマギはちょっとアレだろ？

少し不安そうに、それでいながら何かを期待している様にこちらを見つめるアリカに、無条件でOK出しちまいそうになるけど、ぐつと堪える。

「ああ、流石にマギは不味いだろ。

他の名前を一緒に考えようぜ。」

別にアリカのネーミングセンスが無いっちゅうわけでない。

マギ・スプリングフィールド。

十分に良い名前だと思うのだが、如何せん、その名前はやめた方が  
良いだろ？普通。

「ぬっ？何故だ？」

いや、何故って……。

「『森の隣人』って奴と同じ名前じゃん」

子供の頃、よく聞かされた、森の隣人ってタイトルの昔話。  
その昔話の主人公がマギなのだ。

「森の、隣人？」

首を傾げている様子から、どうやら知らないらしい。

そっぴゃあ、向こう（魔法世界）じゃマイナーっつゝか、コッチで



もマイナーな奴だっけな。  
私の故郷じゃ、皆知っていたもんだから、当たり前だと思ひ込んでたぜ。

災害から救った英雄が力を畏れられ追い出された。

英雄が出て行った後、森の隣人は気付く。

いつも働きすぎといっても過言ではないほどに働いていた英雄。

彼が居なくなつたのが原因で、畑から取れる物は減少し、動物達も病気になる。

村全体で耕していた畑の2割は、荒地となつた。

人々は嘆いた。英雄に謝りたいと願つた。

時は経ち、村は滅びた。

それでも、英雄は最後まで現れなかつたとさ

「めでたしめでたし……。」

つてな感じの話だ。

んでよ、英雄の友人がマギつて名前なワケなんだけだよ。

そのマギつて奴が、英雄の友人なのに、何も出来なくてずっと後悔し続けるんだ。

流星に、子供にその名前をつけるワケにはいかんדר？」

子供が出来たら、この話を聞かせる。

私の故郷の文化とでも言うんかな？

そんな環境で育つたんだ。もし子供が出来たら間違ひなく、この昔

話を喋っちまうぜ。

流石に、子供と同じ名前の人間が不幸になる話しを聞かせたくねえ。しかもだ、この追い出された英雄って奴がアリカに当てはまるだろ？  
それで、子供の名前がマジだったりしてみろ。

なんか、滅茶苦茶嫌だぞ。

「ナギの言う通りだな。

例えば、俺一人で子供の名前を決めるといつ時点で間違っていた。  
この子の親は、2人いるのだからな」

「そうだな。」

親は2人。

鳥頭だの、馬鹿だの言われている私だつて分かる事だ。

父親と母親の一人ずつ。合わせて二人だ。

だけど、なんとなく私は気付いちまった。

本当になんとなくなんだけどな。

N a g i と M a g i、あまりに私の名に似すぎた名前。

偶然なんかじゃねえ。

子供が私に似て欲しいと思って付けた名前だろう。

その思いはけして、嘘ではない。

でも、アリカは、それ以上に自分に似て欲しくないと思っているんじゃないか？

ずっと、アイツの事を見続けてきたから、なんとなく感じるんだ。多分、アイツ以上に、私はアリカの事が分かっている。

生まれる子供が自分に似て欲しくない。

子供が愛おしくて、愛おしくて仕方ないからこそ、アリカは願っている。

少しでも、自分と言う存在が、子供からなくなるように。

確かに、アリカに似ていない方が、この子にとっては良いのかもしれない。

『災厄の王』の子供なんていったら、殺される可能性だってあるのだ。

でもな、アリカ。

それでも、間違いなく、この子は

「私達の子だ。」

二人で良い名前をつけてやるうぜ」

外伝 エヴァ編 ラカン編（前書き）

遅くなってすみません。

結構、今回の物は書くのに苦労しました。

後半は、スグに書けたんですけどねえ……。

とりあえず、更新です。楽しんで貰えたら嬉しく思います。

外伝 エヴァ編 ラカン編

Side エヴァンジェリン

世界は優しくない。

随分と早く、それに気付かされてしまった。

裏切り、怖れ、恨み。

世界は私を嫌い、私も世界を嫌った。

なんで、私だけがこんな辛い目にあうの？  
何度も尋ねた。

どうして、私だけが孤独なの？  
何度も泣いた。

何度も何度も、尋ね、泣いてきた。

食べ物を与えてくれた優しき老婆は、私に呪詛を吐きながら杖で殴ってきた。

友達といってくれた、幼き女は、彼女を助けた時、グチャグチャになった身体が再生される所を見て、私を恐れた。

あの時の老婆の言葉が、耳にこびり付いている。  
あの少女の怯えた顔が、私の目の裏に焼きついている。

それでも、私は尋ねる。

どうして、私は一人なの？

私は訴える。

一人は嫌だよ。一人は寂しいよ。冷たいよ。

尋ねても、訴えても、懇願しても、答えは返ってこない。

腕が千切れ、足が片方なくなりながら、泣きながら尋ねても月は力を与えるだけで、答えは与えてくれなかった。

そうして、気付く。

思った以上に世界は優しくない。

少しの優しささえ、世界は私に与えてはくれなかった。

だから、私は世界を拒絶した。

誇りある悪という逃げ道突き進んだ。

さあ、私を殺してみろ。

私は誇りある悪だからな。

より、大きな力によって殺される覚悟はしているぞ。

私は世界に向かって叫んでやったのだ。

私を殺してみろ。

そうさ、私は逃げたんだよ。  
生から、世界から、私自身すらからも。

そんな事をお見通しの世界はこう言ったんだ。  
泣きながら尋ねても返事をくれない世界は、こんな時ばかり返事を返してくるんだ。

『殺してみろ？』

愚かな私を殺して下さいの間違ひではないのか？』

つてな。

『お前は自分じゃ死ねない臆病者だ。』

誰かが殺してくれるというのに、怖いから必死に抵抗している臆病者なんだろ？』

私が耳を塞ぎ、うずくまっても、奴は気にした素振りも見せず、朗々と言うのだ。

私は耳を塞ぎながら、俯きながら、逃げた。

己を正当化し、誇りある悪を守り続けた。

そうしなければ、崩れてしまうから。

耳を塞ぎ、俯きながら、逃げ続けた。

逃げて、逃げて、逃げて、逃げて、逃げ続けて。

ポツンと一人、取り残されてしまった。

何時しか、あの声すら聞こえなくなり、ただただポツンと一人、闇の中に。

疲れ果て、その場で座り込む。  
俯き、膝を抱え、じっとする。

もう嫌だった。

自分と言う存在が。

ジワリ、ジワリと自分が崩れていく。

さらさらと、欠片が落ちていく。

何も無い、ただ深い水の中で、ゆっくりと身体が溶け出していく。

暗い闇に包まれ、全てがどうしてもよくなって、闇と自分の境目が曖昧になる。

それは、思った以上に居心地がよかった。

私と闇との境目が殆ど無くなった時。

「おい、君

大丈夫か!？」

そんな声。

俯いていた顔を上げると、そこには一筋の光りが差し込んでいた。  
細く、頼りなかったが、それでも確かに光りはそこにあっただ。



~~~~~  
~~~~~

「……夢か」

随分と昔の夢を見ていた様な気がする。

抽象的で、ワケの分からない物だったが、多分アレは昔の私なのだろう。

寝ぼけているせいで、僅かに歪む視界の中に、愛おしい男の寝顔が入る。

あの時、一筋の光りと優しさを与えてくれた男の顔が。

僅かながら感じる、心地の良い圧迫感が、抱きしめられてる事を教えてくれる。

トクン、トクン……。

一定のリズムで、聞こえてくる心音、そして普通よりも少しだけ熱を持っている彼の体温が、心地いい。

吸血鬼という存在は死人に近い。

故に、心音はかなり微かなもので、体温だって普通の人間よりも冷たい。

そんな私と、全く逆の存在が彼なのだ。

冷たい身体をこうやって、温めてくれる。

彼に包まれる事によって、暖かい心音で包み込んでくれる。

与えられてばかりで、何も私が返せていないというのは、非常に自分が情けなる。

私からも返そうとするが、私がこいつより優れている所なぞ、魔法が使えるという事と、戦闘能力ぐらいしかない。

全く、優れすぎている男に惚れた時、女は苦勞するよ。

徹という男は、甘すぎる。

この世に存在するありとあらゆる甘味を混ぜたとしても、奴の甘さを上回れないだろうと思わせるほど、甘い男だ。

赤の他人ですら、奴は己の危険を顧みず救おうとする愚か者だ。

奴の内に入ってしまったえば、甘い奴の事だ。相手がどれだけ情けなくとも、けして手放す事はないだろう。

だが、それに甘受してはいけない。

優しすぎる奴の傍は、心地いいが、その心地よさに浸っているだけでは、奴の隣に立つことは出来ないのだ。

まだまだ、私と言う存在は、奴の遙か後ろに居るだろう。

あの大きすぎる背中に追いつくためにも、私は自分を鍛え続けねばならない。

そして、何時の日かアイツと共に……

『当たり前だよ。』

むしろ、エヴァちゃんが居なくなったら、オレは泣くよ？』

不意に思い出してしまった、あ奴が言った言葉が思い出される。  
単純な言葉。子供っぽい着飾らない言葉。

ただ、それだけの言葉を思い出すだけで、頬が赤く染まっている事  
が分かる。

身体が悶え、叫びたい様な感覚に陥る。

流石に叫ぶワケにはいかないので、徹を思いっきり抱きしめてやっ  
た。

見た目とは裏腹に鍛えられた身体。

身体の厚みと硬さが、安心感を与えてくれる。

なあ、徹。

私は頑張るからな。お前の隣に居続けられるよう。

お前の甘さに、浸り続けないよう、耐えるよ。何時かお前が私に甘  
えてくれる日が来るよう。

だから、せめて今ぐらいは、こつやって甘えさせてくれ。

~~~~~外伝

らん編~~~~~

注：あくまで、コレはおまけです。最近はずちやけがなさ過ぎたために思わず書いてしまった物です。完璧なおふぎけであり、本編には一切関わりませんので、ご承知を。

ラカンは、壁にぶち当たっていた。  
ただただ、彼は徹と共と婚約したいだけだったのだ。

2人とも男同士である状態を、『ただただ』と表現していいか否かは非常に困る所ではある。

とにかく、ラカンは徹と婚約をしたかった。  
だが、如何せん2人とも男であり、さらに愛しの徹は行方不明だ。

コレが、先ほど述べた大きな壁の正体である。

そして、現在彼は徹を探す事、ついでに自分の性別を女性にする方法を求め旅に出ていたのだ。  
だが、全然上手くいかない。

徹の情報はゼロ。女体化の情報は結構あるのだが、どうも不運が重なりまくって、そっちも全然上手くいかないでいた。

ちなみに、ラカンは不運だと思っっているようだが、それはテオドラが胃を痛めながら行った涙ぐましい裏工作の結果である事をココに述べておこう。

だが、その不運を潜り抜け、勘を頼りにようやくたどり着いた。自身を女体化するための方法に。

「僕と契約して魔法少女になつてよ」

「OKだ。てめえ、絶対俺を少女にしるよ」

「……えっ!？」

いや、僕はまどかとさやかに言ったわけで」

「契約の取り消しはできねえぜ」

「夢で見た人……」

「えっ?」

まどか、あんた転校生だけじゃなくて、あの変態おっさんも見てたの!？」

「う、うん」

「大体、どうして君は僕の事が見えてるんだ?」

「んなもん、気合だ」

「まさか、魔女に攻撃を加えたのも気合とおっしゃいますの?」

「当たり前だぜ。」

もちろん気合さ」

「わけがわからないよ」

「まあ、白いの。」

別に、俺は魔法少女なんてモンになりたいワケじゃないから、ちょっとばかり引いてやっていいぜ」

「それじゃ、魔法おっさ」「少女にしろ」

「……わけが分からないよ」

「変態だ!？」

「変態がいる!？」

「さ、さやかちゃん、そんな本人の目の前で」

「ちなみに、てめえが言った言葉からするに、魔法少女というのは損益だ。」

つまり、+アルファでなんらかしらの利益を俺に与えてくれるわけだろ？」

「ありがてえなあ」

「きゅっばい」

「おっと、逃げようなんて考えんなよ。」

なんとなくだが、おめえに良く似た反応が、そこら中に行っている。そいつらから、どうやっても、俺を少女にしてみらうからな」

「ち、ちなみに、それは……」

「もちろん、気合だ」

「……君はいつもそうだね。」

「真実をありのままに言っているんだらうけど、ワケが分からないよ。どうして、気合の一つでそこまで出来るんだい？」

「知らん」

「まどか、君なら運命を変えられる。」

「避けようのない滅びも、嘆きも、全て君が覆せばいい。そのための力が君には備わってるんだから。だから、僕と契約して魔法少女になってよ。」

「そして、僕を助けて」

「おっと、白いの。他を巻き込むのは禁止だ。」

「こいつは俺とお前の問題なんだからなあ」

「きゅっぷい！！きゅっぷい！！」

「プルプル、僕は悪いキュウベえじゃないよ」

「どの時間軸にも、あの男は存在しなかった。  
もしかして……」

らかん マギカ                      完！！

なお、らかん マギカは、魔法少女まどか マギカという作品の二  
次創作も含んでおります。



外伝 エヴァ編 ラカン編（後書き）

……完璧にふざけました。

でも、これだって抑えた方なんですよ？

らかん マギカ、実際はもっと長かった奴を、随分と削ったんですから……。

ここで、宣伝させてもらいます。

現在、まどろみはツイッターを行っております。

更新の宣言、裏話等を呟いていますので、もしよろしければ、見てくださるとありがたいです。

なお、ツイッターのURLは下の通りです。

<http://twitter.com/maddoromi>

## 小話集

### 小話1 超とハカセと胃

〳〳side 超鈴音〳〳

これから起こる未来を知っている。

なんとも言うが、コレは未来人の大きなアドバンテージネ。

とはいえども、そのアドバンテージ故のミス。

つまり、知っている未来凶に固執しすぎる事によって、流れを見誤る可能性というモノも存在するネ。

ただ、私、超鈴音の陥っている場合においては、その様なミスを犯す可能性というのは、限りなくゼロに近いヨ。

そこに、天才という名称を欲しいままにしてきた私の頭脳は全く関係ないヨ。

認めたくはないが、はっきりと言ってしまつネ。

未来の情報と、私のいる過去が全く違っている。

もう、未来人のアドバンテージ云々のレベルの問題じゃないヨ。

全てが根本から盛大に引っくり返されたネ。

もちろん、類似点多々あるヨ。

だが、あくまで類似ネ。

似ているからといって、未来の情報と同じ物と見ると、痛い目を見るはめになるネ。

致命的なミスを犯す前に気付いて良かったと思うしかないネ。

犯したミスを思い出すのと同時に、胃がシクシクと痛み始めて来たネ。

私が、犯してしまったミス。

端的にいうのなら、それはただの私の推論がある意味、間違っただけネ。

それが間違っている可能性もしっかりと考慮していたし、被害も私の精神的なものだけヨ。

エヴァンジェリンを懐柔しようとしたとき、彼女が提示してきた条件。

それは、盗撮、盗聴用ロボットを彼女に与える事だったネ。

恐るべき悪とでも言えはいいのかな？

ただ、条件を提示しただけで、ココまで私の胃に被害を与えるとは、正直言って想定外だったネ。

「うう、胃がシクシクするヨ」

最近手を出すようになった、胃薬を飲み、ロボットのプログラミングの設計をやってくネ。

とりあえず未来のデータを基盤とし、後はエヴァンジェリン好みに細々と換えていく。

「超さん、あまり根をつめすぎちゃダメですよ」

「安心するが良いネ。ハカセ。

別に私は無理はしてないヨ。」

別に気を使っているとかというワケじゃないネ。

事実、物作りという物は比較的好きな部類に入る私にとっては、決して苦ではないネ。

「ただ、エヴァンジェリン関係のストレスで胃が……」

シクシクするネ。

「はあ……」

まあ、私に出来るのはコレぐらいです」

言われながら、本を出して来たネ。

「今、胃を痛めている人間の間に秘かにブームになっているとか使ってくれると嬉しいです」

「フフフ。

ハカセに気を使われるとは、私もまだまだネ。ありがたく使わせてもらっヨ」

受け取りながら、軽く本に目を落とすと

『素晴らしき胃薬』

著者 胃薬マスターズ ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ 青山  
詠春』

「胃が 胃がああああああああああああ」

「ちゃ、超さん!？」

小話2 徹とラカンと筋肉

~~~~~side ナギ~~~~~

「ラカンさんの筋肉って凄いやねえ」  
男としては憧れる部分があるねえ」

何気ない徹の言葉だ。

私はゴリゴリなマツチヨにあまり惹かれないし、女でもあるので、  
いまいち徹の気持ちってもんが分からん。

だってよ、めっちゃカテエし、ゴツゴツ。  
それでもって、丸太みてえな腕だぜ。

スゲエとは思うが、それに憧れるというのは、やっぱり私が女なせいか、共感も理解も出来なかった。  
ただ、それがラカンを褒める言葉ちゅうのは私にだって分かる。

徹に惚れているラカンが、徹に褒められたらどうなるか。  
そんな下らない好奇心でついついラカンに言っちゃまったワケだ。

「そついやさ、徹がラカンの筋肉を羨ましいがってたぜ」  
つてな。

いや、そんな目で私を見るな。  
今は反省もしているし、後悔もしている。

「よっしゃ、勝った!!!この勝負貰ったぜ!!!」  
叫ぶと、ラカンは何処かに向かって、走り去っていったワケだ。  
いまいち、よく分からなかったもんだから、そのまま無視して昼飯を食いにいったんだ。

んで、飯を食い終わってウロウロしてたらよ。

「そついや徹、最近調子はどうだ」

笑いながら上半身裸、ブーメランでポーズを取るラカンを見見しちまったわけだ。

「?????」

まっ、当然な事に徹はどう反応していいか困惑さ。  
ラカンもラカンで、期待した反応じゃなかったもんだから、なんと  
かしょうとする。

その、なんとかしようにとする手段が

ピクピク

胸。ピクだったわけだ。

「ビクッ!？」

「き、貴様は何をやっているんだあ!？」

「い、いや、これには深い事情があつてだなあ」

そんなわけで、こんな状況になつちまったワケさ。  
なに?結局全ての原因が私だつて?

いやさ、仕方ねえじゃん。姫子ちゃん。

こんな風になるなんて予想が全くつかねえしよ。

「はあ、馬鹿ばっか」

姫子ちゃんのその言葉は、意外とダメージがデカかった。

小話3 ハロウィンとお菓子といたずら

明日菜と木乃香の場合

「トウカトイト」

三角帽子に、短く黒いスカート、手には箒を持ち、いわゆる魔女スタイルという格好で明日菜と木乃香が、徹に向けていった。

正式にいうのなら、トリック オア トリート。  
直訳は、いたずら、または、菓子。

一般的には、お菓子をくれないと、いたずらするよ。的な意味合いとなる。

子供にとっては、大人から無償でお菓子を貰えるという、夢のような日なのだろう。事実、明日菜と木乃香の顔には程度の差はあれ、等しく笑みが張り付いていた。

「はいはい。」

それじゃ、どうぞ



用意しておいた菓子の類を、2人に渡す。  
前日に、幾つか袋詰めにしといた奴である。

「ねえ、徹さん。」

「この衣装、どない思っくん？」

「ん??」

2人ともよく似合っていて、可愛いよ」

「ほんまあ。」

良かったなあ、明日菜」

「う、うん」

エヴァンジェリンの場合

「トリック オア トリックだ。徹」

両方ともいたずらである。

どうやら、選択肢はいたずらされるしかないようだ。

そんな、エヴァンジェリンの格好は黒いマントを背中につけ、その中は黒いスクミズのような物、おまけに黒色のニーソックスを履き、口元には魔力で戻した少し長めの犬歯、頭にはこうもりの羽の形をした物を取り付けられていた。

「それじゃ、両方ともいたずらだよ」

徹にとつては、多少のいたずらぐらいであつたら、全然構わない。というよりだ、エヴァの場合であれば、いたずらをすると言つても、そこまで致命的な物や、徹以外の人間に多大な迷惑を与えるような物は絶対しないと分かつているのだ。

「むしろ、私にいたずらをしろ!!」

ある意味、エヴァはいつも通りであつた。

没ネタ      らかん      マギカ      カット部分

ゆるり、ゆるりと幕があがる。

白と黒で構成されている少女が息荒くしながら、走る。

何かに追われる様に、大切な何かを追い求める様に。

桃色の髪を持つ少女は走つた。

僅かに止まる少女。彼女の目には非常灯が目に入る。

白と黒で構成されているはずの世界で、非常灯は緑色に輝き、世界から仲間はずれにされている様だつた。

何かに導かれるかのように、少女は階段を上る。何処に向かつているのか。

それは、彼女自身分かつていないのだろう。

意味などなく、感情など存在しない。ただただ、少女は操られるままに目の前にある扉を開く。

開いた先の世界もまた、黒と白で構成された世界だった。赤い光りも存在していたが、やはり主は黒と白。

広い広い世界。

だが、少女はすぐさまに、黒髪の少女に気付く事となる。何かと戦う、黒髪の少女の存在に。

桃色は何故、そう簡単に気付けたのか、何と戦っているのか、どうして戦っているのか、疑問に思わない。

「ひどい」

それは、攻撃を受け続ける少女に対しての言葉。何が酷いのか、少女は分からないまま言う。

ただただ、言う。まるで、人形劇で操られる人形かのように。

「仕方ないよ。

彼女一人では荷が重過ぎる。でも、彼女も覚悟の上だ」

少女に語りかけてきた、白いぬいぐるみのような存在。

それは、大きな尻尾を振り、赤い目で黒髪の少女を見つめながら言う。

いつの間にか、自分の隣にいる生物に驚くことなく、彼女は会話を  
する。

「そんな、あんまりだよ！！  
そんなのってないよ。」

桃色の少女が見つめる先にいる黒髪。

彼女が、何かを訴えるかのように大きな声をあげるのだが、何を言っているのか判断が出来ないでいた。

「諦めたらそれまでだ。

でも、君なら運命を変えられる」

白い何かの言葉に、桃色は耳を塞ぐ。

聞くことを拒絶している。

だというのに、彼の者は続ける。

朗々と、演劇の一部のように、続ける。

「避けようのない滅びも、嘆きも、全て君が覆せばいい。そのため  
の力が君には備わっているんだから」

桃色と白い何かは、目を合わせることなく会話を続ける。

互いに向いている方向は一緒だが、二人の間にあるはずの繋がりが  
見えない。

「本当なの？

私なんかでも、本当に何かができるの？こんな結末を変えられるの  
？」

「もちろんさ。」

キュルと、尻尾を震わせながら、白は言う。

「だから、僕と契約して、魔法少女になってよ！」

桃色は僅かに迷うような素振りを見る。

そして

「OKだぜ。てめえ、言ったそれを忘れるなよ!!」

空から響く、男の声。

目を凝らす桃色の瞳には褐色の肌をした男の姿が映る。

『ラカン適当に右パンチ』

男が拳を突き出した瞬間

世界は、光りに包まれた。

ゆっくりと、鹿目まどかは目を開ける。

そこには、いつもの見慣れた風景が広がっていた。

「夢オチ？」

原作入り プロローグ(前書き)

注意深い人は、気付きます。

## 原作入り プロローグ

Side メルディアナ魔法学校校長

卒業式を半年前に控え、ワシは頭を悩ませておった。  
その資料には、生徒の成績と教師一人一人のコメントが書かれているものである。

もうすでに、同じ資料を何度も読んでいるため、資料の内容は既に記憶してしまっている。

そもそもだ。その資料に載っている子供は自分の孫なのだ。

このような資料がなくとも、この子のことは十分に分かっておる。だが、それ故に頭を悩ませていおるのだ。

ネギ・スプリングフィールド

これがワシを大いに悩ませる原因となった子の名前である。

この子を客観的に評価するのなら、神童であろう。

2年の飛び級をし、メルディアナ魔法学校ではここ十年で最高の成績をたたき出した自慢の孫だ。

さらに、自らの才におぼれる事なく、努力をし続ける様子は爺馬鹿を抜いても好感を持てるであろう。



とはいえども、いくら神童とはいえども欠点はあるもの。勉学の才能はあるが、どうも考え方が大人びてしまい、こじんまりとまとまり過ぎているというのが、周りからの印象であった。他にも、集中すると回りが見えなくなる性質もあり、そのためか同い年の友達の数も少ない。

これは、子供の時間を勉学に捧げてしまったが故に起きてしまった弊害なのだろう。

過去や両親の血といった複雑事情がある事もあり、ネギは幼いながらも自分が生きていく上で必要な物を何とかして得ようとした結果なのだろう。

全く、自分の孫の事だというのに、たいした事が出来ん自分が嫌になってくるの。

もちろん、ネギのそういった歪みには気付いておったし、何とかしようとした。

だが、ネギが行っている努力は褒められる事はあるが、咎められるような事ではなく、それ故に周りは注意しようにも注意出来ないでいた。

唯一、禁呪書庫に無断で入っていた時は、ネギを叱ろうとしたのだが、相手は神童。

見張りをする教師の一人一人の詳細なデータ、警備体制、道順等の綿密な下準備を行い、幼馴染の手も借りたこともあり、決定的な証拠がまったく出てこず、結局公に叱る事は出来なかったの。

この辺りは、あの馬鹿娘に通じるものがあり、少しばかりほっとしてしまっただわい。

とはいえども、流石に孫が人を巻き込んでやった事。

証拠はなかったが、ワシはネギに正座をさせ、しっかりと叱った。

証拠を残さないように上手くやったネギとしては不満だったようだが、こういう理不尽さは血が繋がった人間のある種の特権であるのだ。

まあ、これも一つの人生経験であろう。

とまあ、自分の孫ながら中々厄介のモンだのう。  
うむ……。

とりあえず、成績を鑑みるに、このままいけばネギが主席となるのは間違いなからう。

成績の問題はネギに関しては一切ない。

問題は、卒業後に訪れさせる修行の地である。

他の子達の分は、もう大分前に決まっておった。

皆良い子じゃし、それぞれに必要なと思われる物をそれぞれに割り振るのは何十年も同じようにやってきた事もあり比較的しつかりと決まった。

だが、ネギ。

歪みに歪み、さらに英雄と災厄の血を引いている子。

さすがに、こういうった子は今までの例がないのだ。

恐らく、ネギが一番相応しい場所は、研究施設等であろう。

一つに熱中しすぎて周りが見えなくなる、論理的な思考、コミュニケーション能力の低さ、歪み。

そういった部分を鑑みるに、やはり研究職や開発といった仕事に向いているだろうと思う。

事実、大勢の教諭が『ネギは研究職が向いている』と言っている。とはいっても、向いているだけであり皆修行の地として、研究職を押ししているワケではなかった。

ワシも含め皆、今のネギに必要とされる物が知識や研究ではないと思っっているのだ。

ココを卒業する子達に必要とされる最低限の知識は与えた。もちろん、これからも知識は必要なだろうが最低限社会にでて恥をかくような事が無い程度の知識は身につけさせた。

故に、修行の地で学んで欲しいと思うのは、自主性、責任能力、忍耐力、等々である。

とりあえず、机に向かっていても分からない事を求めているのだ。

ネギの場合は、そういった大人になるために必要な物以外に、”子供でいる事”も学ばせなくてはならない。

こんなもの、学ぶものではないのだが、あの子の場合無理やりそういった環境下にも入れないと、そういった事に目さえ向けんからのお。

さらに、過去の事件もある事から、かなりの自衛能力又は誰も知らぬ所という条件もついてくる事となるのだ。

そんな都合の良い所が早々あるわけないだろうが。

「うーむ……」

少し唸りながら、再びネギの資料を眺めながら、修行の地に候補リストを上から下へ流し見ていく。

どうでも良い事だが、ワシの孫のネギは神童というが、本当の天才ではない。

いや、もちろん理解の早さや、習得の早さは天才とっていいのかもしれないが、独創性がないのだ。

天才というのは、ネギのようにこじんまりとまとまった存在ではなく、もつと異常性が際立つ存在であり、学業の成績も良いとは限らない。

さらに、神童とはいえども、それは今だからであり、将来どこにもいる普通の大人となっている可能性も多いにある。まあ、そんなモンであろう。

とまあ、孫の才能についての考察を行っても修行の地が見つかるはずもない。いかんのお。あまりにも検討がつかんから、どうも思考が変な所へ行ってしまう。

『校長。

高畑・T・タカミチが学校に到着し、挨拶をとの事です。

通してしまっても大丈夫でしょうか？』

ある意味ちょうど良い所で事務からの念波が来た。

どうも行き詰ってしまっておるしの。

そういえば、今日はタカミチ君が来ると言っておったのお。

タカミチ君……？

麻帆良学園

麻帆良学園であつたら、自衛能力には不満はない。

さらに、学園長である近衛近右衛門は良く知つとる仲じゃ。

”子供でいる事”を学ばせる。

ただ普通に勉強をさせて、これを学ばせる事が出来るのならメルデアイナ魔法学校でも学べたはずである。

だから、普通ではない形（これは追々考えるところ）で生徒として生活させれば良いかもしれぬぞ。

さらに、他の能力は警備員でもやらせるべきか？

だが、危険も……。

いや、逆に考えれば、あれほど整った環境で実践の経験が出来るというのはネギという普通には生きていけない子にとっては最高の条件下なのかもしれん。

考えれば考えるほど、ネギに適した修行の地のように思える。

『校長？』

『おっと、すまんすまん。』

とりあえず、タカミチ君は通しても良いぞお』

候補は見つかった。後は向こうが孫娘の受け入れを許可してくれるかどうかだのお。

## 第4章 吸血鬼編 その1

Side 徹

「たくつ、なんで私がこんな事をしなくちゃいかんだ」

「まあまあ、そんな事言わないの。」

学園長にはいつもお世話になっているんだから」

「ふん。いつも世話をしてるのはコッチの方だ」

「はいはい」

「だから、撫でるなといつも言っているだろうが!!」

「ジーーー」。

マスター、こちらの方はご安心を」

まあ、確かにエヴァちゃんはかなり学園長に貢献している。

なんか、エヴァちゃんって、魔法使いとしてのレベル？。なんか、そんな感じの奴が学園内どころか、世界中でもトップレベルにいるらしい。

学園長曰く、十指に入るとか何とか。

そんな人が、学園にいるというのは、かなり学園にとってプラスになるんだろう。

ちなみに、茶々丸も（ちゃん付けで呼ぼうとしたら、噛んで断念した）なんか最高傑作云々言われていた。

立派になってくれて嬉しいような、ちょっと寂しいような。

そつえば、その後ちよつと落ち込んでいるオレに気付いたのか、話の話題を変える意味も込めて学園長が一位の人を教えてくれた。

曰く、恐ろしき先読みの力。

曰く、魔法や気を一切使わない者。

曰く、英知の塊。

ミライビト 徹。

また、お前か！！！

つと、心内で突っ込んでしまったオレを誰も攻めれないだろう。というより、口に出さなかつただけ、むしろ褒めて欲しい。

20年ほど前に、ミライビト 徹さんって人とオレがマフィアの人に間違われたのだ。

ある意味、その人のお陰で助かつただけどねえ。



「おはようございます。  
待たせてしまってますみません」

「いや、オレもさつき来た所だから、気にしないで」

タカミチも到着し、これで『転校生お迎え隊』の全員がそろった事になった。

まあ、隊というわりに、実際はオレとエヴァちゃん、茶々丸にタカミチの4人なただけだね。

知らない仲というわけでもないどころか、比較的仲の良い相手だ。ダラダラと待つのは苦じゃない。

「本当!？」

「は、はい。」

ただ、ライバルがかなり多いらしいので、大変みたいですね」

「ふふふふ。このか、聞いた??」

「聞いたとるえ。」

良かったなあ、アスナ」

声の元を見ると、やっぱり明日菜ちゃんと木乃香ちゃんがいた。

「おはよう。明日菜ちゃん、木乃香ちゃん」

「て、ててて、徹さん!？」

おはようございます」

「おはようございます」

「いやあ、2人とm」

は、は……はくちんっ

そんな声と共に、風が舞い上がり、留めていたボタンは全て弾け飛び、脱げてしまっていた。

下着が飛ばなかったのは、唯一の抵抗とでもいうのだろうか。

さて、なんかオレ脱がされたんだけど、どうすればいいのかね？  
時期も時期なため、冷たい空気が肌を刺す。

「ええ〜と、どうしよう？」

流石に、良い歳なんだからトランクス一枚というのは不味いんだけどなあ。

普通に犯罪者扱いされるもんなあ。このボディーだと。

「とうかさ、明日菜ちゃんに木乃香ちゃん、おまけに茶々丸。

そんなに穴が開くほど見られると恥ずかしいんだけど」

「いや、す、すみません」

「勘認なあ。

お父様みたいな感じやったから驚いてなあ」

木乃香ちゃんが言う、お父様みたいっていうのは、傷の事だろうな。詠春さん、そういえば結構傷あったし。

「ジーンー。」

すみません。ですが、見られて恥ずかしがるような身体ではなく、引き締まった良い身体だと推測します」

「えーと、ありがとう?」

「どういたしまして」

なんか、毎回茶々丸と話していると、不思議な会話になるんだよね。

「徹さん。」

あのお、どうして平然としているのか、とか疑問は多々あるんですが、せめてスポンだけでも履いて下さい」

「ごめん、ごめん。」

しかし、なんか快感になりそうなんだけど、どうしょ?タカミチ」

「……広域指導員として補導する事になるんですけど」

「いやいやいや。冗談だからね。」

だから、そう本気で返されると困るんだけど!??」

流石に、露出に快楽を覚えるって勘違いされると困るんだけど。

全く話に入ってこないエヴァちゃんと、女の子(多分10歳ぐらいかな?)はというと

「ええい。全く貴様、気合が足りないぞ。

何故、そこで最後の一枚だけを残すなどという愚行を犯す!？」

「そ、そんな事言われても」

「いや、この場合は奴の裸が、有象無象の奴等の目に入らなかった事を喜ぶべきなのか？」

だが、共に風呂に入るとはいえども、時にはこういったドツキリ的なものにも心が躍らせる要素があるという事は否定できない事実なのだ。

「いったい、私はどうすれば!？」

なんか、苦悩していた。

所変わり、学園長室にて。

とりあえず、なんか学園長がネギちゃんに、色んな説明をしている。

なんと、ネギちゃん。ナギさんと、アリカの娘だっというんだよ。

(タカミチ情報)

そういえば、容姿はナギさんにそっくりだね。

何度も経験している事だけども、やっぱり自分の容姿が一切変わら

ないっていうのに、知り合いは歳をくって、子供を生んでいるって  
いうのは、なんか複雑な気分なんだよな。

でも、これってオレだけじゃなくて、エヴァちゃんも同じ……  
いや、もしかしたらエヴァちゃんの方が複雑なのかもしれないな。  
オレは男だから分らないけどさ、やっぱり女の人って、好きな人と  
結ばれて、子供を持ちたいって思うんじゃないのかな？

「……ん。」

そんなに見つめて、どうかしたか？」

「いや、なんでも」

ちよつと、鋭すぎるエヴァちゃんにビクつとしながら、誤魔化す。  
誤魔化せたよね？

「フオフオフオ。」

それでな、徹君。ココからが本題なんじゃがな」

ようやく、オレ達に関係のある話になるらしい。

「それでな、徹君うちの孫娘とお見合いせんかい？」

いや、確かに関係あるけどさ、なんか違うよね！？

「ややわあ」

金槌を学園長に振り落とす木乃香ちゃん。

「その邪魔な後頭部を切り落とされたいか？ジジイ」

目を光らせるエヴァちゃん。

「ま、まあ、冗談はそれぐらいにしておいて。徹君、茶々丸にエヴァ。悪いがネギ君を君達の家泊めてくれんかのお？」

まだ住むところが決まったらんのじゃよ」

「こ「別にいいですよ」……おい」

「一応、茶々丸がいるけどココで、ネギが入ってくればエヴァちゃんと徹さんとの2人っきりの時間を妨害できる？」

……ハイハイ！！私も賛成です。

いざとなれば、時々私もログハウスに様子を見に行ってもいいですし」

おっ、なんかボソボソと呟いていたと思ったら、明日菜ちゃんも賛成してくれた。

「まあ、もしエヴァちゃんが本気で嫌だっというんだったら、断るけどさ。

でも、学園長もネギちゃんも困っているんだから、ね??」

「むっ……分かった。

ただし、こちらは妥協する側だ。なにか対価を考えておけ」

「ふおおおお。分かった。

まあ、上手い酒かワインでも送るぞ」

「いや、ジジイじゃなくてな、

……っち、分かった。ジジイ特上なものを寄越せ」

うん、エヴァちゃんの説得完了。

まあ、後でなんか考えてあげようかな？

「それで、茶々丸はどう？」

「どう、とは??？」

「ネギちゃんをウチに泊めてもいいか、ダメかなんだけど」

家事をやるのは、茶々丸なんだから人数が増えて一番苦労するのつて、茶々丸なんだよね。

まあ、オレも一応一通り出来るんだけど、いつの間にか茶々丸がやつちやっっている。

「……私は、2人が良ければ別に構いません」

「と言う訳で、これからよろしくね。ネギちゃん」

「あつ、はい。」

よろしくお願ひします」

とまあ、そんな感じでネギちゃんの住居先がウチになる事が決まった。

#### 第4章 吸血鬼編 その1（後書き）

特に大きい、山も落ちもなく、終わってしまいました。

まあ、導入部分なので、仕方ないといえば仕方ないんですが……

さて、本当の意味で吸血鬼編に入るのはもうちょっと先のことになるでしょう。

お楽しみに。



## 第4章 吸血鬼編 その2

Side ネギ

僕は焦り、困惑していた。片方だけでもやっかいたというのに、両方のダブルコンボだ。

このままじゃダメだと思えば思うほどドツボに嵌まっていつている。

僕が与えられた修行の地というのは『A STUDENT IN JAPAN』日本語で翻訳するなら『日本で学生をやる』という物だった。

この修行の地が、そんなに難しいかということ、けしてそんな事は無い。

幼馴染のアーニヤの『ロンドンで占い師』の方が社会的な責任能力、コミュニケーション能力等が必須であり、よっぽど大変そうだ。

では、何故そんなに悩んでいるかということ、あまりにも『修行の地』らしくないのだ。

自分で言うのもどうかと思うけど、僕は比較的優秀な方だと思う。自分が凄く優秀だから、難しい修行の地を与えるのが当たり前。なんて言いつもりはないんだけど、やっぱり修行の地に納得できない部分があるのだ。

一応、学生を卒業し、仮免期間とは言えども、僕たちは社会に出る

つもりだったのだ。  
なのに、僕だけ、再び学生をやっているっていうのは、色々と考えてしまう。

授業内容が特別難しいのかと思いきや、別にそうでもない。  
むしろ、随分と前にやったような内容はかり。

色んな人が考えて、僕の修行の地がココになったんだという事は分かる。

だから、けして無駄じゃなくて学ぶべき物が多々あるんだとは思っただけ、それが全く分からないのだ。

確かに、クラスメイトになった人達は皆、魅力的な良い人だった。

僕が泊めて貰う事になった家主さんのエヴァンジェリンさんは、なんか怖かったけど、それでも素晴らしい人ばかりだった。

そんな人達がクラスメイトというのは嬉しい限りだけど、あまりにも居心地が良すぎて、自分が修行しに来た事を忘れてしまいそうになるのだ。

もしかして、それが修行の内容なのかな？

居心地の良い空間に居ながら、怠惰に過ごさない強靱な精神力を鍛える。みたいな？

なんか、らしいって言えばらしいけど、多分違う。

そうなってくると……。

ああ、もう、分からないよ!?

「はあ、おじいちゃんは僕に何をさせたいのかな？」

後で、タカミチに相談しよう。

「ん？」

あれって、たしか……のどかさん」

たくさん本を持ってヨロヨロと、しながら階段を下りようとしていた。

なんというか、その姿は非常に危なっかしくて、

「あっ」

「って、やっぱり!!」

のどかさんが大きくよろけたかと思うと、階段から落ちたのだ。背負っていた杖を、身体を捻りながら振りぬく。

「ふっ」

吐く息と共に、放つのは風の属性。

一瞬、のどかさんを浮かび上がらせる。

如何せん構成が甘いせいで、多分浮かばせれる時間はそんなに長い物ではない。

飛びつき、彼女の身体の下に両手を入れるのと同時にのどかさんが落ちて来た。

「あでぼっ」

うう、デコぶった。でも、のどかさんはしっかりと助けられたんだ。デコぐらい、大した事が……

「ええ」と、明日菜さん??

見ちゃったりしました??」

コクン

「じ、実はアレ。

最近流行りの化学現象らしいんですよ。

なんか電子とかプラズマとかが、上手い具合に、グラウンドとつりあつて、何故かプラスとマイナスが合体」

ダメだよ。僕自身何を言っているのか、全然分からない事を言っちゃつてるよ!?

こんな下手な言い訳じゃ、絶対……

「そ、そうなんだ」

誤魔化せた!!

「え、ええ。そうなんですよ」

明日菜さんが純粹な人で助かった。

「……ネギさん??」

「あつ、のどかさん。

大丈夫ですか?」

「あつ、はい。

大丈夫です」

とりあえずは、これで一安心かな?

魔法を見られた明日菜さんは誤魔化せたい、のどかさんにも怪我はない。

とりあえずは最良の結果だよ。

side 徹

「ようこそ。ネギちゃん」

ネギちゃんが入ってきた瞬間、幾つものクラッカーが鳴り響いた。

2 - A 転入生の歓迎会だそうだ。

それは非常に良い事だと思うよ。

元気で明るいクラスだし、エヴァちゃんがこんなクラスにいるっていうのも凄く良い事だと思うんだよ。

たださ、何でオレがいるのさ。

いや、別に嫌だというわけじゃないよ。

たださ、全く関係ないよね！？オレ！！

「それで、先輩

先輩とエヴァちゃんの関係は??」

「関係って……」

昔からの知り合い??」

「ふむ。まあ、そうだな」

まあ、このクラスの人達が良くも悪くも遠慮しない人達だから、居心地が悪いつて事はないんだけどねえ。

「それじゃ、先輩はエヴァちゃんの事をどう思っているんですか？」

どうつて、また難しい事聞くねえ。

ちなみに、今のオレの状況はというと、朝倉ちゃんっていう娘にマイクっぽい物を向けられている最中である。

しかも、周りに野次馬がいて、オレが答えるたびにキヤーキヤーと言われている。

なんていうか、こういう雰囲気は男子高じゃ味わえないものだよな。むこうじゃ、もっと暑苦しいというか、ねえ？

「凄く大切な娘だよ」

「うわっ、大胆な発言！？」

というか、先輩つてもしかしてロリコン??？」

失敬な。

「茶々丸!？」

「完璧です、マスター」

「やっぱり、エヴァちゃんが一步リードやなあ」

まあ、そんな感じでキヤーキヤー言われたり、タカミチとぐだぐだしたりしていたワケだ。

「いや、ごめんなあ。遅れてもったわあ  
せやけ……」

「徹兄い？」

それは、随分と懐かしい呼び方だった。

「おお、アコちゃんじゃん。  
久しぶりだねえ。」

「しかし、大きくなったなあ」

「side アスナ」

『好きな相手の好みに貴方は非常に近いようですよ』

それが、ネギと言う少女の占いの結果だった。つまり、私が、テツの好みの女性と比較的近い存在となっているという事がいえる。

過去に、私が出したデータは以下の通りである。

- 1、テツはおっぱいがC辺りが好み。
- 2、テツは普通より少し背が高い方が好き。
- 3、男色の気はなく、ノーマルである。
- 4、現在の所、下着や裸を見せたとしても、反応がない所から、子供に欲情するという事はない。
- 5、子供好きであるため、抱きしめ、膝に座る、一緒にお風呂、同衾は普通にやってくれる。
- 6、積極的に動けば、子供のソフトキスまでは許容の範囲内らしく、それ以上へは進めなかった。残念。
- 7、フレンチキスをした所、注意されたため、二度目は不可能である事が判明。おいしかった。
- 8、意外とウブであり、女性の裸の写真を見せた所、顔を赤く染めた。別の女の裸を見せるのは不愉快であったが、調査のため我慢。とりあえず一緒にお風呂に入り、消毒。
- 9、下半身についているソレは意外と立派。

そして、テツは17才から時が止まっていると聞く。

現在の私の身体は13、14程度のものである。

テツの身体の年齢と比較的近い、今の状態は確かに彼が性的興奮を覚えるラインにまで辿り着けたであろう。

さらに、胸もこと、非常に丁度良い物となった。もう少し経てば、彼と同じ年齢になるが、あえてこの辺りで攻めるというのも良いの



かもしれない。

最近では、一緒にお風呂に入ろうと言って来る事もなくなった。つまり、私に女性を見出し出したという事になる。

これで、私の裸を見て血液を下半身に集中させてくれるようになったのであればいいのだが、如何せん試してしまうと痴女の称号を手に入れてしまうので、下手を打つ事は出来ない。

こんな事なら、ネギの魔力暴走がテツではなく私を狙ってくれば、テツの前で自然に肌を晒せたのに……。

まあ、実際にそんな事になったら明日菜は泣いちゃうか……。それに、眼福だったから、文句は言うまい。

この時代の女性っていうのは、どうやら見る目がない人間ばかりのようで、テツはそれほどモテていない。

全く、彼ほどの男というのは、中々居ないというのにな。

ライバルが少なくて嬉しいような、自分が惚れた人間が評価されないことが悔しいような。

このように、感じ始めるというのも、明日菜の影響なのだろうか？

とにかく、少ないライバルの中で、私は間違いなくテツの好みで上位に入る存在であろう。

つまり、今の私はかなり勝てる可能性が高いのだ。

「いや〜、ごめんなあ。遅れてもったわあ  
せやけ……」

「徹兄い？」

「おお、アコちゃんじゃん。  
久しぶりだねえ。」

「しかし、大きくなったなあ」

「アコちゃん。」

昔、テツが何度も口に出していた女性の名前だ。  
何百年も前の存在であるはずだから、彼女もまた人外？  
いや、とてもじゃないが、彼女からそういった匂いは感じられない。

だが、彼女が脅威になるという事は女の勘が訴えている。

「ここで、第3勢力か……」

〈side 明日菜〉

「ん？明日菜」

なんか、ゆゑた？」

「へ？？」

私なんか言ってた？？」

特に何かを口にだしたような覚えはないんだけど。

「ゆゑとつたよ。

第3がどうとか」

大サン？？」

誰よ、それ！？」

## 第4章 吸血鬼編 その2 (後書き)

今までのフラグを、ちよつとずつ回収していきます。

## 第4章 吸血鬼編 その3

Side アコ

ワイワイしているある種、宴会特有の喧騒が、ウチ等のクラスから聞こえた。

あゝ、ちょっと出遅れたみたいやな。

ウチが頼まれたのは、菓子を買出し。

一応、今日転校生が来るってのは知ってたから、それぞれで持ってきて来たんやけどな。

数が心ともなかったから、買いに行つとつたんや。

安いところで買おうと思つて、少し遠い所に行つたんは失敗やったかもなあ。

「いやゝ、ごめんなあ。遅れてもつたわあ」

クラスに入ると、驚いたような顔をしとる人間が数人。

さては、ウチがおらんかった事に気付いておらんかったな？  
後で、からかいを含めて問い詰めたろ。

「せやけ」

ど、菓子は大量に買ってきたで。

そう言うつもりやったんや。

でも、ウチの口は上手く音を発してくれんへんかった。

一人の、少年とも青年ともとれる男性を見た時から、ウチは何も出  
来なくなってもうた。

あの時から、全く変わらない姿で、お得意の苦笑したような、それ  
でいながら楽しんでいるような笑顔で級友と話しとった。

たくさんあった。

言いたい事は、たくさん、本当にたくさんあった。

何度も何度も考えとった。

徹兄いが帰ってきた時、どうするか、いっぱい考えとった。

ドラマみたいにロマンチックで、キスでしめるような物も考えたし、  
抱きしめて泣いてまうかも、とも思った。

他にも成長したウチの女っばさにメロメロにさせるなんていう赤面  
物の事も、幾つも幾つも考えとったんやけどなあ。

「徹兄い？」

ウチが出来たことは、問いかける事だけやった。

そんなウチに、兄いは

「おおく、アコちゃんじゃん。

久しぶりだねえ。」

しっかし、大きくなったなあ」

およそ、3ヶ月ぶりにあつた姪に声をかける叔父のような返事をした。

「なんや、それ!？」

「ぶべらっ」

「おお、いいパンチあるね」

「あ、あの徹さんを殴るなんて……  
和泉君は、何者なんだ!？」

「修羅場か、修羅場なのか!？」

外野、うるさい!!!

「だいたい、何年ぶりやと思ってんや!？  
5年近くやで!!!5年近くも会つておらんのやで!!!」

「ゆ〜ら〜さな〜いで〜」

「しかも、生死不明の状態。」

周りは、兄いの葬式をやる様進めてくるし、おじさん達ぐらいしか、生きているって言ってくれる人おらんかったし、兄いの部屋の本棚の後ろに『素晴らしき美乳』とか見つけてもうたし

他にも、他にもっ」

ポんと、頭に置かれた手

「いやあ、苦勞かけた。

親父達にも謝らんといかんね」

ワシヤワシヤと、乱雑に撫でるその手は、幼い頃の記憶と同じものだった。

＼side テツ＼

胸元で泣いているアコちゃんの背中を叩きながらあやす。

頭を撫でたら、急に抱きつかれ、泣いてしまったのだ。

身体は随分と大きくなったっていうのに、昔と同じように泣き虫のまままだ。

まあ、だからこそ対処も慣れた物なんだけどね

「ほら、高い高い」



「キヤーー！！！！」

「ぼぶるっ」

蹴られた。

「て、徹兄い。

ウチ、ミニスカート！！！！」

後、高い高いして、喜ぶような歳でもない！！」

「ごめんごめん。

でも、昔はこうすると喜んでくれたのに、成長するっていうのは嬉しいような、寂しいような……」

「まあ、その気持ちは分からないでもないんですけど、和泉君も、もう立派な中学生なんですから、しっかりと意識してくださいよ」

「まあ、分かってはいるんだけどねえ？」

オレって、アコちゃんはもちろんタカミチも、子供扱いをしちゃうんだよねあ。

もちろん、2人とも成長したんだけど、小さい時を知っているせいかな、気付かないうちに子供扱い（もどき）をしちゃうんだよねえ。

一応注意するつもりだけど、多分また子供扱いしちゃうんだろうな。実際、エヴァちゃんに子供扱いするな！！

って、500年以上言われてきたけど、直らなかつたし。

『……それで、和泉君とは一体どういった仲なんですか？』

おっ、タカミチから念波。

うくん。ココで普通に従妹って言っちゃうと面倒だよな？

タカミチはオレがちょっと長生きしている事だっけ知っているわけだ。

そんなオレと普通のアコちゃんが従妹っていうのは矛盾しているって事になる。

つまり、銀行強盗にやられた事とか、なんか過去に行っちゃった事とかをまとめて話さないといけなくなる。

ぶつちゃけ、信じてもらえとは思わないんだよなあ。

というか、オレだって、そんな事を言う人がいたら精神病院を進めるし。

『まあ、エヴァちゃんとか、アスナちゃんとかと同じ様な感じ』

つまり妹みたいなの、娘みたいなの。という事だ。

なんか、タカミチを騙しているみたいで、罪悪感が沸くけど、嘘は言っていないぞ。

Side タカミチ

『まあ、エヴァちゃんとか、アスナちゃんとかと同じ様な感じ』

返事はそんな物であった。曖昧な返事。確かに、それは間違っていないのだろう。だが、先ほどの和泉君と徹さんとのやり取りを鑑みると、それだけではないのは、はっきりと分かる。

普通に、彼達の会話を聞いていれば、可笑しい所ぐらい幾つも見えてくる。

まず、5年間の生死不明だったという事だが、これ自体は矛盾点がない。

もちろん、可笑しいといえれば可笑しいが、不可能ではない。魔法やら知人やらを使えば出来るだろう。

まあ、その様な事をやる理由が全く思い浮かばないが、不可能ではないのだ。

問題なのは、和泉君が見つけたという『素晴らしき美乳』である。別に、その本自体に問題はない。徹さんが美乳派であるという事実が明らかにされたただけだ。

問題なのは、それを『徹さんの部屋』で見つけたという事だ。

和泉君がああのログハウスに侵入し漁っていたというのはありえないという事は、徹さんはああのログハウス以外に部屋を持っていた事になる。

僕は徹さんとここ15年は、共にいた。まあ時々外に出る時もあったが、それでもかなり長い期間共にいたことは確かだ。

そんな僕以上に共にいたのがエヴァだ。常に共にいたのは間違いない。

そんな状況で、徹さんが5年前にエヴァや僕が知らない専用の部屋がある事が可笑しいのだ。

そして、一番問題なのは、徹さんの

『親父達にも謝らんといかんね』

という言葉だ。もちろん徹さんに親がいるのは当たり前である。

ただ、和泉君が徹さんの両親を知っており、かつなんらかしらの関係があるという事になる。

長い事共にいるというのに、徹さんの事は知らないことばかりといえば、そうだが……。

まあ、そんな物なのかもしれないな。

あえて問うワケにも行かないしね。

＼side エヴァ＼

騒いでいる徹と和泉亜子を見ながら、ため息を一つ吐く。

あの夢で見た『アコ』という少女が、目の前にいる彼女だった。全く知らない人間なのだが、たびたび徹から聞かされた少女の名であった。

名前だけは何度も聞かされていたので、そのアコという少女が目の前にいるというのは、不可思議な感覚を覚える。

何でもないかのように、怒り、泣き、笑っている和泉亜子。しかし、彼女は分かっているのだろうか？

徹が、500年以上もお前の事を思い続けていた事を。

500年以上も共にいなかったというのに、一目で、すぐ成長したお前だと気付いた、その奇跡とでも言いたくなるような、出来事が起こっていたという事を。

別に、徹が和泉亜子に恋心を覚えていたなどと言うつもりはない。なにせ、夢の中で見た2人の年齢差は非常に大きいものだったのだ。さらに、徹の様子からもそうではないというのは、楽に予測がつく。私や明日菜と同じ、娘のような、妹のような物と思っているのだから。

だが、500年以上も思い続けてきた、その思いの強さは本物なのだ。

強敵といえば、強敵なのかもしれんが……

貴様如き小娘に負けてやる気はないぞ。

くおまけく

「あの、ネギさん

さっきは、危ない所を助けていただき、その……

ありがとうございます。これは、お礼の図書券です

「入っ???

え、と、ありがとうございます、でいいのかな?」

## 第4章 吸血鬼編 その4

side テツ

「……兄い。」

「今から叔父さん達の家に行くよ!!」

「ちよつ、唐突過ぎる」

「ネギちゃん歓迎会が終わったら、アコちゃんに捕まり、こんな状況なのだ。」

「唐突もなにもないやろ!!  
最優先事項なんやから、すぐ行くのは当たり前や」

「うう、正論で何も言えない。」

「叔父達？」

「つまり、テツの両親という事だよな？」

「アコ、待て。私も行くぞ」

「えっ、テツさんの両親??」

ちょっと待って、私もついて行く」

え〜と、エヴァちゃんと明日菜ちゃんも付いて来るって事？

「ウチもええやる〜か？」

木乃香ちゃんも来たいと。

というか、エヴァちゃんと明日菜ちゃんが来るんだったら、ついでに茶々丸も紹介しておきたい。

でも、茶々丸も来ちゃうとネギちゃんが一人になっちゃうし……

次の土日辺りにしたいんだけど

「兄い、早く〜」

ぐいぐいと袖を引っ張るアコちゃんを見る限り、無理だよね？

「もう、いいや

みんなで行こうか。

あつ、茶々丸とネギちゃんも悪いけど一緒に来てくれるかな？」

「了解しました」

「僕もですか??」

僕は構いませんが、なんというか、良いんですか？

良く分かりませんが、久しぶりに実家に帰るんですね？」



「全然OK。」

というワケで、ちょっと行ってくる。

タカミチ、悪いけど学園長に言っておいてね」

「はっははは。」

まあ、ただ皆で徹さんの家に遊びに行くっていうだけなんだから、報告の必要はないんだけどね。

任されたよ。」

ありゃ、確かに言われてみればそうかも。

でも、明日菜ちゃんとか木乃香ちゃんとかは寮生だから、報告とか必要なんじゃないの？

えっ、それすらも必要ないの？

なんというか、自由すぎない、それ？？」

「いや、しかしこれだけ人がいるのに、男がオレだけっていうのも、ちよつと肩身が狭いなあ」

全部で7人いるんだけど、その中で男はオレ一人。

なんというか、周りからどう見られているんだろ？って考えるとち

よつとドキドキする。

モテモテに見えるのか、それとも保護者？

オレも女に見られて、女子7人の団体に……流石にそれはないか。

「そうですか？ 肩身が狭い様には全然見えませんが。むしろ皆の中心になつて見える様に見えますよ。」

でも、良いんですか？

アポイントもなしに、こんな大勢が押しかけてしまつて。」

なんというか、ネギちゃんってすっかりとしすぎている。

これで、9歳なんだよね？

「うーん、ちょっと問題かもしれないけど紹介したい人ばかりだからなあ。」

まっ、久しぶりに帰ってきたバカ息子の我俣って事で許してもらつつもりだよ。」

それより、ネギちゃんだよ。

いやあ、完璧に巻き込まれた形でごめんね」

「へ??？」

「いやあ、こつち来たの今日なんですよ？」

疲れているのに、オレの実家に行くとか、良く分からない流れになつちやつたもんだから、悪かつたなあつて」

考えてみたら、ネギちゃんを一人にしなれば良いんだから、タカミチにでも預けておけば良かったんだよね。」

今更気付いても遅いけど。

「いえ、気にしないで下さい。

それに、これから一緒に住む人の事ですから、僕としても知っておきたいですし」

良い子や。ほんと、良い子や。

「兄い、何処まで行く気？

「こっちゃん」

「いや〜ごめんごめん。

普通に家忘れていたわ」

ネギちゃんを引き連れ、Ｕターン。

アコちゃん曰く、オレの家を見上げる。なんとなく懐かしい気がするような、しないような……

「全く、しっかりしてや」

「いや〜、ごめんごめん」

左から3番目の植木鉢の下。

うん、合鍵の位置は変えていなかったみたいだね。

「よし、開いた。

ほいじゃ〜、皆遠慮しないでじゃんじゃん入っちゃって」

現在歩いているのは、麻帆良から出てすぐの所である。

前には、テツの袖を引くアコ、袖を引かれているテツ、その隣にネギという集団がおり、その後ろを付いていつているという形になっている。

両親に紹介しなくちゃいけない。

徹がただ言ったただけだというのに、その言葉に心が異常なほど躍っていた。

もちろん、徹の言う『紹介』というものがどういったものなのかは分かっている。

世話になったとか、ずっと共にいるとか、そういった内容であるだろう。

分かっているのだが、奴の『両親に紹介する』という言葉の響きだけで、気分が上向いてしまうのだ。

よくある、『この人と結婚を前提にお付き合いしてます』みたいな感じになりそうじゃないか。いや、ならないんだろうけど、雰囲気的にそういった感じというか……

どうやら、この照れくさいような、嬉しいような気持ちになってい

るのは私だけではないようだ。

明日菜は、時々思い出したかのように宙を見て、ニヘラ〜っと笑みを浮かべているし、近衛木乃香も、ありもしない埃を時々払っていたりと、落ち着きがない。

とはいえ、まあ大きくリードしているのは私なんだがな。

なにせ私は、テツのた、大切な人なんだからな！！

さらに、その大切な人の前には凄くがつくほど、大切にされているんだ。

私が大きくリードしているというのは、確定的であろう。

という事は、両親に紹介という物が私の考える物になるという可能性も、私が一番高いわけで、その可能性が0に近いだけで、少なからずあるというわけで、さらに……

「ちゃ、茶々丸。

この格好で、奴の両親にあって問題ないか？」

お気に入りのゴスロリを着てくるべきだったのか？

そのまま来てしまったから、普通の制服だぞ。今の私は。

「特に問題はないかと思われます」

そうか？ そうなのか？

確かに、制服というのは正式な場に行く時にそのまま使えるものがあるが……

堅苦しいと思われる可能性もあるのではないだろうか。

だが、ゴスロリだと、それはそれで問題視される可能性もある。

定番である『お嬢さんを、僕にください』のパターンだとスーツの

場合が多いが、それはドラマとかであって、実際もそうなのかどうかも分からぬし……

というより、もし現実のものであったとしても、それは男性バージョンであって、女性バージョンが、それと同じとは限らんわけだし。

「私はどうしたらいいのだ!？」

「もうっ、どうしたらいいのよ!？」

「どないしようかぁ?？」

……えっ???

↳ side ネギ

歩きながら、隣を見る。黒髪、黒目の青年が、そこにはいた。

多分、誰しもが普通の人っていうんじゃないかな?

話していて、優しいっていうのは分かるけど、でもやっぱり普通の人だと思う。

この人は、徹さん。しばらくの間お世話になる人だ。

普通の一般人なんだと思う。

ただ、どうしても気になってしまうのだ。

あの忘れもしない雪の日。

時間がいくら流れても忘れられない、『あの人』の言葉

『ああ、そうか。

またテツに助けられちゃったか』

『また』って事は、多分その前も『あの人』は『テツ』っていう人に助けられたんだと思う。そんな凄い人なんだ。多分図書館で調べれば出てくると思って調べてみたけど、何も出てこなかった。

どうやら『テツ』っていう人を知っているらしいタカミチに聞いても、殆ど教えてくれなかったのだ。

その人がもしかしたら『あの人』に続いているのかもしれない。いや、それを抜いても、僕を助けてくれたという、『テツ』という人について知りたいというのは、ごく自然な事だろう。

そして、偶然か、故意かは分からないけど、僕のお世話をしてくれている人も『テツ』なのだ。

うーん、でも、徹さんは普通の人にしか見えないんだよね。

あつ、でも優しい笑顔で、なんか頭をグシャグシャに撫でられるとなんかむず痒くて、それでも嬉しいような、恥ずかしい様な……でも嫌じゃない。そんな気持ちにさせる徹さんって、凄いんだと思う。

それは、ある意味魔法よりも。

全てが繋がってしまった。  
知りたくなかった事実。いや、知ってはいけない事実であったんじやが。

様々な事象が複雑に絡み合っており、知らぬ物を知らぬままにして  
おいた。

徹君が話してくれる時まで、知る必要はない。むしろ、知っては  
いけないのだと思っておった。

エヴァンジェリンや徹君ほど生きてはいないが、それでも長き時を  
歩んできた。

ここの学園長、関東魔法協会の理事なんてものをやらされている事  
もあり、知りたくも無い辛い現実を幾つも見てきた。  
だが、それに慣れる事など、どうやってもないのだ。

耳にこびり付いてしまった、助けを呼ぶ声と、うめき声……  
涙ながら、助ける方法がないと言う。

楽にしてくれといい、それに僕は涙ながら杖を向け、そしてありが  
とうと……



奥歯を強く噛み締め、頭を振るう。  
今は、過去を振り返る時ではないのだ。

全てが繋がったのは、タカミチ君の定期報告の後の何気ない世間話の話であった。

タカミチ君は明日菜ちゃんと、木乃香、亜子ちゃんに、エヴァ、茶々丸、ネギちゃんが出かけたという事を態々儂に言ってきたのだ。  
曰く、徹君に頼まれたらしい。  
問題なのは、その後からじゃった。

自然、タカミチ君との会話は、徹君達のものになっていった。

「皆で遊びに行くとは、仲がいいのは良い事じゃ」

「まあ、そうですね。」

徹さんが真ん中になると、それだけで皆が何だかんだでまとまっちゃうんですよね。

まあ、師匠や詠春さん、アルなんかは、その徹さんのせいで胃を痛めていたんですがね」

恐らく、赤き翼の時代を思い出していたのであろう。口元には苦笑を浮かべながらも、タカミチ君の顔は穏やかな物であった。

「ふおっふおふおふお。」

英雄達に、唯一勝てる存在じゃからのお、彼は。

ところで、徹君達は何処にいったんじゃ？」

これが、問題じゃった。もしかしたら、儂がこの残酷な過程に辿り

着いてしまったのは、彼の未来視といっても過言ではない予見の力によって、想定された事なのかもしれない。

「徹君の家らしいですよ」

「家??あのログハウスじゃないんじゃないかなあ……  
となると、土佐の方じゃから」

「なんで、そこで土佐が出てくるんですか?」

「む??」

何故といっても、徹とへバの家があるのは、土佐だったはずじゃぞ。僕も何度か訪れた事があるしのお」

いやあ、あの時は助けられたわい。

「へえ、土佐にも家があるんですか。あの人達。

それとは別に、学園の傍にも持っているらしいですよ。

後、和泉君が張り切っていましたね。徹兄いを絶対両親に合わせる  
つて」

徹君の実家が学園の近くにある。初耳じゃったが、長き時を生きてきた2人じゃ。家ぐらい幾つもあるじゃろう。

ただ、どうして徹君の家に行く事が、亜子ちゃんの両親に会うことに繋がるのか、不思議じゃったが、何かがあるのだろうと、勝手に  
思い込んでおった。

「ふおっふおふおふお

徹兄いとは、亜子ちゃんは随分と徹君に懐いているようじゃ。しかも、自分の両親に会わせようとするほどに。

一応、俺も生徒達に気を配っているんじやが、知らなかったのお」

「まあ、知らなくて当然ですよ。

何せ5年近く会っていなかったとか。なんか生死不明だったらしいですよ。徹さん

あと、僕の言葉足らずでしたね。和泉君の両親ではなく、徹さんの両親に合わせるつもりみたいですよ。和泉君」

タカミチ君にとっては、ただただ自分が聞いた話を俺に伝えてくれているだけであろう。

もしかしたら、タカミチ君も徹君の矛盾に気付いたのかもしれないが、俺と同じように知ろうとしなかっただけなのかもしれない。

じやが、俺にはタカミチ君以上に情報があった。

その全てが綺麗に繋がってしまったのだ。

忘れもしない、5年前の事件。

銀行強盗、撃退したが重体となった『村重 徹』という少年。そして、医師、治癒士、村重徹の両親と、事件に巻き込まれた『和泉亜

子』という少年の従妹の目の前で、少年は世界樹の発光と共に消えた。

世界樹の発光する少し前。

重体となった徹という少年が、儂の知っている徹と勘違いしてしまい、エヴァンジェリンへと電話をかけた。

その時のエヴァンジェリンの様子が少々おかしかったのも、しっかりと記憶していた。

既に、必要な物はすでに儂の元にあったのだ。

そして、気付く。気付いてしまった。

エヴァンジェリンが、あれほど動揺しておったのも、徹という少年が消えたワケも。

そして、1000年ほど前。

建設中の麻帆良を見に来た時、偶然見てしまったあの光景。

当時でも有名だった『徹』が悲しそくに世界樹を見ていた理由が。

その全てが繋がってしまったのだ。

## 第4章 吸血鬼編 その5

「side ア」

「ただいまあ」

「おっ、お帰り」

「いやあ、今日も疲れた」

「ご苦労さん。」

あつ、知り合いが大勢なんか詰め掛けてきたけど、別に良いよね？」

「おっ、別に構わんよ」

「ん、良い匂い。」

夕飯、徹ちゃんが作ったの？」

「んにゃ、オレじゃなくて、茶々丸と木乃香ちゃんが作ってくれた」

「女の子を連れ込んでるの？」

徹ちゃん、やる」

「やるゝつて、まあいいや」

「紹介してね」

「まっ、そのつもりで連れてきたつもりだよ」

……我慢や、我慢するんや。ウチ。

「なに、徹。」

お前、亜子ちゃん以外の女の子を連れてきたのか。

「こりゃ、挨拶しなくちゃな」

「ふふふ、そうねえ。」

でも、私としては亜子ちゃんかなあ」

「お前なあ、別にその子達が亜子ちゃんと同じとは限らんだろっが」

「亜子ちゃんと同じ?」

「んふ、女の勘は良く当たる物なのよ」

「おゝい。無視しないでえ」

まだ、大丈夫や。

まだ、耐えられる。

ウチは、やれば出来る子なんや。

「しかし、親父老けたねえ。お袋は全く変わっていないけど」

「はっはは。そりゃ5年も経ったんだ。少しぐらい老けるさ」

「ありがと。でも、お袋かあ。」

「前まで、お母さんって読んでくれたのに、ちょっと寂しいなあ」

「ん〜、そういえばそうだったかも。」

「気付かない間に、ちょっと口調も変わっちゃったし」

「ねえ、ウチ頑張ったよね？  
頑張ったよね？」

「あつ、今日の夕飯が、」

「なんか、違うやる!？」

「どうしたの、亜子ちゃん??」

「あらあら」

「普通すぎるやる!!」

「確かに、ウチの時も徹兄いはそんな感動的な再会ちゅ〜もんをやってくれへんかったよ。」

「せやけど、両親との再会やったら、感動の再会をやってくれろと思

つとつたんやで!?

まあ、なんか叔父さん達に負けたみたいで、嫌やけど、それでも親には勝てへんって思ったんや。

それなのに、なんや!?

この普通すぎる再会は!!

「ええくと、アコちゃん?」

「叔父さん達も叔父さん達や!!」

なんで、行方不明になつとつた息子が家にいるちゆう、ワケの分からん状況に、なんでもないかのように、接するんや。

ただとどしく、とは言わへんけど、ちょっとぐらい驚くべきやろ!?

だいたいなあ、兄いの泣き顔が見れるかもって、皆ワクワクしとつたんやで。

茶々丸さんなんか、どこからとりだしたのか分からないビデオカメラで撮つとつたし」

「いや、なんか良く分からないけど、ごめんなさい」

「良く分からんやと???」

side エヴァ



恐らくだが、アコが徹に言いたかった事は、かなり多くあったのだらう。

それが、文句だらうが、好意を伝えるものだらうと、とにかく多くあったのに間違いはない。

それが、ついに爆発したのだ。

「良く分からんやと??」

釣りあがった目で、徹を見つめるアコ。

そして、この言葉の後に続いたのは、膨大なアコ曰く”文句”。

その文句には、恐ろしい情報がそこらにちらばめられていた。

背筋がゾクゾクとする。

いくら、金を出そうと、権力者になろうとも、知りえない事がこゝで暴露されていたのだ。

「えっちい本の量が多すぎるんや。

えっちい本を見るのは、大人になってからやる。

ちゆうのに、兄いは……

大体、なんや、あの本棚の裏にあった『素晴らしき美乳』や『お兄ちゃんに（はあ〜と）』とかは!??」

「いやあ、良く知ってるなあ」

あまりにも、恐ろしい暴露であった。

「明日菜!!」

本棚の裏だ」

「わ、分かったわ」

「ひゃあ、意外とすごいなあ」

「マスター、統計を取ることによって、徹さんの趣味を調べる事を推奨します」

「その辺りは、任せたぞ。茶々丸」

「はっ、お任せください」

「はっははは、ちょっと見つけられると恥ずかしいんだけど。というか、結構レベルが高い奴もあるから探さないで欲し」

「探せ、徹底的に探すんだ!!」

徹が己でない女の裸を見て喜ぶという事に対し、ちょっとした嫉妬に似た感情と、多大な好奇心が湧き上がる。

「さらに、机の引き出しの中にあったビデオ。

アレも、ラベルは普通のアニメだったけど、中身はえっちかったし」

「明日菜。」

机の引き出しにもあるぞ!!」

「あかんでえ。エヴァちゃん。」

明日菜、『素晴らしい美乳』片手に顔真っ赤で固まってる

「ちっ、耐性をつけさせるべきだったか。  
木乃香。任せたぞ!!」

「任されたえ」

「ジッーーーーー」

集計中、集計中」

ふっはははは。

いいぞ、いいぞお。和泉 亜子。

私の時代は近いぞ!!

「え、ええと、僕はどうすれば……」

「ふふふ、君には少し早いから、私と向こうに行きましょう。」

後、あなた。何こっそりと徹ちゃんの部屋に行こうとしているのかな?」

「えと、息子の事だからな。うむ。」

俺もすっかりと、奴の趣味嗜好を学ぼうかなあ〜と……」

「ふふふふ、あなたも私と向こうに行きましょうか。ちよつと、お話したい事がありますし」

「はははははは……」

いやね、男っていうのは何時になっても、そういうのが見たいというかね？」

「ふふふふふふふふ」

↳ side テツ↳

現在オレ、両親、アコちゃん、ネギちゃんの5人で食事中である。ちなみに、他の人達はというと

「ふっはははは、奴、外人モノもしっかりあるではないか。しかも、金髪の白人と言うものだ。

ふっはははははははははは」

「いややわ〜、エヴァちゃん。

身体付きやったら、ウチや明日菜の方が勝ってるでえ」

「ジッーーーーー」

「あえ、で、でも、裸で……  
ぬ、ぬるぬるで……」

皆で、オレが溜めていた奴を見ていた。

まあ、レベルが高い奴は回収しておいたので、一安心。

今、見られている奴なんかはただ裸だけである。

女の人からしてみれば見慣れた物であろうから、教育上全く問題ない……よね？

「そっいえば、徹。

お前、この5年でなにしてたよ？

あつ、マヨネーズとって」

「うーん、一応高校。まあ、色々とワケがあつてね。  
ずっと、高校生だったよ。」

ほい、マヨネーズ」

「ふーん……」

なんで、すぐ帰って来なかったの？

後、あなた。マヨネーズはカロリーが高いからお医者さんから減らすように言われたでしょうが」

「帰れなかった。っていう感じ。」

まあ、詳しくは話せないんだけどね。」

そんな感じの夕食。

何故か、アコちゃんにデカイため息を吐かれた。

## 第4章 吸血鬼編 その6

「タカ、高畑先生……あの

おいしいお茶が入ったんですが、飲んでいただけませんか?？」

「ふふ

これはホレ薬だろ？」

こんなもの、必要ないさ」

「え、どういう事ですが?？」

「はっはっはっはっは

何故ならもともと僕は君の事を愛しているからさ」

「ええっ!？」

高畑先生、か、顔が近づ

「いつもみたいに、タカミチとは呼んでくれないのかな?。」

「せ、先生と生徒なんだから、そこはしっかりしないと」

「今は、教師、生徒として見て欲しくはないんだ」

「えっと、えっと……」

「ネギ君」

「たかは、タカミチ」

side ネギ

「はうわっ!？」

えっ!？

なに、なんだったの!？

胸がバクバクしてるし、顔も熱い。

嬉しかったのかな？

それとも、なんか怖かったのかな？

何が原因かは分からないけど、飛び起きてしまったのだ。

怖い夢を見た。ワケじゃないよね？

”あの時”の夢を見たときは、もっと酷いもん。

「……ん〜？

どうしたの？」



「へ??」

す、すみません。なんか起きてしまっ

「怖い夢でも見てたのかな？」

まだまだ、遅いから、寝よっか」

「あっ、はい」

……あれ？

もしかして、僕、徹さんのベッドに忍び込んだじゃった!?

なんか、悪いなあ。

自分のベッドに……

あれ、抱きしめられちゃって、動けな……

徹さん寝ちゃってるしなあ。

まあ、良いか。

ん〜、ゴツゴツで、硬いけど、でも気持ちよくて……

お父さんか、お兄ちゃんって、こんな感じなのかな？

今日のようなチャンスは滅多にないことだった。

幼い頃では普通の事だが、今では週に一回あれば良い方であろう。こういった、少ないチャンスを物にしなくてはいけない。

出来れば行くところまで、行ってしまいたいというのが、正直な所の気持ちだが、まだ時期尚早。

そもそも、私が勝手にやっちゃうと、もう一人が泣いちゃうし……

出来ない妹を持つと、姉は苦勞する。

まあ、ソコが可愛いんだけど

私の時間はとても短い。

ねえ、徹。

徹は気付いている？

鈍感なようで、鋭くて、でも鈍感だったりして……  
どうなの？

気付いていてくれると、嬉しい、かな。

そつと、そつと、部屋に忍び込む。

徹以外に誰かがいる。

エヴァかと思ったら、ネギだった。

徹の腕の中に、入っているネギは、穏やかに、子供っぽい顔で寝ていた。

「ん〜、お父さん」

……仕方ない。

片腕はネギに譲ってあげよう。

そ〜と、徹を仰向けにさせ、もう片方の腕の中に入る。  
薄暗い部屋のなか、私の視線の先には、徹の横顔がある。

ちよつとだけ、抜け駆け。

明日菜には悪いけど、これぐらい良いよね？

徹を抱きしめ、ゆっくりと彼の頬に近づいていった。

） s i d e 明日菜）

気付けば、私は徹さんを抱きしめていた。

カーテンの隙間から漏れる明かりで、照らされる徹さんの顔。

高校生にしては、ちよつと幼くみえる顔。特別カッコいいという訳

でもない。

いつも、笑っていて、優しい。

多分、徹さんを紹介するとしたら、コレぐらいの事しか言えないんじゃないかと思う。

でも、それで十分。

小さい時から、私にとって徹さんは王子様だったんだから。

あの時から、ずっと優しいお兄さん。

それで、エヴァちゃんは、友達みたいなお姉さんかな？

徹さんが、私に優しくしてくれるのは嬉しいけど、ちょっぴり悔しい。

今でこそ、ちょっぴりですんでいるけど、小さい時は酷かった。

何も私が出来ないのに、甘えさせてくれるのが、悔しくて嫌で、泣けちゃって。

チカラの無い、自分が許せなかった。

何でかは分からないけど、泣けちゃって、徹さんに思いつきり八つ当たりしちゃった。

『私みたいな、ただただ頼る事しか出来ない子供に、優しくするな  
！！』

だったかな？

小さくて、自分が何て言ったのかなんて覚えていないけど、多分そ

んな感じの事を言ったんだと思う。

ワケも分からないまま、泣きながら、徹さんに散々当たっちゃって、それで嫌われちゃうかと思うと、余計泣けてきちゃって。

謝ろうとする自分もいたけど、それでも譲れない自分もいて。

その時の自分が情けなくて、思い出すたびに気恥ずかしくなっちゃうな。

で、そんな私に徹さんは、屈みながら、私の頭を撫でてくれた。やっぱり、顔には笑顔を浮かべていた。

「子供はね、大人を頼って良いんだよ。

大人は無条件で、子供を優しくするんだよ」

凄く徹さんらしい言葉だと思う。

でも、当時の私は気に入らなくて、頭に乘る手を叩いた。

徹さんが言っていた事、私はそれが嫌だったのだ。

”子供”だから”大人”に頼って良い。

それが嫌だった。

無力な”子供”が嫌で、そんな自分が嫌で嫌で仕方なかった。

ただただ、守られる存在が嫌だった。

明らかな拒絶にも関わらず、徹さんは何が嬉しいのか、笑みを目を細めていた。

「オレ達も、そうやって大人にしてもらったんだ。

明日菜ちゃんも、めいいっぱい甘えて、めいいっぱい頼らせてもらって良いんだよ。

それでね、いつか大人になった時に、明日菜ちゃんが子供をめい  
っぱい頼らせてあげればいい。

それまで、オレに頼りになるお兄ちゃんをさせて欲しいんだ」

叩かれた手で、乱暴に目元を拭われた。

多分、好きだった徹さんの事が、別の好きに変わったんだと思う。

そうなってくると、また徹さんに甘えるというのが嫌になっちゃ  
うのだ。

今度は、全く違う理由。

『頼りになるお兄ちゃん』じゃなくて、『ずっと隣にいる人』にな  
って欲しくなっちゃったのだ。

だから、今でもちよっぴり悔しい。

互いに支えるのではなく、一方的に支えられているのだから。

でもね、私も成長しているんだよ？

まだ、徹さんほどじゃないけど、子供にちょびつと頼られる程度に  
はさ。

ずっと、徹さんを見てきたんだ。

私も、いつか徹さんみたいになるよ？

それでね、その時になったら、徹さんと一緒になれるのかな？

寝ている徹さんを抱きしめる。

夢の中でも、やっぱり徹さんは暖かくて、安心できた。

そと、階段を上る。

徹のコレクションの確認等をしていたら、遅くなってしまい、私達は徹の家に泊まる事になったのだ。

唯一、アコだけは、隣が実家なため、そのまま帰っていった。

それで、私達は居間に布団を敷き、雑魚寝をしていたんだが、如何せん徹が傍にいないと、寝付きが悪いのだ。

浅く眠り、起きる。無理やり寝ようとしても、ウツラウツラとはするのだが、どうも深く寝れない。

600歳を過ぎ、既に人の寿命の10倍弱を生きているというのに、一人で寝れぬというのは、情けないと思い、何とか寝ようとしていたのだが、限界が来た。

すぐ上に、徹がいるのだ。

我慢する必要など、ない、よな？

眠いのに寝れないという、妙な状態のまま、徹の部屋へと入っていく。

ん……

「ふあ……」

私は、ねるぞあ

ねるんだぞぉ〜」

徹の隣には入れそうにもない。  
だが、甘いぞぉ、甘すぎる。

私が、この程度であきらめるものか。

布団をめくり、そのまま徹の上に乗り、抱きつく。

いつも、このまま動かなくてはいけないのだが、今日はコレだけだ。  
これだったら、奴への負担も少ないだろう。

んっ……

これで、よっやく、ねれる

「ん？」

どうしたんだ？お前。

徹を起こしに行ったんじゃないか？」

「ふふふ。

そうだったんだけどねえ、あの光景を壊しちゃうのがなんだか勿体  
無くて」



「ん？あの光景？？」

カメラなんて持ち出して、どうしたんだ？」

「徹ちゃんの部屋で、ちょっとね。」

「一緒に行きましょう」

「ん??」

まあ、いいや。よっこらじよ。

それじゃ、行きますかな」

「おやおや、コレは……」

「ね、写真に撮りたくなるでしょ」

「全く、こいつがココまでモテるとは思わなかったよ」

「あら？本当に？」

「そりゃ、そうだよ。」

まったく、一体、誰に似たやら」

「私は、あなたそっくりだと思っただけどなあ」

「おいおい。」

俺は、こんなにモテやしなかったよ」

「あら、そうかしら？」

「はあ、俺がモテたのは、お前ぐらいだよ。」

さっさと、写真を撮らないと、起きさつまじぞ」

「ふふふ。」

そついで事にしておきまじょうか。」

#### 第4章 吸血鬼編 その7（前書き）

なんだかんだで、結構大変でした。

いやあ、こつこつ日常編というのは難しいですねえ。

しかも、最近godgodに……

ちよつと、今は力を溜めている最中なので、そのうち、ズドンとデカイ物が来ると……いいなあ……

そんなこんなの最新話です。

短いですが、楽しんで貰えればと思います。

## 第4章 吸血鬼編 その7

Side マナ

超鈴音。

天才の名を欲しいままにしている彼女が、私の雇い主である。

超の本当の目的というのは、不明。

どうやら、再来年度の麻帆良祭で”何か”を成功させる事を第一目標としているらしい。

全く、雇い主が秘密主義だと困るよ。傭兵として働いているのだったら、守秘義務や、余計な詮索をしないと聞いた事はしょっちゅうなのだから、かまわないんだけどね。

とにかく、超は何かをやるうとしている。そして、その目的を成功させるにあたって、邪魔となりうる存在が、近衛近右衛門、高畑・T・タカミチ、そしてエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの3人のはずだったらしい。

なるほど、エヴァンジェリンはどうかは分からんが、近衛近右衛門、高畑・T・タカミチ、共に麻帆良学園最強の魔法使いであり事は周

知の事実である。

荒事をするには、2人の存在は邪魔であろう。

まず、超は3人の中で一番墮としやすいと考えたエヴァンジェリンとの交渉を行い、その交渉は見事に成功。

私の中では、エヴァンジェリンというのは、学園長と高畑先生に並ぶほどの注意人物ではないかと思っていた。

とはいっても、暴力だけが力の全てではない。

なんらかしら超にとつて、不都合が出てくる存在なのだろうと、勝手に思い込んでいたのだ。

それが、彼女の技術だと気付けずに。

彼女もまた、化け物の一人であった。

何せ、600年近くもの時を生き続けた、吸血鬼の真祖だったのだ。

全く、一般人と思っていたクラスメイトの一人が吸血鬼の真祖なんて、笑えない冗談だよ。

一応これでも、有名な傭兵団の戦闘員だ。

力を見破るくらい、出来るつもりでいたのだがね。

どうやら、まだまだのようだ。

吸血鬼の真祖。

それほど強烈な力を持つ存在ならば、それなりの物を感じるはずなんだが……。

それすらも、認識させないというのは、やはり彼女の技術の高さが思い伺える。

普通の認識阻害ではどれほど技術が高かろうと、あそこまで人間っぽく見せる事は出来ないと思うのだが、卓越した技術を持てば可能なのだろうか？

……まあ良い。

とにかく、その交渉の準備に超はエヴァンジェリンについて調べていたのだ。

そして、浮かび上がってくる、共に暮らしている一般人の姿。

それが、村重 徹という人間であった。

吸血鬼の真祖であるマクダウェルと共に暮らしているという時点で彼が普通でない、いや普通であるはずがないと分かるはずだ。

私の感覚に引っかからない所を見ると、彼もまた、エヴァンジェリンと同等の技術を持つ人間なのだろう。

学園長や、高畑先生、さらにエヴァンジェリンに、村重 徹。

麻帆良学園とはいえ、このような化け物ばかり集まるといのは、超も中々ついていない。

話を戻すが、エヴァンジェリンを見破った超の情報収集能力を持つとしても、村重 徹の過去を知る事は不可能であった。

具体的に言うのなら、およそ2年。その年月しか彼の過去が探れなかったのだ。

超からしてみれば彼は、目的を遮る力を持つ可能性が高い、不確定要素が満載の存在だ。

少しでも、彼の情報を得、出来る事なら彼を自分の陣地に引き込みたいという考えも、納得できるものであった。

そして、今日起きた異常事態。

関連性のないと思われたクラスメイトが村重 徹に抱きつき、泣いた。さらに、クラスメイトは彼のことを兄と呼ぶのだ。

今まで、どう探っても不明であった村重 徹。

そんな彼の情報が入る可能性があるのだ。

以上のことから、私に村重 徹の監視を依頼してきた事は、理解できる。

ああ、理解出来るとも。

もし、私が超のような立場であるのなら、このチャンス逃すまいとするであろう。

恐らく私だけではなく、超の所からも良く分からない機械を使って、彼の様子を探っているであろう事も楽に想像がつく。

それだけ超が力を入れて彼を探ろうとするのも、理解できる。

そう、理解出来るのだが……

何が楽しくて

R-18指定の本、ビデオの物色している様子を監視しなくてはいけないのだ!?

確かに、私は周りからは大人っぽいといわれるし、大学生と間違え

られた事だつて多々あるが、一応中学生だぞ。  
華の中学生。何が悲しくて、R - 18指定を物色している様子を見  
なくてはいけないのだ!?

いや、年齢ではない。

そうだ、年齢ではないのだ。

そもそも、女が、たいして付き合いもない男の趣味趣向を全力で覗  
いているというだけで、そうとうイヤである。

しかも、映像だけではなく、どうにか設置した盗聴器。

それから、女性の、まあ、あまり健全とは言いがたい声までもが  
耳にしているイヤホンに流れてくるのだ。

耳につけているイヤホンを、このまま床に叩きつけられたらどれほど  
気持ち良いだろうか??

「これも仕事、これも仕事……」

イヤホンを潰そう誘惑から、ブツブツと呟く事によって逃れようと  
する。

ちなみに、装備は双眼鏡、イヤホンに毛布、魔法瓶の味噌汁、カッ  
プラーメンにコーヒーマグである。

ズルズル……。

ラーメンをすすっていると、女性の非健全的な音声が耳元で鳴り響  
いた。

バキッ



「え〜と、割り箸、割り箸……  
あった、あった」

再び、非健全的な声。

バキツ……

「と、まあ以上が今回の依頼内容だ。  
一応、彼の女性の趣味と思われる物の統計を簡単に取っておいたが  
必要か??」

「い、いいネ」

「はっははは、『良い』だな。

分かった、超のPCにメールで送っておく」

「ち、違うネ!？」

結構ヨ」

「はっははは、『結構』だな。  
分かった、任せて置け」

「なんか、伝わっていないような気がするネ」

「気のせいだ」

ちなみに、損害は割り箸455、双眼鏡40、イヤホン57であつた。

これ、経費として、請求できるだろうか？？

## 第4章 吸血鬼編 その8

Side エヴァ

偶然通っただけだった。

なんとなしに気が変わり、いつもとは違う道を使っただけ。

そして、なんとなしに店に入っただけ。

このぐらいの変化など、よくある事であろう。

だが、その偶然によって、私は運命的な出会いをしてしまったのだ。

一瞬で、私はそれに一目ぼれしてしまった。

もちろん、葛藤も色々あった。

だが、人だろすが、吸血鬼だろすが、欲望には逆らえないのだ。

最後の一つという事もあり、すぐに私はそれを手に取り、ほぼ無意識のうちに買っていたのだ。

それは、恐ろしくも甘美な物であった。

この世の理を捻じ曲げ、人の感情を捻じ曲げる。

私がやるうとしている事はその様な事だ。

けして、褒められた事ではないであろう。

だが、私は悪の魔法使いだ。

邪道？卑怯？

ふっははははは。良いではないか。良い褒め言葉だ!!!

『悪』に正々堂々を期待するほうがバカなのだ。

邪道だろうが、卑怯だろうが、私は欲しいモノはどんな手段を使っても手に入れる。

それが、私であり、悪なのだろ!?

だったら、悪らしく手に入れてやるうではないか!!

この

『これで、あなたも彼をゲット。どきどきヤンデレのススメ（はあ  
と』

を使ってな!!!

『あまりに相手を愛するが故に陥る現象である!!  
つまり言うのなら、ヤンデレこそ、最高の愛情表現なのだ!!』

本書は、あなたをヤンデレにし、あなたが恋する相手と甘い生活を  
送れるよう、手助けをするためのものである』

初めのページ目から随分と重要な事が書いているのだな。

ふむっ……

とりあえず、蛍光ペンでなぞっておくでしょう。もちろん付箋も忘  
れない。

「おっ、エヴァちゃん勉強やってるなんて珍しいじゃん」

「まあな。

私だって、自分の知らん事を知っている者に敬意を持つし、知ろう  
とする努力ぐらいするさ」

「頑張つてね」

「ああ、任せろ」

さて、徹からの応援も得た事だし、張り切つてやるとしようか。

『好きな相手との一体感を求めるのは極自然な事である。』  
この本を手にした恋する乙女達も大なり小なり、経験があるのでは  
ないだろうか？

ハグやフレンチキス、性的接触を行いたいというのも、その一体感を求めるが故の物であるのだ。

さて、その一体感をより高いレベルの元とする方法があるとしたら、どうだろうか？

おそらく、一般的に最高レベルにある性的接触を上回る一体感、同一感が得られる方法があるというのなら、その方法を試したいと思わないだろうか？

ここで、”思わない”と述べる人間には、非常に心苦しいのだが、あなたにこの本が必要ないであろう。

本書、『これで、あなたも彼をゲット。どきどきヤンデレのススメ（はあと）』は相手との多大な一体感を得る事によって、互いに離れられなくなるような関係（依存関係と言い換えることも可能である）になる事によって、相手を手に入れる、又は相手とよりラブラブな関係を築くための物なのだ。

その根本である一体感を否定してしまうと、本書が全く役に立たなくなってしまうのだ』

ふっははははははは、完璧だ。完璧ではないか。

これこそが、私が求めていたものだ。

この様な、素晴らしいきものが、たったの780円（税別）で手に入るとはなあー！！

悪の魔法使いである私と、この恐ろしき悪魔の書があれば、私の目的を果たす事が出来る。

ふっはははははははは、徹。ついに、ついに、貴様は私のモノとなるのだ。

初めは数年のウチに私のモノにするつもりだったのだがな。

気付けば5世紀以上も経っていた。

貴様と、この関係も悪くはないさ。  
なにせ5世紀以上もこんな関係だったんだ。居心地が悪いわけがない。

この関係を壊してしまうかもしれないという恐怖は勿論ある。

だがな、徹。

私は永遠の友と誓ったんだ。ズルい等言われてしまうかもしれないが、私は勝手に誓ったんだ。貴様を私のモノにするとな。

さあ、徹よ、覚悟するが良い。

今回の私は、少々本気だぞ。

＼side 明日菜＼

腕の中に本が一冊。

普段本なんて読まない私だけど、本屋でそれを見た瞬間なんか、こゝ、ビビッときちゃって、衝動的に買ったのよ。

まあ、その時私が何を考えていたかは簡単に分かる。

恋愛の成功術の本だ。もちろんあの人の事を考えて買っていたに違いない。

うん……

でも、こういうので上手くいくかどうかと言われると、首を傾げる物だ。

本を読んで実行するだけで100%上手くいくのなら、失恋とかする人間がいないはずだ。

だが、現実はそのようなワケがない。

事実、2年ほど前に、モテモテだったサッカー部のキャプテンをふっている亜子ちゃんを見たし。

あの時の光景は衝撃的だったなあ……

他にも、こういう本って、男の人が好きになるように自分を変えろ、とか言うんでしょ？

もちろん、相手に好かれる努力するのは間違っていないと思うんだけど……

例えば、私が木乃香みたいになつたとするでしょ？

ガサツな性格から木乃香みたいな大和撫子になって、モテモテになる。

それで、徹さんが私が好きになって、恋人になつたりしても、なんかそれって嬉しくない。

まあ、こういう本って読んだ事ないから、ただの偏見なのかもしれないけどねぇ。



でも、出来るなら私は自分の力で徹さんといい感じの仲になりたい  
というのには間違いのない事実だし。

「うん、やっぱり読むのやめよ。読んじゃうと絶対影響されちゃう  
しね。」

うーん、かといって捨てちゃったり、古本として買ってすぐ売っちゃう  
のも勿体無いよねえ」

(そんな、うかつかしていると、エヴァにとられるわよ?)

「ああ、そうだ!!」

エヴァちゃんがいるんだっただ!?

他にも、亜子ちゃんとか、ネギとかも怪しいし!?!?」

(でも、一番恋人に近いのはエヴァ)

「うう、、そうなのよねえ。」

エヴァちゃんって、徹さんとずっと一緒にいるみたいだし……」

(でも、スタイルだったら勝ってるよ?)

エヴァ、幼児体形だし)

「そ、そうよね。」

エヴァちゃんって、おっぱい全くないし!?!?」

(そう、勝てる可能性があるんだから頑張らないと)

「うう、、でも私……」

（大丈夫。貴方が恐れている事にはならないから。貴方は貴方のままでから……だから、安心して？）

「うう、そこまで言うんだったら……」

読むだけ、読んでみようかな？？

『べ、べつにあなたの事なんて好きじゃないんだからね！！で彼を手に入れよう（はあと）』

え、えくと、何考えて買ったんだろ？

コレ……

後日談 1

「ふっはははははは。

完璧だ。完璧にマスターしたぞ！！」

「おめでとうございます。マスター」

「なんだか分からないけど、ご苦労様」

「いや、茶々丸。」

この快拳は、お前のような優秀な従者が居たからこそだ。

徹、お前もだ。

お前のお陰で私は安心して没頭出来たんだ」

「そんな、恐れ多いです」

「まあ、家族だからね。」

当たり前だよ」

「と言う訳でヤンデレ作法、第163項

血を飲むべし。

よし、徹、血を飲ませる」

「うん、良いよ。」

そういえば、オレの血飲むのって、久しぶりだよねえ」

「うむ、そうだな。チュー……」

あれ???

「べ、べつにアンタのこころ、事なんて、好きなんかじゃないんだからね!？」

「はっははははは。

でも、オレは明日菜ちゃんの事が好きだからね」

「すすすすす、好き!？」

「ううううううう。

ヒック、聞いてるか、タカミチ!？」

「はいはい、聞いてますよ。徹さん」

「良いんだよ？」

オレだった反抗期ぐらいやった事あるし、覚悟だっけてしていたよ。でもねえ、実際にそうになるとねえ、ヒック。

大体、分かるかあ?？」

『お父さんの靴下と一緒に洗濯しないで』とか、いつあの子達に言われるかどうか、戦々恐々しているんだぞ?」

おやつさん、熱爛、もう一本だあ」

「いや、徹さん、これ以上飲むのは……」

「だいじょ〜ぶ、だいじょ〜ぶ。」

おやつさん、しっかりとオレの年齢事情知ってるから」

「いや、そうじゃなくて、身体に障りますよ?」

「ヒツク、今日ぐらい飲ませる。」

今日は帰らんぞお。

泊まるぞ!―タカミチん家ちに、オレは泊まるぞお」

「みたいな事があつてねえ……」

多分、徹さん本気で嫌われたと思っているよ?」

「す、すみません。」

本当に、すみません!―!」

## 第4章 吸血鬼編 その9

Side エヴァ

人間が吸血鬼を恐れる、畏れる、怖れる、というのは当たり前的事である。

それが、例えその吸血鬼自身の本質を見ようとせず、ただただ吸血鬼というだけで、忌避し、否定しようとする事は当たり前であり、吸血鬼の真祖である私自身としてもそれは正しい事であると思っている。

人間と言う存在は、余りにも儂く弱すぎるのだ。  
先入観という、あまりにも不確かで曖昧な物に縊らなければならぬいほどに。

吸血鬼の真祖という化け物である私ですら先入観に踊らされる事が多々あるのだ。  
それより脆い、人間は私よりも踊らされやすいというのは仕方の無い事。

そう、仕方ない事なのだ。

「エヴァンジェリンさんが吸血鬼の真祖??」

え〜と、大分前に徹さんから聞いていて、知っていたんですけど…  
…」

……先入観、仕事しろ。

〈side ネギ〉

僕の前で朗々と吸血鬼について語るエヴァンジェリンさん。  
吸血鬼という存在の定義、種類、真祖と普通の吸血鬼の違い、さら  
にはヴラド・ツェペシュについてまで、解説しているのだ。

全てはそう

「どうだ？私が怖くなってきただろ??」

僕を怖がらせるために。

「いえ、あの、本当に申し訳ないんですが、特に怖ろしいとは特に思えないんですが……」

「貴様の頭は、一体なんのためにつけているのだ!？」

あれほど吸血鬼という存在の怖ろしさ、厄介さを教えたにも関わらず、何故怖ろしくならないのだ!？」

「逆にどうやって、懇切丁寧に吸血鬼の恐ろしさ、その対処法を教えてください。人に恐怖を覚えろっていうんですか!？」

いくら怖がれと言われても、正直無理な話である。

「私は悪い吸血鬼なんだぞ。」

徹とか、徹とか、徹とかを襲う、怖い吸血鬼なんだぞ!！」

「……徹さんしかないじゃないですか」

一体どうすれば、この吸血鬼さんを怖れられるのだろうか？

正直、僕としてはもう無理なんじゃないかと思ってしまうている。

「いいか？貴様を脅かすぞ!？」

もう、ネギが夜に1人でトイレに行けないうくらい怖がらせるぞ!？」

「は、はい。」

僕としても、怖がってあげたいので、ここで盛大に怯えさせて下さい  
「い」

「い、いくぞ……」



「はい」

訪れた緊張感。

ピンと張り詰めたような空気の中、僕のゴクリと、唾を飲み込む音がやけに大きく聞こえた。

そして、おもむろにエヴァンジェリンさんは両手を掲げ

「が、がお〜」

「え〜つと……きゃあ〜?？」

「気を使って、驚いたふりをするな!!」

「忘れる!! さっきの事は忘れるんだ!!」

「それで、どうしたんですか?」

「どうした、とは？」

エヴァンジェリンさんは、大分落ち着いたようで、普通の反応がようやく返ってくるようになった。

「いえ、自分が吸血鬼の真祖と言ったり、僕の血を欲したり、どうしたのかな」と

先ほどの騒ぎの元凶である。

「いやなに、私の崇高な計画のために貴様の血がどうしても必要だったのだ」

「崇高な、計画？」

「ふふふ、そうだ。」

私は貴様の母親、サウザンドマスターに登校地獄などという屈辱極まりない呪いを掛けられた。

こいつのせいだな、私は30年もの間、学生生活をしなくてはならんのだ」

深くため息を吐くエヴァンジェリンさんを尻目に、僕は大きく興奮していた。

思いもよらない人、思いもよらない時に、憧れの人物、である母の名前が出てきたのだ。

驚き、喜び、興奮、それらの全てを混ぜたような感情に支配されてしまっても、仕方ないであろう。

聞きたい事も、疑問も数多くある。

エヴァンジェリンさんと、サウザンドマスターとの関係は？  
どうして呪いを掛けられたのか？等々

けど、そういうワケにもいかない。

エヴァンジェリンさんはいったのだ。

『サウザンドマスターに呪いを掛けられた』と。  
どういった理由で、そうなったのか非常に知りたい事ではあるが、  
分からない。

だが、それが表すのは、エヴァンジェリンさんとお母さんが敵対し  
ていたという事。  
そして、彼女を母に持つ僕の血を媒体とし、呪いを解こうとしてい  
る。

それは、警戒する事なのだろう。  
警戒し、疑い、信じず、近づかず、観察するべきなのだろう。

彼女の存在を見極めるために。

それは、己の身を守るのに、大切な事。必要な事。

だけど

『あっ、そついえばーっ。』

エヴァちゃんって実は吸血鬼なんだ。

だけどさ、良い子だから苛めたりしないであげてね』

あの人と約束しちゃったしなあ、僕には、出来そうにもないや。

エヴァンジェリンさんは、朗々と語る。

「お前の血を使い呪いに干渉する。  
もう、分かっただろ？」

彼女の問いかけに一つうなづく。

母がやった呪いだ。僕の血が非常に良い媒体になるというのは分かりきった事。

さらに、彼女は吸血鬼。血のプロフェッショナルといっても過言ではない存在である。

いくら英雄の封印とはいえども、それだけの条件が揃えば解呪は可能であろう。

後は、僕の気持ちしだい。

そう、後はそれだけなのだ。

「そう、たった30年じゃ全く足りないのだ！！

せめて倍。出来れば150年ほど、この登校地獄が続くよう、改竄するのだ！！！」

「お断りします」

自分でも驚くような即答だった。

「なぜだ。」

痛くない、むしろ気持ちいいと評判なんだ。

怖がる必要はないぞ??？」

怖がれと言ったり、怖がるなと言ったり、結局あなたは何をさせた  
いんですか!？」

「そこは普通、解呪のために血を使う場面でしょう。」

それをどうして、期間を増やそうとするんですか!？」

「まったく、何故分からないんだ？」

徹が、たったの30年間で落とせるワケがないじゃないか」

「どうしてソコに徹さんが出てくるんですか!？」

「いや、どうしてって……」

この登校地獄って、私と徹がくつつくためにの呪いだぞ?」

登校地獄って、そういう奴でしたっけ!？」

ようやく明らかになった登校地獄の本当の姿。

初めはただただ、徹さんがエヴァンジェリンさんに学園生活を送らせなかっただけだった。

ただそれだけなのに、なんかそれぞれの思惑が複雑に絡み合ったらしい。

その思惑の一つが、アルという人の『エヴァンジェリンさんと徹さんをくつつける』であったのだ。

今まで旅ばかりしていた2人。

そんな2人が、同じ家に2人つきりで暮らしていたら、なにか間違いを起こすはずだ。いや起こすに違いない!!

ただ、徹って鈍感だしなあ、とりあえず30年ぐらい閉じ込めておこうか。

そうすれば、ナギも目標達成しやすいだろうし。

のような感じで、登校地獄がされたらしい。

もう、なんというのだろうか？

幾つも突っ込みたい所が満載であり、さらに理解出来ない部分も多々存在したのだが、もうそういう物と諦めてしまった方がいいような気がする。

「というわけで、私にはお前の血が必要なんだ」

「イヤですよ。」

大体30年間の登校地獄っていうだけで不健全だというのに、それを延ばすなんてイヤです」

出来るのなら、すぐにでも呪いを解いてしまいたいぐらいだ。

今だったら、胸を張って言える。

この人、全然、驚くぐらい危険じゃない。

もう、びっくりするぐらい安全で、徹さんさえ居れば、危険度は野良犬以下だ。

「だったら、無理やりに」

「徹さんに言いますよ?」

「むむむっ……」

#### 第4章 吸血鬼編 その9（後書き）

吸血鬼編、終了です。

何を言っているか分からないかもしれませんが、事実です。

おっかしいなあ。

本当だったら、ネギ君とエヴァの凄いバトル。

カリスマばりばりのエヴァを書く予定だったのですが

『が、がお〜』

とか、言っちゃっているエヴァを書いちゃうし……

「が、がお〜」にカリスマあるのかなあ……



## 次章予告（前書き）

エピソードの代わりです。

## 次章予告

それは、なんでもない修学旅行のはずだった。

「きゃーー!!」

カエルくくく!!?」

「お、落とし穴!?!どうしてこんな所に!?!」

次々とクラスを襲う陰謀。

「このかが、このかが誘拐されちゃった」

狙われる少女。

「ほな戦<sup>ゃ</sup>ろうか。西洋魔術師」

「うふふふ。先輩」

巨大な敵が彼女達を襲う。

「わ、私は、お嬢様と……」

白き翼と、重き荷物を背負う少女は何を思い、何を成すのか。

「さあ、出てきいや。  
鬼達よ」

やがて、彼等は京都全土を襲う人災に巻き込まれる事に。

「ふっははははは

これが、私の力だ!!」

「ワイと勝負しな。

男やる!？」

「まさか、君がココにあらわれるなんてね。

全く、なんてついていないんだろっか？僕は。

いや、それすらも計算道理なのか？」

「これで、これでウチはようやっと……」

運命の鍵を握るのは、小さき少女と、力のない青年。  
様々な思惑、渴望、思いが交差する中、少女は足掻き、青年は戦った。

「コレが、西洋魔術師の力だ!!」

「さてと、悪い子にはお仕置きしないとなあ」

「ウチは、大人にならんとあかんのや!!」

謎の幼き少女の正体は？

次章 『流れて流されてネギまへ』 京都編 乞つご期待

「なあ、王子様って知つとるかえ？

ちよつとかつこ悪くて、情けなくて、平々凡々。そんな変な王子様。せやけどな、王子様はお姫様を颯爽と助けてくれるんやで？」

## 次章予告（後書き）

プロット通りに進んでくれれば、予告通りになるんですが……  
はてさて、どうなることやら……

## 外伝 最悪な老婆の最悪な裏切り 表

闇夜の中、少女は歩いていった。

汚れ、破れた服を身に纏い、裸足でふらふらと歩く。

自分の頭上にある満月が少女に力を与えるが、全然足りなかった。  
一番最後に飲んだ血は何時だっただろうか？

銀のナイフで何度も切られた、その身体が欲求する。

血を吸えと。

血を吸い、力を得よと。

生存本能が訴える。

その欲望が、己が人間ではなくなった事を突き付け、涙を流しそうになる。

自慢だった光りを反射する金の髪も色はくすみ、ボサボサに、目は血走る。

フラフラと彼女は歩く。

血を求め、拒絶し、あてもなく歩む。

ふらふら、ふらふらと歩き、パタリと倒れる。

彼女の視界は狭まっていく。

彼女の求めた終着点がそれだったのかもしれない。

あの世なのか、暗く暖かい闇なのか、それは分からぬが、それ自体が彼女の目的地だったのかもしれない。

暗く、深い闇に、彼女は抱かれる。

「ふん、態々人の家の前で死ぬんじゃないよ。小娘」

しゃがれた声が少女に届くが、少女は気付かない。  
深く、深く、彼女は落ちていったのだ。

少女が目覚め一番初めに聞こえた音はパチパチと、薪がはじける音であった。

上半身を起こすのと共に、自分に掛かっていた毛布がずり落ちる。

「ようやく、目が覚めたか？小娘」

しゃがれた声のする方向を見ると、その声に対応しい老婆が、何かを編んでいる様子が目に入った。

皺に覆われた顔、細長い顎、カギ鼻の上には小さなメガネが置かれていた。

その後ろでは、ユラユラと影が踊る。

その様子は、母が話してくれた魔女を彷彿させた。

エヴァンジェリンは、己が抱いた感想の下らなさに、小さく笑う。

昔話では魔女のはずの老人が普通の人間であり、助けられた少女がバケモノなのだ。

その皮肉っぷりに小さく自傷の笑みが浮かんだのだ。

「あ、あの」

助けてもらったようで、ありがとうございます」

「ふん、助けたくて助けたワケじゃないさ。

あんな所で死なれると、儂が困るんだ。

分かるか？家の前に死体。あっという間に狩られて終わりさ」

魔女狩り。

それが、この老婆が怖れている物であった。

中世ヨーロッパにおいて、行われていた物であり、一種の集団ヒステリーとも言われているものである。

戦争、疫病、飢饉など、様々な災厄によって、人々は常に死と隣り合わせの生活をしていたのだ。

だからこそ、その責任をなすり付けるスケープゴーストが必要であったのだ。

家畜が病に掛かったのは、魔女が実験をしたから。



子供が死んだのは、魔女が悪魔の生贄にしたから。

彼等にはそうする事しか出来なかったのだ。

不安が生贄を必要とし、次は己が生贄になるのではないかと疑心を生み、結果は暴走であった。

そんな時代なのだ。

老婆が警戒し、怖れるのも自然な事であった。

「……小娘、お前孤児だろ？」

この言葉に込められたのは同情なんかではなかった。どちらかというのなら、恐らく侮蔑が混じった物。

誰にも必要とされず、何の役に立たない。

下手をすれば害悪の原因となるのだ。

「……そうです」

「どこにも行くところがない。ちがうか？」

「……そうです」

彼女は怖かった。

何故かこの老婆が、今まで銀で切りつけてきた教会の人間や、自分を殺そうと躍起になっていた奇術使い達よりもよっぽど怖ろしかったのだ。

吸血鬼の力を使えば簡単に殺せる、この枯れ木のような老婆が怖ろしくて怖ろしくて仕方なかった。

「ふん、だったら儂の家にいな。  
おっと、拒否はさせんよ。命を救ったんだ。儂の手伝いをするぐら  
いたいした事ないだろう」

それは怖ろしい老婆の、不気味な提案であつた。

昔話であるのならば、ここで頷くと少女はこき使われて食べられた  
りするエンディングが楽に想像出来るだろう。

だが、少女は頷く。

怖ろしい老婆の不気味な提案であつたが、それも良いかな。と思っ  
てしまったのだ。

こき使われるかもしれない。奴隷と変わらない立場にされるかもし  
れない。売られるかもしれない。でもそれでも良いと思つてしまっ  
たのだ。

老婆と過ごすようになってから既に3年の月日が流れた。

皮肉な事にエヴァンジェリンが追われていた先入観という物によつ  
て、老婆に彼女が吸血鬼だという事がばれないでいた。

日の光りは身体に悪いという事で、老婆の部屋は常に厚いカーテン

で覆われており、買物も曇り又は日が傾いてから行われていた。これにより吸血鬼の敵である太陽に殆ど肌を晒さなくてすんだのだ。

「痛っ。」

「っち、また切っちゃったよ。小娘、口をあけな」

「ん……」

遠慮なく、口の中に老婆の曲がった指が入れられる。

その指を丹念に舐める。

すでに慣れてしまっているエヴァンジェリンは、老婆に口内を蹂躪されているという嫌悪感はなくなっており、血を飲む事にも慣れてきた。

コレもまた、彼女を助けてくれている先入観の一つである。

若い少女の唾液には怪我の治りを早めてくれる。

ちなみに、この幼いというのは処女というのと同義であった。

そもそも若い少女というのは、特別視される事が多々ある。

事実、美しい女性の血と美貌に関連性を見出し、少女を殺し続けた女性の話が存在するのだ。

老婆のそれはそれと似たような物である。

少女という存在と共にいるだけで己の老いが遅くなるという事を信じていた。

さらに、3年という月日が過ぎても全く育たないエヴァンジェリンの発育の悪さもまた、少女の永遠性と関連付けられ、己の寿命が延びると歓喜していたほどだ。

「……ふん、気に食わないね」

エヴァンジェリンの口を散々蹂躪した老婆は指を抜くと、唐突に言うのだった。

「何か不快な事をしましたか？」

「お前のそのへりくだった態度が気に食わない」

とはいっても、エヴァンジェリンが反抗すればこの老婆が不機嫌になるのは目に見えていた。

「すみません」

「女なんて、この時代じゃただの道具さ。」

いや、消耗品ってところが。

小娘なんぞ、消耗品以下の扱いさ。

そんなへりくだった態度だと、あつという間に内を食われ尽くしておしまいさ。

ああ、お前はとっくに儼に食われ尽くしてたか」

イッヒヒヒヒと、まさに昔話の魔女と同じ笑い声が部屋に響いた。

ああ、かわいそうなエヴァンジェリン。

魔女にこき使われ、物扱い。ですがエヴァンジェリンはせつせと働

きます。

もし昔話であつたら、そのように語られたであらう。

そして、知恵を絞り魔女をやっつけ、財宝を手に入れ、幸せに暮らした。そんなエンディングであらう。

だが、これは現実の話である。

そもそも、エヴァンジェリンは物語の少女とは全く逆の感情を持っていたのだ。

例え物扱いだらうが、こき使われようが、そこに自分の居場所がある。

それだけで、エヴァンジェリンは幸せだったのだ。

先入観や呪いまじなを信じ込んで、自分を利用していただけだろうが、吸血鬼になって初めて受けいられたこの空間はエヴァンジェリンにとっては心地よい物だった。

そんな歪な関係は、あっけなく崩れる事となる。

全ては偶然の事だった。

その日の夜は偶然満月であり、いつも朝まで起きない老婆が偶然夜中に起き、偶然怪我をしてしまったのだ。

指を怪我した老婆はいつもの様に、エヴァンジェリンの口の中に指を入れる。

いつもと違うのは寝ているという点であった。

指を入れられたのとはほぼ同時にエヴァンジェリンは目を覚ました。寝ぼけた頭には口の中に入っている異物の存在と、血という吸血鬼にとつては必要不可欠な栄養源の味しか認識する事が出来なかった。もし、この夜が吸血鬼の本能を表にだす満月でなかったら別の未来もあつたであろう。

だが、それはもしもの話。

満月により、本能が表へとだされたエヴァンジェリンは、人間には出せない力で老婆に襲いかかってしまったのだ。

いつも首に巻いているマフラーを剥ぎ取り、彼女は老婆の首元に犬歯を突きたてた。

甘い、甘い血がエヴァンジェリンの口を満たす。本能が訴える、血を吸えと。生きるために血を吸えと。

「ちっ」

いくら、人以上の力を発揮できるとは言えどもエヴァンジェリンの身体は小さく軽い。

老婆は無理やりエヴァンジェリンの身体を自身の身体で支え、髪を引つ張り頭の位置をずらすと

「小娘が!!」

頭突きを一つ入れた。

しよせん老婆の頭突きだ。吸血鬼相手に頑張った方だが如何せん吸血鬼には大したダメージは与えられない。

肉体的には

「えっ……」

あっ、私、私……」

エヴァンジェリンは後ずさる。少しでも老婆から離れるために。だが、背中を向けて走り出す事はなかった。

離れたい。だが遠くには行けない。

老婆はツカツカと近寄り、エヴァンジェリンの口を指で無理やり開けさせる。

「異常に尖った犬歯、満月……」

小娘、今まで儂を騙していたのか!？」

「ち、ちがっ」

「黙れ!！」

持っている杖でエヴァンジェリンを叩きながら老婆は叫んだ。

「あの、私は」

「去ねと言っている!！」

エヴァンジェリンは老婆を怯えた目で見つめたまま後ずさる。後ずさる事しか出来ない。





外伝 最悪な老婆の最悪な裏切り 表（後書き）

珍しく本気をだした。

こういった雰囲気を書くのは初めてなので、出来が不安だった  
りします（汗）

まあ、楽しんで貰えれば幸いです

外伝 最悪な老婆の最悪な裏切り 裏(前書き)

ツンデレを書きたかった。

外伝 最悪な老婆の最悪な裏切り 裏

暖炉の炎が揺らめく中、老婆はただただ編んでいた。毛糸を使い、ただただ編んでいく。

何を編むのか、何故編むのか。

老婆は知らない。

目的もなく老婆は編んでいた。

編む、編む、編む。

生きているから編むのか、編む故に生きているのか。その境界すら曖昧になっていた。

いつの頃は忘れていた。

だが、1人になり、気付いたら老婆は編むだけの存在になっていたのだ。

暖炉の前で編むなか、音が響いた。

何かが倒れたような、そんな音。

いつもであったのなら、老婆は音など気にすることなく、編み続けていたであろう。

だが、なぜかその音が気になったのだ。

ゆっくりとした動作で立ち上がり、ドアを開け……

運命の出会い。

陳腐かつ胡散臭い言葉であろう。

だが、物であった彼女を者へとしたこの出会いはやはり、運命の出会いという奴なのではないだろうか？

「ふん、態々人の家の前で死ぬんじゃないよ。小娘」

こうやって悪態を吐くのが久しぶりだという事に老婆はやはり気付かなかった。

「今日は、満月か……」

白い息を吐きながら、老婆は呟く。

こんな寒い夜でなくても良いのではないか？

首を振り、その考えを打ち消した。

そうやって、言い訳を見つけては、何度も何度も先延ばしにしていたのだ。

もう、時間はないのだ。

「えっ……」

あっ、私、私……」

怯えた様子で少女は後退っていた。

涙を目に浮かばせながら、少女は首から血を流す老婆を見ていたのだ。

「異常に尖った犬歯、満月……」

小娘、今まで儂を騙していたのか!？」

「ち、ちがっ」

「黙れ!！」

持っている杖で叩きながら老婆は叫ぶ。

必死の形相で少女を叩く老婆が、恐ろしい鬼の様にも、苦しげに泣かまいとしている様にも見えた。

「あの、私は」



う巻く必要がない事を思い出した。

老婆の首元には、幾つもの傷があった。

2つの鋭い物によって、皮膚を突き刺したような痕が幾つもあったのだ。

ゆっくりと、家に戻り、いつもの場所に座ると、老婆は再び編み始めた。

ゆるり、ゆるりと編んでいく。

そこに広がるのは3年前と全く同じ光景であった。

唯一の違いがあるとするのならば、編んでいるそれが子供服である事ぐらいだろうか？

パチパチと薪がはじける音がする中、老婆は編んでいった。

暖炉の前で編むなか、音が響いた。  
強く戸を叩く音。

ゆっくりとした動作で立ち上がり、ドアを開け、老婆はニヤリと笑った。

「思った以上に、早かったね。  
アンタ達」

親しげに話す。

その人達は皆、農具や包丁等を手に持っていた。

「まあ、丁度いいといえば、丁度いいもんだよ。

おっと、なんもしなくても良い。逆らいはしないさ。  
何だったら、言ってやってもいい」

老婆は口の端を釣り上げる。

「儂が魔女さ。

そうだね。どんな奴が良いかい？  
病を流行らせた？



家畜を殺した？

何でもいい。

思いつくまま全て挙げな、それ全てが僕の仕業だからな」

外伝 最悪な老婆の最悪な裏切り 裏（後書き）

疲れました。

いやあ、やっぱり僕にはこういった書き方が出来ないようですね。

指が進まない、進まない。

それにしても、徹とラカンがないだけで、ここまで雰囲気が変わるとは思いませんでした。

やっぱり、あの二人は必要ですね。

さて、前書きに書いたように、ツンデレを書きたくてこの外伝を書きました。

ツンデレ婆ちゃん。

これはいける！！と思った過去の自分を殴り飛ばしたいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4492k/>

---

流れて流されてネギまへ

2011年12月30日01時51分発行